
気分はもう短編集

高橋うがい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気分はもう短編集

【Nコード】

N0902E

【作者名】

高橋うがい

【あらすじ】

奇人、変人、異星人、一般人、変態……。どこか残念な世界で生きる人たちの物語を残す小規模な群像集。オムニバス形式のショートショート、掌編で構成されています。――すべてが一話完結でどれから読んでも支障はありません。しかし、各物語は細い糸で繋がっていたりする〈場合も〉あります。それらを探して楽しむのもまた一興……。というが更新が遅すぎて誰も覚えてないよなあ、と忸怩たる思いで白旗を振り回す著者と傍らでふんぞり返ってる愛猫。

#1 大きな恋のメロディ

「あなたは常に人を疑って生きていかなきゃ」

「その中に、君は含まれているのかい？」

肯定とも否定ともとれる困惑した表情をし、彼女は、そうね、とだけ呟いた。

殺し屋という職種がある。決して表沙汰には出来ない、してはいけない職業だ。

依頼を受け、段取りを取り、十分に作戦を練って、殺す。後始末は、掃除屋と呼ばれる職種の者がやってくれる。こうして人を殺す立場と人を片付ける立場は連なっている。いわば運命共同体だ。

殺し屋には男性が比較的多く、掃除屋には女性が多いのも特徴である。人を殺すには力があるにこした事はないから男性、些細な汚れにたいして神経質になりがちな女性が掃除を担当する。一般家庭の関係性と似ている。

「殺し屋は家庭を持たない」という印象は、漫画や小説の中だけに、つまりフィクションの中だけにしてほしい。実際、俺には妻がいる。結婚して五年経つが子どもはいないので、妻も働いている。

妻は掃除屋だ。

妻との出会いは、私の仕事の後片付けを依頼したときだ。出会いの場として、殺人現場が使われるのはどうなのだろうか、苦笑が漏れる。

私たちは職業が職業の為、他人を勘繰ってしまい、すぐにはいかなかったが何とか意気投合し、結婚した。生きている者を殺す、神の道理に反する者とその死体を片付ける者という、ある意味、最低な相性の二人組は丁寧に式場を借り、神の前で永遠の愛を誓った。結婚後もお互いに仕事に勤しみ、それなりに満足した生活を送っていた——はずだった。

縛られた体をどうにか起こし、かろうじて車の窓から見える夜景を眺めながら、竜太は今までのことを振り返った。

竜太は今、現在、自分が置かれている立場がよく分かっていなかった。ただ一つ分かっているのは、運転席にいるのが妻の真紀だということだった。

「君は俺をどこに連れて行こうとしている？」声にしようとするが、口はガムテープで塞がれている。

沈黙の中、「妻に裏切られた」という安易な絶望感だけが車内に溢れ、竜太を包み込んでいる。それを振り払おうと必死だった。

仕事を終え、普段通りに妻の作ったレストランのシェフ顔負けの夕食、入浴し、ビールを飲み、眠くなりベッドに向かった。いつもより早く眠気が襲ってきたのが気になったが、先ほど真相に気付いた。妻に薬をもらったのだ、と。

目を覚ますと、体を拘束具のような者で縛られ、体の自由を失くし、車の後部座席に座らされていた、というよりも放られていたと言ったほうが正しい。

真紀は何を考えている。答えを探す振りをする。答えは既に出ている。だが、認めたくないのだ。

「妻が俺を殺す」現実味のない、答えがじりじりと迫ってくる。来るな。来るな。

なぜ妻は俺を殺そうとしているのか。理由がない、それが答えという根拠がないじゃないか。

ふと、婚姻届を役所に出した直後の、妻の言葉を思い出す。

——「あなたは常に人を疑って生きていかなきゃ」

「それにしてもこんなのってないよ」と心の中で言うが、現実の、運転席に座る妻はこちらを見向きもせず、運転に集中していた。

鳥の糞がこびり付いている車の窓からは、雲がかった空と生い茂った木々が見える。先に進むにつれて人気はなくなっていき、車が

停車したときには道ゆく人の数はゼロになった。

「ここはどこなのだろうか」森林浴に適した、何の屈託もない、雑木林に溢れる場所に着いた。

「着いたわ」今まで何の説明もなしに、沈黙を貫いていた妻が急に喋り、吃驚した。それと同時に、やはりこれは妻なのだ、という現実をつき付けられた。

妻が運転席のドアを開け、外に出た。そして後部座席のドアに手を伸ばし、開けた。外の空気が無防備な顔に当たり、寒いと言おうとするが、またしてもガムテープが邪魔をした。

「降りて」こんな無理なことを言う妻じゃなかった。もっと人のことを思いやるタイプの女性のはずだ。仏を扱う仕事をしているのだから、間違いない。

拘束具のせいで降りる事が出来ない、と目で訴えかけると妻は「そうだった、そうだった」と驚きに似た焦りを見せた。

まず脚の拘束具を外し、次ぎに、口に貼ってあるガムテープを横に勢いよく剥がした。「痛い」今度は言葉として、口から出す事が出来た。

「説明してくれないか」車を降り、真っ先に怒鳴りといってもいいほどの声で言った。腕の拘束具は付いたままだ。

「あなたを殺そうと思うの」妻の声は冷たく、そして刃物のように鋭かった。

「なぜだ」車内に置いてきたはずの絶望感が、またしても襲ってきた。車内のときより姿形がはつきりとしている。

「もう殺し屋の妻には疲れたの」

君だってその殺し屋に加担しているじゃないか、と口に出そうとするが絶望感が強く、言うことが出来ない。

真紀は続ける。「私も掃除屋をやめる」

木々たちは風に揺られ、踊っているように見えた。馬鹿にしてい

るのか。最愛の妻に裏切られた俺を、嘲笑しているのか。木々たちは揺れ続ける。

「最期の仕事として、俺を片付けるのか」強い風によって真紀の肩まである茶色に染めた髪が揺れている。

「いいえ、違うわ」

は？、と真の抜けた声を出してしまった。じゃあ何をするというのだ。

「もう足を洗いましょう、普通の生活がしたいの」

更にこう言い付け加えた。「子どもが出来たの」

一瞬、辺りは静まり返り、目に映るものは腹部に手をやる妻だけになった。

人は驚きすぎると、笑いが出るといえるのは本当だった。この期に及んで何てことを言いだすんだ。それを言うためだけに、大掛かりな拘束具までつけて、森の奥深くまで連れてきたのか。

「だって、あなたはこれぐらいじゃないと」少し間を置き、再度、口を開く。「うんって言うてくれないじゃない」

イエスと答えなければ殺される、そのぐらいの状況に立たされなければ俺は、頷かない。そう妻は説明した。

「分かった、足を洗おう」

「本当に？」真紀の顔が普段の顔に戻り、やはり深刻そうな顔は似合わないなと思った。

「ああ、足を洗おう。そして三人で暮らそう」

真紀は頷くと、目に涙を溜めながら腕の拘束具を外してくれた。

二人は車に飛び乗る。来た道に戻る気はなかった。馴れた手つきで、車を動かす。

空からは、いつの間にか雲が消えており、くっきりとした円形の月が見える。

月明かりに照らされながら、二人を乗せた車は走っていく。車は森を抜け、車道に出た。

その光景は、妻と出会ったばかりの頃に一緒に観た、恋愛映画のラストシーンと重なった。

「映画の二人は、子どもだったから街から逃げ出した後、大変な目に合ったと思うの」

真紀はそう言った後、竜太の横顔を、ちらっと覗きこむようにし、はにかみながら「でも私たちは、もう大人だから大丈夫よね」と言っ

った。

竜太は車を運転しながら首肯し、

「君だけは疑わなくてよかった」

と真紀に聞こえなくてもいいと思うぐらい小さな声を漏らしてからやっと運転に専念することができた。

—終—

#2 僕のヒーロー

ある晩のこと。

寝室で家族三人で寝ていると突然、窓に小石が当たったような音がしました。

はじめは無視をしていましたがコンコン、という音は鳴り止まず、窓の一番近くで寝ていたお母さんが「うるさいわね」と言って起き上がりました。

左側で寝ているお父さんのほうを横目で見ると、まだ寝息を立てていました。

お母さんが窓に近づいていき、鍵に手を伸ばしたその時です。

「あぶない！」寝ていたはずのお父さんが立ち上がり、大きな声で言いました。

お母さんはその声に驚き、その弾みで鍵を開けてしまいました。ガッシャーンガンガガンガシャン、と大きな音と同時に窓が割れ、口元と目元だけが開いたマスクを被った大柄な男が家の中に入ってきました。

お母さんは壁の隅に吹き飛ばされてグッタリとしていました。いくつかの小さなガラスの破片が体に刺さっているように見えます。

「おじさん、誰なの？」

「こんばんは。殺し屋です」

小学五年生の僕にも分かりました。「この人はたぶん悪い人だ」

「殺し屋さんは悪い人でしょ？」

「殺し屋には二種類の殺し屋がいる」

人からお金を貰ったら誰でも殺してしまう殺し屋、人を殺すのを生き甲斐にしている殺し屋がいると説明しました。

僕はどちらも悪い人だと思いました。

お父さんは倒れたお母さんの介抱をしています。

「大丈夫か！　しっかりしろ！」そういった言葉が聞こえてきました。

お父さんにこの男の人は悪い人だ、と伝えなければならぬと思
いお父さんのほうに近づこうとしたら、横から伸びてきた大きな手
に腕を掴まれました。

「逃げちゃダメじゃないか」

昨日の国語の小テストで出た「絶体絶命」という四文字熟語が頭
をよぎりました。

大柄な男、つまり殺し屋に腕を引っ張られて捕まってしまうまし
た。

首筋にナイフを突きつけられました。

それを見たお父さんは抱きかかえていたお母さんをそっと布団の
上に寝かし、僕達のほうへ向かってきました。

「目を瞑ってろ。すぐに助けてやる」お父さんがそう言って何秒と
経たない内に、僕の体は殺し屋の腕の中からお父さんの腕の中へ移
動していました。

「お前、いま何をした！」

「ちょっとね」

チツと舌打ちをして、殺し屋さんは勢いよく迫ってきました。

「目を瞑ってろ」

またしても僕が目を開いている間に、不思議なことが起こりまし
た。殺し屋が地べたに倒れているのです。

ぐうああ、と殺し屋さんは唸り声あげています。痛がっているよ
うです。

「殺し屋に二種類の殺し屋がいるように、ヒーローにも二種類のヒ
ーローがいる。世界の平和を守るため昼夜を問わず闘うヒーローと、
家族の平和だけを守るヒーローだ！」

そう言うとお父さんは僕にいつもの優しい視線をくれました。
そして、お父さんがまた「目を瞑ってろ」と言い、そこで僕の意識は途切れました。

僕が目を覚ました頃には、すでに朝になっており、お母さんは朝食の準備を、お父さんは仕事に行く支度をしていました。

「昨日の殺し屋さんはどうなったの？」と僕が目を擦りながら言うと二人とも驚いた顔をしたのです。不思議に思いました。

「まだ寝ぼけているのね。はやく顔を洗ってらっしゃい」お母さんはとぼけたが、お母さんの腕に何かが刺さったような小さな傷があるのが見えました。

「あれは夢じゃなかったんだ……」

寝室の窓から隙間風が吹いてきて、それが顔に当たり確信に変わったのでした。

——「……だから、お父さんは僕のヒーローです。これで僕の発表を終わります」

直後、教室は拍手と歓声で湧いた。

先生は「素晴らしいわ」と褒め、多くのクラスメイト達は他の話も聞かせてとせがんで来た。

教室の黒板には白く大きな文字で「今日の国語の授業は『創作文』の発表です」と書かれていた。

——終——

#3 急がば事故れ

「急いで来いよ。間に合わなくなるぞ！」

「はいはい、分かった分かった」友人の気だるさが電話越しからでも伝わってくる。

再度友人を急かすような言葉を言うと、「もし俺が事故ったら責任取ってくれるんだろうな」という返事がきた。

「取ってやるよ！」乱暴に電話を切った。

来栖に友人の事故を伝える知らせの電話がかかってきたのは、友人から荒く電話を切られた十五分後のことだった。

「あの馬鹿……！」血の気が引くよりも先に怒りが沸いた。そして、その怒りよりも先に体は動き、電話を切った直後、来栖は家を飛び出した。友人が搬送された病院へとバイクを走らせた。

到着した病院は慌しく、泣き声と嗚咽、時折笑い声が混ざっていた。あの馬鹿は大丈夫なのか、バイク事故は死亡率が高いとよくメディアなどで聞く為、来栖は友人のことが心配で仕方なかった。『受付』の文字を見つけ、すぐさまそこに向かい駆け出す。

「すいません、事故で友人が搬送されて友人がバイクで病院が……！」

「落ち着いてください！」受付係と思われる女性が宥めるように、

「落ち着いて話してください」

来栖は呼吸を整える。「友人がバイク事故を起こして、この病院に運ばれたと聞いたのですが」

「先ほど運ばれた患者さんのことですね。病室は○×号です」

「ありがとうございます！」来栖は雑なお辞儀をし、言われた病室へと向かう。階段を上がる途中に重大なことに気づき、再び受付に戻った。「すいません、何階ですか？」

「三階になります……それと」受付の女性は不意に迷惑そうな顔をし

た。

「それと？」

「病院内ではお静かにお願いしますね。走らないでください」

「お前なあ」ベッドで横たわる友人に向かい、呆れ顔で溜息交じりに来栖は呟く。「心配したんだぞ」

「だって、お前が来るの遅いからさ」友人は悪びれることなく、「俺のほうから出向こうとしたってわけよ」

「お前はいつも急ぎすぎなんだよ。まったく、『急がば回れ』ということわざを知らんのか」不恰好で大きな絆創膏を顔中に貼っている友人を説教するかのごとく説いた。

「逆に、お前はいつも急がすぎなんだよ！」

「なんだと！ 今日下痢して遅れただけだ！」事故を起こしたとは思えない程に元気な友人に掴み掛かる。友人も負けじとギプスを装備した腕で対抗した。

不意に病室のドアが勢いよく開けられる。「静かにしてください！」

この醜い争いのおかげで、友人の入院期間が少しばかり長くなったのは言うまでもないのだった。

—終—

#4 特撮じゃねえ!

目を覚ますと、四肢の自由が奪われていた。おはよう、それよりも先に「どういうこと?」と無垢な子どもが親に尋ねるように問うた。

一応、自由を取り返そうと試みてみる。

まず、両手両足にぐるぐると巻かれているテープを剥がそうと、もがいてみた。無理だった。結果は分かっていたが。

そもそもこれはテープなのだろうか。この固さは、なにか別のものではないだろうか?

その、『別のもの』が何かと例を挙げようと思えるが、良い例は浮かばなかった。視界さえはつきりしていれば答案はすぐに手に入るのだが、顔には縁日でよく見かけるプラスチック製のお面のようなものが被せられている為、ほとんど視界も奪われていると言ってもいい。

私は辛うじて光が入ってくるぐらいの小さな覗き穴から辺りを確認してみる。何かが動いているのが分かった。聴力に頼ってみるとガサガサという何かを探るような音も聞こえてくる。

——この空間に私以外の何者かがいる。

私は勇気を振り絞るといふより、滲み出すように叫ぶ。

「おい! そこにいるのは誰だ!」

声が裏返ってしまった。

「うっす」

笑いを堪えるような言葉が返ってきた。拍子抜けするほど軽やかな挨拶だった。声の低さで、男だと私は断定する。

「ちょっとお邪魔してます。すいませんね」

「お邪魔してますじゃねえよ!」さらに語調を強めながら、

「お邪魔しますじゃねえし!」同じことを二度続けて言うてしまう自分の語彙の貧弱に氣落ちした。

「だからすいません、って言ってるじゃないッスか」

男はとうとう笑いを堪えることが出来なくなったのか、人の気も知らず吹きだした。下品な笑い方だ。

「何しにきた？」自分の眉が寄るのが分かる。

「空き巣ッスね」

いま何してる？　という問いに「呼吸」と答えるような簡素な言い振りだ。

「俺いるじゃん！　だからこれ空き巣じゃねえだろ！」

「正直、困ったッス」

照れたような声だった。ボリボリという音が聞こえてきたので、頭を掻いているのは安易に想像できた。

私は何を照れてるんだ、と声を荒げたくなったが、ぐっと堪える。冷静に対応して去ってもらおう、と考えたからだ。

「スタートで躓いちゃ拙いよね。今日は帰ったらどう？」

「そうッスね」

男は思案しているのか、少しの間黙り込んだ。私はこれは脈ありか？　そんな期待を抱いたが、その期待もむなしく、

「でも今日はここでもいいッスわ！」

今日の抱負が決定したかのような男の明るい声に、私の張りぼての冷静は簡単に崩されてしまった。

「ふざけんな！　出て行け！」さらに語調を強めて言う。「出て行け！」

さすがに二度目の落胆はかなりのものだったが、まだ怒りのほうが強かった。

「あんた面白いッスねえ」

男は感嘆ともとれる声を上げて笑った。

そもそも、なぜ自分はこのような状況に置かれているのだろうか。ハイビジョンとまではいかないが、そこそこの画質でこの状況に置

かれる以前の自分の行動を思い返してみる。

——会社が終わって、同僚と酒を飲み十時に解散して、そのまま直帰して、

あ。ここだ。

簡単なことだった。酔った自分は戸締りを怠ってしまったのだ。

玄関の鍵をかけた覚えがない。

「もしかして、玄関のドア開いてた？」

「戸締りはちゃんとしなきゃ駄目ッスよ、ほんと」男は電話をかけてきては小言を言う母親のような口振りで言った。「俺としては助かりましたけどね」

「助かりましたじゃねえだろうが！」自分の落ち度を嘆きながらも一応、男に対しては強気を保つ。

突如、男は笑い出し、

「つーか」と一拍置いた。「あんたなんて格好してんスカ！」

下品な笑い声が四畳半の部屋に響いた。

「お前がさせたんだろうが！」そして語調を強める。今度こそはと意気込んで言う。「好きでやっへんじゃねえ！」噛んでしまい、顔が熱くなった。そして、無事に事が終わったら歯列を直そうと決心した。

「仮面ライダーのお面はないッスよ、マジで！」下品な笑いはマグナス効果により揚力を受けた野球ボールのように伸びていった。

「これ仮面ライダーかよ！」

と言いつつも、仮面ライダーなら『まあ：そのあれだな』と悪くないな、そう思う自分がいるのが不思議で間拔けた。

「じゃあお前は仮面ライダーの寝込みを襲った卑怯なショッカーだな」

「まあ本来、悪役は寝込みを襲うぐらい悪じゃないといけないッスよ」

男はとぼけたように答え、また聞いていると煩わしくなる笑い声をあげた。

「本物の仮面ライダーは戸締りをちゃんとすると思いますけどね、子どもの憧憬の的ツスから。だらしない生活はしてないでしょ」

私は素直に悔しく思った。

男が「んじゃ、そういうことでお疲れさん」まるで先に会社を上がる上司のように去っていった後、私は床を這いずり回り、どうにかして家を出た。かなりの時間を要したので、男が逃亡するには十分すぎただろう。

「だれか助けてくれえ！」と叫ぶと即座に隣人が助けにきてくれた。隣人は演出じみた声で、

「大丈夫ですか？ いったい何があったんですか！」

私は空き巣との会話が聞こえなかったのか？ と疑問を抱くがすぐにそれは解消された。このアパートは狭い癖に、やたらとプライバシーには気を使い、防音だけはしっかりしていたのだった。あの空き巣はそれを前もって知っていたのだろう。だから、私の口を塞がなかったのだ。

隣人に縋るように、

「とりあえず警察を呼んでくれ、空き巣だ」と言うと隣人は、
「強盗じゃないんですか？」と戸惑った。

「盗られたものは？」

目の前に立つ制服を着た男はメモ帳を広げる。

「カードと現金三万です」

「犯人の顔は？」

私はお面を指差しながら、

「これのせいで見えませんでした」と苦笑する。

「そうですか、じゃあ何か特徴のようなものはありませんでしたか？
訛りだとか」警官は淡々と喋る。

「そうですね」私は今月の生活費を奪っていった憎き犯人を思い出す。

——言動。下品な笑い声。そして、仮面ライダーのお面。

思い巡らす内に笑いが込み上げ堪えきれず、うつむきがちに肩で笑った。

「どうしました？ 何かありましたか？」肩を震わす私を心配するような柔らい声で警官問う。

「よく喋るシヨツカーでしたよ」

「はあ？」

何が何やらといった表情をしながらも、警察はそれをメモ帳に刻んでいた。

翌日、朝刊の「強盗犯はシヨツカー!？」という見出しで私はシヨツカーのような下品な笑い声を上げた。

「悪は必ず捕まる^{まけ}んだぞ」

私は独り言を呟き、戸締りを何度も確認してから会社に向かった。

—終—

#5 悩み事は雨天決行

はじめじめとした湿気が鼻の先端に触れ、外が悪天候なのが分かった。窓を見ると星の数ほどの水滴がついている。

閉じるのを忘れていた真っ白なカーテンが窓に触れ、若干滲んでいた。

「これだから一階は嫌だったのよ…」ふいに独り言が漏れる。

私は一階だけは嫌だと反対したのだが、親はそれを無視し、一階を選んだ。「だって、高すぎると怖いでしょ」母親は屈託ない笑顔で言う、私を無理矢理に納得させるように、水洗いのせいで荒れた手で、私の頭を優しく撫でた。「ずるい」と私は頬を膨らませた。一向に眠れる気配がなく、ベッドから起き上がり、テーブルの上のプレイヤーに手を伸ばした。プレイヤーから蔓のようにだらしく巻かれているイヤホンを耳にかけると、程なくして音楽が流れ込んできた。

「一週間でどんな人も生まれ変わる」そんなことを先日解散したばかりのバンドのフロントマンは気だるそうに、リズムに乗せ歌う。

「たった一週間で人が変わるわけじゃないじゃん…」

雨音は強くなっていった。

薫は端的に言う『男性恐怖症』であり、それが原因で学校では白い目で見られている。男性に話しかけられるのは勿論のこと、男性が触れたものに触れることさえも恐れている。男性に関わるだけで手の震えが止まらなくなり、酷いときは吐き気を催す。そんな薫を、人々は「お高く止まってる」や「意味が分からない」などと中傷とまでは行かずとも、薫を傷付けるには充分すぎるほどの言葉で表現する。

「好きで嫌ってるわけじゃない！」薫の思いは届くわけもなく、心の濁った部分が更に濁るだけだった。

面倒な毎日の中で俯いてばかりいると、状況は悪化するばかりだった。比較的、擁護側についてくれていた女性たちも薫を非難し始めた。明確な理由は解らなかったが、男性の目を気にし始めたのだろう。「一人よりも多数の異性を選んだ」賢い選択だな、と薫は納得しようとしたが、まだ中学生の薫にはそれが容易いものではなく、塞ぎこんだ。殻に閉じこもった。「誰とも関わらないのが一番、楽」布団の中に入り、自己暗示をすると本当に少しだけ楽になった。

イヤホンを耳から外すと、強くなった雨音が新たに耳に流れ込んできた。壁にかけられた時計を見ると、分を示す針よりも長さが劣っている針は零時を指していた。思ったより時間が過ぎており、損した気分になる。同時に、このまま朝を迎えるとまた学校に行かなければならない、と鬱屈な気分にもなった。

薫は冷たい視線を浴びながらも、学校には通っていた。目に見える攻撃、つまりイジメはなかったが、囁くような陰口が耳に流れ込んでくるのが辛かった。「攻撃よりも口撃のほうが痛い」薫は痛みを堪えながら、学校生活を送った。朝を迎えると、挨拶よりも先に溜息が零れる。今日もきつとそうだろうな、という確信があった。

ふとそろそろカーテンを閉めようと思い、窓に近づくと一瞬だけ、外が明るくなった。雷だった。音が大きかったので、近所に落ちたのではないかと心配したが、それよりも気になることがあった。窓に人影が映ったのだ。

室温と外の温度差で出来上がった濡れた窓。そこに映った人影。確認するか、迷っていると窓を軽く叩く音が聞こえてきた。びくりと、薫の肩が上がった。

強盗、それとも更に劣悪な何かか。薫の頭の中をいくつもの憶測が巡る。だが窓を叩く音が、どこことなく謙虚である為か、不思議と強い恐怖感は抱かなかった。窓の一部分を上着の裾で拭い、耳を当てた。ひんやりと冷たい感覚が伝ってくる。「あの…誰かいるんで

すか？」

薫の声が聞こえなかったのか、それとも誰もいないのか、窓の向こうから反応はなかった。窓をノックするような音も消え、気のせいだったのかと薫が自己完結を始めた時だった。「すいません、勝手に雨宿りをさせてもらっています」窓の向こうから、痰が絡んでいるような低い声が聞こえてきた。男性の声だった。

男性だと認識するや否や、薫は窓から離れてた。この場合、離れたというよりも逃げたと言ったほうが良いのかもしれない。体が反射的に窓から離れていった。大声を出し、両親を呼ぼうと思うが、今日は二名とも不在のことを思い出した。今日は自治会の集まりがあると言って、朝まで帰宅しないと言い十七時には二人揃って家を出て行ったのだった。「どうしよう…」薫は怯えながら、ベッドから掛け布団を奪うように取り、それを頭から被ったがノックの音は絶えず、聞こえてくる。合間合間に「すいませーん」と呼びかけるような声も聞こえてくる。

すると段々、恐怖よりも苛立ちのほうが強くなってきた。

薫は枕を窓に力強く投げつけ、「け、警察を呼びますよ！」と叫んだ。

「やっぱりご迷惑ですよね…」と、窓の向こうの男は残念そうに言う。

「…当たり前です！」男の謙虚な態度に戸惑いを感じる。

ふと薫は冷静になり雨音が強いにも関わらず、なぜはつきりと声が聞こえてくるのかと考えた。原因が分かった瞬間、背筋が凍った。窓の右上にある小窓が開いているではないか。「最悪…」

小窓を閉めねばと、薫が意気込み、ベッドから降り再度窓に近づくとき、「すいません、もう行きますんで」と男の声が聞こえてきた。「…この雨の中をですか？」薫が自分の口走った言葉の意味を理解するのに数秒かかった。

薫の住むマンションの窓には雨が窓ガラスにつくのを防止のため

に、小さな屋根が備え付けられていた。この屋根は横雨以外には大変成果を上げていた。「どうせなら水滴防止のガラスも欲しかったな」水滴防止のガラスというものが存在するのを知ってか知らずか、薫は思っていた。

「え？ ご迷惑じゃないんですか？」窓の向こうから困惑の声が聞こえてきた。その問いを投げかけられた当人も困惑しているため、すぐに答えることが出来ず、「えっと」などと言葉を濁す。

「雨：強いですよね」薫は小窓に手を伸ばしながら、怯えるような口調で言った。

「えっとまあ：そうですね。雨が弱くなるまで雨宿りさせてもらえると有難いです」

「じゃあその」一時、口ごもる。「雨が弱くなるまでなら別にいいです…」

「えっ！ 本当ですか？ ありがとうございます！」男の驚喜の声に、薫は戸惑っていると、くしゃみが聞こえた。「風邪引いたな、こりゃ」と男が言い、鼻を擦るような音を立てた。

「あの、大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫！」男は風邪を引いた人間とは対照的な笑い声をあげた。薫はいつのまにか小窓に伸ばした手を下ろしていた。

時計は静かに零時半を指していた。沈黙の中を時計の針の音が歩き回っている。実際に姿が見えないためか、沈黙の気まずさはなく、あるのは男にたいする若干の不信感と興味だけだった。

「あの：どうしてここで雨宿りを？」

男は一度考えるように唸る声を出し、「買い物帰りだね」とだけ簡単に答えた。「そうですか…」河合が続かず、再び沈黙が訪れる。「あ、あの！」薫はなぜ自分がここまで必死なのかと疑問を抱きつつも、男に再度問いかける。「私、その：男の方が苦手で：だから、本当はそんなところじゃなくて、他の暖かいところで雨宿りをさせてあげたいんですけど…怖くて…」

「君は優しいんですね」男の返答に薫は安堵をする。父親以外の異性に温もりを感じるのは、小学生以来だった。

薫が「男性恐怖症」に悩まされ始めたのは、中学一年生の頃に受けたストーカー被害が原因だった。男に説明するには少々、言い辛いこともされたので薫は簡単に説明した。一通り話し終えると、男は低い声を更に低く出し、「許せない！」と語調を強めるように言った。

「許せないよ！ そんなの！」男は感情的になり地団駄すると、雨水が跳ね、靴を汚してしまったようだった。「水が…」うな垂れるような声が聞こえ、薫は声には出さなかったが面白い人だな、と思った。

「ストーカーなんて最低だね！」

「最低です…」もしかしてこの男もストーカーなのでは？ と、一瞬あらたな憶測が頭の中を過ぎるが、男と会話をしてから受けた柔和な印象があつてか、その憶測にはすぐに「没」の烙印が押された。「次は僕の話をしていい？」男は余程寒いのか、声が震えていた。

「あ、どうぞ」

「僕は君とは逆で、女性が苦手なんだ」そう言う男は苦笑を漏らした。顔こそ見えなかったが、言葉にはそのような表情が埋め込まれていた。

「…そうなんですか」

「そうなんですよ」男は一度溜息を吐き、「でも君とはなぜか普通に話せているね」と続けた。薫は「私もです」と言おうとしたが止めた。雨音が弱くなっていたからだ。

「さて…雨も弱くなってきたし、そろそろ帰ります。ありがとうございました」男の感謝の言葉を聞き、薫はなぜか残念だ、という思いを抱いた。それがなぜかというのは認めがたかったが、すぐに理解した。しかし、その思いとは逆の言葉が出てしまう。「お気を付けて」

「本当に助かったよ。ありがとう。それじゃ」男が湿った地面を歩いていく音が遠ざかっていく。薫はその音を聞きながら、自分を励ます。「早く引き止めろ、引き止めろ!」と。

ぎゅっと左の拳を握り、右手を小窓にかけ、小窓から、口を出すほどの勢いで近づき、外に向かって声をだした。「…傘、貸しましょうか?」

水を跳ねながら、遠ざかっていく音が踵を返す音に変わった。「…お言葉に甘えようかな」男の声は優しく、薫は悟られないように笑みを零した。

男の返事を聞いた後、薫はすぐさま玄関に走り傘を持ってきた。傘を渡すには、小窓は文字通り小さすぎた。そのため、窓自体を開ける必要があった。「窓、開けますね」薫のおどおどとした声を聞き、窓の向こうの相手が「どうぞ」と答えると窓は水滴を飛ばし、間抜けな音を出しながら大きく開いた。

「ごめん! 待った?」肩で呼吸をしながら薫が言うと、優希は空模様と比例した笑顔で「いま来たところ」と言った。

優希の女性らしい声を聞き、薫は安心するように微笑みながら言う。「あ、やっと風邪治ったんだ。良かったね」

「うん、ありがとう。薫の家で雨宿りしなかったら確実にもっと酷かったと思う」

「感謝してよね!」ふざけながら薫が言うと優希は頷いた。「枯れてた声もやっと治ったし」

「あの低い声も結構好きだったんだけどなあ…で、今日は何処行く?」と、薫。

「今日はねえ…」優希は薫の笑顔を見ながら、思考を巡らす。なるべく男のいないところにしよう、と薫のことを第一優先にして考える。自分にとってたった一人の友人と今日をどう過ごそうかと考える。

るのが、優希は楽しくて仕方がなかった。薫と出会った数日前の雨の日を思い出すと大事なことを忘れているのに気が付き、同時に行き先を決めた。

「ねえ、決まった？」 薫は目を輝かせながら優希の背中を指先で軽く突く。

優希は薫のほうを振り返り、行き先を告げる。「今日はウチにおいでよ！ 借りてた傘を返さないと！」 優希は薫の手を握り、日曜日の街を歩き出した。

「私たちカップルに見えるかな？」

「さあね、分かんない」と言った後に優希は「そうなれるといいね」と薫には聞こえないように呟いた。

—終—

#6 ショーセツ・エスエツフ

「この世界にはフィクションが存在しない」

フィクションといっても、色んなものがあるが、すべてに共通するものは一つだ。『作り物』

誰かが作り、誰かに語り、誰かがそれをまた違う誰かに語る。そういう一連の流れによって、フィクションはフィクションとしての市民権を得る。誰も知らないような話は、フィクションじゃない。ただのホラ話だ。

話を戻そう。なぜ、この世界にフィクションは存在しないのか。簡単なことだ。すべて叶えちゃったからさ。

フィクションはフィクションじゃなくなってしまった。ノンフィクションになってしまった。現実になってしまったんだ。どこかの科学者たちが、「夢を現実にする」というとんでもない機械を発明した。エネルギーのいらない乗り物、感情を持ち人を殺さないロボット、好きなところに出れるドア。すべてが現実となって現れた。

当然、それをよく思わない人たちもいた。SF作家や漫画家、夢を売ることを商売にしている人たちは反対したよ。「そんなもの作るべきじゃない」って。だけど、その人たちは少数派だった。夢を商売道具にするには何より才能がいるからね。消費者たちは嫉妬していたんだ。かくして、フィクションはあっけなく迫害された。

——それ以降、すべての非現実的な娯楽は法律で禁止された。というよりも商売にならなくなった。誰も目の先、鼻の先にある、手を伸ばせば届く距離にあるものに、お金は払わないから。

「ショーセツ？」裕一は、透き通った瞳をこちらに向けた。自分がカラスなら、迷わずくちばしを使い、狙うだろう。

「そう、小説」やっぱりみんなは知らないよね、うーん、と幸恵は

頭を捻った。

裕一が、上目遣いで顔を見てくる。あらためて透き通った目だな、と思った。自分が誘拐犯なら、迷わず搔っさらってしまうだろう。

裕一に小説のことを説明しようと思った矢先に、チャイムが鳴った。「はい、みんな教室に戻って。午後の授業を始めるわよ」

覚束ない、小学生らしい足音が、生徒たちの笑い声と共に学校の廊下を、所狭しと駆け巡る。このような光景を見るたびに、幸恵は教員になって良かった、と心から思う。

空にはいつもと同じ太陽と、いつもと同じ形をした雲が浮かんでいた。

幸恵が、この小学校に勤務することになったのは一ヶ月前だ。「

三年一組の担任が産休に入り、臨時で幸恵が入った」よくある話だ。

「あまり変わってないなあ」この小学校は幸恵の母校でもある。時代は変わってしまったが、見た目はあまり変わっていない。校風だって変わっていない。「自由で、個性のある、夢を持った、他人を思いやれる人になりましたよ」

「いくらなんでも欲張り過ぎでしょ」壇上で校長が読み上げる度に、幸恵は顔を引きつらせる。校長は「夢を持った」この一節だけを、いつも強調するように読む。

「夢を見れなくなった世界になったもんなあ」幸恵は勤務初日、自己紹介も兼ねて生徒に将来の夢を書かせた。いかにも活発そうな男の子は、エリートサラリーマンになると言い、容姿に長けている女の子は、良い奥さんになりたいと、これ以上にないぐらいの笑顔で言った。ほかの子たちも同じような夢を書いていた。

自分たちが子どもの頃の事を思い出す。「仮面ライダーになりたい」「スーパースパイダーになりたい」こういうものこそが、夢ではなかったのか。他人の前で読み上げるのが少し恥ずかしい、夢とはそういうもののはずだ。

「悲しいねえ」心の中で呟いたつもりだったが、声に出してしまっ

たらしい。職員室で隣の散らかったデスクに腰をかけていた、耕太が吹き出した。

「なにいきなり言ってるスカ」

幸恵は顔を真っ赤にしなが、別になんでもないと答えた。

耕太は、普通なんでもないのに独り言言いまスカ、と揶揄し、そして頬に皺を作った。

「ねえ、先生？」裕一が放課後、職員室にやってきた。「ショーセツってなに？ エスエフってなに？」なにかの呪文のように唱え、好奇心だけを映した目で聞いてくる。

「エコエコアザラクみたいだね」

「なーにそれ」これが伝わらないのは年代の問題だなあ、と幸恵は苦笑した。

小説とSFについて、裕一に簡潔に教えてあげた。だが、裕一はよく分からない、と頬を風船のように膨らませた。

子どもには難しかったかな、自分の説明力が足りないというのは棚にあげ「やれやれ」と溜息を吐いた。

「まあもつと簡単に言う」と

「簡単に言う？」裕一が唾を飲み込む音が聞こえた。

「叶わない夢よ」

うーん、と裕一はよく分からないという顔をした。「ショーセツ、エスエフ、カナワナイユメ、ショーセツ、エスエ…」また呪文のように唱えていく。これで棒切れを持ち、地面に落書きでもしたら、メケメケ族の生き残りに違いない、自分の下らない冗談で幸恵は吹き出す。

いつのまにか裕一が、職員室の窓に寄っていき、窓を開けていた。心地よい風が顔に当たる。あまりの心地よさにこのまま風を受けていたい、そう思ったが、机上の書類がその風によって数枚、飛ばされるの見て、やむおえず裕一に窓を閉めるように言う。裕一にはその声は聞こえてなかったらしく、一向に窓を閉めようとしな

「はやく閉めなさいってば」椅子から立ち上がり、裕一に歩み寄っていく。裕一の隣にくると、その背丈の差で、この子はやっぱり小学生なんだな、と当たり前のことが分かる。

「先生みて」裕一が窓から少し顔を出し、右手で空を指差す。危ないよ、と注意しようと思うが一階だから大丈夫か、と思い、裕一の腰に手をやり支えるだけにした。

「どうしたの、別に変わったところは何もないじゃない」幸恵も同じように少しだけ顔を出し、裕一の指す方向を眺める。太陽が眩しく、目を細める。

「あの雲、いつも浮いてるね」確かに、ひとつだけ昼夜を問わずに、空に浮いてる雲がある。時間によっては微動したり、大きく綺麗な曲線で描かれた雲だ。

「まるで、人の手のようね」なにかを掴んでみたい、と言おうとしたとき、裕一が体のバランスを崩した。片手で体を支えていなかったら、窓から転落しただろう。間一髪だった。裕一は顔を引きつらせながらありがとう、ときちんとお礼を言った。

「よくできました」裕一の黒く、健康的な髪が生えた頭が幸恵は撫でてあげた。

「我々が見上げる空にはいつも同じ雲がある」幸恵たちの知らない場所で、無精髭を生やしっぱなしのだらしない格好をした男が言う。「見たまえ、あの雲を」男は裕一と同じように、一つの雲を指差し、この世の終わりを見たかのような顔をする。

「まるで、人の手がペンを握っているような形だろう」

今日も、この世界の空は青く澄んでいる。あの雲はいつもそこにある。

人々の運命はすべてあの雲の仰せのままに。

終

#7 共犯者の簡単な作り方

【一日目】

「ここは一体、どこだ」目を覚ますと、正面にドアノブのない赤い分厚そうなドア、天井には小さな豆電球が一つだけあり、他には何も無い、コンクリート打ちっ放しの部屋にいた。

「頭が痛いわ」横で寝ていたミサトが目を覚ました。言われてみれば僕も頭が痛い。手で触れてみると、たんこぶが出来ていた。少し出血したのか、触るとカサブタが貼られようとしているのが分かった。「こんなところで結構な間、寝ていたのか」

「寒いわ」ミサトが肩を震わせながら言った。唇が着ているシャツと同じ紫になっている。

「大丈夫かい、ミサト」

「うん、大丈夫。ケンジこそ大丈夫？」

「僕は平気だよ」精一杯の笑顔で返答したが、ミサトと同じように肩を震わせていたのでバレていたのだろう。ミサトは無理しちゃって、と苦笑しながら言った後、溜息交じりに呟いた。「なんで私たち、こんなところにいるんだろう」

【二日目】

「あ、これドアだったんだ。気付かなかった」ドアを見つけた。壁とほぼ同じ色をしていたから、全く気付かなかった。

僕ら二人は近眼で、普段は眼鏡をかけている。僕は黒縁で、彼女は赤縁の眼鏡だ。そのため大学のサークル仲間たちからは、眼鏡カップルと揶揄されるが、僕らは嫌ではなかった。共通点があつていいよね、と笑い合っていたぐらいだ。

今はその共通点がない。どこかで落としたか、僕らを閉じ込めた犯人に奪われてしまったのだろう。目覚めたとき、すでに眼鏡はな

くなっていた。

昨日に引き続き、頭痛で横になっているミサトに呼びかける。「ドアを開けたら、トイレだったよ。ミサト行ってきたよ」

「あたしは後でいいよ。ケンジ、先にいっていいよ」正直、昨日からずつと尿意を我慢していたので先に行きたかったが、こんな時でもレディファーストの精神を怠らなかった。「いや、こんな時だからこそか」トイレに入り、ズボンのジッパーを下ろした。排尿を行っている途中、ふと上から風を感じる。顔を上げると、正方形の換気口があった。ほこりなどは付着しておらず、清潔な印象を受けた。男の自分には通れそうにないが、ミサトなら通れるかも知れない。

「ミサト、ちょっと来てくれ」ミサトは生返事をするだけで、動くもしない。ジッパーを上げ、ミサトのほうに歩み寄る。

「おい、大丈夫かよ」ミサトはぐったりしながら、大丈夫大丈夫と寝言のようにしか言わない。額に触れると熱を帯びているのが、すぐに分かり、何か冷やすものはないかと探す。しかし、辺りには何もない。

「これ」ミサトが折れそうな声、折れそうな細い手を僕の前に差し出してきた。

その手には赤いハンカチが掴まれている。

「ちょっと待ってて、濡らしてくるから」即座にトイレに向かい、意地悪なほど少量の水が止め処なく流れている溝でハンカチを濡らした。

ミサトの方に返り、ハンカチをミサトの額に乗せ、「ちょっと汚いけど」

「ありがとう」ミサトは頬を赤らめていたが、それは照れたからなのか、熱のせいなのか分からなかった。セーターと、その上に羽織っていたジャケットを脱ぎ、セーターはミサトの下に敷き、ジャケットを寝ているミサトにかけた。ミサトはまた頬を赤く染めながら「ありがとう」と言った。

【三日目】

食事は一日に一回で、赤いドアの下部にある辛うじて御盆プレートが通るくらいの覗き口から質素な味気ないパンが入れられてくる。食料はちよūd僕らが寝ている頃に運ばれてくるので、犯人は僕らを四六時中監視しているのだろう、と思い、この部屋の隅々まで、這い蹲って探したがカメラらしきものは見つからなかった。

【四日目】

ミサトの体調が回復してきた。食欲も出てきたのか、僕がパンを半分ちぎってあげると喜んで食べた。ミサトが健康になればいいとそれでいい、と思った。二人だから、こんな閉鎖的な環境に入れられてもあまり怖くなかった。

【十日目】

壁に正の字を書いて、日数を数えておくのも飽きてきた。いつここから出られるのだろうか。ミサトはまた体調を壊し、度々トイレに行っては嘔吐している。胃の中には吐くものがないらしく、胃液しか出ないらしい。背中をさすってあげると「ありがとう、ありがとう」と何度も言い、横になり眠っている。

自分の体よりもミサトの体が心配だ。僕らを監禁している犯人になにか薬を貰おうと思い、食料を運んでくる時がくるのを狙い、一日中寝ずにドアを見張ってみた。が、その日は食料が運ばれてこなかった。結局、薬はもらえなかった。

どうせ頼んだところで貰えはしないだろうけど。

【十一日目】

「体も壊れるのに飽きちゃったのかもね」ミサトの体調が劇的によくなった。嬉しきことだが、僕は少し疑問を抱いた。

「あれほどまでの酷い体調が睡眠だけで治るはずがない。栄養失調のほかにも症状が見られた」

ミサトは、でもまあ治ったのは事実だし、とあつけらかんとした顔で言った。

【十二日目】

今度は僕のほうが体調を崩した。熱っぽく、吐き気がする。こんな不衛生のところで、栄養価のない食事ばかりとっていたら体を壊すのは当たり前だろう。ミサトは僕がミサトに対してしたように、心配してくれたが、他人のことよりも自分のことのほうが大事なのかは分からないが、唯一の栄養源であるパンを多めにくれたりはしなかった。

「自分が必死であるように、ミサトだって必死なんだ」ミサトに対して不満を抱く自分が汚い人間に思えた。

「こんな状況だからこそ、しっかりしないと」

【二十日目】

僕らの会話は日が経つにつれ、少なくなった。「大丈夫？」「うん」ぐらいなものであり、通勤時にすれ違う、知らない人と交わす挨拶よりも軽い。

トイレの水面に映る自分の顔はやつれきっていた。横で眠るミサトは自分よりも余裕のある顔に見える。それは裸眼だからかもしれないが、そう見えることは確かだった。

【二十九日目】

「もう限界だ」犯人が分かってしまったから、生きる気力は失われていった。明日、計画を実行しようと思う。この生活から早く抜け出したい。

【三十日目】

ミサトが目を覚ます前に、僕はミサトの首筋へと手を伸ばした。細く、力強く握れば簡単に折れてしまいそうな白い首を、ぎりぎりと締めた。ミサトは目を大きく開き、水槽の魚が餌を食べる時のように口を動かすだけだった。しばらくするとミサトは動かなくなり、体温は失われ、ただの肉の塊になった。「君が犯人だったんだろう」僕が寝た隙に、トイレの換気口から抜け出し、この部屋に食事を運んでいた。あの小さな換気口から抜け出す事は小柄な女性のミサトなら可能はずだ。

体調が崩れた時は、抜け出した際に薬を飲んでいたか、端から演技だったに違いない。「君はどうして、この部屋に僕を監禁しようと思ったんだい」すっかり、床のコンクリートと同じように冷たくなってしまったミサトに問いかけるが反応はない。

ミサトと過ごした思い出が、まるで映写機で映し出されたかのように頭の中で映し出されてきた。

その後、何度も肥大した罪悪感に押しつぶされたが、これからの自分の末路が分かっているいる為、なんとか持ちこたえることができた。

「監禁の理由は死後の世界で聞くことにしよう」犯人が死に二度と食料が運ばれてくることのない部屋で、僕は死を待つだけになった。

【百八日目】

なぜか僕はまだ生きている。生かされている。ありえてはならないことが起きたからだ。

ミサトを殺した翌日、目を覚ますといつものようにパンが御盆プレートに乗せられ運ばれていた。その時点で自分の目を疑い、自分は正気なのか幻覚ではないかと疑った。

そしていつもと違う点がひとつ、あった。パンの横に、枯葉のようにくしゃくしゃにされた一枚の紙が置かれていたのだ。混乱しながらも、僕はその紙を手を取った。その紙には荒い文字で一言だけ書かれていた。

「これでお前も共犯者だ」

今、このドアが開いたとしても僕は外の世界には出ることはできない。どこに逃げればいいのかも分からない。誰に助けを求めればいいのかも分からない。

運ばれてくるパンを半分だけしか食べることができなかったのは、それでも生きていたいという事への罪悪感の表れなのだと思う。

—終—

#8 エイプリルフル廃止!

「え? エイプリルフルって無くなっちゃったの?」ハイエナのように噂話を求める目つきの主婦達が溢れかえっている昼過ぎのファーストフード店で、人目を気にせずに真智が言った。真智の肩まである真っ直ぐで触れずとも潤いが伝わってきそうな黒髪が上下に揺れている。

「真智、知らなかったの? 常識だよ常識」言い終えた後、手にとったハンバーガーを口に含む。体には悪そうだが、味としては悪くはない。

「全然知らなかったよ。フミはどこで知ったの?」

「今朝のニュースで、大臣って人が言ってた」口の中ですり潰されていく牛肉と萎びた野菜、そして三日間砂漠に放置されたような潤いの欠片もないバンズが混ざっていく。

「へえ、じゃあ私みたいにエイプリルフルが無くなったことを知らない人たちは大変だね」真智はそう言いながら、食べ終えたハンバーガーの包み紙を領きながら四角に畳んでいく。

「大変? どうして?」

「だって、嘘ってついちゃいけないものでしょ」真智は畳み終えた包み紙を宙に浮かすように優しく投げた。包み紙は私の額に当たった後、店員がモップ掛けをしたばかりの床に落ちた。

翌日、四月二日のニュースを見て私は愕然とした。「エイプリルフル廃止!」という文字が新聞の一面を飾っていたからだった。老眼鏡をかけ、時折納得したように頷きながら新聞を読んでいる父親から新聞を無理矢理奪い取り、活字体の群れに目をやる。

「ハネムーンを終えたばかりの新婚夫婦がエイプリルフルに離婚届を出し、本当に離婚成立?」馬鹿としか言いようがないな、と私は溜息交じりに呟いた。

次の群れに目をやると「世紀の発見は捏造だった！責任逃れからか、所長失踪！」と書かれていて、やはり金星人の化石は嘘だったのかと肩を落とした。

新聞を読み進めていけばいくほど、どれほど社会が大混乱に陥っているのが直接頭の中で絵となって浮かんでくるように解った。額からは汗が垂れ、生唾を飲み込む。「私って嘘の天才だったんだ！」

報道陣はエイプリルフル廃止を連日連夜取り上げた。廃止を唱えたと噂されている大臣には何本ものマイクが向けられた。

大臣はマイクを向けられる度に、一度咳払いをし、「記憶にございません」とだけ答えていた。

—終—

#9 安心屋始めました。

昼夜問わず、この街は静かだ。だが気味が悪いとは思わない。街の人々は自ら静かな生活を望み、それを実行しているだけだからだ。ただし、これにはある条件が必要となる。

『安心』を買うのだ。

「本当、儲かるな。儲かりすぎるぐらいだ」大きな皮製の椅子に腰掛け、目の前にある札束の山を眺める。「これだけ金があると、金が金に見えなくならないか」

「そんなことありませんよ」エニエルが札束を掴み、頬ずりをする。伸び始めの髭と札が擦れ、景気の良い音を出す。

私は酒が切れたことに気付き立ち上がり、「酒を買いに行こう」
エニエルは頷き、屈伸を始めた。ペキポキ。人類の進化を匂わす音さえも、札束の山の前では景気の良い音になる。

「さて、と」

「行きましょうか」

私は玄関の古めかしいドアに手を伸ばした――。

そもそもなぜ私たちは『安心』を売るようになったのか。この街は私たちのものなわけだし、好き勝手に暴れ、金を奪い、酒池肉林の限りを尽くしても良いのだ。しかし、私たちはそのような下品で、低俗な治め方は望まない。愛がない。愛のない侵略は意味がない。

そして血の流れない侵略、政策をすべく、夜通し頭を捻り倒し生まれたのが『安心屋』だ。我ながら愛のある商売だと思う。『安心屋』が生まれた日は自己賛美の声をあげ、酒を浴びた。

「この『安心』を買えば、私たちは貴方たちの生活を邪魔しません！」真昼間の路上で、『安心』の叩き売りを始めると、市民たちは揃いも揃って芸のない反応を示した。ざわつき、疑い深い目をこちらに向けてくるだけだ。

「その綺麗な奥さん！お一つどうですか？」買い物袋を肩に下げた中年の女性に話しかけると、「胡散臭いわ」と一蹴された。

「あらら。それは残念だ」本当に残念だ。パツウインと指を鳴らし、待機させていた黒のワゴン車を呼んだ。「愛がないことはしたくないんだけど」

黒のワゴン車から数人の男たちが飛び出してきて、『安心』の購入を拒んだ中年の女性を羽交い絞めにした。有無も言わず腹部を殴りつけ、体を縄で縛り、仕上げとして口にはガムテープを貼った。そして、ワゴン車の後部座席に勢いよく放り込んだ。そそくさと男たちも車に乗り込み、何事もなかったかのように走り去っていく。

「皆さん！『安心』を買わないとあんな目に合っちゃうかも知れませんよ！」

かくして『安心』は飛ぶように売れた。特に人気商品だったのは『安心十日パック』だ。リーズナブルな価格設定で『安心五日パック』を二つ購入するより二割もお得なのだ。これが売れないわけではない。

「儲かる儲かる。誰も傷付かないで金が手に入る。これは愛があるね。愛の極みだ」どこからか部下が盗んできた年季のはいった木の椅子に腰掛る。椅子がギシギシと悲鳴をあげた。

「そうですね。これは楽です。愛があるかは別として」上機嫌な顔をしたエニエルはグラスを空にし、次のボトルを空けグラスに注ぐ。

「ところで、あの中年の女はどうしたんだ？」

「とつくに始末しました」グラスを掴み口に運ぶと、瞬きよりも早くグラスは空にし、エニエルは鼻で笑う。「愛がない、ですか？」

「いや、構わんさ。愛に犠牲は付き物だ。あの女もあの世で後悔し

ているだろうし」

ですよねですよね、と言いながらエニエルはまた次のボトルを開けた。グラスに注ぐのが億劫になったのか、そのままボトルを掴み一気に飲み干した。

今の所、この侵略で流れた血はあの利巧じゃない中年女性だけだ。敢えて、前市長とその家族は省かせてもらう。

「やあ、ジェファー。一人でおつかいかい？ 偉いね」安心屋の前を通りかかった少年に話し掛ける。「『安心』の買い物は頼まれてないのかい？」

「頼まれてないよ」ジェファーは不機嫌そうな顔をして言った。

「それは残念だ！ でも早く買っておいて方がいいよ！ ママにおねだりするべきだね！」

「うちにはもうお金がないんだ。食べ物を買うだけで精一杯だよ」

「そうかそうか。でも買わないと危ないぞ」わざとからかうように言う。

「あんたたちが悪い癖に」ジェファーは吐き捨てるように言い、走り去っていった。街中に消えていく小さな後姿。これが私の見たジェファーの最期の元氣な姿だった。

『安心』を買うことで、市民たちは健気にも文字通り安心のある生活を送っていたように思う。

黙って従い、安心を買ってくれば私たちは手を汚さなくても済むのだが、時折「お金が無い」などと甘えたことをばやく者も居れば、育ちの悪い野良犬のように噛み付いてくる命知らずが居て困る。その場合は、やむを得ず、愛に反する手段を取らざるをえない。愛の犠牲になってもらう他ない。

そのような市民たちのせいで、今日もこの静かな街に銃声が鳴り響く。「残念だ」

—— ドアを開くと、深夜にもかかわらず顔に熱を感じた。同時に前が見えなくなった。視界が白に染まる。

「こんばんは、市長」この声によって、広い庭に続く玄関先に誰かがいることが分かった。「ちょっと眩しすぎましたかな」

カチツというスイッチを切ったか、ボタンを押したような音が聞こえ、視界が段々と白から暗闇に変わっていく。「誰だ？」

「私ですよ、私」まだ顔は見えない。

「だから誰だよ」苛立ち、口調が荒くなる。こんな時間に何の用だ。「あなたに妻を殺された者ですよ」

すぐに分かった。あの初めの犠牲者である中年の女のことだ。なぜなら今まで女の犠牲者は賢くない選択をしたあの女だけだからだ。「実は私以外にも市長さんに会いたい、って方がまだいますね」

視界が回復し、見えてきたものは蟻の大群のような数よりも多い市民たちだった。皆のそれぞれの手には何やら危なっかしい物が握られている。刃物、鈍器、極めつけは拳銃も見えた。

「驚きましたか」

「いやいや、全く」私は即答する。声は震えていない。「まあ、こうなるでしょうな」

「なぜ逃げなかったのですか、市長」どうやらこの男が統率者らしい。前に乗り出し私に問いかけ続ける。

それまで黙っていたエニエルが身を乗り出し、「市長だからだ」

「こちら。エニエル、この方は私に聞いているんだぞ」

「しかし」

「私には義務があるから」エニエルは納得したのか、一步後退した。「なぜ逃げなかったのか。はて、なぜでしょう。強いていうなら、先ほどエニエルが言ったように『市長だから』ですかね。それと」

「それと？」と、目の前に立つライフル銃を手を持った男。

「逃亡には愛がないでしょ」

私の背後に立つエニエルが大きな拍手をした。大勢の市民の前に
むなしい音が響き渡る。「さすが市長！」

「あんたふざけてんのか？ 人を殺しておいて愛なんてないだろう
が」男が銃口をこちらに向ける。「妻は森の奥で死んでいた。あんな
たらに殺されたんだ。ボロ雑巾よりもヒドイ姿だった。あれは人じ
やない。あれは私の知ってる妻の姿じゃなかった。ただの腐った肉
だ！」

私は何も言わずに頷き、踵を返した。「エニエル、諦めよう」

エニエルは静かに頷きを返し、ジーンズの右ポケットから拳銃を
取り出した。

「お前たち、一体なにをする気だ！」

「責任を取るつもりだが」エニエルが私の横に移動し、にこやかに
笑った。

「なあ、エニエル。私は一つミスを犯してしまったようだ」

「それはなんでしょう？」

「自分たちの『安心』を買うのを忘れていた」

エニエルはくすりと笑い、右手に持っていた銃の引き金を引いた。
エニエルが静かに倒れていくのを見届け、私はゆっくりと目蓋を閉
じた。

——『どこで買えばよかったんだ？』

静かな街に景気の悪い銃声が響いた。もう二度とこの街に、この
ような銃声が響かないことを私は願う。

「愛のある街になってくれ」これが市長としての最期の務めとなっ
た。

—終—

#10 腹巻ラブストーリー

「だせーなあ」

洗面所で眠気眼のまま顔を洗い、目の前にある大きな鏡を見ると水色で薄い生地の腹巻をした男がそこに立っていた。

これじゃモテるわけないよな、なんて思っていると外から大きな音が聞こえてきた。ドーンドンと何かを思いっきり叩いてるような音だ。「親の仇を殴ってるようだ…」聞いている内に、心の底から何かが湧き上がってくるようだった。

それはただの気のせいだったように今では思う。

音の主が一体なんなのだろうか、気になって窓に手をかけた。

窓を開けた瞬間、ビクツと怖気づく程の今まで部屋に漏れてきていた音の何十倍もの大きな音が、耳に入り込んできた。

「今日は祭りだったのか…」

仕事ばかりで、地域の活動に全く感心を示さない為、知る由もなかった。

おかげでその仕事の疲れで、体調が崩れてしまい毎朝、腹痛に悩まされている。

下痢だ。

医者に、何とかならないかと問うと「私が子供の頃は腹巻をして寝たものですよ」と答えた。

ものは試しだ、と思い腹巻をして寝てみた。そうするとどうだろう。ここ一週間、体調がすこぶる良い。下痢もしなくなった。

腹巻は勿論のこと、腹巻のことを提案してくれた医者にも感謝している。

「祭り、行ってみるか…」体調が良くなると気分も優れる。

仕事ばかりしていると沢山の人の出会いはあるが、それは仕事

上だけの関係であり、もっというなら上辺だけの関係だ。

それ以上、進展することはない。

「ナンパでもしてみようかな」

薄手のシャツを上から羽織り、鏡の前に戻り歯を磨き、ボサボサの寝癖だらけの髪の毛を整える。

「よし！」威勢よく家から飛び出した。

奇跡的に、いや天文学的にありえない確立の話だがナンパには成功した。

ホテルで脱ぐのを忘れていた腹巻姿を見られたのは、言うまでもないだろう…。

「かわいいね」と彼女は言ってくれたが、その時は余裕がなく下手な言い訳をつらつらと並べてしまった。

うんうん、と微笑みながら、言い訳を聞いてくれていた彼女の顔が今でも目に焼きついており、昨日のように思い出すことができる。

——以上は五年前の話だ。

五年もあれば引越しもする。部屋にあの時のように祭りの音が響く事はなくなった。

同時に、新たな出会いを求める事もなくなった。

当時使っていた、あの水色の腹巻は相変わらず使っている。

その腹巻は「いつも清潔にしないとね」と言われ毎日洗われている為か、糸は解れてしまい、いくつか穴も開いてしまっている。

「いつもありがとう」洗濯を終えた腹巻を畳む途中に感謝の言葉を述べた。

「やーね、腹巻に話し掛けるなんて。まだそんな歳じゃないでしょう」

これは違うんだ、と必死にする言い訳を「うんうん」と微笑みながら彼女は聞いてくれた。

「いつもありがとう」本当は君に言ったつもりだったとは、腹巻を

畳み終えても言う事が出来なかった。

—終—

#11 さよならですよ

「せーの！ で、飛ぶんだよ」文子ふみこはまるで今から妖精にでもなるかのように楽しそうに言い、頬を緩ませた。「沙紀ちゃんさき、もしかして怖いのか？」

「怖くないよ」

そうだよ、と文子はこれから何をするのかを忘れているかのよう
うに、無邪気にはに cand。

わたしたちが現在立っている学校の屋上は無駄に広く、特にこれ
といって何もない。強いていうなら鳥の糞があるぐらいで、それも
白く乾ききっており、清掃の行き届いていない屋上を更に汚く見せ
ている。

よくある青春映画などでは、屋上というものは神聖で「青春の溜
まり場」という小奇麗な印象を受けるのだが、現実の屋上はガサツ
で、どちらかというと「ゴミの溜まり場」のほうがしっくりくる。

顔を上げると、こちらは無駄に青く澄んだ無慈悲な空があるだけ
だった。

「沙紀ちゃん、わたしもう疲れちゃった。死にたいわ」

文子は彼氏から一方的な別れを告げられた晩、沙紀の部屋で弱音を吐いた。思春期特有のつまらない自殺願望だろうと思っていたが、
どうやら本気なのか、目には生気が感じられず、死んだ魚介類のよ
うな目をしていた。

「いっしょに死にましょ」

と、腕を掴み必死に懇願してくる文子は哀れかつ、迷惑だった。

「わたしはまだ死にたくないわ」と、一応言ったが、自分自身に自
殺願望がないかと言われれば嘘になる。「毎日、死にたくて仕方な
い」というのが本音である。

わたしに自殺願望が芽生えているのは他ならぬ、この腕にしがみついて離れない文子による度重なる嫌がらせのせいだった。

今年の夏からいま現在までに行われた、文子曰く「ただの悪戯」というまるで悪意が存在しないかのような嫌がらせは数知れず、わたしは疲れきっていた。中でも一番堪えたのは、夏風邪で倒れ自室で寝ている時のことだ…。

「沙紀ちゃん、大丈夫？」

文子が心配そうにドアを少しだけ開け、その隙間から顔を出した。咳をしながら頷くと、文子が安心したように微笑みながら部屋に入ってきた。右手に何か黒い物体を持っている。熱っぽさからか視界が曖昧で、よく見えない。

文子が一步、また一步とわたしが横になっているベッドへと足を進めてくる。文子がベッドの真横に立ち、

「これ、あげる」と言って右手を前に突き出した。

黒猫だった。

すでに事切れている、生気のない黒猫を文子は満面の笑みを浮かべながら、枕元に置いた。

「猫ちゃん、好きでしょ」

視界が黒くなり、わたしは吐いた。吐瀉物まみれになったベッドのシーツを文子が「あらら、汚いわね」と言いながらタオルで拭く。一通り拭き終わった後、文子はそれじゃあお大事にオホホ、とまたあの満面の笑みを浮かべながら言っ、そそくさと部屋から出て行った。

それからというものの、体調は更に崩れ、文子への恐怖で夜も眠れない日々が続いた。人にたいして、これほどまでの嫌悪と恐怖を抱くのは初めての事だった。

「——沙紀ちゃん、明日の放課後、屋上から一緒に飛び降りましょ」

「ええ、分かったわ」

一瞬、考える素振りを見せてから、苦悶の表情を浮かべながら答えた。

文子が死ねば、わたしは死ななくて済む…。

明日、文子を屋上から突き落とす。

そのことだけを考え、一睡も出来ないまま、学校へと向かった。外は、清くない雨がぱらついていた。

教室のドアを開けると、クラスメイトたちの渦の中で、ひと際目立つ雰囲気の花がいた。文子だ。期末テストの話をしているようだった。「今日が最後の学校になるから、めいっぱい楽しみなさい」わたしは自分の席に座り机に伏せ、口元が緩むのを隠した。

時間は早く過ぎていった。授業の終わりを告げるチャイムが鳴ったかと思ったら、次の瞬間またチャイムが鳴り、授業の終わりを告げた。「楽しい時間は早く過ぎる」というのは迷信じゃないのかも知れないな、と感銘を受けた。

放課後を告げる放送が始まった。「みなさん、下校の時刻になりました。気をつけて帰りましょう」

わたしは放送に歯向かい、約束の屋上への急な階段を登り始めた。

屋上へのドアは重く、非力なわたしには少し辛かった。鍵と鎖に覆われて普段なら、侵入することの出来ない屋上だが、今日は鍵がかかっていなかった。恐らく、生徒会長でもある文子が、それらしい理由をつけて鍵を職員室から拝借してきたのだろう。

「遅いじゃない」

文子は今朝、クラスメイトに囲まれている時とは別人のような顔つきだった。

「こっちに来て」と、文子が手招きをする方へと向かった。

今朝ぱらついていた雨はとくに止んでいたが、雨の名残がまだ屋上には染みついて乾ききっていなかった。

「せーの！ で、飛ぶんだよ」

ここに来て初めて文子が頬を緩ました。その顔を見て、「これから、この人を殺すんだ」という自分の恐ろしい考えを思い出す。自分のこれからの行動に、怯えた表情をしていると不意に文子が顔を覗き込み「沙紀ちゃん、怖いのか?」と言ってきた。

「怖くないよ」

自分が怖いとは間違っても言えない。

そうだよ、と文子は自分が今から殺されるということを知らずに、はにかんだ。それがものすごく阿呆面に見えた。

「それじゃあ、死のつか」文子がエメラルドグリーンのフェンスに手をかけ、それをよじ登る。「沙紀ちゃんも早く、はやく」

フェンスを登り、「あと一歩で死ぬ」といえる小さな足場に体を任せた。自分は死ぬわけにはいかない。慎重に体勢を整える。横を向くと同じく、体勢を気にする文子が立っており、風によってスカートがふわふわと浮いている。

地上を見下ろすと、グラウンドには誰もいない。テスト期間中の部活は校則によって禁じられている為、グラウンドは砂漠のように殺風景だった。「誰にも止められないから」と、文子が今日を提案したのは、わたしにとっても好都合だった。突き落とす場面を目撃されては困るからだ。

「じゃあ、準備はいい?」文子が長い髪が口に入ってくるのを気にしながら言った。

「いいわ」びゅーっと、風の音が聞こえる。普段は聞くことのない風の音と共に文子の「せーの!」という言葉がはっきりと聞こえた。

横を見ると、文子は飛び降りていなかった。

「やっぱり、わたしを殺そうとしたのね」

「バレた?」

などと言いながら文子はあっけらかんとしている。曇天の空が文子の悪意を際立たせた。

天井が映し出されていた。後頭部が鈍器のような物で殴られたかのように痛むことに気付いた。

「ああ、そういうこと」

霞む意識の中で、後頭部を触った手を見ると血がついていた。階段にも同じように大量の血がついている。

「やっぱり、わたしも死ななきゃならないの？ お姉ちゃん」

完璧に上手くいったと思い、気を抜いたのがいけなかった。びしよびしよに濡れた上履きがタイル式の階段で見事に滑った。なんという不運。

不運？ いいや違う。どうせ違う。不運なんて大層なものじゃない。やない。

それとも恨み？

お姉ちゃんの祟り？

それにしても早すぎない？

いいや多分、きつと、絶対そう。お姉ちゃんだ。

「わたしは、お姉ちゃんみたいに上手に出来ないなあ」

お姉ちゃんうざいよ、お姉ちゃん。

殺したいほど、うざいよ。

薄れゆく意識の中で思い出すのは、「せーの！」と言う自分とほとんど同じ顔をした双子の姉の笑顔だった。

わたし、飛ぶ。

—終—

#12 そこにいた日常。(幽霊と私)

「どうしてここにいるのよ!」目の前に立つ明日香の顔を平手打ちしようとするが、掌は空を切った。「最悪!」

「だって友里恵が悪いじゃん」明日香は薄気味悪い笑いを浮かべる。本当に薄気味悪い。

——それもそのはず、

「ついてこないでよ! この幽霊女!」先週自殺したはずの明日香が、そこにいたからだ。

明日香は学校の屋上から盛大に飛び降りた。明日香の体が無残な肉片となり散った運動場は、体育の授業で気だるそうに私語をしながらマラソンの練習をする多数の生徒たちの足と時間を止めた。

明日香は虐めにあっていた。クラスの町田や河野はしきりに明日香に絡み、汚い言葉はまだしも性的な悪戯まであったと明日香が死んだ後に噂しているのを聞いた。明日香の両親は娘の虐めに気付かず、毎朝「いつてらっしゃい」と明日香を見送っていたらしい。

私が明日香の立場だったらと考えるだけで吐き気がした。

明日香の葬式を終え、帰宅すると突然、違和感が襲ってきた。「怖い」のだ。目に見えない何かがそこにいるような気がし、恐怖した。だが、これは間違いであることに部屋の電気を点けてから気付く。

「おかえり」私のベッドの上で、もうこの世には存在しないはずの明日香が寝転びながら言った。

「葬式って面倒臭いよね、先に帰っちゃったよ」明日香は頬を緩めながら頭を掻いた。

「なんで：明日香がいるの?」両手が無意識の内に顔を隠そうとする。恐怖のあまり、何も見たくないと本能が行っているような気がする。

「なんでって、私もよく分かんないけど」

「…本当に明日香なの？」

「うん、あなたが見殺しにした明日香ちゃんだよ」明日香は右手でピースサインを作った。

「もう…：ついてこないでよ」

「嫌よ。他に行くところないし」

「家は？ 両親に会いたくないの？」

「別に…：ていうか、言うの忘れてたけど私の姿って友里恵にしか見えないんだよね」

「えっ！」通学路の途中で、そのような大事なことを告げられ友里恵は戸惑いと恥ずかしさを覚えた。頬が熱い。自分が幽霊と会話しているところを、通勤通学の不特定多数の人に見られてしまった。

「そういうことは先に言つてよ！」

「私は幽霊なんだから、当たり前でしょ」明日香は路上なのもお構いなしに、腹を抱えて笑い転げた。しかし、明日香の真っ白な服には汚れがつかず、私は明日香が幽霊であることを再認識する。

「このまま明日香と会話しながら歩いてたら、変人だと思われちゃう…」

「もう思われてると思うよ」明日香の言う通り、すでに遅く、道行く人たちの視線が冷たかった。

「最悪！」明日香を放置して、そのまま学校へ走っていかうとしたが、幽霊に敵うはずはなくすぐに追いつかれてしまった。

「友里恵。ブツブツ独り言しながら学校に来たんだって？」鞆から取り出した教科書を机に入れていると、隣の席に座っていた理紗が話しかけてきた。「もう噂になってるよ」

「ちょっと頭痛くてね…」ぎこちない愛想笑いを浮かべると、理紗は「ふーん」とだけ返し、教室から出て行った。おそらく、女子トイレに向かったのだろうと推測した。女子トイレは団地妻がゴミ捨

て場で噂話をするように、女子高生が噂話をするには都合の良い場所だった。今頃、理紗が私のことを同級生と噂しているのだろうか、と考えていくうちに鬱屈な気持ちになった。

「ドンマイ」と、机上に座る明日香が笑う。

「邪魔だからどいてよ、馬鹿」本当は叫びたい気持ちだったが、これ以上自分の評判を落とすのは避けたかった為、声を落とした。

「馬鹿とは何よ、馬鹿とは」明日香が言い寄ってくるが、寄りすぎたため、顔と顔が触れ合った。というよりは寧ろ、透けて顔がめり込んできたといった方がこの場合の表現としては適しているような気がした。

「気持ちわるっ」

「幽霊なんだからしょうがないでしょ！」明日香は机の上に立ち、甲高く叫んだ。

もちろんその甲高い声は私にしか聞こえていないらしく、周りのクラスメイト達は皆、無反応だった。

結局、明日香は一日中、一緒にいた。給食のときはスプーンを宙に浮かべて遊び、クラスメイトたちは普段は「そんなもの子供騙しだ」などと小馬鹿にしているのに、ポルターガイストだと騒ぎ立てた。明日香が問題を起こす度に、私は胃が痛くなり、教室から逃げ出したくなった。

「いやー、今日は楽しかったね」下校中に隣で塀の上を歩きながら、明日香が満足げに言う。

「私は全然楽しくないんですけど」地面に落ちている小石を蹴飛ばすと、同時に履いていたスニーカーまで飛んでいってしまい、それを片足でホッピングする要領……つまりケンケンで無様に拾いに行き、明日香の笑いを誘ってしまった。「なんで私についてくるのよ。他にも姿が見える人がいるでしょ、絶対」

「いないってば」そう言うのと、明日香の表情が少し曇ったように見えた。「友里恵しかいないの」

「なんで私なのよ……」

「たぶん私は友里恵を恨んでるから」

「…恨んでる？ 私を？」明日香に恨まれるようなことをした覚えはない。明日香とは休日によく遊んでいたし、悩み事だって聞いていた。親友にもっとも近い関係だったと明日香が死んだ日に私は思ったぐらいだ。

「私、虐められてたじゃん」明日香は苦しそうに言いながら、目に涙を浮かべた。幽霊でも泣けるのだな、と私は感慨深く思う。「でも友里恵は助けてくれなかった」

「だってそれは…」助けることが出来たのではないか、明日香の自殺を止めたのではないか、本当のところ明日香が死に数日間はそのことばかり考えていた。だが助けられなかったという結果論だけが先に頭を支配し、結局はそれを受け入れ、仕舞いには虐めのことを一切知らなかった風に装った。

「友里恵は私を見殺しにした。自分が次の標的にされるのが怖くて、見殺しにしたんだ。学校では他人の振りをして、休日になったら学校の奴らに見られないようにわざわざ隣町まで行って遊んで…都合いいよね、ほんと」明日香は腹に溜まっていたもの吐き出すように言った。

「それは……違うよ……」

「何が違うのよ！」明日香が涙を流しながら、力強く訴えるように叫ぶ。「何が違うって言うのよ！ そうでしょ！ 認めなさいよ！ 私を見殺しにしたって！」

「見殺しになんてしてない！」違う。この場においてなお、嘔く自分に反吐が出る。「私は明日香を…」突如出てきた鼻水をすすする。

「何よ」

「助けたかった……」人目も気にせずに涙を流した。噂話？ そんなものは明日香が受けてきた痛みに比べるとミジンコ以下だ。マイクロミクロンだ。私は明日香を助けたかった。でも助けられなかったのだ。いや、助けようともしなかったのだ…。

「認めるの？」

「：見殺しにしたのかなあ」

「したのよ：」 塀の上から飛び降りた明日香が私を抱きしめようとするが、それは出来なかった。「もう感触がないよ、友里恵」

「明日香：私、最低だよ」

「うん、友里恵は最低だよ。でもね……ありがとう」

「ありがとう？」

「だって、認めてくれたじゃん」 明日香は微笑し、私の返事を待たずに「じゃあね」と言い、どこかへ向かっていった。私は涙を拭うのに精一杯で、明日香の向かう先を見ることが出来なかった。

帰宅すると、今日の出来事が全て夢だったように思え、溜息をついた。「明日香：どこ行っちゃったんだろ」 二階に上がり、自分の部屋の電気を点ける。

「おかえり」 明日香がまたベッドの上で寝転んでいた。

私は明日香に「なんでまだ居るのよ！」などと怒る振りをしながら考えていた。

これから明日香に償うことは出来るのだろうか、もう触れることも出来なくなった友人に何が出来るとだろうか。そんなことばかりを考えていた。

共に生きていた頃よりもずっと大事に、明日香のことを考える私が、そこにいた。

—終—

#13 ハーゲンダッツ・マイラバー

「このアイスって高いと思わない？」

「値段相応だろ」千尋ちひろの持つアイスに視線を向けながら、修二しゅうじは答えた。「買うのか？」

「修二の言う通り美味しいんだけどなあ：でも高いから止めとく」だから買ってと言わんばかりの瞳に頷きを返しそうになるが堪える。

「あっそう」素っ気無い反応を返し、アイスの並べられたクーラーの扉を指差し閉めるように促がすと、千尋は不貞腐れたような表情をしながら、名残惜しそうに扉を閉めた。扉を閉めたときに発生した小さな風により、千尋の短い髪が少しだけ揺れた。

街の真ん中に去年建てられた『スーパー大福だいふく』の店内は人が溢れかえっていた。

その人の群れによる会話が潮騒に聞こえ、邪険な思いを抱く。野菜売り場に並べられたタイムサービスの影響と見て取れる値段がつけられたキャベツを掴む手が震える。

「キャベツなんて買っても腐らせてしまうだけだ：」何とか震える手でキャベツを掴み、漸く気が付いた。

自分の持つ買い物かごを覗くと何も入っていない。腕時計を確認すると、『スーパー大福』に入店して早二十分が経とうとしているのだ。

この二十分の間、キャベツと同じように掴んでから「不要」だと判断して、棚に戻すという行為を繰り返していたようだった。

「何を買えばいい」

修二は頭を巡らす、買いたいものが一つも浮かばない。「何を買いに来たんだっけ？」

何か目的のものが、貴重な休日になぜか『スーパー大福』

に來たはずなのだ。なのに、なぜ…。

「修二」

ふいに名前を呼ばれ振り返ると、そこには声色で判りきっていたことだが千尋が立っていた。

「きてたのか」

「当たり前でしょ」千尋の朗らかな顔に癒された。ここ半年、労働基準法を無視した夜勤の連続により作られた心労、肉体的疲労が解き解されたような錯覚に陥る。だが、癒されたというのは事実であった。

「俺は何を買いにきたんだっけ？」

千尋が嘖き出した。「疲れてるのね」

「そうかも知れない」疲れを意識すると、にわかに目蓋が重くなった。

ふと、休暇をくれない上司の顔が浮かび上がる。妄想の中の上司は現実とさして変わり映えのない言葉を毒づく。

『休みをくれだど？ やってもいいがそれは永久の休みになるぞ』

煙草のヤニで黄ばんだ歯を見せる。『まあ一日だけならやってもいいがな』

「どうしたの？」千尋が修二の顔の前で広げた掌を大袈裟に左右に振った。

「ごめん。ちょっと考え事してた」妄想を振り払おうとするが、頭の隅で上司の情のない言葉が木霊する。黙れ、この外道。

「しっかりしてよね」千尋は心配する視線を修二に配った。続けて、

「買いにきたのはあれよ、あれ」

千尋の指差す方向にあるのは、冷凍売り場のアイスクリームコーナーだった。いつかもこのようなことがあったような既視感に襲われたが、気のせいで片付ける。

「ああ、アイスか。あれだな、あの高いアイスだな」

千尋に手を引かれ、修二はアイスクリームコーナーへと向かって行った。

レジで支払いを済ませ、『スーパー大福』を出た。辺りは既に暗くなっていた。

買ったばかりのアイスクリームの入った袋を覗き込むと、冷え冷えとしており、白い霧が袋の中にたちこめている。

店を後にし歩いていくと、すぐに千尋の家に着した。意識せずとも、という歩足取りだった。

千尋宅は二階建てのアパートであり、千尋はその二階に住んでいた。ドアの前に着くと一時と躊躇せずに呼び出しブザーを鳴らした。間抜けな甲高い音が鳴った手応えはあったのだが、千尋は出てこない。

「留守か？」ドアに備え付けられた郵便受けの小さな隙間から部屋の中を覗き込むが、千尋の姿はなかった。

「せっかく買ってきてやったのに……そうだ」閃いた。

郵便受けに入れとこう。

我ながら名案だと賛美を送る。早速、袋から値段相応の味をもつアイスクリームと取り出した。

「入らねえ……」何度も試すが入りそうにない。それもそうだ。元々郵便受けは新聞などの紙類、つまり平らなものを入れるべき場所なのだ。

諦め、溜息をつくが、またある事を閃いた。「中身だけ入れりゃいいじゃねえか」

「そうだそうだ……中身だけ……手の熱で溶かして……。とろとろ溶けた中身だけ……」

中身がアイスクリームとは思えない程に頑丈な容器の封を開けた。「ほお……」

容器を傾け、郵便受けに流し込んでいく。無意識の内に笑いがこみ上げてくる。楽しい。とろとろ溶けたアイスクリームがどろどろ流れ込んでいくよ。楽しいよ。とろとろでどろどろだよ。楽しいよ。アイスクリームが郵便受けに流し込まれ、容器を袋に戻した。

どろどろとしたものがはみ出ている郵便受けをながら、指についた微量のアイスクリームを舐めた。体温で溶けてしまっていたが、値段相応の高級感のある上品な味だった。

ドアを眺めたまま呆けていると、不意に部屋の灯りがつけられた。同時に短い悲鳴が聞こえた。

「どうした？ 千尋！」聞き覚えのない声がドアの向こうから聞こえる。お前は誰なんだ？ 気安く俺の『千尋』呼び捨てにしやがって。

「ドアに何か……何これ……？」千尋の震えた声だ。判らないのか？ お前の大好きな少しばかり値の張るアイスクリームだ。わざわざ買ってきてやったんだ。

ドアに近づいてくる足音。「……これは…アイスじゃないか？」
「えっ？」

先ほどとは違う体重の軽そうな足音。そして、ドアが開けられた。だが、そこには誰もいない。

そこにあるのは『スーパ―大福』のビニール袋だけだった。恐る恐る中を覗くと、アイスクリームの容器が入っている。

千尋は挙動を激しくし、辺りを確認するが人の姿はない。すっかり長くなった髪が縦横無尽に揺れていく。

姿はない――。

しかし、千尋は判っていた。このアイスクリームを持ってきたのが誰かと言うことを。

修二は夜道を歩きながら、ぶつくさと呟く。内容は上司への不満、社会への断罪要求などだ。

自宅に到着し、上着のポケットから鍵を取り出そうとすると、あることに気付いた。

「指がベタついてる……なんで？」

記憶にない。身に覚えは無い。

頭を捻らせながら、ベタついた指で鍵を掴み、鍵穴に差し込む。

ドアを開けて広がる部屋はいつもよりも寂しげだった。
「疲れてるんだな俺……」洗面所で何度も何度も手を洗う。
修二は鏡に映る自分が不気味な薄ら笑いを浮かべていることに全く気付いていなかった。

――終――

#14 外の住人

半年振りに外出して、まずはじめに感じたのは『太陽』からの殺意だった。それもあからさまな殺意だ。

「死ね死ね焼け焦げてしまえ。ここはお前如きが来る場所ではない。はやく巢に戻れ。それとも——死ね死ね焼け焦げてしまえ」

太陽はじりじりと僕を照らす。十階建てのアパートが作る大きな影を切り裂き、執拗に僕を照らす。

「やめてくれやめてくれやめてくれやめ——」

太陽はニタニタと笑い、「なら帰れ」と僕の怯えを楽しみながら吐き捨てた。

僕はTシャツの裾で涙を拭い、がたがたと震える足に鞭を打ち、自転車置き場に走った。

数十メートルがやけに遠く感じる。太陽と同じ距離のように感じる。どれだけ手を伸ばしても届く気配はない。どれだけ足に鞭を打とうが自分自身に叱咤しようが届かない。一步近づくと、一步離れていく。これっぽっちも望んでいないイタチごっこが繰り返される。

何分？ 何時間経ったであろうか。僕の被るチャコールグレーのハットは汗で真っ黒に変わっているため、もしかしたら数日かも知れない。数週間の可能性も、某探偵漫画の黒幕が主人公に最も身近な博士の可能性と同じぐらいある。極めて零に近いが…。

さすがに諦め、家に帰ろうと震える肩と足でエレベーターに乗り込むと見知らぬ中年男性が既に乗っていた。

僕が十階行きのボタンを押すと男は右の口端をくいつと器用に攀り上げ「おめでとう」と拍手をしながら言った。その瞬間、エレベーターに大勢の人間が押し寄せて、口々に「おめでとう」と爽やかな笑顔で理由不明の祝福を始めた。僕は訳も分らずも一応「ありがとうございます」と頭を掻きながら照れてみせる。そうすると、

それまで馬鹿の一つ覚えのように「おめでとう」と拍手を繰り返していた老若男女は醒めたような目付きで舌打ちを始めた。

チツチツ――。

「何なんだよ、あんたら……」

チツチツ――。

チツチツチツ――。

ツ……チツ……ティツ……。――難しい」

時々、上手く舌打ちが出来ていない人もいて妙に苛立つ。出来ないならするな、馬鹿。

貧乏揺すりをしながら、耳を塞いでいると初めの中年男性が昂然とした足取りで近づいてきた。僕の前に立つと上着のポケットから手の平に収まるほどの何かを取り出し、それを差し出した。目を見ると「はやく取れ」と言っているように見えた。

「くれるんですか？」

「あがりゅ」

知能が足りていないような舌足らずな口調だった。気味が悪いな、と思いつつも僕はそれを受け取る。鍵だった。ご丁寧に「おくじょう」と汚い字で書かれた紙も一緒に渡された。

僕は屋上に向かうため、ぎゅうぎゅうとなっているエレベーターから平等の精神に則り、老若男女平等に蹴りをいれ追い出した。時折、エルボーやチャランボーも織り交ぜた。鍵をくれた中年男性には特別に渾身の顔面パンツをくらわせてやった。

男が「鼻が折れたあ、鼻折れああ」と泣き喚く顔を見て漸く、ようやく平等の精神を都合よく頭の隅に追いやっていたことに気付いた。だが反省する気は蟻の頭ほどない。

僕は騒がしい外野を睨みつけながらエレベーターのドアを閉じた。ドアが閉じる瞬間、何故か鍵の中年男がドアに手を挟んだ。ドアは気に留めることなく、「主君の命令は絶対」と云わんばかりに強引に閉じた。結果、エレベーター内に中年男の両腕の肘から先が取り残されてしまった。非現実的でグロテスクだったが、不思議と吐き

気はなく、むかつ腹が立っていたので丁度良いやぐらいの感覚で思いつき踏みつけると「きゅう」と可愛らしい音と共に粒子となって消えていった。

エレベーターはぐんぐん加速していく。一定の速度を保つものだと思っていたが、これは僕の勝手な常識だったらしい。エレベーターは加速していき、案の定天井に衝突し停止した。ボタンを押していないにも関わらず、ドアが独りでに開き、僕は飛び降りた。飛び降りるとそこは目的の屋上だった。

「鍵いらねえじゃねえか！ あの中年親父、次会ったら殺してやる」次会える確証と両腕を失って生きてる保障はどこにもないが反吐が出た。

『おくじょうの鍵』を屋上の地面に叩きつけようと振りかぶったが、視界にある物が映り中止する。「チャリ！」

無駄にだだっ広い屋上に、自転車がぽつんと置かれていた。自分と同じマイノリティを感じる。同じくシンパシーも。

自転車に向かって駆け出し、足の震えが止まっていたことに気がついて笑った。

「あっ！」

自転車には施錠されていた。それも頑丈そうな鍵だ。銀色のごつごつとした鍵。囚人を捕らえることを使用用途としているような鍵。

鍵、鍵――。

はっとして手に持った『おくじょうの鍵』を見つめる。

「もしかして、もしかするのかな？」

期待を込めて鍵穴に『おくじょうの鍵』をはめた――はめようとした。が、合う合わない以前にサイズの問題で入りもなかった。

「あのやろおおおおお！ 一体なんなんだよおおお！」

止めだ止め、と呟きながら屋上の汚れた地面に胡坐あぐらをかいた。服と髪は汗でシャワー後のように濡れ、気持ち悪い。

胡坐を崩し、大の字に寝転がろうとするとチャコールグレー色だった帽子を風が『待ってました！』と鮮やかに飛ばした。風に舞う

帽子は敵意丸出しの太陽と一瞬、重なった。ほんの一瞬だったが、太陽は僕を照らせなかった。太陽は僕に殺意を向けられなかった。僕は器用に右の口端だけをニヤリと攣り上げ、『おくじょうの鍵』を握り締める。『おくじょうの鍵』はひんやりとして気持ち良かった。

軽く目を閉じる。電源が切れたように意識が、ぶつん――。

――終――

#15 カフェオレ

ストローでコップの中をかき混ぜると、氷とコップが子どものようにじゃれた。

カランカロン――。

七割を占めるミルクと褐色のコーヒーが混ざっていく。二つともスーパ―の特価品だ。ミルクに関しては賞味期限切れで半額以下だった。

カランコローン――。

「カフェオレってさ」手に持ったコップを僕は見つめる。

「ん？」

「何でもない……」

「嘘。今なんか言おうとしたじゃん」

皮のソファ―に座る彼女は「言いなよー、言いなよー」と駄々をこねた。

「うーん……」

唸りながら、コップをテーブルに置くと、『くの字』に曲がったストローの先からまだ残っていた微量のカフェオレがテーブルに一滴垂れた。

「眠い」

「話を逸らさないでよ!」

彼女は強い口調とは裏腹に顔には笑みを浮かべ、二人はゆうに座れるスペースのあるソファ―で猫のように、ごろんと横になった。

「別に、たいしたことじゃないよ?」

「いいから、いいから」

嬉々とした表情の彼女は依然としてソファ―に横たわり、気だるそうにはやし立てた。

「カフェオレってさ。何か混ざりきれてない自分みたいだなあ、っ

て思っただんだ」

「混ざりきれてない？ 何と？」

「他人と」

と、答えると彼女は一瞬だけ目を点にして、我を忘れたように狂った笑い声をあげた。

あはは――。

「な？ たいしたことじゃなかったろ？ 笑われるから言いたくなかったの。臭いし」

「そうじゃなくて」彼女は苦しそうに、途中途中笑いを混ぜながら言った。

「なんだよ」

彼女は足をばたばたと地団駄踏むように動かし、腹を抱えて笑い声をあげる。「そもそもアンタは人間じゃないし！」

彼女は狂人のように笑い続ける。笑いすぎて涙目になっている。

僕も彼女につられ、同じようにおかしな笑い声をあげながら、頭にある尖った縞々しましまの角ツノを軽く撫でた。

舌のように、ざらざらとした角――。

ひとしきり笑い終わると二人同時に、テーブルの上に置かれたコップに手を伸ばした。取っ手のないシンプルなデザインのコップには水滴がびっしりと付いていた。ストローでかき混ぜると、また小気味良い音が聞こえて、ほっと一息ついた。

本当に混ざりきれていないのは、人間を理解しようとする自分とそうじゃない自分なのかも知れない…。

カフェオレが飲み干されたコップには氷だけが残った。所々、角かどが尖った氷だけが――。

――終――

#16 最低なジューンブライド

——本日、六月五日に私は——する。

私が運送会社の事務の仕事に就いて五年が経った春に、靖雄^{やすお}は新入社員として入社してきた。

第一印象は『地味な奴』。

手ぐしで適当に整えた黒髪と頬に薄っすら残っているニキビ跡が特に印象強かった。言動も普遍的な当たり障りのない：悪くいえば媚びているようだった。

「柏木先輩」

私のことを『先輩』と呼ぶ後輩が遂に出来たかと、内心うれしく思った。この『スカンク運送会社』は名前通り胡散臭く、私を最後に五年間、新入社員が入ってくることはなかったのだ。

「なに？」

「髪に埃^{ほこり}がついてます」そう言って靖雄は私の後ろ髪に手を伸ばし、軽く触れひょいっと埃を掴み取った。「ほら」

「：ありがと」

靖雄はニコリという擬音が聞こえてきそうな屈託のない笑顔を浮かべ、足早に去っていった。

このような触れ合いを通じ、靖雄ははじめの印象とは真逆で、『気遣いが出来、話すと案外面白い奴』に変わっていた。なんといってもあの笑顔が、必殺の笑顔が、憎らしい程に愛らしい。

などと考えているうちに、私は照れ笑いを浮かべていた。気づいたときにはもう遅く、頬は熱く火照っているのが鏡を見ずともわかった。

「あー、そっか」

私は靖雄が好きなのだ。好きだからこそ、こんなにも頬が赤く染まってしまうのだ。

「ふふふ…」傍から見れば不気味な声を漏らしながら、私はデスクに戻った。

「俺、先輩が好きです！」

炎天下の下で、ベンチに並んで腰掛け、溶けていくアイスクリームを食べていると靖雄が唐突に告白をした。

正直、意外ではなかった。靖雄とデートした回数は指の数では足りない。足の指を駆使しても足りはしない回数にまでなっていた。『どちらが先に告白するか…』そのような状態で二人そろって燻くすぶっていたのだ。

「私もだよ」と、答えると靖雄は嘆息をついた。「どうしたの？」

「オツケー貰えるなんて思ってたんで…」靖雄はぶっきら棒に頭を掻く。

「うっそー！」

「本当ですよ！ 心臓バクバクしてるし…」

どうやら燻くすぶっていると思っていたのは私だけだったようだ。

靖雄が濃い顎髭に触れながら、「本当に、本当ですか？」と詰問してきた。

私は『靖雄、可愛いなあ』とお姉さん振った意地悪な笑みを浮かべながら、「本当だよ」と言って唇にキスをした。靖雄は驚いたように目を見開きながら、固まった。

靖雄と付き合い始めて半年が経過した。すっかり衣替えをし、毎朝『何か羽織るもの…何か羽織るもの…』と独り言を言いながら、結局いつも黒のカーディガンに落ち着く。

毎夜、律儀にメールや電話をしていると『彼氏が出来るといふことはこういうなんだなあ』と感慨深く思う。靖雄はトラックで市内を駆け回っている為、同じ会社と言えどいつも一緒というわけではなかった。『そばにいるのに寂しい』何か今すごく恋愛っぽい切ない事を考えた気がする。

現在二十五歳。結婚適齢期間近だが、今まで私は男性と付き合い合ったことがなかった。靖雄が初めての彼氏——いわば『ハツカレ』である。しかし、靖雄にはこの事は黙っている。なぜかと言うと、付き合った事はないが男性経験はあるからだ。処女を失った時のことを思い出すと、頭の奥で千枚通しをチクリと執拗に当てられるような痛みを覚える。

靖雄と性行をしていると、必ずと言って言いほど鮮明にあの日のことを思い出してしまう。頭では忘れようとしようが、身体には染み込んでしまっている。

——高校からの帰宅途中。

——唐突な鈍痛。ノワール公園。背後。

——悲鳴。私の。

——草木が揺れる音。草木が折れる音。湯船をかき回すようなグロテスクな音。

——少女漫画の描写のような快樂などなかった。そこにあったのは痛み。破れていく貞操。

——私を犯す男の顔には真っ白なマスク。私は一瞬の隙について、無我夢中にそれを引き剥がす。

——男の顎に大きなホクロが見えた。

——男は息を荒くし、私の顔を思いつきり殴りつける。

——鼻の骨が折れた音が耳にこびり付いた。

——そこで意識は途切れ、次に目覚めたのは病院のベッドの上だった。

戸川純の歌詞でありそうな、または過激なティーンズ小説でありそうな体験を私はした。フラッシュバックする映像に映し出される私は、この世の全てを憎むような目をしている。

七年間もの間、男とは最低な生き物だ！と、心の中で釘打っていたが靖雄はそれをすんなりかわし、私の心の中に入り込んできた。これが——愛なのかも知れない。

「大丈夫!？」服を脱ぎ、裸の靖雄が震える私を見て焦る。「先輩

！先輩！」

「うるさいなあ…大丈夫だって…」

適当にあしらいながら、がちがちと震える身体を必死にコントロールしようとするが失敗する。

『醜い過去忘却しろ、失われた貞操は忘却しろ。今は全力で靖雄を愛しなさい私』呪文を唱えると身体の震えが安らいだ——ような気がしたが、震えが完全に止まったのは靖雄が強く抱き締めたおかげだった。

「先輩、俺と結婚してください！」

最近市内にオープンしたテーマパークの目玉である観覧車が天辺に到達した時、靖雄はまたも唐突にプロポーズをした。

狭いゴンドラの中で透明のガラス越しから見えるネオンライトの街は綺麗だった。靖雄はこのような雰囲気を感じするロマンチックな男だったのかと、交際して近々一年になるというのに今更気づかされた。

「ずるいよ…」ごちるように漏らす。

「えっ？」戸惑う靖雄。

「ずるい…」

戸惑う靖雄は可愛かった。狂おしい可愛さだ。

私は頷きを返し、靖雄に抱きついた。伝わってくる体温が心地よい。揺れるゴンドラの中で私たちは永遠の愛を誓った。そして、私はもう一つの誓いをたてる…私の心の奥底にいつまでも居座り続ける邪悪な忌まわしき過去を靖雄に打ち明けようと。

快晴。雲一つない空の下、結婚式は行われる。

私の父と母は靖雄を人目で気に入ったらしく、結婚を簡単に承諾してくれた。母は私に『よかったね…本当によかったね…』と泣いてくれた。母は父以上に私のことを子煩悩を遥か通り越した心配を向け、何よりも私の体を心配した。

「お母さん、お父さん、ありがとう」

父と母は部屋を去っていく。ドアを閉める直前に母は「これからはお二人で…ね。ふふ」という気遣いの言葉を残していった。

「靖雄」

「なに？」ネクタイを締めながら靖雄は答える。

「どう？ ドレス似合ってる？」雪のように真っ白なウェディングドレスを見せつける。その場でゆっくり一回転すると、ドレスはひらひらと靡いた。「どうかな？ どうかな？」

靖雄は笑う。「似合ってますよ」

「そう？ よかったー」

ネクタイを締め、鏡の前で身なりを気にする靖雄をみて気付く。

「だらしないから顎の髭剃っちゃいなさいよ」

「ええー」靖雄は『いやいや』と顔の前で手を振る。

「剃りなさい！ 先輩命令だよ！」

「はいはい、分かりました」しぶしぶ、といった感じに鏡の横の棚を開け、いかにもホテル用な袋詰めされたカミソリを取り出した。

「大体、靖雄は顔があっさりしてるんだから髭は似合っていないよ」

「ええー、今更ですか？」カミソリを顎に当てながら、ぼやく。

今更だ。今だからこそ指摘する。「私さ、今更なんだけど。靖雄に言わなきゃいけないことがあるの」

石鹸付きのハイテクなカミソリのおかげで顎が小奇麗になった靖雄が笑いながら、「なんですか？」

「私ね…」時間はあった。だけど、この土壇場まで言えずにいた。言わないまま靖雄と結婚することは出来ない。最早、意地になっているのが自分でも分かる。

「ん？」靖雄が『今までそこにあったもの』を探るように顎を撫でる。落ち着かない様子だ。

「私…」靖雄の顎に目を細めると、火傷の跡のようなものが小さいがはっきりと残っていた。「あ、その跡なに？」

「これを見られるのがあまり好きじゃなくて」恥ずかしそうに頭を

掻く。「昔、レーザーでホクロを『じゅっ』って焼いたんですよ。どうしてもホクロがコンプレックスで」

照れ顔を浮かべる靖雄を見て、体が震えているのが分かる。心臓が皮膚を突き破り出てきそうだ。憎しみが愛おしさが入り乱れ、目の前がウェディングドレスと同じように真っ白に染まる。

「靖雄、私ね…高校生の頃に――」

――本日、六月五日に私は決行する。

――終――

#17 そこにある日常。(幽霊と私 part2) (前書き)

『#12 そこにいた日常。(幽霊と私)』の続編。

#17 そこにある日常。(幽霊と私 part2)

目覚まし時計がジリジリと狂気としか言いようのない声をあげる数秒前。

友人『明日香』^{あすか}はそれの数倍にも及ぶ声をあげる。

「友、里、恵！ 朝だよ！ 起ーきーろー！」^{ゆりえ}

これが毎朝の恒例みたくなっているのが腹立たしい。

「うるさーい！」布団から勢いに任せ、起き上がる。掛け布団が枯れ葉のようにくしゃくしゃになった。

「ええー」

「ええー、じゃない！ 勘弁してよね！」怒気がこもる。

まったく懲りていない様子の明日香は、しよげたような声で、「じゃあどうすればいいのよ…」

何を言っているのだ…コイツは！

「私が起こさないと友里恵は遅刻しちゃうでしょ？」

それは明日香が目覚まし時計を止めるからでしょ…！

「ねえ？ 聞いているの？」

手がわなわなと震えるのが分かる。息を大きく吸い込む。

そして、「聞いているわよ！」とまるで山彦^{うやまひこ}を楽しむような遠慮のない怒号をあげた。

叫んだ後、大事なことを忘れていたことに気付く。

「また大きな声出しちゃって…怒られるよ？」明日香が『やれやれ』というジェスチャーをした。

そうだ…怒られる。お母さんに…。

『友里恵！ いま何時だと思ってるの！ 近所迷惑でしょ！』一階からでも、この二階に響く母の声は近所迷惑じゃないのだろうか…。「あんたのせいだからね…あんたのせいで私はいつも独り言をブツブツ言ってるような狂人だと思われてるんだから…！」

「はいはい、そうやっていつも私のせいにすればいいよ」

「何よ、それ！」

友里恵は幽霊のくせに生意気にも鼻で笑った。

「絶対遅刻だ」

焦っても、朝食を抜いても、髪を整えることだけはしなくてはいいけないのが女学生の悲しい性だ。

「遅刻！ 遅刻！」私の横でプカプカと浮かぶ明日香は楽しそうに口笛を吹く。もちろんその下手糞で耳障りな音は私にしか聞こえない。この幽霊『明日香』は私にしか干渉することが出来ないのだ。理由は未だ不明。明日香曰く、私を恨んでいるからなのだが、明日香は許してくれたはずなのでよく分からない。

「よし！」適当にしては、それなりに見える。寝癖が後ろ髪に一束見えるが、それは学校についてから水で濡らして直そう。

「ギリギリだね」

「ギリギリだよ、もう！」

「早く、早く」

洗面所を後にして、玄関に駆ける。あまり丁寧な掃除の行き届いていない廊下は滑らない。掃除をしないことへのメリットを初めて見つけた。

真っ白なコンバースのスニーカーを履く。踵を踏むが、直す暇はない！

「行ってくるーす！」

母の返事を待たずして家を飛び出した。返答は安易に想像出来る。『行ってるっしょい』

空には太陽が今日も浮かんでいた。律儀だな、と思う。出来ればもう少し陽射しを弱くしてくれば助かるのだけれど。

「暑いねえ…」涼しそうな顔をして地上から五センチほどの高さに優雅な物腰で浮かぶ明日香が呟いた。「夏は嫌いだなあ」

「何言ってるの…」しかし、暑いのは確かだった。汗で夏服が透け

て、絶妙に助平すけへなことになっていないか心配だ。

熱されたアスファルトの上を走っていると、前方に見覚えのある背中が見えた。たくましいとは遠い、やせぎすな頼りない背中。私はそんな背中が、嫌いではない。背中には近づいてくる。

「お、おはよ！」息が荒れていて、どもったような口調になって恥ずかしさを覚えた。

「あっ、おはよう。瀬戸さん」私とは正反對の丁寧な口調で、やせぎすで一見頼りなさそうな同級生『ふかだきようへい深田恭平』は穏やかな笑みと挨拶を返してくれた。

深田恭平——。良い名前……。思わず下品なニヤリとした笑いが浮かぶ。

「友里恵、キモイ……」

「うるさいわね！」

はっとした。つい脊髓反射で……。

「え？」いつしか自然と隣を歩く深田は目を限りなく点に近い状態にしていた。「どうしたの？俺なにか気に障ること言った？」

「ち、違うの！深田くん！」

深田は少し考えるように黙り、「やっぱり瀬戸さんって変わってるなあ」と零した。

最悪だ。最悪の朝だ。

「ドンマイ！友里恵！」

えへへ、と含み笑いをしながら空中に浮かぶ明日香を睨みつけても気は晴れず、私は自分の運命を呪った。

どうにか無事に、学校には遅刻せずに着くことができた。学校までの道程が気まづかったことを除いて。

「友里恵、深田くんと一緒に登校？ふーん、そういう関係なの？」綺麗に整えられた肩に乗っかる黒髪に触れながら、クラスメイトの理沙がからかってきた。

「そんなんじゃないって！」少し嬉しい。確かに周りから見れば、

仲良く登校しているように見えるのも無理はない。気まづかったことを除けば。

「ふーん」

と、理沙は訝しげな表情をして、教室から出て行った。

「まただ…」女子トイレで交わされる団欒のネタを作ってしまった。「ほんと、女子って陰湿だよねえー」こんな大それたことをポリウム大で言えるのは、勿論——うんうん、と自己納得するように頷きながら明日香は教室の窓に寄っかかった。

「まあ、そうだけどね」こちらはポリウムをミュートの一步手前程度に抑える。「陰湿なのは嫌だね」

「そうそう。私みたいに堂々と——」

「人に憑いてるやつが何言ってるの！」

「ありゃ？」間抜けな声。

私は机に隠れるのように、俯きがちに笑った。

「次は体育だから、授業はちょっと早めに切り上げるか」

この言葉を発した数学教師『岡部』^{おかべ}を、簡単な歓声が包み込んだ。数学の授業は解る問題ならのめり込み、すぐに時間が経つのが、現在習っている『ナントカ数式』は理解不能を通り越し、退屈になっていたため、時間の経過が亀のように遅かった。歓声を聞く限り、こう思っていたのは私だけじゃなかったようで少し安堵した。

岡部は満更でもない表情を浮かべ、「じゃあ終わり」

「起立」

委員長の深田くんの声が教室に響く。

「気をつけ。礼！」

ありがとうございます、という空っぽの脳でもいえそうな言葉が二重、三重、それ以上：にもなって教室に溢れた。

私も例によって、この言葉を深田くんの合図に便乗して漏らしたのだが、ちょうど『くした』の部分で大変なことに気付いてしまった。

——体操服を忘れた。

間違いない。今日は厄日だ…。

そんな私の気持ちを窺う素振りすら見せず、明日香は理沙の机上で胡坐あぐらをかいていた。もちろん、理沙はそれに全く気付かない。

「明日香…、ちょっと来て…」という思いを決して口には出さず、明日香に向かって手首をスナップさせる。明日香はそれに気付くと、露骨に嫌な顔をした。

「何よ…」

「頼みがあるんだけど」

「やだ」

「お願い！」小声ながら必死に懇願する。「お願い、明日香！あなたしかいないの…！」

明日香が、ぴくつと反応した。「私しかいない？」

チャンスと思った。明日香の表情が若干和らいだのだ。「そうよ。いま私が頼れるのは明日香——あなただけよ！」

ずびし！と、明日香を指したいぐらいの勢이었다。

「…そこまで言うんなら」

「じゃあ体操服を家から取ってきて！お願いね！」

「え？」

それ以上言わさないように、無理やり明日香を家に向かわせた。ふらふらと飛んでいく明日香の背中を頼りになると思ったのは初めてだ。

数分後、明日香はなぜか戸惑いながら帰ってきた。さすが幽霊は早いなあ、と感心した。

「これでいいの？」

「うん！ばっちり！」すでに教室には私しか居らず、辺りを気にせず明日香を褒め称えた。それと同時に体操服が独りでに宙を舞う様子を思い浮かべ、含み笑いがでた。

「ちよっと恥ずかしい…」脈絡なく、頬を赤らめる明日香。

「そうだね、恥ずかしかったかもね」またも体操服が宙を浮かぶ絵が思い浮かびあがり、笑った。

私は明日香から体操服の上下を受け取って、雑に着替え、そそくさと運動場へと向かった。

「マラソンかあ、嫌だね」隣に座る理沙が耳打ちする。

私はそうだねと、楽な返事をした。

クラス全員が集められ座っている前に堂々と立ち、体育教師の蓮池^{いけ}が今日の授業内容を大雑把に説明していく。

「男子はグラウンドを十週！ 女子は五週だ！」

一斉にブーイングが飛び交う。岡部のときとは大違いだ。ワールドカップのときに見たフリーガンによる罵声を真似ている男子もいた。一方、女子は調子よく沈黙していた。私もその一部だ。

「うるさいぞ男子！ 男はなあ、女の二倍ぐらい走って当然なんだよ！」

「なんでだよ！」

「意味わかんねえ！」

「女尊男卑反対！」

「今更、女子に媚売ったってモテやしねえよ！」

様々な罵詈雑言と各種多用な悲痛の声があがった。女子は全員、依然として沈黙を保っている。

「うるせえ！ 文句言うやつは三倍にするぞ！」

蓮池のこの言葉で、運動場は夏にも関わらず凍りついた。男子たちは俯きながら、「ずりい…」などとごちっていた。

「よーし、わかればいいんだ！ わかれば！ 体操はさっきやったから大丈夫だな！ よし！ 全員立て！」

だるそうにクラス全員が立ち上がり、トラックのコースを無視し、白線だけに集中したようなバラバラな並びをしたが、蓮池はそれには触れなかった。

「よーい、ドン！」

蓮池のドスの聞いた声で、まるでワインのコルクが抜かれたように一斉にクラス全員がグラウンドを走っていく。私もそれに負けず、劣らず、勢いよく飛び出した。

太陽がまったく遠慮せずに私を照らす。私なりに精一杯走っているのに深田くん一周遅れにされた。深田くんが私をちらっと見た。だけど、気は悪くならなかった。

だって、深田くんだから――。

私は全く気付いていなかった。

自分の着ている体操服の胸に書かれた氏名が『村枝明日香』だということに気付いたのは、体育が終わった後の手洗い場でさわやかな汗を額に浮かべる深田くんが、「亡くなった村枝さんの体操服を着るなんて、やっぱり瀬戸さん変わってるね」と苦笑したときだった。

私は再び思う。

「今日は厄日だ……！」と。

――終――

#18 延長線ヘブズドア（前書き）

（追記…平成21年12月4日）

若干の加筆修正。しかし展開の変化はなし。

#18 延長線ヘブンズドア

高校を退学した。

親に無理を言ってわざわざ地元から飛び出してはみたものの、周りの環境が変わっても自分自身は全く成長しなかった。しっぽを巻き、また逃げ出してしまった。

どうやら人間には二種類いてそれは『必要な人間』と『不必要な人間』らしく、それを決めるのは人間以外の何者でもなかった。深く言うなら他人の目だ。そして、僕は誰がどう見ても、たとえ鼻屑をしたとしても後者なわけだ。周りの人間からは水が下流に流れていくようにごく自然と淘汰され、居場所を失った。（初めから無かったとは出来れば思いたくはない）

母はこんな僕を限りなく過保護に近い形で守ってくれていたが、正直な話、僕にはそれが酷く疎ましく思え、クラスメイトによる恥辱の材料にされるのが痛く辛かった。

母はとにかく僕は守ることに必死だったただけなのだ。必死にさせたのは自分であるのに、このような汚い感情を抱く自分を醜いと強く嫌悪する。嫌悪しても足りないくらいだ。

「高校を辞めたい」と、電話越しに告げると母は一寸間を開け、「分かった」

と震えた声で言った。

残念そうに顔を歪める母の表情が浮かび上がり、自分でも信じられない位の涙が、にきびのせいで凹凸のある頬を伝った。悲しみと悔しさが雑に練り混ざって作り出された、自分に対する憎悪が拳を振動させた。その震える拳を何度も太股に振り下ろした。

悔しかった。自分自身に自分は負けた。

僕がくだらない言い訳をしても、母は詰問することなく「帰ってきなさい」とだけぼつりと呟いた。説教臭さや押し付けがましさは程遠い、ただ息子の帰宅を願うだけのやんわりと包み込むような

声だった。

「うん…」

「待っているからね」

「うん…」

手に持った携帯電話の電源ボタンを押すと、母の声は呆気ないほど簡単に途絶えてしまった。電話が切れた後、母はどんな表情をしているのだろうか。僕が中学の頃、誰かに上履を隠されたとき一緒に学校中を捜し回ったときよりも悲しい顔をしているのは容易に想像できた。

携帯電話をベッドに放り投げたつもりが思いのほか勢いよく、ベッドを軽々超えその先の壁に衝突した。二つ折りの携帯電話は『壊れました』という注意書きが浮かび上がってきそうな、見事な二分割になった。

ふと目を向けた十四インチのテレビに映る美人なだけが取り柄の女性アナウンサーが話題の硫化水素を使用した自殺のVTR後に、

「お悔やみ申し上げます。…では、次はスポーツです」

とすぐさま悲壮から一転して輝かしい笑顔になり、緩急のある表情の変化に僕は慄然とした。人にとって知人以外の死はどうでも良いのだということをまじまじと見せつけられた気がしてならなかった。

テレビを消し、ベッドに横たわると不思議な安心感が僕を包み込んだ。掛け布団の中に、まるで穴を掘るかのように潜り込むとその安心感がどこから湧いてくるのかは分からないが、ただもう何もかもが遅すぎたように思う。

遅かった…。という言葉はやはり過ぎてから思う事だ。

もしかしてこの差出人不明の安心感の正体は残念賞なのかも知れない。

「人生の残念賞にしては結構いいものだな」

目蓋を軽く閉じると、深い淵に落ちていくような眠りが僕を待っていた。

今朝も鳥による自己中心的な存在表現の声で目覚めた。

覚醒する途中、何か騒々しい声が聞こえたが、ベッドから体を起こし辺りを見渡し、目に映るのはいつもと何てことのない小汚い一人暮らし臭い部屋だった。

いつもなら起きてすぐに、どれだけ眠っても目を擦るのだが、今朝はそれを行わずに洗面所へ直行した。奇妙なほど目覚めがいい。

ばしゃばしゃと、恒例の音で顔を包み終えると歯を磨いた。口をあけ、歯磨きの途中経過を観戦してみると『赤、青、白』と配色された歯磨き粉は口の中で何とも表現しづらい色へと変貌していた。混沌とした世の中を示しているように思えた。『血、憎悪、喧騒』

歯磨き終了後、上下ねずみ色のスウェットを脱ぎ、Tシャツとだぼついたジーンズに着替え、すぐに帰り支度を始める。

「卒業するまでは帰らないからね」

家を出る際、母にこんな誓いをした気もするが、都合よくぼかす。「母に会わなければならぬ」

この思いが強くなっていくのを感じながら、荷物をまとめていると不意に外から甲高いサイレンの音が鼓膜を揺らした。

「なにか事件でもあったのかな？」

窓から少しだけ体乗り出すと、このアパートの一階に恐らく先程のサイレンの主である赤いパトロンをつけた車と野暮ったい救急車が見えた。まだ八時だというのにごく少数だが野次馬も集まってきている。自分もその野次馬に加わり、このアパートで起きた何らかの事件（または事故）を観察したい衝動に駆られるが、ボストンバッグに荷物を詰めると同時に、その衝動も無理やり押し込んだ。自分にはそんな暇はないのだ。

実家行きの電車の時刻が迫っている。

焦燥感に苛まれながら、律儀に実家への電車の時刻を覚えている自分に苦笑した。

荷造りはボストンバッグ一つで事足りた。

茶色で無地のボストンバッグを抱え、玄関のドアをあけるとさつき見たときよりも数倍の人だかりが出来ていた。そのことに驚きつつ、僕は人だかりを裂くように一人暮らしのアパートを後にした。僕の他に住む一階の大家さんには後日挨拶をしようと思う。今はとにかく時間がない。

電車が来てしまう前に駅へ急がないと。

僕はがたんごとんと揺れる電車の中で、隣に座る初老の男性に起きていることを悟られないように固く目を閉じていた。

この電車の切符を買う際、自分の存在感のなさを再認識した。切符売り場の前に立ち、肝心の財布を忘れたことに気付き、自分の愚かさを呪い、ダメ元で駅員に事情を話してみようと試みた。しかし何度話しかけても駅員は僕の呼びかけを無視した。ラッシュ時の騒音で本当に聞こえていなかった可能性もあるが、僕の被害妄想はたちまち沸騰してしまった。

僕は腹を立てながら「ここなら向こうから離しかけてくるだろう」と、改札口に向かうとあるうことか改札口に立つ駅員は切符の確認もせず僕を通した。混み合った人だかりの濁流に上手く飲まれて気付かれなかったようだ。普通は気付くはずだがあの駅員は…と理不尽毒づきたくなる。

つまり、現在僕はこの電車に無料乗^{タダ}りをしている。といってももちろん切符は目的の駅に到着したら買うつもりだ。あくまで、つもり、だ。

目をあけているとわずかにある罪悪から目が泳ぎそうになったり、挙動不振になり怪しまれそうな為、必死に寝た振りをする。はたして駅員に無視される人間の異変に気付くことがあるのだろうか…。徒労に終わることは分かっていたが、出来る限りのことをやった。

学校生活でも出来る限りのことをやっていれば…。いいや、僕は僕なりにやったんだ。やったけど駄目だった。だから逃げたんだ。

悔いながら電車を降り、すれ違う人たちや今日発売の週刊少年マング雑誌が山積みになされたキヨスク店頭に視線を配ることなく、まっすぐと駅を出た。

半年振りの故郷の風景は全く変わっていないかった。空にはカラスなのか鳩なのか見分けのつかない鳥が数羽、優雅に空中遊泳を満喫している。僕はそれを眺めているとなぜか苛立って、下手糞な舌打ちをした。

実家への道は明確に覚えていた。たった半年振りなのだから当然だ。半年間で実家への道筋を忘却したのなら、帰省するよりも最寄りの精神科に駆け込まなければならぬ。

補修工事のされていない道路を歩くと足の裏に違和感が生まれる。少し前まではこれが当たり前だったにも関わらず、今は大分懐かしと思う。

車道兼歩道のこの道をまっすぐ歩いていけばすぐに実家が見える。親子二人で住むには広すぎる平屋が。

もしも父がいればそれなりに適切な家として部屋は荷物で埋められ、雑草しか生えていない庭にはゴルフボールが転がっていたりしていたのかもしれない。

不意に僕が生まれてまもなく死んだ父の事を想ったりしてしまった。感傷的になりすぎているようだ。

新鮮味はないが小さく感動してしまう景色を眺めながらゆったり足を進めていると、道に点々という地元の人間の中に見知った顔がいることに気が付いた。

——中学の頃。先頭に立ち僕をいじめていた隆夫^{たかお}だった。

僕は隆夫に僕だというのを悟られないよう俯きがちにしてい、自動販売機の前で座り込み美味そうにとろんとした目つきで煙草を吸っている隆夫の前を足早に横切った。

横切る刹那、隆夫のキツネ目から放たれる尖った視線を感じた。何度も浴びせられた蔑む視線。背中を冷えた手で触られたような悪

寒。いくつもの、あの日の下劣な出来事が鮮明に思い起こされ、吐き気を催しそうになるのを必死にこらえた。

隆夫の前を通り過ぎ、数歩。恐るおそる一瞬だけ後ろを振り返ってみると、まるで隆夫は僕に気付いていないように、引き続きぼーっとした顔をしながら煙草をすばすばと口に運んでいた。隆夫の吐く濃い霧のような煙が澄んだ空に溶けていく。

僕は一の次が二であるのと同じように、自然と安堵の溜息をついた。

数十分、漠然と景色を眺めながら歩くと、ようやく実家が見えてきた。無意識のうちに、足取りが速くなっていくのを感じる。

一步、また一步と近づくにつれ、視界が滲んでいった。「母さん……」

「ただいま」

ジーンズのポケットから鍵を取り出し、我が家に踏み入れると、この世に二つとない母と実家の匂いがした。帰ってきたことを実感する。

スニーカーを乱雑に脱ぎながら、「ただいま。母さん？」と呼びかける。

家のどこからも返事はなく、薄気味悪い沈黙。トイレかと思い、向かってドアをノックするが応答はなかった。

「おい、母さん。どこにいるの？」

二階の自室、リビング、風呂場——探し回るが、母の姿はどこにもない。捜している最中、隠された上履を捜したときのこと想起された。

「まさか……」

そう逡巡した時にはもう実家に帰ってきたという懐かしさを楽しむ余裕は音もなく消え去っていた。

母の身に何かあったのではないか？ 自分のせいで何か善からぬことがあったのではないか？

『わかった』

『帰ってきなさい』

『待っているからね』

昨晚の母の震える細い声が頭の中で何度も繰り返し再生される。

自分のせいで母が…そんな…。

いくつもの最悪な事態が勝手に浮かび上がり、頭を支配しようとする。力なくふらつく足を半ば引きずるようにして、無意識のうちにリビングに向かい、長椅子にどさっと座り込んでいた。

母さん…。ごめんよ…。

ふとリビングの中央にあるテーブルに目をやると一枚の紙が置かれていたのが見え、噛み付くようにそれを掴み、半年前までは見馴れていた達筆な文字群に目を通し、ほっと肩を落とした。

『あの子の家に行ってきます』

母は、僕の家に行ったようだ。しかしなぜなのだろうか？ 電話では僕が帰るようにと言っていたのに…。

確かな疑問を抱きつつ、僕は家を飛び出し、一寸の狂いもなく来た道に戻った。ふてぶてしい太陽は橙色へとうつり変わっていた。

——家に帰らないと。

「近くで自殺があったらしいぜ」

「マジで？ うっわマジやべえ」

品のない言葉を使い、品のない男子学生二人組の会話が不本意ながら聞こえ、身震いした。

自殺？ なんだよ、それ？

今朝の自室の窓から見た光景が高画質でフラッシュバックされていく。頭を振る。いやまだ僕の住むアパートで起きたことではないという可能性は十二分にある。

しかし、その可能性は今朝よりも騒々しく野次馬と警官に囲まれたアパートを見た瞬間に、シャベルカーに襲われたブロックのように音をたて崩れた。

「すみません！　どいてください！　ここの住人なんです！」

僕の必死な叫び声に、誰一人耳を傾けようとはせず、好奇心丸出しの夢中な表情でアパートの中の様子を窺おうとしている。

野次馬の間を自分でも驚くほど器用にすり抜け、警察が張り巡らせたのであろう、

『KEEP　OUT』

と大々的に書かれた黄色いテープも潜り抜けた。数人の警察官たちは僕を呼び止めることも一瞥を送ることもなく、ざわつく野次馬相手に強い口調で静かにするように、と注意していた。

二階への外から丸見えの階段を駆け足でのぼるが、いつも聞こえていた『カンカンタタン』という錆付いた音が鳴らないことに違和感を覚える。

その違和感はある記憶の断片を引き起こした。中学のとき隆夫たちに一方的に殴られて帰ると母は、

「優太は優しいから、殴らなかつたんだよね。それができるの人が本当に強い人だから。でも優しさと自分を犠牲にするのは違うのよ」唇を噛みながら僕の頭をなでた。そして強く抱きしめた――。

玄関のドアの手前に立ち、静止し、全力疾走だったにも関わらず、自分の呼吸が全く荒れていないことに気が付いた。

半狂乱に頭を振る。何が起こっている？

僕の家でいったい何が起こった？

頭を占拠しようとする無数の疑問に混乱しながら、ドアノブに手をかけた瞬間――。

「優太！　優太！　目を覚ましなさい！」

母のまるで片腕を引き千切られたような悲痛な叫び声がドアの隙間から漏れてきた。

「母さん！　僕はここ――」

ドアを開き、見えた光景ですべてを理解した。全細胞が否定しようとするが、いち早く脳がそれを肯定した。テンプルに強い打撃を受けたような衝撃を感じ膝が崩れ、勢いよく床に倒れこむが、床か

ら発されるはずの鈍い音は出ない。

「僕は…」

這いつくばって、人目はばかりず号泣する母の元に向かう。

「母さん！ 母さん！」

母は必死に呼びかける僕に視線を向けることなく、ベッドに横たわったまま冷たくなった抜け殻の方の僕の手を握りしめ、滝のように涙を流しながら「優太ごめんね、ごめんね…。お母さんが傍にいてあげられなかったから…。お母さんが優太を守れなかったから…。優太をひとりにしたから…！」

母の張りつめた自責の念が次月と空気の中にまぎれていく。違う。違うのに。

「母さんのせいじゃない！ 僕が弱くて…自分を…自分を変えることが出来なかったから！ 母さんのせいじゃないんだ！ だから母さん…お願いだからもう…謝らないでよ！」

当然、僕の懇願する声が母の鼓膜に届くことはなく、母は枯葉のようにくしゃくしゃになった苦しそうな顔で僕に向けて謝罪を絶え間なく続けた。

違うんだよ…。母さんは悪くないよ…。

傍目からみても不自然な落ち着きを取り戻した母は警官が集まった関係者に何度も頭を下げ、「朝まで二人きりにしてくれ」と泣きついた。

それまでの母の状態を見ていた女性警官の一人が母の『後追い』を心配したが、母が「認めてくれなければ、今この場で死ぬから」と半ば脅迫に近い形で交渉し、しぶしぶ了承された。但し、玄関のドアの前に警察官が待機することが条件だ。

なぜか妙に落ち着いた母はベッドに寄りかかるように腰をおろし、僕の抜け殻の額を撫でながら柔和な声で呟く。「優太。今日は、お母さんも一緒に寝るからね」

寝息をたてながら、頬を濡らす母の横で僕は何度も床に拳を振り

下ろす。どんなに強く殴っても床からは一度として衝撃音は聞こえない。聞こえてくるのは母の寝息だけだ。

「母さん…。本当に謝るべきなのは僕の方なんだよ…。母さんは何も悪くない」

母に懺悔しきれない思いを吐瀉物のように吐き出していると、ふいに目蓋が重くなり、あの安心感が僕を包みこんだ。

寝息を立てる母の顔を見ていると、どうしようもない身勝手な思いを抱いてしまった。

「もし神様がいるなら、残念賞はこんな身勝手なものじゃなくて、もう一度母さんの息子として生まれる権利にしてくれないか？」

はじめからやり直したいとか、立派な息子だとかそんな傲慢な願望ではなく、こんな身勝手な僕を全力で愛してくれた母さんが近所の人に僕の事を何気なく話せるような、そんな普通の息子になりたい。

——なるから、絶対。

—終—

#19 ジェニファー・ロペスの命日を忘れないで…

「ジェニファー・ロペスが死んだって本当？」健太は魚のように目をギョッとしながら尋ねた。

「ああ、ジェニファー・ロペスは死んだよ」さりと答えてると、健太は「マジかあ。残念だなあ」と、上っ面だけののような悲観を述べた。

健太の部屋はクーラーによる冷房が効いており、心地が良いのだが、少しばかり狭い。しかも、部屋の大部分には『巨大』と表現する資格を持つ、大人二人が眠ることの出来る大きな青いソファが置かれているので尚、狭い。その為、必然的にこのソファに座ることになるが所々に染みがあり、汚い印象を抱き、座ることに對してあまり好意的な気持ちにはなれなかった。疲れるだろうが、棒のように立っていたい気分だ。

「ところでさ、ジェニファーの奴がどうやって死んだか知りたくない？」

「死因か：知りたいっちゃあ、知りたいな。うん」健太はこくこくと頷く。「意外にも、間抜けな死に方だったりして」

「『天才は短命』って言うよね。だからさ、ジェニファーは寿命で死んだんじゃないかな」

「そうかあ？」健太は眉を下げ、クーラーのリモコンをいじり始めた。

——『ピ、ピ、ピ』と、鳥の囀りさえずりのような小気味良い音を合図に、部屋の気温は『大暴落！』といった具合に右肩下がりに順調に下がっていった。

「少し寒すぎやしないか？」外の気温の差はどれくらいあるのだろうかと考える。寒いように感じるのだが、手は震えて寒さを表現にしていない。それほど外の気温との差はないのかも知れない。

「寒い、寒い」健太はクローゼットを開き、厚手のジャケットを取

り出した。「寒っ」

「寒い…って、お前が下げたんذار」

健太は黒のジャケットを羽織りながら、「そうなんだけどさ」

「意味わかんねえよ。大体、そんなに寒くないし」

「お前はそうかもな」健太は顔を引きつらせた。「…で、ジェニフアー・ロペスの死因はなんだっけ？」

「わかんねえ」

「調べてみよっか」

肯首して、ふんだんに皮肉を混ぜ「…お前がジェニフアー・ロペスのことを知ってたのって意外だな」と言った。

健太はこの冗談を鼻で笑い、ソファの前にある机上のノートパソコンの起動ボタンを押した。

「ノートパソコンって起動が遅いのが嫌だ。だから俺はデスクトップ派」

「派閥なんかあんのかよ！」と、健太は迅速なツツコミを入れ、苦笑する。

しばらく黙ったまま、二人して机上のノートパソコンの画面を見つめていると、真っ黒な起動画面に健太の真面目な顔が映り、思わず噴き出した。

「人の顔を見て笑うな！」

「ごめん、ごめん」すっかり瓦型になってしまっている口元を手で隠す。「反則級だな。お前の真面目な顔は」

健太は反則級の真面目な表情のまま、「立ち上がったぞ」と、言った。

「結構、早いじゃん——」

「次にお前は『ノートパソコンにしては』と、言う」

「ノートパソコンにしては…はっ！」これは健太の好きな漫画の主人公と敵による一連の流れだった。度々、健太はこの流れを振ってくる。そろそろ飽きないのだろうか…。

健太は真面目な顔から一転、嬉々とした表情でデスクトップのア

アイコン——インターネット 익스プローラーにカーソルを合わせ、ダブルクリックをした。

「ダイヤルアップ接続かよ」最先端だな…と、皮肉を吐く。
「うるせえ」

画面に大手検索サイトのトップページが表示された。

「へえ。お前、このサイトをトップにしてるんだ」

「このサイトは今日のニュースが表示されるから好きなんだ」

「ニュースねえ…」画面にカラフルなデザインで今日の出来事が表示される。水死事故、有名人の葬式、インサイダー取引…。どれも陰鬱なものばかりだった。「あ、ジェニファー・ロペスが死んだことも載ってるんじゃない？ ネットの情報って病的に速いし」

健太は唸りながら、カーソルを画面狭しと様々な所に合わせてはクリックしたが、ジェニファー・ロペスの情報は掲載されていなかったらしく、残念そうに首を振った。

「おいおい。あのジェニファー・ロペスが死んだってのに、この扱いは酷すぎやしねえか？」

「俺もそう思う」

「そうだ！ 公式サイトなら！」

「そうだな！」健太は手馴れた感じで、タイピングを始めた。検索エンジンの枠内に『ジェニファー・ロペス』と左から順に打ち込まれていく。『ス』が打ち込まれた刹那——『パーン！』と、弾くようにエンターキーを押した。

瞬きよりも速く、『ジェニファー・ロペス』の検索結果が表示された。最上に位置する『作家ジェニファー・ロペス公式サイト』を、健太は目を輝かせながら、迷わずクリックする。

——絶句。

公式サイトのトップページには、ジェニファー・ロペスが歯を見せて笑う画像が表示されているだけだった。

「なんだよ。ちくしょう」やり場のない怒りが体を震わす。「公式サイトですらこのザマかよ…。ジェニファー・ロペスという天才が

死んだんだぞ」

「もしかして、ジェニファー・ロペスが死んだことを誰も知らないんじゃない？」

健太の素っ頓狂な発言で、こめかみに血管が浮き上がった。「そんなわけねえだろ！」

「でもさ、実際……」

「どけ！　今すぐサイトを更新してやる！」健太を突き飛ばし、ノートパソコンの前を陣取った。「パスワードは？」

「ケンタ KENTA ロペス ROPESZ」

パスワードを打ち込み、サイトの編集を始める。カタカタカタ……と、タイピングすると見事な言葉の羅列が完成し、『パーン！』と、弾くようにエンターキーを押した。

『天才ネット作家「ジェニファー・ロペス」ここに死す。死因はリストカットによる出血死——自殺。遺書には『天才は短命であるべき』とだけ書かれていた。もう一度云う——ジェニファー・ロペスは死んだ。自殺したのだ。本日、八月一日をジェニファー・ロペスの命日として永遠に記憶し、忘却することを禁ず。それがジェニファー・ロペスへの悔みとなるであらう……』

サイトのトップページの編集を終え、手首を見ると、どばどばと血が流れでていた。流れ出る血は青いソファアについている染みと同じ色をしていた。手首を切ったのだと実感が沸き、体温がより一層下がっていくのを感じる。

「ふう……」視界がザッピングするテレビのようにぶつ切りになっていく。「健太……」

「なんだ……？」

「俺たちは『二人』で、ジェニファー・ロペスだ」

「ああ……」

サイトのトップページ右上にあるカウンターにカーソルを合わせる。『本日の訪問者数…四』

「認められなかった天才か……」笑いがこみあげてくる。健太も下品

なほど口を大きく開け、声をあげた。

途切れていく意識を引きずるように、血の滴る震える人差し指にありったけの力を込めて、ノートパソコンの起動ボタンを長押しすると、『強制終了』され画面が真っ黒に染め上がった。

活動を終えた機械の真っ暗な画面に一人の顔だけが映る。

青ざめながらも真面目な顔をした、反則級に笑える哀れな僕の顔だけがそこに映った。

—終—

#21 TSUNAMI

待ってよー、と間延びした声を出しながら追いかけてくる涼汰を、私は置いてけぼりにした。「捕まえてみなさいよ！」

まったく頼りない男だ、涼汰は。そこが可愛い、というのも否めない真実だけど。

私は一面に海が広がる砂浜で足を止めた。遅れて来た涼汰は、肩で呼吸をしながら、どうしたの？、とコンパスの針で開けた”点”のような円らな瞳で問う。

「海、綺麗…」頬に触れる潮風が体中にまわりついでいる柵しがらみをそっと解放したような快感。

「そう？」涼汰は腰を屈めて、砂浜に落ちているポテトチップスの袋を人差し指と親指で慎重に——というよりは汚いものに触れるようにそっと掴んだ。

「空気読んでよ」眉根を寄せる。

「ごめん、ごめん」涼汰はポテトチップスの袋を放り投げた。片付ける気はないらしい。

「海、綺麗でしょ？」

演技っぽく遠い目をしながら、涼汰は「ソウダネ」と呪文のように唱えた。「そうだね、ソウダネ」

「確かにゴミがなければ、もったいいんだけど」

私は呆れながらも認めた。

海に映るぼやけた夕陽は美しかった。これを見ただけでも津波警報が出されたのを無視して、というより強行したに近く、二人で海に来たかいたが思ったと思った。こんな日に海に出てくる猛者は私たちしかないなかった。

「寒いよ…」涼汰は若干震えた声で唐突に呟いた。自分を抱きしめるように肩を掴み、寒い寒い、と身振りをする。

「そんな格好してるから、当たり前でしょ」

頭上を見上げると、天気は最悪な曇り空。それなのに涼汰と私は水着姿だった。理由は簡単、『夏で、海だから』。それでも私は露出があまり好きな人格ではないので、薄手の上着を一枚羽織っていた。

「上着、貸してあげようか？」

涼汰は一瞬、目を輝かせたが一応意地があるのか、「いや、いいよ」と首を振った。

「貸してあげるよ」うりうり、と脱いだ上着を見せびらかす。「ユー、着ちゃいなよ」と、他国の人のような日本語訛りを作り、からかう。

「いいって」

「本当に？」

「…貸してください」

私は笑いながら、その申し立てを受理せずに砂浜を駆け出した。それはもう脱兎のごとく。疾風のごとく、だ。

「待ってよー」また無様なほど可愛い間延びした声が後方から聞こえる。

私は笑う。楽しいから。涼汰と過ごす夏が、一生で一番楽しいから。

「待ってよー」

「捕まえてみなさいよー」私も涼汰の語調を模写するように叫ぶ。砂浜を踏みしめていくサンダルには、目に見えるざらついた粒子たちが進入してくる。もし戦争をしかけられたら、現在の私たちの国はこんな感じに、いとも容易く侵入を許してしまうだろう。ニュースを見る都度、そう思う。

『まあ愛の融通が利かないこの国は、竹箒で掃かれるように滅んじやってもいいけどね』私は冗談半分でも思う。残りの半分はきつと涼汰に対する「ごめんなさい」の感情だ。私が私じゃなくて、別の形の私だったら、涼汰と私はもっと幸せになれるのにな…。市役所に提出した結婚届が受理されなかった日の事を思い出し、私は

唇を噛んだ。

「待ってよー」 「あはは」

「待ってよー」 「あはは」

「待ってよー」 「あはは」

「待ってよー」 「あはは」

「待ってよー」 「あはは」

「待ってよ」

「あはは」

「待って」

「あはは」

「まっ」

「あはは」

「待って！」

「あはは」

「待てよ！」

「あは…は？」

涼汰の声が必死になっていることに気付いた。何がどうしたのだ？ 急に？ もしかして怒っちゃった？ あはっ！

私は精一杯の天真爛漫な表情を作り出し、軽く謝って許してもらおうと振り返った。

走り迫ってくる涼汰は付き合い始めてから今まで見たこともないような、戦慄した顔をしていた。

「どうしたの？」

涼汰は青ざめた表情で私の前に止まり、餌を欲する池に住む鯉のように口をパクパクと動かす。声は出ていないような…。

——声は出ている？ でも聞こえない。

「もっと大きい声で言って！」

涼汰はぶつ切りの平仮名を並べるように——「つ・な・み」と口を動かした。

私は海を睨み付けるように見た。

そこにあつたのは先ほどまでの綺麗な青の海ではなく、例えるなら腹をすかせた化け物のような猛々しい姿を：駄目だ！ 漢字を正しく読めないほど頭が混乱している！ 何、この状況？ 津波って何だっけ？ 『見つめ合うと素直におしゃべり出来ない』んだっけ？ いや、私と涼汰は見つめ合うと愚直なぐらい素直にお喋り出来るし、ていうかぬるーいキスもするし。

「じゃあ津波って…？」

私と涼汰は答えを出す余裕もなく、一心不乱に走った。逃げないと。とにかく逃げないと。

「涼汰！ どこに逃げればいいの！」

涼汰はちらっと私を見て、「分からない！」と甲高い声を出した。まったく：頼りない男だ、涼汰は。…この状況だと可愛くないぞ。救いようがない頼りなさだ。

「涼汰！」

「うわぁあん！」

涼汰、さようなら。私たちはここで…。

海なんか見に来なければよかった。冷静に考えると、そんなに綺麗じゃなくない？ むしろ汚い。ゴミだらけだし。あ、これは涼汰がさっき言ってたっけ。

津波の音が聞こえる。

津波が迫る音が聞こえる。

津波が「いただきます」と言ったように聞こえた。

私たちは猛々しい津波の口の中に飲み込まれた。涼汰は最後まで頼りなかったけど、それは涼汰が最後まで涼汰のままでいてくれたってわけで：私はちよつと嬉しかった。

「こちらが津波によって——され——になった、若い——二人組がいた砂浜です」石つぶてのような大雨のせいで音声が所々遮断される。「そして——」

普段はバラエティ番組で、とんちんかん言動で人気の女性リポーターは淡々とお茶の間に哀れな若者が居たことを報告する。これが本職ですから、と言わんばかりに凜とした立ち振る舞いで。

リポーターを舐めるように映すテレビカメラに一瞬だけ、同じ柄をした二枚の海パンが見切れた事に気が付いた視聴者の数は、一人の人間が一生の内に食べる食パンの枚数よりも少なかったかも知れない…。

—終—

#22 トランペット×エレファント(前書き)

トランペット「かける」エレファント

#22 トランペット×エレファント

僕が例の女の子にはじめて見惚れてしまい、足にアイスピックを刺されたみたく身動きがとれなくなっただのは秋の日だった。

彼女のことについて知っていることは同じ中学校だということぐらいで、ほかには何もない。：本当に何もない。

そんなことを考えながらの帰宅途中、車道を横切ろうとして轢かれそうになった黒猫が彼女に見えて僕は身を乗り出してしまった。ああ！、と口走ってしまった。

黒猫は危機感をまったく感じていないような飄々とした振る舞いで、足取り軽く去っていった。僕には『無事』だということに喜ぶ余裕もなかった。頭の中でちらっとだけ見ただけなのに熱く焼き付いてしまった彼女の顔が何度も何度も、ちらちらと、いやそれはもうちらちらなんてこそそそとしたものじゃなくて、どこかかとしている。どこかかと土足で走り回っている。

不意にアスファルトを大根おろしで擦るような甲高い音が耳を襲った。「あぶねえぞ！」同時に野太い中年男性の声もだ。

ぼーっとした頭で足をふらつかせた僕は車道に飛び出していて轢かれそうになった。

いっそ轢いてくれればよかったのに。
：なんちゃって。

翌日の昼休みの時間に友人に相談することにした。このやきもきとした、ほかほかとした、気持ちについて、だ。

「そりやお前『恋』だろ」

友人の来栖くるすが屈託なく笑った。

「ませてんなあ、お前」

僕は自分の頬が紅潮していることに気付きながら、「うるせえよ！」と吠えて、来栖に飛びかかってプロレス技をかけようとした。

「おっ、やんのか、オラ」

「やってやるよ！」

「待て待て待て！」来栖が僕の肩をぼんぼんと叩いた。

「なんだよ」

「実はな、俺も恋してんだよ」

僕は来栖のタイミングも糞もネアンデルタール人もびっくりな暴露に驚愕したというより笑いがこみ上げた。

「ちよっとこれ見てみ」

そう言うとき来栖は机からさがそと雑誌を取り出して、ぱらぱらと一枚のページをめくってから見せつけてきた。

「かっこいいだろ？」

「え？ あ？ ああ、かっこいいな……」

僕の反応がおかしいことに気付いたのか、来栖は少し慌てた様子で「馬鹿、おめ、違よ！^{ちげえ}男じゃなくて、男が乗ってるバイクだよバイク」

来栖が指さすバイクは大きく——真っ赤だった。背筋が筆で撫でられたように、ぞくつとした。

「どうだ？」

「かっこいいな」

「だろ？ お前なら分かってくれると思ったぜ。乗りてえよな」

「だなあ」

「あ、そうそう。これなんかも……」来栖はべらべらと雑な手つきで雑誌のページをめくる。

「……おい」

「ん？ まあそう焦るなって」

「お前さっき『俺も恋してる』って言ってたじゃん」

「言ってたな」

「それって」

「おう、バイクだ」来栖が親指をたてながら満面の笑みを作った。

——僕が来栖にコブラツイストを仕掛けたのはいうまでもない。

「鯉」「こい」「濃い」「コイ」「請い」

僕は何なんだろう。僕の頭は、僕の思考回路はどうしちゃったんだろう。誤変換を繰り返している。故意に変換を狂わせている。

放課後、教室に居残りして、自分を落ち着かせることに徹してみたが、たいした成果は得られなかった。

こんなときは、母音に濁点を付けてしゃにむに叫びたくなる。：が、迷惑なのでやめておく。

「帰ろう」

うちに帰ってもう一度、自問自答してみようじゃないか。この気持ちは何なのかと。それでもわからなかったら辞書でも引いてやるぞ。

昇降口に向かうと外は薄暗くなっているのがわかった。

そもそも「それ恋だよ」なんて突きつけられてもまともに受け入れることが出来ないのは当たり前だ。

だって僕は未だに保健の体育で、先生や女子が真面目に話したりしている中、カードゲームや漫画の続きについて考えていたりするのだ。

『性』って何なのって感じた。「セイツ！」「セイツ！」来栖と空手ごっこをするときの掛け声じゃないの？

靴を履いて昇降口を出て、小石を蹴りながら歩いていると少し先に数人の女子が立っているのが見えた。

その横を歩いていく。

何とも思わなかった。

やっぱりだ。僕は女子にたいして変な気持ちを感じたりしない！していない！

ほっとした。心底ほっとした。

ちいさく飛び跳ねて、開放感で、はやく家に帰ろうと思い走り出そうとした。

—
終
—

#24 最後の晩餐にはワインが付きもの

「私たち、何がいけなかったのかな？」篤史の前に座る眞子まこが問うた。

すると、夫である篤史あつしはお手上げといったポーズをし、「さあね」とぼつりと答えた。そしてフォークでぐるぐると巻いたパスタを一口くちに運んだ。

眞子は三十半ばにしては皺も少なく、街で見掛ける同年代の女性より美しさを保っていた。家事も全般的に好んで、夫の要求はすべて叶えてきた。それを苦に思った事は一度もない。

篤史は若き頃から会社では『有能』という称を得て、ぐんぐんと同僚を追い抜き、追い越し、最終的には上司を部下にするまでの地位にまで登り詰めた。家庭では、子どもは授かれなかったが、それなりに家族サービスに徹してきた。

完璧な夫婦。

レッテルを貼るならば、これが一番しっくりくる。しかし、篤史と眞子は夫婦という関係を明日——解消する。

「ねえ、私って駄目な妻だった？」

「いや、僕は君以上の女性を知らない」

「そう…」

眞子は寸分の迷いもない即答に安堵した。だが、素直に肩を撫で下ろすことはできない。

「僕は駄目な夫だったかい？」

篤史は手に持ったフォークを皿の上に腰かけさせるように静かに置いた。皿にはまだパスタが残っている。

「私もあなた以上の男性を知らないわ」

「…やめよう。照れる」篤史が頬を緩ませた。

ふふふ、と眞子も小さく笑った。「そうだ。あの約束、覚えてる？」

「覚えてるよ」

「てっきり忘れちゃってると思ってた」

「おいおい、ちゃんと守ってるだろ」篤史はわざとむっとするように言った。

「そう？」

「うん」

眞子が席をたち、「もういい？」という視線を送りながら、篤史の前に置かれた皿を掴む。篤史は「ああ」と肯定の視線を送った。

眞子が流れるように片付けをする様を見ながら、篤史は一つの約束を思い出した。

「なあ」油で汚れた皿を水につけている眞子に呼びかける。「約束、守れてなかった」

「気づいた？」

「うん」

大方片付けを終えた眞子が席に戻り、「ね？ 忘れてたでしょ」

「ごめん」

「いいのよ、別に」

篤史は、これが眞子との最後の食事なのだからせめて今日ぐらいは出された料理を残さず食べるべきだったと後悔した。

「結婚前はいつも『美味しい』って悪い幽霊にとりつかれたみたいに言ってたのに。今でも手を抜いた覚えはないのよ？ さっきの Pasta だってあんなに美味しいし」

「うん。変わらない味だよ、今でも」

『じゃあ何故？』と眞子は違和感を覚えたが、口には出さなかった。明日には他人。家族として、最後の夜だ。口論はしたくない。

今度は、眞子がある事を思い出した。「そうだ、あれ開けなきゃ」「あれって？」

篤史の問いに答えず、眞子はキッチンに向かった。

数分経って、「これよ、これ」と手にその『あれ』を持って戻ってきた。

「ああ、それか。なつかしい」篤史は笑った。

結婚届けを役所に提出した日の帰りに買った『ワイン』だった。

「ラベルにね。結婚記念日書いてあって」

眞子が差し出したボトルを丁寧な両手で掴み、「そうそう。もう十年も寝かせてのか。早いなあ」と篤史は感慨深く呟いた。

「実際はもっと寝てたんだろうけどね。このワイン」

「買ったときにはもう結構な値段だったしね」

「値段覚えてるの？　あなたが選んだのよね」

「いいや。でも思わぬ出費だったのは覚えてる」

「指輪にワイン。あなた大変ね」

「人事のように言わないでくれるかな？」

二人は笑いあいながら、同じことを考えついた。

「飲もつか」「飲もうか」

眞子がキッチン戸棚にコルク抜きを取りに行こうとするのを、

篤史は視線で制止して、「僕が行くよ」と言い席を立った。

ほどなくして篤史は戻ってきて、「じゃあ開けるよ」とコルクをきゅっきゅと抜いた。

ぶどうのたるい匂い——香りが空気中に舞い、両名の鼻に入り込んできた。

「いい香り」

「これはいいよ、きっと」篤史が目を輝かせた。「グラスに注ごう」コルク抜きといっしょに持ってきたスタイルの良い女性のくびれのような曲線を描く透明のグラスにワインが注がれていく。

「いい？」と、グラスを持った篤史。

「ええ」と、同じくグラスを持ち短い返事をする眞子。

「この場合は『乾杯』でいいのかな？」篤史が苦笑した。

「いいんじゃないの？　私たちは別に難しい事があって別れるんじゃないんだから」

「そうだね、じゃあ…」

「うん…」

「乾杯」「乾杯」

柔らかくぶつけたグラスで揺れる紫のワイン。

それに口をつけてから篤史と眞子はそれぞれ味について率直に感想を漏らした。

「やっぱ僕が選んだだけある。実に美味しい。味に深みがあるよ」
「そう？ 私はイマイチだと思うわ…」

—終—

#25 ケツ婚しましょ

男は鬱屈とした気持ちとセカンドバッグを抱えながら、駅に向かって揺れる電車内で耐えていた。今日も仕事だといううんざりする繰り返し、その現実に対抗することの出来ない自分。叱咤する気はない。ただ、うんざりしていた。いつもと同じ景色を見ながらどんよりとした息を吐きつつ、うつむきながら立っていた。

女は憤りと羞恥で頬を赤らめ、揺れる電車内で耐えていた。朝の通勤ラッシュの車内という密集地帯で起こった小さな事件。事件こそ小範囲だが、女のプライドを傷付けるには十分な威力だった。

男と女の関係。『赤の他人』

男の右斜め前に女が位置している。

それ以上も、それ以下もない。一度として交わってはいない二つの人生…。

ぷしゅー、と電車のドアが開かれた。我先に、われ先に、われさきに、と人がそのドアめがけて駆けていく。速度は歩行よりも劣る。だが、その迫る思いは全力疾走に引けをとらない。

当然彼も、駆けた。流されるように身を任せ、会社へ向かうために、自分の中にある鬱屈とした思いはわざと車内に落とした。

女は、眼を離さず男を追った。瞬くことすら自らに許さなかった。強い怒りの眼差しを彼の男の背中に絶えず送った。

男が駅に靴底をつけた瞬間――。

背後からぐっと左手を引っ張られた。

強く、握られている左手首。

『逃のがさない：！』

男は何事かと思い、戸惑いつつ後ろを振り返った。そこには女がいた。

胸まで伸びた黒髪。目隠しの役割を真っ当している前髪。どこか見覚えのある黒のロングコートを着こなしている、すらりとした体型。

男は小さく悲鳴をあげ、女に尋ねる前に冷やかな手を振り払おうとした。が、振り払えず男は更に混乱した。

「一体なんですか!」

女は手を離すことを頑なに拒む。

「……」

問いを飲み込むようなの重圧のある沈黙。

「ちよっと、は、な、離してくだ、さいよ!」

ぶつ切りの言葉を放ちつつ、腕に力を込めるが、うまくいかない。これが女の力か?、恐ろしい。

「……るさない」

女が震え声を漏らした。

「え? なんですか?」

「許さない!!!!」

今度ははっきりと男の鼓膜を揺らした。鼓膜がブランコなら、百八十度の位置まで何度も揺れるほどの危険を感じる音量だった。あぶない。

この状況はもの凄く——危険だ!

男は理解してしまった。

電車を降りて、見知らぬ女に腕を掴まれる、そして「許さない」

と怒鳴られる…。

あれしかない。あれしかないじゃないか。

女の口が開いていくのがスローモーションのように見えた。ゆっくり、ゆっくりと女は男の望んでいない予想通りの言葉を紡いでいった。

「この人、痴漢です!」

そして車内に置き去りにした、鬱屈とした荷物が大きく膨らんで戻ってきた。

「ちょ、ちょっと待って、何かの間違いだって！」

女に弁解するというより、ざわつく周りの人間に叫んでいるようだった。しかし、しどろもどろで不細工な弁解は、理解ではなく、疑惑と白けた目線を強めるだけだった。

「あなたは私の臀部：いえ、お尻を弄んだわ：」

肩をぶるぶると微動させる女の顔は、狂気そのものだった。

「待って、本当。なんかの間違いだって」

「間違い？ それはあなたの存在のことでしょ」

「人の話を聞いてくれ」

「私の耳は私のためにあるの。あなたに指図されて使うほど、ちゃんものじゃないわ。馬鹿にしないで」

「……」

男はすぐさま諦念した。街角で外人に道を聞かれ『右行って左行って真っ直ぐ、そして：』と拙い英語で説明するほうがよっぽど簡単だろう、と思った。

この女には話を通じない。特殊なフィルターが発動して、日本語を未知なる言語へと変換しているに違いない。亜種だ。人類の中の亜種。決して関わってはいけないタイプの人間。自分に子どもが産まれたら「ばぶばぶ」としか言えない頃から「…このようなタイプの人間とは関わるんじゃないぞ」と耳に埃が溜まるほど言い聞かせる。

だれが呼んだのか、または『異常』に気が付いたのか一人の駅員が走ってきた。

「何事ですか？」

「痴漢です！ 捕まえてください！ さあ、早く！ この外道を縄でぐるぐるに捲いて！」

「助けてください……」

ヒステリックに男を罵る女に駅員はたじたじとしながら、男の腕

を掴んだ。

「ご同行お願いします」

「助けてください…わかるでしょう？」

駅員は寸分怯みながらも「…ご同行お願いします」と言った。

女は叫び続ける。「この雄豚を早く捕まえなさいよ！ 現行犯よ、

現行犯！ 一般人でも捕まえられるでしょうが！ さあ、早く！」

男は怯えていた。現在の状況にではない。これからの未来についてだ。わけも分らない内に自分の人生は、面識のない女のブーツで跡形もなくなるほど踏みつぶされてしまうのか？、勘弁してもらいたい。日常を返してもらいたい。先ほどまで嫌で仕方なかった、どんよりとした暮らしを、この手に、返してもらいたいと。男は願った。

駅員は困惑していた。これまで何度か痴漢の現場に立ち会ってきたが、今回は一筋縄ではいかない。ぐちゃぐちゃの、ごちゃごちゃ縄だ。簡単に解けそうにない。この現場で真中に位置するのは間違はなく加害者ではなく、被害者の方だ。というより、被害者なのかも危うい。加害者の男性の狼狽っぷりは「捕まってしまった」というより、「巻き込まれてしまった」のような気がしてならない。

「駅員さん」口を開いたのは男だった。「私はしていません」

「ですが…」分かってる。が、駅員としては言及せざるをえない。疑わなければならぬ。万が一があるかも知れないのだから…。

「信じてください。この人——」と男はセカンドバッグをどさっと地べたに置いて女を指差し「おかしいんです」と力なくうな垂れた。

駅員は何とも言わず、女に問うた。「すいません。あなたは…」

「うるさいわね！」

「す、すいません」

頼りない駅員を見て、男は絶望した。

「——というわけなんです。いきなりでしょう？」

男は駅員に簡潔に説明した。簡潔に、といっても省く所などなかった。短く唐突な痴漢呼ばわりだからだ。

ここでやっと駅員は男の腕を離した。

「わかってくれましたか？」

「大体は」

「冤罪です」

「でも証拠がないので…」

「証拠なら、痴漢したという証拠もないじゃないですか！」

男は思わず声を荒げてしまった。

駅員が女に恐る恐る視線を向け、「証拠とのですが」と尋ねた。

女は眼を鈍く光らせながら、「私が触られたと言っているんです。被害者が訴えているんです。それだけで十分でしょう！？」と顔を歪めた。

男は絶句し、駅員はどうしたものかと思考を巡らせた。

「とりあえず事情はあちらで…」

と、駅員が指さす方向には駅員室があった。

男は力なく足を引きずるように駅員に付いていき、女は男を睨みながら歩んでいった。

駅には、電車が突風を起こして野次馬を連れて去って行った。これが何度目かは覚えていない。

「あなたおかしいよ。言ってることめっちゃくちゃだよ…」

「どこがおかしいのよ。痴漢することの方がおかしいじゃない！」

「だから、何度も俺は言ってるだろう？俺は痴漢なんてしていない。誤解だ」

「息をするように嘘をつくのね。さすが変態だわ」

「それは君だろ！」

「人を指ささないでくれるかしら。マナーがなってないわ。あ、そ

りやそうよね。電車で痴漢するような人だもの。そんな変態にマナ
ーがあったら、平和をつくる戦争もあるはずだわ」

男が激昂しようとした瞬間、駅員が「あの…」と遮った。

「お二方の住所、氏名は分かりましたので、これから詳細のほうを
説明してほしいのですが」

「さっき説明したじゃないですか」

「ですが女性のほうは納得していないようですし」

「彼女は少しおかしいんだ。いや…だいぶおかしい。駅員さん、あ
なたも気付いているはずだ」

駅員はそう言われて胸に針の先でちゃんと刺されたような痛みを
覚えた。ちらりと女の顔を見ると、女は執拗に右手の親指の爪を噛
んでいた。かりかり、とある種軽快な音が聞こえた。

「冤罪だ」

男はなんでこんなことに、と肩を落とした。駅員はそんな男を見
て気の毒に思った——思ってしまった。

「私は触られたんです。信じてください」

駅員は何とも答えることができず黙った。

「信じてくれないんですか？」

駅員は沈黙を続ける。

「もしかして…」女が両手で顔を覆った。「二人とも…グルなのね
！？　　そうなのね？　　私は…はめられた…」

妄想。仮定。憶測。そして発狂。

男と駅員は顔を見合せて、苦笑しようとしたが失敗した。そんな
余裕などなかった。

「冗談はやめてくださいね。もう一度、詳細を聞かせてもらえます
か。あなたの口から」

女は呼吸を乱しつつ「私が立っていたら後ろから手が、私のお尻
を撫でるように這っていった、何度か振り払ったんですが無駄だと
言わんばかりに何度も何度も迫って、私…怖かった」

男はあんたが怖いよ、と口には出さず遠い眼をした。

「その手がなんで私の手だと分かるんです？ さっき聞きましたが」
「分かると思ったら分かるんです」

はいそうですね、分かるほどと頷くことは当然できるはずもなく、男はため息をついた。

「あのですね、俺——」男は一度痰を切るようにわざとらしく咳をした。「僕はですね。右手に鞆を持ってたんですよ。あなたは僕の右側に立っていた。しかも車内は知っての通りあれだけ人がいるんだ。不穏な動きをしたり、無理やり左手を伸ばして触れることなんてしたら丸分かりじゃないか」

「まあ、そうですね」と頷きながら淡泊に言う駅員。

女は無言のままうつむいた。

「警察は呼ばないでくださいね」

と、男は駅員に頭を下げる。「ここで終わらせたい」

「しかし……」

「彼女ももう諦めたのでは？」

男が駅員を促すように視線を女に向けた。

「どうしますか？」

駅員がパイプ椅子に座りうつむいて押し黙ったままの女の顔を覗き込むようにして、問うた。

女は沈黙を続けたまま、貧乏ゆすりを始めた。

「あのですね、黙られても困るんだ。こっちは会社を休まなきゃいけないったんだ」

男は駅員室に着いてすぐに駅員に了承を得てから会社に有休の電話を入れた。上司は「そろそろ有休を消化してもらいたかったところだ」と笑ってくれていたが、内心どう思われているかは分からない。

「おい」

女は貧乏ゆすりを続ける。

「おい」

女の貧乏ゆすりでグレーの簡易的な机が微かに揺れている。

「何とか言ったらどうなんだ！」

男は怒鳴った。埒があかない。こんなところで時間を割きたくはない。迷惑だ。

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい——」

女はまるで「うるさい」という一言をコピーアンドペーストするように小声で並べていく。

「うるさいとは何だ。あんたが……」

女の黒髪で覆われた目が虚ろになっているのが見えた。

「とにかく、僕は痴漢なんてしてませんから。分かってもらえましたか？」

駅員は小さく頷いた。そして「あの、大丈夫ですか？」と女に体調が優れないのかと尋ねた。

「病院に行くことを薦めるよ……」男が苦笑した。

「ねえ……」

女が擦れた声を出した。

「ん？」「ん？」駅員と男の声が重なった。

「結婚しましょうよ」

「はあ？」男の声だけが予想していなかった言葉に反応する。「なに訳のわからないことを……」

「それがいいわ。そうしましょう。ねえ、結婚しましょうよ。ふふふ。それがいい。だってあなた私のことが好きなんでしょう？ 分かっているんだから。照れなくていいわ。いつも電車に乗るとき私の近くにいたじゃない」

「そうなんですか？」と驚いたように駅員。

「いや、覚えがない」

男は女の言葉に戸惑った。この女を見たのは初めてだ。それは間違いない。しかし、何か違和感があった。

「あなたはいつも×○線ばつまるで乗ってくる。そして私と同じここで降りる」

「なぜそれを」

「気付いてないけども？ 私は気付いていたわ」

ふふふ、と含み笑いを女が漏らした。

「あなた彼女のストーカーなんじゃ…」 駅員がまるで真実に驚愕したような顔をした。「警察を呼ばなくては…！」

「ちょ、ちょっと待ってください！ それはただの…」

男が言葉を途中で停止した。

駅員は電話機に伸ばす手を止めて、つばを飲み込んだ。

「通勤コースです！ 彼女のことなんて知りません」

「…そりゃそうですよね」

「いいの。素直になりなさいよ」

「病院へ行け」

「いいの。思わず触ってしまったんでしょう？ 我慢できなかった

のね」

「病院へ行け」

「許すわ。私はそこら辺を歩いている軽薄な女たちとは違うの」

「病院へ行け」

「ふふふ。焦っちゃって、可愛い人」

女の表情は笑みなのか判別できないほど歪んだ。口元から白い歯がのぞく。

「駅員さん、だめだ…」 男は頭を抱えた。「彼女はおかしい。はじめから言っていたけど、おかしいよ。間違いない」

駅員は黙ったまま電話機に手を伸ばした。どこかに電話をするつもりだろう。

「ねえ、あなたの朝の景色に私はいつもいたはずよ」

「そんなわけ…」

男は、はっとした。朝の揺れる電車。窮屈な車内の中で立ちつくす自分。その視界に入るものは普遍的なものだった。しかし――。

「私はいつもあなたといた」

「その服……」

男は意識していなかったが、女が着る黒のロングコートが記憶に微かに息をしている。

「そう」

「そんなわけ……ない。それじゃ君はいつも本当にいたのか」

「あなたのそばにいたわ。わざと」

「わざと？」

「あなたと接触するために」

男の背中がぴきぴきと恐怖で凍っていくのに、駅員は気付いていくのか、気付いていないのか、電話に小気味よく番号を入れていく。

「どこに電話を？」男は辛うじて小さく開く口で問うた。まさか警察か？

駅員は簡潔に答えた。「チャペルです」

まったく笑えない冗談だ。

男は鬱屈とした気持ちとセカンドバッグを抱えながら、駅に向かって揺れる電車内で耐えていた。昨日は酷い目にあった。帰ってから酒を飲んで泥のように何十時間も眠った。そして朝になり、会社へと向かう。こんなにも会社へと向かうことが憂鬱じゃない日があるなんて……。

視界に例の女の姿はない。男は安堵して、ゆっくりと視線を下に落として「よかった……」と呟いた。

だが、目的の駅に着いたことを知らせるアナウンスが聞こえる、その数秒――零コンマ何秒前かに右耳に吐息のようなものを感じた。吐息は言葉だった。すぐにアナウンスに掻き消されたが、男の耳にねっとりとした残った。

「結婚しましょ…」

かくして、男はその日も有休を使うことになった。

—終—

#26 古本紀行

遠くへ行きたくなった――。
どこか遠くへ――。

無職になった。外から聞こえる近所の子どもの遊び声さえも耳鳴りと同列で、苛立つ。

無職になった。家にいるだけで胸に存在する無情さが憂鬱と同列で、苛立つ。

なにもなかった。

「これから」や「これだ」と言える未来像は、なかった。

「どうしようもないな」「どうして」「俺なりに頑張ってきたつもりなんだけど」

何をすればいいのか。いったい何処へ行けばいいのか。

貯金は少なからずだが、ある。趣味という趣味がなく、友人と呼べる友人もなく、使い道がなく、それなら当然金は溜まっていく。

通帳を覗くと当分の暮らしは大丈夫そうだった。しかも、これに失業手当が加わるのだ。大丈夫だ、大丈夫だ、と自己暗示する。

会社が倒産し職を失って数日が経ち――退屈が襲いかかってきた。趣味がないのは痛かった。せめて趣味があればこの逆境を「趣味に費やせるチャンス」などと言えたかも知れない。

テレビをザッピングするが興味を持つ番組はなく、やらせ臭いドキュメンタリーに仕方なくチャンネルを合わせる。それを漠然とした目で見続ける。内容はまったく入ってこなかった。

外から、なァーなァー、と野良猫の小生意気な鳴き声が聞こえ、たまたま手に掴んだ本を窓に投げた。

投げた本はかつての上司に薦められ購入した自己啓発本だった。「こうすればああすれば、あなたも…」などと助言めいたことばか

りが羅列され、うんざりしたことを覚えている。

ぐしゃりと力なく落ちた本を拾い上げて、ぱらぱらとめくってみる。頁をめくっていけばいくほどうんざりとする。

趣味に関しての項目を発見し、一応読むことにした。

『無趣味の人はとりあえず読書を始めましょう。読書は視野を広める事――』

なるほどなるほど、そうかそうか。

明日、本を買いに行くことにした。この本に誘発されたからではなく、どうせ暇だから、だ。

通勤には専ら電車だったため、自転車置き場に自転車があるのか（盗まれてないか）心配だったが杞憂だった。

自転車に乗るのはかなり久しかった。しかし自転車という乗り物は不思議なもので、違和感はあるものの、下手になるということや乗り方を忘れるということはない。数分も経てば違和感も、消える。昼過ぎの生ぬるい風が顔に当たる。悪い気分でもない、かといって良い気分でもない。

平日だというのに賑わうスーパーマーケットや楽しそうな若者の集団。焦燥を感じざるを得ない。

「俺は何をやっているんだ」

頭を抱えなくなる衝動を押し殺しながら、古本屋へと急いだ。

「いらっしやいませー」若々しい店員が一寸だけ視線をこちらに向けた。

全国チェーン店の店員は古本屋だろうが、レストランだろうが元気がいい。もしかすると葬儀屋でも元気がいいのかもしれない。普段なら「やかましいな」と煩わしく思う所だが、今日ばかりは「その元気を少しでもいいので分けてくれませんか？」と思った。

漫画コーナーを一瞥もせずに通り過ぎ、小説コーナーへ足を運んだ。

ずらりと並ぶタイトルに圧倒される。聞いたことも見たこともない作家ばかりだが、時折見知った作家もいた。学生時代に読んだ作家たちだ。

それからはノスタルジーなのだろうか、一度読んだことがある本ばかりを籠かごに入れていった。

「檸檬」 「羅生門」 「肝臓先生」：エトセトラ・エトセトラ。

籠かごがいつぱいになり、やっとレジへ向かった。店員が驚くのではなからうかと内心期待したが、店員は一礼して「お預かりします」と言ってから淡々とレジを打って打って打って打って打って…。

二つの大きな袋を持って、「ありがとうございましたー」という声を背に受け、自転車を見て思う。「これは帰りが大変だ」

なんとか帰宅し、息をついた。

山になった本を見ながら小さく笑う。「これで当分は退屈しないで済む」

例の自己啓発本を窓から投げ捨てた。

それから数か月は一心不乱に本を読み漁った。

つまらないと判断した本を容赦なく読むのをやめ、面白いと思った本は読み返したりした。

このぶっきらぼうな読書には一つ発見——楽しみがあった。

古本にはおかしなものが挟まっているのだ。

よくある髪の毛やゴミをはじめ、なんとお札が挟まっていたこともあった。

何も挟まっていないことが普通なのだが、あたらしい本に手をつける度に雑誌の袋とじを開けるような妙な興奮がある。この興奮のために読書をしていると言っても過言ではないと思われる。

だが、この些細な楽しみも今日で終わる。とうとう最後の一冊を迎えてしまったのだ。

ふう、と弱々しい気合を入れる。

「ついに…」 息をのむ。

はじめの頁をめくると、ぽとりと何かが本から落ちた。どうやら当たりのようだ。

枯葉だろうか？、と思った。手にとってみると材質は紙だった。薄茶色に変色したと思われる^{しおり}葉だった。

「葉か…」

がっかりしている自分がいる。

「葉ね…」

最後だから特別なものだといいな、と生意気な期待を抱いていた自分がいる。

そんなもやもやとした気持ちで、しげしげとその葉を見ると思わぬ発見で笑いが出た。一人で笑う。傍から見ると奇人だ。しかし、笑う笑う。

書店によるオリジナルの葉らしく、葉にはその書店の地図が載っていた。小さく見難いが、見えないこともない。

その地図は明らかに、ここから随分遠くの東京のものだ。

東京の書店で誰かが買ったこの本は、その誰かが古本屋に売り、また違う誰かなどを流れ流れて、今「ここにある」という奇蹟。大袈裟だと言われるだろうが、感動した、大袈裟なくらい笑った。

『現実の小説より奇なり』

ありがたい言葉。これこそ真理だ。

と、またも大袈裟に思う。

翌朝、東京行きの新幹線に乗った。

—終—

#27 それでも米を炊く

〈朝〉

やる気がない。

今日はいけるか、今日こそは、と毎朝雀との会話で思うが毎朝自分に失望する結果を迎える。

繰り返される日常の中でまどろみ、また繰り返す。非凡性とはかけ離れた温和な暮らし。

朝、パンを焼く度に何故か学生時代を思い出す。ぱっとしない学生時代だ。このときからもう僕の普遍的な人生は始まっていた。当人は其のことに気付いてはいなかった。その証拠にギターを買ったりしたのだ。文化祭で大勢の生徒の前でライブする空想に溺れた。なぜ空想なのかと簡潔に述べるとギターはGコードを覚えてなげた。

——「滑稽」その言葉がふさわしい。

チンツ、という軽快な音が響いた。パンが焼けたようだ。

「精神科にでも行くか」呟きながら焼けたパンにジャムを塗る。平たく伸びていく真赤なジャムが今日も残念でならない。だって真赤な外見をしているくせにこいつはブルーベリーの味なのだ。僕は偽られるのが嫌い。だって痛くなるではないか。「騙されたー」と軽く頭を小突きつつ本当は苦しい。

つけっぱなしのテレビでは昨今の悪しき流行の偽装問題のことを取り上げている。「てめえらもジャムと同じだな」と唾を吐きたくなった。もちろん報道陣にもだ。「てめえら威張って『悪者』を報道しているがその『悪者』がいなくなったらパン一枚食べられないんだろうが。感謝しろよ屑どもめ」

などと、心境は荒みきっているが、外面は善良な市民そのもの——だと自負している。その裏付けになるかは解らないが、手を震わせずにしなやかな手付きでパンにジャムをべったりとを塗っている。来たるべき裁判の為に写真でも撮っておこうかと思う。「裁判

なんてありえないのにな」あひつと気味の悪い笑いが出た。
パンを食べきるとテレビを消し、今日も今日とて会社へと向かった。

歯磨きは夜寝る前だけでいい。

〈夜〉

疲れた。

今日も想定通りの疲労を感じた。想定通りでも疲れは疲れであつて、それは不可避なわけだ。撃たれる！、逃げないと！、と頭で理解していても零距离射撃を避けることができますか？

答えは「NO！」

断じて「NO！」

仮に僕が伝説の中国拳法の使い手でも、

「ノ、NO：。NOだ、NO！　：多分」

死にたい。こう思うことが多々ある。過剰だと言ってもいいのかもしれない。三秒に一度は死にたくなる。「自殺」という文字が脳内の電光掲示板にちらつく。これでもかと虐めのように陰湿な現れ方をする。

頭^{かぶり}を降る。しっかりしろ。正気を保て。

ソファになだれるように座り、だらりと脚を伸ばす。「落ち着く」テレビの電源を入れると、心が安らいだ瞬間を狙い澄ましたようにクリスマス特集をやっていた。まだクリスマスまで一週間以上あるというのに飽きずによくもまあ毎年毎年。無駄に苛立つ。

ザッピングをするがどこもかしこもコピーしているかのようにクリスマス特集クリスマス特集クリスマス特集だった。溜息をつき静かにテレビの電源を切った。

「くそ…」

ソファに拳を落とした。無情な音が短く鳴った。

天井を見上げながら漠然と考える。恋愛したり結婚したりすれば、

こんな風にもどかしい思いは抱かないのだろうか、と。

引き続き天井を見上げながら慎重に考える。恋愛をしている自分、結婚をしている自分……。浮かぶ映像の自分は今よりもっと疲れた顔をしていた。

「これが現実か……」注意これは想像です、というテロップが表示された。脳内で。

いっそ死んでしまおうか。

またも例の尻軽な自殺願望がひよいひよいと姿を現した。

「よお」

「おっす」

「また死にたくなっちゃった」

「だと思った」

「どうすればいいんだ」

「死ねばいいんじゃないね」

「あ、そう……」脳内会議終了――。

あああ、と意味のない空虚な言葉を漏らしうな垂れていると、ふとある言葉を思い出した。

『死ぬ気になったら何やってもいい――』

ある犯罪者がこう言って笑っていた。これこそが心理、だと笑っていた。はじめてそれを聞いたときは「そんなわけないだろ」と呆れ返ったが、今ではその言葉がしっくりくる。妙に、刺さる。

失うものがない立場や未練がない人間にとって余生や「これから」など眼中になく、それならばと投げやりになるのはおかしいことではない。それはまぎれもなく正常。

「犯罪者に共感か……」

まいったな、と頭を抱えた。

僕には失うものがあるし未練も存分にあるじゃないか。

でもこの鬱屈とした思いは消えないままだ。毎日毎日、毎分毎分、うろろうとつきまってくる。

物事に成功すればこの思いは容易く一蹴されだろう。しかしそん

な希望的観測は無意味だとわかっている。自分が成功などということから程遠い存在だということも。

ああだこうだと思いを巡らせていると、鈍く腹の虫が鳴いた。

「こんなときぐらい我慢しろよ。ナーバスな気分を壊すな」自分自身に八つ当たりをかました。

「ったく…」

まったく参るな、と思いながら立ち上がり、だらついた足取りでキッチンへ向かう。

でかでかと無洗米と書かれた袋から米を一合分だけ取り出し、一人暮らしにぴったりの二合炊きの炊飯器に水といっしょに入れた。

「死にたいな…」

そう呟いた後、炊飯器のボタンを押した。
ピッ、という無機質な音が響いた。

—終—

#28 メリメリ・クリスマス

記念すべきかは分からないが十本目のコーラのペットボトルを部屋の隅に放り投げた。先住民である九本のペットボトルがドミノの如く倒れていく様を見ながら「やるしかない…」と呟いた。

『今日がくることを心待ちにしていたか?』と問われると、迷う。そして悩んだ末に「イエス」と弱々しく答えるだろう。「…答えるしかないだろう!」

カレンダーで確認すると本日の日付は十二月二十四日。クリスマス・イブ

「やるしかない」

自分を奮えたたせる為にこの一言を反芻する。何度も口に出す。わざと口に出す。

「やるしかやるしかやらねばやらねば——」

ペットボトルが手に入れば中身は捨ててもよかったし、ましてや実効日までの二日ですべて飲み干すのが困難であるコーラを選んだのは自分の決心の固さを確認するためだった。今日日口の中に貼りついたしゅわしゅわとした味と嫉みのような不快が取れない。これは証だ。消えてくれない——消えるはずのない連中を恨む不愉快の証。

「明日か…」

早速明日の“準備”に取り掛かった。

明日になれば毎年受ける苦痛から解放される。たった一日で生涯の苦しみから解放される。

徹夜となり朝を迎えた。“準備”ははじめての事だったので思いのほか苦戦した。

完成した物を慎重に人に見られないように車まで運んだ。

会社へ向かう車内で折れそうになる心を叩いた。「しっかりしろ。今日はなんとしても会社に行かないと」

「昨日はサイフで、今日は本命」

「あたしは逆」

「なんで？」

「むこうの都合が悪かったの」

同僚の女性数人が休憩所で笑いながら話している。飽きず笑いながら話しながら、腹の内を見せる気はないように嘆息を吐いたりしている。それを聞くだけで心苦しい。

そそくさとコーヒーを一杯淹れて休憩所を去った。去る間際、背中に聞こえた。「やっぱ長瀬さんって不気味」「あの人絶対彼女いないよね」「いたらその彼女どんな趣味してんだってね」「言ってる」「彼女いない歴イコール年齢じゃないの」「それ言いすぎ」「って笑ってるじゃん」

時計の針は午後の一時を回ろうとしていた。

「お前仕事なめてるだろ」

部長の高木が怒鳴り声をあげた。矛先はしっかりとこちらに向けられている。高木の座る回転する椅子からギョルルと煽るような音が聞こえた。

「何度同じことを言えばわかるんだ？ あと何年大学生気分で居る気だ？」

一昨日提出した書類を顔面に投げつけられた。ぐしょっという音が静まりかえった空間に残った。「やり直せ」

うまくいかないことばかり――。

どうしようもないことばかり――。

どうしてこうも溜まっていく名刺のように毎日休みなく苦痛は重なっていくのだろうか。

高木は今日も同僚の佐々木さんと不倫デートを重ねていく。それを知っているから「お前も仕事なめてるだろ」と逆切れしたい。が、

そんな勇氣はない。我慢だ。今日で終わる。この我慢は終わる。泡のように消えていく。しゅわしゅわと簡単に。

「すいませんでした」

頭を下げたが、高木はそれを見ようとせず、目の前のパソコンの画面に視線を戻した。

空間にざわつきが宿っていくのを感じながら、黙々と床に散らばった書類を拾い集めた。泣くことはない。もうこの程度のこと——慣れてしまった。慣れという名の我慢を学んでいる。

定時を過ぎ、同僚たちはみな足早に去っていった。みな心情をもろに表情に表していた。今日の「これから」を考えて心踊っていた。かくいう自分の今日の「これから」はというと……。複雑である。

「おつかれさまでした」

「おつかれです」

最後の同僚の遠ざかる背中を見ながら、なぜか溜息が洩れた。

怖いのか？「いや」

やめるか？「いや」

逃げるか？「いや」

自問自答を繰り返しながら爪を噛む。「やるしかないんだ」

何を怖がる必要があるというのだ。

これから行うことは逆恨みであり、醜悪な嫉妬であると肯定した——つまり認めた上での行為。

開き直った人間に恐怖心など必要ない。

「よし……」

例のものを取りに車へ向かった。

「誰もいないよな……」挙動不審といった具合にきょろきょろと視線をあちらこちらへと配る。

発見を恐れているわけでない。止められることを恐れていた。

会社到最后まで残ったのは戸締りをする事ができるからだ。いつもは面倒で誰よりも早く帰宅するのだが、今日ばかりは特別だ。戸締り、というよりは真逆で鍵を開けたままにしておく必要があった。

目的の場所へと向かう自分の性器が固くなっていることに気付いたのは、目的の場所に着いてからだ。

「寒いな…」

屋上はさすがに冬の洗礼といった感じで肌寒かった。車に戻ったときにコートを持ってくればよかったと少し後悔した。

両手に持ったばんぱんの袋を慎重に地面に置いて、深呼吸する。

「落ち着け…」

屋上から見下ろす景色は素晴らしいと手を叩きたくなるほど煌めいていた。街中にカップルがあふれているのが見える。

十本のペットボトルを並べていく。圧巻、とまではいかないが悪い光景ではない。

「なーに、人を殺すわけじゃないんだ。ただ少し、ほんの少し、痛い目に合わせるだけ…」

すでにラベルを剥がされコーラのペットボトルだとは分からない一本目を掴む。

途端に先ほどまで感じていた寒気が風に飛ばされたかのように、いなくなった。

〈一本目〉十七歳のクリスマス。

はじめてクリスマスを意識した歳。自分なりに彼女づくりを試みたが失敗。親が買ってきたショートケーキを食べて、泣いた。

〈二本目〉十八歳のクリスマス。

「リベンジ」だと去年以上に必死になった歳。…失敗。親が買ってきたチョコプレートケーキを食べて、泣いた。

〈三本目〉十九歳のクリスマス。

「リベンジ（その二）」もちろん失敗。当然のごとく失敗。親が買ってきたモンブランを食べて、泣いた。

〈四本目〉二十歳のクリスマス。

ついに二十歳を迎えてしまった。^{はたち}「今年こそは」からすぐに「ちくしょう」へ。泣いた。

〈五本目〉二十一のクリスマス。

略。泣いた。

〈六本目〉二十二のクリスマス。

大学生活最後のクリスマス。

ついに、はじめて、彼女ができた。顔は残念ながら貧相だが、性格は良く、気が利く女性だった。しかし彼女はイブにしか会ってくれなかった。おかしいと思い後日問い詰めるともう一人彼氏^{おとし}がいた。そして「これいないから」とプレゼントしたバッグを安物だったからであろう、突き返された。それから彼女とは会っていない。泣いた。

〈七本目〉二十三のクリスマス。

女性不信の自分に幸せなクリスマスなどくるはずがない。泣きもしなかった。

〈八本目〉二十四のクリスマス。

一日中、陰謀説を唱えた。キリスト教が人類を誘い込もうとしているのだ、と。

〈九本目〉二十五のクリスマス。

「なぜ自分だけがこんな思いをしなくてはならないのだ？」

そして、

〈十本目〉二十六のクリスマス。

「やるしかない」復讐するんだ。

「やるしかない」もう泣かなくていいように。

九本目のペットボトルが綺麗な円を描きながら落下し、鮮やかな爆発音で街に流れるラブソングに傷をつけた。さらにカップルによる悲鳴がラブソングに致命傷を与えた。

十本目を握る手が想定外の汗で滑る。ズボンで手を拭おうかと思ったが、やめた。テンポを壊したくなかった。

「これで最後だ」

放り投げた十本目が街中へと飲み込まれていく。やがて、『メリメリ…』と鈍い音をたてて、勢いよく破裂した。

破裂したペットボトル爆弾の小さな破片が、街を流れていく人の群れの心に刺さればいい。

幸せな者がいるということはその時、不幸を背負って苦しんでいる者がいるということを分かってくれればいい。

「やめろ」とは言わない。ただ、理解して楽しんでもらいたい。その上で成り立ってもらいたい。

聖なる夜なのだから。

楽しい夜なのだから――。

――終――

#29 ご機嫌でも現実不足

最愛の彼女を迎えに行く車中、僕は全力で考える。朝から眠気の爪痕が残っている頭を駆使して、使えない頭でどうにかして使える案を考える。

「今日こそ彼女を起こすんだ」

と、僕は決意した。夕方になると陽が沈むように当然のことを。ほどなくして彼女の家は無駄のない運転で到着した。この運転を彼女に見せることができないのがたまらく口惜しい。

普遍的なアパートに住む彼女は普遍的な小説を書いていると聞く。色恋もので、煌びやかな青春の一片のようで僕は一頁読むと眩しくてそれ以上頁をめくることができなかった。ごめんと謝ると彼女は嫌な顔せずに「いいの」と言ってくれた。

「おーい、」ピンポンを鳴らすのが、彼女からの反応は予想通りなく、僕はジーンズのポケットから合鍵を取り出す。

「朝だぞー」がちやりと鍵が開く音と同時に呼びかけた。ベッドで横になっている彼女の体がぴくりと動いたように見えた。「朝だつてば」

靴も脱がずに彼女の家にあがる。彼女はもぞもぞと潜った布団の中で動くだけで声を発しない。

まったくしょうがないな、またか、と僕はうんざりしながら、部屋への光を一切遮断している閉め切られたコバルトブルーのカーテンを開ける。眩しい朝日が部屋の中にこぼれる。

「ほら、今日も良い天気だよ。起きなよ」

二人分のコーヒーを沸かして、コップに注いで彼女の返事を待つ。この間、僕はコーヒーに口をつけたりしない。ただじつと黙って椅子に座って彼女の返事を待つ。コーヒーが冷めたら、僕は「また明日くるから」とだけ言い残して部屋を去る。

「じゃあまた明日くるから」

そのとき彼女がいつもとは違うパターンを見せた。寝ながら力なく左手をあげてひらひらと動かしだした。それは「じゃあね」と返事をしたようにも捉えられた。

僕は嬉しくなってスキップで停めてあった車に向かった。

彼女が返事をしてくれるなんて――夢のようだ。

僕の毎日の苦勞が報われたのだった。

ご機嫌な僕は帰路につく車内でご機嫌なUKロックを流す。今の僕は昼間のバラエティ番組よりも元氣よく、力強く「ごきげんよう！」と言えると思う。人間以外の、たとえば小汚い野良犬にたいしてもだ。何の差別意識もなく、ただ無垢な「ごきげんよう！」を使いたい。こなせることができそうだった。

帰宅した僕はご機嫌なまま、今日のことをレポートに書く。いつもは同じことの繰り返しだったため、コピーアンドペーストで片付けていたが今日はそうはいかない。

ノートパソコンに打ち込まれていく文字列の雪崩れる美しさ！

「――以上。っと」

久々に味わう達成感。嬉々として吐く矛盾した嘆息。そしてそれらと同時に押し寄せる眠氣。

寝るとしようか、誰にいうでもなく呟いてノートパソコンを静かに閉じる。

コバルトブルーのカーテンの隙間から若干の光が洩れているのが気になって、きちんとカーテンを閉める。入念にチェックする。「よし」もう僅かな光も部屋の中に侵入してきていない。

布団に潜り込んで、自分自身の反省点について考察する。目を瞑り、今日のできごとを反芻する。

僕のような卑屈な人間の彼女が煌びやかな青春小説を執筆しているのは不自然ではないか？

土足で彼女の家にあがるというのはアメリカの家庭ならともかく日本では不自然ではないか？

コーヒーをブラックで飲むのは極少数ではないか？ 今度は砂糖

やミルクを用意してみようか？

僕は思考を視界と同じようにぐるぐると不規則に回しながら、布団から一度起き上がった。

ぐるぐると回る視界で文字通り手探りな形で机に手を伸ばし、虹色の錠剤を掴む。それを水も使わずに飲み込む。

そしてまたふらふらと布団に戻って今日のできごとを反芻する。僕のような卑屈な人間の思い描く情景にしては、まあまあだな、と自己賛美をしながら眠りについた。

「次はもっとうまくやれる。やれるに決まっている。そう思わないと：俺は、俺を保てない」

先ほどまでの自己賛美（自信）は自己嫌悪に変化し、最終形として睡魔になった。

—終—

#30 かわずかはづ

「どうも人間という生物は進化するらしい」

手にメスを持ったエタノは言った。「進化、といってもかなりのスローペースだが」

「それなら先日の授業で習いました」

ルーノが答えると、エタノはそうかそうかと関心するように短く頷き、メスを手術台の上に寝かせた一体の人間の腹部に刺した。そして丁寧に腹部を裂いていく。腹部から内臓が覗き、血が滲み、人間の臭いが室内にたちこめた。

「う…」ルーノが人間の内部を見て目をそむけた。

「なにを怖がっている」

「怖いではありません」

「じゃあしっかり見ておけ。我々には記憶ではなく記録が必要なのだ」

エタノの語調の強い言葉で、ルーノはノートに薄めがちに見る内蔵の位置を記録していく。デッサンのような荒い絵も添えている。

「そもそも解剖に恐れる理由などないだろう？ 君は理科の授業でカエルを解剖した時に恐怖を覚えたのか。私は好奇心でいっぱいだった」エタノは少年の日の断片を思い出すように語る。「血の臭さや残酷性じゃあ好奇心を打ち破ることはできない。人は常になにかを知りたい、得たいという探究心の元で学ぶ。それを恐れていては白痴になるだけだ」

エタノは語りながらもメスの動きを止めていない。その目には確かに好奇心だけがあった。

「私にだって」ルーノは理科の授業を思い出せずにいた。自分は授業を受けなかったのだろうか。いや、ぼんやりだが記憶にはある。

「好奇心はありますよ」

「ほう。それにしても手の動くペースが遅いが」

「すみません」

「雑な字で構わない。あとで清書すれば」

「わかりました」

ルーノは真剣な目つきでノートと解剖された人間を交互に見て記録をすすめた。今回ルーノは記録者であり助手の為、時折エタノの額の汗をガーゼで拭ったりもした。

解剖が中盤にさしかかった所でエタノは何か想起したようにメスの動きを止め、

「そうだ、君はなぜこの解剖に付き合うことにしたんだ？ 希望者は君だけだったし助かったが」とルーノに疑問符を投げた。

「それはまあ、好奇心、でしょうか」

ああ、そうかそうかとエタノは苦笑しながら、

「今はただの解剖実験に過ぎないが、これは必ず未来に繋がる。そんな現場に立ち会えた事を光栄に思ってくれよ」

「当然です」

「まあ急ぐことはないんだがな。上は何を考えているのだから」

「数十年といったもうすぐです」

「私たちの星は、まぎれもなく私たち自身が殺すのだな。何千年とかけてじっくりと」

「罪深いですね」

「裁く者がいないから罪は深くなる一方だよ、まったく」とエタノが嘆息をついた。

ルーノは記憶を刻みながら考えた。我々は今なにができるのだろうか、未来に繋がる架け橋を作り上げることができるのだろうか、その架け橋を私たちの子孫は無事に渡ることができるのか。

「なにをぼーっとしている。早く書かないか。あともう少しで終わる」血に一晚漬けたように真っ赤になったメスを握るエタノが笑った。

「はい」ルーノは不安な心を張りのある返事で隠した。が、ひとつの疑問だけは隠しきれず、溢れそうになる。「先生」

「どうした？　もういいぞ、あとは塞ぐだけだ」

「先生、この星が駄目になったら他の星に移住するというのは分かります。住めなくなれば、その場を離れるのは当然だと思います。しかし一つだけ疑問というか、心配事というか」

「なんだ？」

「この人間と我々の構造が生物学的に同じ、もしくは近いのでは人間の住む星が我々の星と『同じ状況』に陥っているという可能性はないのでしょうか？」

エタノはその問いに答えず、しばらく黙々と人間の腹部の傷の縫合に集中した。

「ふう」とエタノは疲労に満ちた息を吐き、メスを置いた。「終了だ」

「先生、教えてください。どうなのです？　その可能性はないのでしょうか？」ルーノの語気が強まった。

エタノはまたも疲れきった弱い息を吐き頭をかいた。

「それはこの人間を送り返す者たちが調べてくることだ。解剖が仕事の我々の範疇ではない」

「それはそうですか？」

「祈れ、彼らが我々と同じように残酷な生態系でないことを。」

祈れ、彼らが我々の移住計画に気付かない鈍感な生物であることを。

祈れ、彼らが星を明け渡す弱者であることを……」

エタノは「上に解剖は無事に成功したと報告してくる」と言っ
て解剖室を去っていった。

残されたルーノは台に乗せられた裸の人間を見つめ、少年の日を思い出した。仰向けに寝かされた人間は内部構造こそ自分とほぼ同一だが、カエルにしか見えなかった。好き勝手に解剖されたカエルにしか。

—
終
—

#31 乱暴、淑やかに、マグロ。

乱暴な性行為には愛を感じない、こんな軽口を叩ける人間は一体どんな性行為を行っているのか興味があつた。昨日参考資料として「淑やかにして。」というタイトルのアダルトビデオを黄色のレンタルショップで借りて深夜に鑑賞してみたが、それはどう見ても乱暴で、失望すると同時にやはりなという確信を得てしまった。

交際を始めて半年になる彼女にこの事を話すと、気を悪くしたのかだんまりを返された。

彼女との性行為は乱暴そのもので、でもそれは格闘技だとかの荒いスポーツの括りというよりも、儀式といったほうがいいと思う。神聖な儀式：とは言い難く、とぼけて表記するなら真性な儀式だ。

真昼間の公園の草むらでいそいそと自慰を行うような感覚で、自己嫌悪、照明を唐突に消された恐怖。それらを武器として使用して相手を貶す性行為。彼女とはそんな交わりを連日続けている。

とべます、とびます、いきます、いけます…。胸にぐりぐりと鉛筆の先を刺す虚無感と彼女の冷たい視線を感じる度に、肩と舌と震える。「そんなに乱暴でひゅうか」

昨夜見た「淑やかにして。」の映像テープを引き延ばすように無理やり呼び起こす。はじめこそ淑やかだった割と美人な黒髪女優が男優が指先、足先、唇に触れていくと一本一本理性の螺子が勢いよく飛んでいき、終盤では顔面がゆがみに歪み見てられない様で身悶え、それは淑やかかなどとはほど遠く、どんな薬使えばそんなに『狂う』になれるんですか？、なんて巻頭五十ページの特集インタビューを組みたくなる姿だった。率直にのべると関心した。そして羨ましくも思った。自分の彼女が見せる堅い表情との違いに愕然ともした。

「乱暴だったか」

固まった彼女の肩を揺らし、「俺を見ろよ」と声を荒げた。「し

っかりと、その目で、俺を見ろ、見てくれ。どうだ？　どうなんだ？」

だんまりを決め込む彼女に苛立つ気持ちを抑えようとベッドに拳を落とした。ベッドに敷かれた白いシャツが歪む。「もう終わりだな。半年もよくもったもんだ」

ここでやっと彼女が返事をするように息を吐いた。よわよわしく酸素が洩れる。

乱雑な気分にな不自然なカバーをかけて話を続ける。「こんなときだって何も言わないんだね」

彼女が「私、乱暴な性行為には愛を感じないの」なんて陳腐な言葉を吐いてくれればよかった。そうすれば互いに言い合ってやり合ってすっぱりと別れることができるのだから…。

——気付いた時には、彼女を足蹴にしていた。苛立ちが、焦燥が、血となって足に集中しているのが分かる。

肉体が凹む音が耳を侵す。乱暴な音を発している彼女を見下ろすような形で何度も、何度も蹴りながら、時には踏みつけながら涙腺が緩んでいることを意識してしまった。自覚してしまっただけはもう遅い、あとはもう涙腺が崩壊するのを待つだけになる。

淑やかに、とぶように、いくように。身を縮こまらせた彼女のマグロのように艶々としたビニール製の体を畳む。半年間、全力で乱暴されてボロボロになって所々ガムテープで補正した体。

目をシャツの袖で拭い、目を細めカレンダーの日付を確認した。

「明日だな…」

明日は不燃物の日だ。

だから、明日は彼女との別れの日となる。最後ぐらいは淑やかにバイバイしよう。

——終——

#32 ハレヤカナミライ

占いは宗教と似ている。それと天気予報もだ。

ということは占い師と宗教家、天気予報師は親戚みたいな位置関係だと言える。

心の拠り所を求め彷徨う、弱った人間にたいして最もそれらしい便利な言葉を吐き、信じ込ませる。占い師と宗教家の目的は同じなのだ。

弱った人間は、本当に弱った人間は自分でその状況を打破しようなど愚かな真似はしない。弱った自分を他人を、それこそ自慢に近い形で大らかな態度で披露して救いの手を求める。『溺れる者は藁をも掴む』という言葉の通りに、そこが正しいのかというのを追及、または言及する前に信じ込んでしまう。

その習性につけ込むのが、私のような占い師だ。

ペテンだなんだと嘲笑される場合があるが、それは間違いだ。
——間違いになる。

信者にとってはそれが正しい、間違いは藁を掴んだとき既に別次元の問題になっているため、それ以外の事柄など放棄して吸収する。黒を白、白を黒、だと言われれば、そうなんだ間違いないと思わなければならない。それが自分に与えられた使命であるかのように。天気予報が外れた際に、天気予報師を愚弄し、毒づく人間を見掛ける度に悲哀の念を抱く。信じた責務だけは放棄してはならないという当たり前の事になぜ付かないのだろうか。

「すいません、今いいですか」

野暮ったいウインドパーカーをまとった男がなぜか申し訳なさそうに立っていた。

「どうぞ」

おかけになってください、という意味合いを込めた視線をパイプ椅子に向けると男は「すいません」と繰り返し腰をおろした。

「えっと」

比較的広めの男の肩は濡れていた。水をはじく素材のウインドパーカーでなければ染みになっていただろう。

刺すように降る雨の中でもお構いなしに、雑居ビル群に囲まれた駅前で『あなたを占います』とだけ書かれた看板を出ただけでテーブルもない、ライトもない、ただ向かい合わせにパイプ椅子を置いただけの占い屋にくるもの好きは結構多い。弱った人間は雨に出かける習性がある。なぜなら雨は大多数の人間に不快な思いを与え、弱った人間に近い状態にするからだ。湿気で前髪がはねる、化粧のりが悪い。など上げればキリがない。人は些細な出来事で簡単に、弱る。

「いいですか？」まるで餌を前に待ったをされた子犬のような目をして男は言った。

「どうぞ」

「あのでも、やっぱり」

話す気であるのにためらう振りをする男を見ながら私は男が求めているであろう眩しい保障を投げる。「もちろん、ここで聞いたお話は他言しません」

「そうですか」

「ええ、職業柄もらすと大変な事態になるようなお話もよく聞きます。でも一度としてそれを他言するなどという好奇心に任せた真似はしていません」

「なら：」

男は安心したのか、ほっと息をついて、ここでもようやく気付いたのか肩についた水滴を手で払った。

「昨日、五年付き合ってた彼女と別れたんですよ」

相槌もいれず無言で促す。

「今日から、ちょうど一週間前にプロポーズして。どしや降りでムードぶち壊しの公園なんかでプロポーズしたせいか『考えさせて』なんて言われまして。一週間の間、生きた心地がしませんでした。」

ずっとドキドキ、ドキドキしててどうしようどうしよう断られたらどうしようなんてそわそわ、そわそわしてました」

「それで」

「はい。昨日が約束の日で。…まあ最初に言った通り、はい。残念です」

唇を噛みしめながら男は視線を落とした。落とした視線の先にはぐちよぐちよに湿った皮靴しかない。

「なるほど。…それで、今日はどのような用件で？」

男はゆっくり顔をあげて、下手な照れ笑いをうかべつつ「彼女を追うべき、あきらめるべきかを」と言いにくそうに答えた。

重大な選択に限って、人はその選択を他人に任せたがる。もしその選択が間違った結末を生んだ場合、その責任を他人におしつけて被害者面できるからだ。それはこの男もそうだった。そして、先日
の女も。少なくともここに来るような人間は皆そうだった。

「選択は自分ですべきですよ」

「わかってます、わかってるんですけど。なんというか踏ん切りと
いうか、決意というか、背中を押されればな、なんて…」

既に男の中で、答えはでているようである。

「追うべきです」 きっぱりと断言した。

「そうですか…」

「ただじっとして失った事を嘆くより、追ってから失った事に気付く事の方が美しいでしょう？ 嘆くのはそれからでも可能です。い
ずれ不可能になってしまう事は不可能になる前にすべきです」

男は両目をじんわりとしながら、私の冷えた手を握った。同じよ
うに冷えた男の指紋の感触が手の甲を這う。

「そうですよね、やっぱり、そうですよね」

「私はあなたの味方でも敵でもありません。中立的立場からだから
こそ、あなたを最善の行動に導ける」

小刻みに頷く男の手をやりわりと払う。男はすいませんと慌てて、
手を膝の上に置いた。

「でもね。私ができるのは手を引いて導くだけ。『ここよ』と指さすだけ。そこから歩みだす、それを信じて前に進むかは当人次第」

「僕は…」

「あなた次第」

「僕は…」

男はパイプ椅子をがしゃんと後ろに倒す勢いで立ちあがった。「いきます」

「追いかけるのね」

「あなたの言葉を信じます」

愚直なほど素直な男の弱気な心の隙間に入り込むのに成功した。

「ええ、好きにきなさい」投げやりに呟いた。でも私は私の言葉の責任を放棄するつもりはない。この状況にオーガズムを感じ、身悶えしそうな衝動さえある。

男は力強い目を私に向けてから、デニムのポケットからくしゃくしゃに折れ曲がって歪な笑顔をしているかのような福沢諭吉が印刷された紙幣を取り出して、私の生命線だけが異常に長い手の平に握らせた。

そして、男は去って行った。傘もささずに去っていく男の背は、雨を意識していないように見えた。雨などにかまっていられるか、と傲慢な態度にも見える。

男が握らせた紙幣をできるだけまっすぐになるように引っ張りながら先日ここを訪れた女も同じようにぐしゃぐしゃな紙幣を握らせたと、と思い返した。傘もささずに来たあの女も同じように結婚の話をしていた。内容ははっきりとは覚えていない。だが自分はその女にも最善の道をあたえたはずだ。弱った人間に、弱った言葉など必要ない。それらしい前向きな道が最善になる。

この町はいい…。

見上げるとそこには雨雲すらなかった。蜘蛛の巣が張ってある駅前天井だけ。

荒んだ町には長居できない。それだけ責任が大きくなるからだ。

大きな責任は抱えすぎるとやっかいだ。この町ぐらいちっぽけな悩みを抱えた人間だらけの町が一番仕事をしやすい。

駅の中にある大型テレビには「有罪判決です！ 有罪です！」と記者が騒いでいる模様が映し出されている。例の宗教家が逮捕されたいらしい。その責任を今度とらされるようだ。

——占い師と宗教家は似ていないのかもしれない。

宗教は人間の人生に干渉しすぎている。せっかく埋めた隙間を広げるような行為をしてしまうときがある。そうして広がった隙間に、それらしい言葉を埋めて——いつしか支配しようする。

占い師は違う。

導き役に徹して、かろうじて記憶の断片に残るか残らないかの謙虚さがある。

占いと運命は連ならない。という可能性を私は心のどこかで持ちつつ訪れる迷える人たちを導いている。

だから、重んじるはずの責任が、軽く思えてしまっているようだ。……私は愚かだ。

そう考えると天気予報師だけが高尚な存在なのか。

天気予報師は人々に安心感を与えている。日々、責任を全うしている。仮に失敗を犯したとしても信じている者たちも薄々はその失敗を予測していて、許すのを決めている。

何より天気は、宗教も占いも立ち向かう事ができない難題だ。決して変えたり、導いたり、思い通りに操ったり、そのような挑戦挑もうとも思わない。勝機が見えない。

それに日々立ち向かう天気予報師は……

今日は店じまいしようとパイプ椅子を畳む。濡れたパイプ椅子の脚をタオルで拭く。

先を急ぐ雑踏に無視されながらもテレビでは噂をすればなんとやらで天気予報師が明日の天気を告げる。

『明日は快晴となるでしょう』

こんな敵意すら感じる暗雲の今日を見てもなお、明るい未来を見

据える天気予報師は、やはり偉大だ。

明日もし晴れたら。

明日がもしも雲一つない快晴だったら。

私は占い師をやめようかな、こんなあこぎな商売は畳もうか。それもいいかもしれない、どうしようか。

誰かにこの選択を任せたくなった。

天気は素人目でも分かるぐらい順調に悪化していった。これから天気と私の運命はどう転ぶのやら…。

—終—

#33 ペンを折る。

先日五歳になったばかりの愛娘のマコが、自分の絵を描いてほしい、とシャツの裾を引っ張ってきた。

「あー、はいはい」

適当に了承した。といってもわざわざ画家の仕事を使う画材を寝室まで持ってくるのは億劫だった。

「パパ早く」

「はいはい、わかりましたよ」

ちよっと待っててね、と優しく言いマコの手をシャツの裾から離した。そして首の骨をぼりっ、と鳴らしながら机に向かう。

「どっこいしょーたろう」

シルバーの椅子に腰を下ろすとぎしっ、と悲鳴がきこえた。太ったのかイスがもろくなったのか。

「あらあら大変ね」

妻のウメが化粧台と睨めっこをしながら笑った。「マコったら寝る前にいったいどうしちゃったのかしらね」

「さあね」

マコは、早く早く、と隣に立ってせがむ。

「わかった、わかったから」

眠気よ、もう少しの辛抱だ、耐えてくれよな、と身体に鞭打つ。机にアイデアが浮かんだときなどのためにメモ用として据え置きしておいた紙と黒いのボールペンがある。それを握る。

「面倒だなあ…」

思わずに口になると、ウメが鏡越しに、きつ、と睨んできた。

「家族サービスよ、サービス。たまにはかまってあげなさい」

「わかった、わかった」

「ほんと、もう。この旦那ときたらいつも絵ばっかり描いて、周りのことなんか見ちゃいないんだから」

「いや、俺は絵を描くのが仕事だから」

ウメの発言が皮肉だと理解しているが、すかさず訂正を入れた。
我が家では皮肉はボケなのだ。そしてボケにはツツコミが必要不可欠なのは常識問題である。こんなことはテレビを見ていれば他人に言われずとも学ぶ。今の時代この決まりを知らないのはN●Kしか見ていない団塊ぐらいだろう。

あまり気が進まないが、ボールペンを走らせる。時折マコの顔を凝視する。その繰り返しだ。絵なんてものはそんなもんだ、一から十までやって完成というわけではない、一と二を何度も繰り返し完成するものだ。単純作業で複雑なものを作り出すのが――画家の仕事。

「パパ、パパ」

「なに？」

「マコ、こんなに太ってない」

マコが途中経過を覗きこみ、抗議した。

「いやいや、最近ぼっちゃりしてきたよ。お菓子ばっか食べてるから」

「食べてないもん！」

「食べてますう」

「食べてないもん！」

「食べてますう、マコちゃんはお菓子ばっか食べてますう」

「食べてないもん！ マコ、お菓子食べてないもん！」

ほうほう、と小馬鹿にして頷き、

「今日パパがポテトチップス食べようと思ったら、なくなっていました、今日のお昼はママはいませんでした。バレーしに行っていました。マコとパパしかいないお家で、パパが食べてないチップスがなくなっただけってことは誰が食べたんでしょうかあ」

と緩急をつけた口調でマコに問うと、

「うーん」

「あれあれえ？　もしかしてマコなの？　マコちゃんでしょ。パパ

のチップス食べたのマコちゃんでしょ!」

「:マコじゃないもん!」

「はいはい」

「ねずみさんだもん!」

「はいはい」

ちいさな体で必死に暴れるマコの頭を左手で軽く押さえながら、利き手は引き続きボールペンを走らせる。適当でいいか、そんな思いが浮かぶが、そこは一応画家。心中を無視して納得のいく仕上がりを目指し手が勝手に動いてしまうものである。

「あら、うまいじゃない」

寝る準備を終え、仕上げに髪をゴムで結いながらのウメが賛辞を呈した。

「そりゃ、どうも」

「駅前で描いたら儲かるかもよ」

「プロだから無理。怒られる」

ウメは、冗談よ冗談、と口元に手を添える。ややあって、ふうあ、とだらしない声を、息をもらした。

「寝る」

「おやすみ」

ウメは目で「おやすみ」と返事をし、ベッドにもそもそともぐつていった。

「パパ、まだあ?」

「もうすぐ」

目尻がなかなか上手く表現できない。マコのなんというか、ふっくら感、が上手く表現できない。

「もういい!」

「ちよ、ちよいちよい」

ウメの寝るベッドにもぐろうと向き返ったマコを呼びとめると、ベッドの上からふふふ、とウメの嘲笑が洩れた。

「できた、できたから!」

適当でいいや、そんな思いが容易く浮かぶのが画家。締切が来てしまったのだから仕方ないじゃないか、と自分を納得させるのはお手の物である。

——でもこれ、そこそ良い線いつてんじゃないの。

そんなかな自信を持って、マコに似顔絵の描かれた紙を手渡した。

似顔絵を眺めたマコは、

「ううん……」

と生意気にも唸り、渋面で猛抗議をはじめた。

「似てない！」

こうきっぱりと言われるとわが娘でも流石に、むっ、ときてしまうのが芸術家の悲しい性である。芸術家というのは、否定するのは好きだが、否定されるのは腹の虫が何匹いても足りないほどの憤りを感じるのだ。

「似てるよ！ そっくり！ こりゃクリソツだよ！」

幼子には判らない死語で反論した。

「似てないもん！」

「似てます！」

「似てない！」

「似てる！ むしろこっちがモノホン！ あなた誰！ マコちゃんはそっち！ こっちのマコちゃん是谁！」

「マコだもん！」

——「うるさい！ 寝られないでしょ！」

せわしい論争はむくつと起き上がったウメの一喝によってあっさりと終止符を打たれた。

「見せてみ」

不機嫌そうなウメがマコから半ば強引に奪い取り、似顔絵の紙を先ほどまで閉じられていたのであろう瞳でまじまじと見つめた。

「……似てるじゃん」

「似てない！」 「似てるよな！」

マコと反応が重なった。しかし、その意はまったくの反対である。親の仇を睨むような視線を実の親にたいして発するマコが、唐突になにか思いついたのか化粧台の前に走って行った。

「どうした？」

マコは化粧台に貼られたマコぐらいの少女なら足先以外を映す鏡を指差し、

「こっちのほうが…うまい！」

と、どうだまいったかと言わんばかりに胸を反って言った。

「はあ？」

マコの意図がわからず訝っていると、ベッドの上でウメがくすくすと笑った。

「なんだよ」

「鏡のほうが上手いって。あんたの描いたのより、鏡の描いた似顔絵のほうが上手だってさ」

ああ…。

「あらら、お父さん立場ないね。画家なのに」

ああ…。

「パパ、下手！」

もうなんだ、もういいや、眠いし疲れたし、でもこれだけは言っておかないとな…。我が家の決まりなのだから。

「こりゃ一本とられた。父さん降参ですわ——って、それ似顔絵じゃないから！ ホンモノが映ってるだけだから！ モノホンだ、モノホン！ 負けるに決まってるだろうが！」

マコは耳に人差し指を挿して、

「パパ、うるさい」

と何処で覚えてきたのか小生意気な反応をした。

マコのその反応で思わず、大人げないと己を制止する前に手に持っていたペンを折ってしまった。ああ、わざわざ画材を持ってこなくてよかった…。

終

#34 中二でロックでもうすぐ三月(前書き)

「中二でロックで三月へ」と同じ内容です。

#34 中二でロックでもうすぐ三月

俺はロックンローラーになりたいんだ。ストラトを掻き鳴らして社会批判とか愛憎劇のメッセージ性の強い曲をステージで叫びたいんだ。合唱台の上で規則性のある指揮棒を見つめながら賛美歌を歌いたくなんかない。

ロックンローラーになる為だったら俺は何だってする。

あからさまに道に迷ってる婆さんを見無視して古本屋で漫画を立ち読みするし、重い荷物を持って腰を曲げてる爺さんを見無視してファミレスでデラックスパフェを一人で喰っちまう。俺はその覚悟がある。中学二年としてのプライドと共に俺には屈強なロック魂があるのだ。まずそれを証明するにはゆとり教育を嘲笑する事で優越感に浸っているだけの無能である団塊の世代への批判、ひいては社会風刺。マスコミへの挑発。

俺ほどロックンローラーに向いてる人間はそういないだろう。

しかし誰もその事を分かってくれない。誰も気付いちゃくれないんだ。

誰でもいい。俺に安物でいい、贅沢は言わないから漫画雑誌のカラページの通販に載っているアンプとギターのセットでもいい。俺に買い与えてくれ。俺にステージを用意してくれ。

音楽室で俺がどんなに願おうと皆が皆口を開いては合唱だ。フォルトレがどうだとかアルレがどうのとか。俺は思うね。俺には神の右テがあるからそんなのはどうだっていいって。俺はそう思いながらいつも歌っている。魂で歌っている。

「小向クン、半音下がってるよ。しっかりして」

「あ、はい。すいません」

うるせえ！ そんなことはどうだっていいんだよ！ 今すぐ叫んでやろうか！ ファックユー！ 生意気だぞ。たかが顧問の分際でフロントマンの俺に楯突くなんてよお！

なんてまあ俺を苛立たせるドビュッシーオタクの古池ふるいけの前で『月の光』をロック調にアレンジして歌ってやりたい衝動に駆られる。だが俺はなんとか思いとどまる。アレンジが湧かないからだ。俺が絶好調だったら今すぐにでも…。

命拾いしたな古池。

俺は「ククク…」という下衆な笑いが出そうになるのを必死に堪えながら古池の横顔を凝視する。微妙な長さのシミあげが癩に障る。剃り落せ、命請いの代わりとして剃り落せ。フレディ・マキユリーを見習え、フレディを。フレディを崇拜しろ！

今思えば俺がこうも絶え間なく、サザエさんを見終えた後に襲う月曜日の存在を感じる時のような鬱屈気分なのは学校に軽音楽部がないからだろう。軽音楽部さえあれば俺は満足だったのに。学校の不手際が俺を憂鬱にさせるんだ。だが逆説的に考えるとこの逆境こそが俺のロック魂を業火のごとく赤く高らかに燃え上がらせたのだとも俺は認めている。俺は利口だからな。

「なんで軽音楽部がないんですか？」俺は入学して三日で担任を困らせた。担任のあの時の顔ときたらぶん殴ってやりたくなるものだった。あー、はいはいという白けた顔。死ねばいいのに。ピックに頭をぶつけて死ねばいいのに。

「必要ないからだよ」ボールペンをくるくるとあたかもそのまま回していればいつか浮上していくかのようにながら担任は言った。フアック！ 必要だろうが！ 俺は怒鳴ろうとしたが流石に入学三日でしかも義務教育の下でいざこざを起こすのは気が引けた。俺は俺なりにこの怒りのぶつけ方を模索した。結果俺はその日の帰りに駄菓子屋で十円ガムを百円分も万引きした。…ロックだ。

盗んだ十円ガムを土手でくっちゃくっちゃと何百回も味がなくなってもなお噛み続けながら思考を巡らせた。ピンクだった十円ガムが舌に色をうつしきって真白になった頃、俺のリビドーと破壊ですっかり混雑した脳みそを駆使して俺はしっかりとした答えを導き出す事に成功した。

——合唱部を乗っ取る。

俺は決意した。そして奮起した。おまけに吠えた。言葉にならない思いを吠えた。吠えすぎて喉を痛めたが吠え続けた。血の味がした。これはまさしくロックだった。その日俺は案外宙ぶらりんだった自分はロックンローラーになるという運命が明確なものになった気がした。

翌日、俺は合唱部に走り書きの入部届けを提出した。入部理由には「ROCK!」とだけ素晴らしく端的に書いた。顧問の古池はそこを読むなり鼻で笑っていた。まただ。あー、はいはいという白けた顔だ。ファック! その潰れた鼻にレスポールをぶつけてやろうか!、などとは俺は思わなかった。いたって冷静に、よろしくお願いますと頭をたらし^{こしら}た。しかしこれは従順な飼い犬になったのではない。飼い犬に手を噛まれるこの教師の顔を拝みたくなかったから牙を隠した——それだけだ。その時俺は己の利口な音楽性を感じざるを得なかった。

「小向クン、真面目にしてくれよ。私の指揮をちゃんと見てくれ」

「あ、はい。すいません」

入部してそろそろ二年が経とうとしている。だが、俺の目標はまだ達成されていない。合唱部を軽音楽部にして音楽室いっぱい機材を持ち込み、優良な機材に囲まれた中でバンド仲間と、

「やっぱインディーズだべな。メジャー契約なんかしちまう腐抜きのバンドなんてロックじゃねえべな。お遊戯だべな。安泰を手に入れたロッカーなんてただの会社員だべ」

「ふむふむ。確かに確かに」

「あと色恋歌うような奴らもロックじゃねえべ。ありやJ—POPだべ」

「そうだそうだ。曲の構成が同じでマンネリのコード進行。ボーカルが違うっただけだ」

「カラオケだな」

「カラオケだ」

「カラオケなんて格好悪いな」

「悪い悪い」とラッキーストライクをふかしながら語り合うという偉大な目標が！

ぐむむむむむむ…。

俺は齒軋りしながら古池の横顔——もみあげを重点的に眺めながらどうすればいい、どうすればいいと頭を回転させる。その間、トム・ヨークとギャラガー兄弟がにらめっこをしているアイキャッチ。トム・ヨークが鼻の穴を広げてノエルを失笑させたその瞬間——
ピキューン！

ひらめいた。俺は一日にして合唱部をロックロックロックにしてしまう案をひらめいた。悪魔の氷をも溶かす業火の脳でひらめいてしまった。

俺は「ククク…」という下衆な笑いが出るのを堪え切れずに合唱台の上で肩を震わせた。そんな俺を見て声はソプラノ、顔はメイクイーンの女数人がこそそこそと何か囁いている。ファック！ レイプすっぞ！

ドウドウドウドウ。落ち着け俺。周りの声などに騙されるな。お前はお前の叫びだけを聞け、信じろ、掻き鳴らせばいい。

俺の決意は揺るぎない。

今回ばかりは揺るぎない。

来たる三月の合唱コンクール。ラストデイ。音程など無視して指揮など無視して、しゃらくせえとばかりに俺は叫ぶ。俺は賛美歌を全身でロックにしてやる。歪んだ欲望と狂ったチューニング。混沌とした優越。思慮深き思惑。それらをすべてエネルギーに変換して叫ぶ。

合唱なんてやってられるか！ 俺はやるぞ、やるったらやる！

俺が合唱コンクールを滅茶苦茶に蹂躪したらステージを見て胸打たれるまだ目覚めていないロックンローラーの卵たちが俺を慕うはずなんだ。そしたら俺の勝利！ 合唱部につめかけるロック・エッグ達！ カモンカモン、お前ら全員にアイラブユー！

完璧だ。こうなったらもうこの練習には意味がない。今までも意味がなかったが暇つぶしぐらいにはなっていた。しかし決意をした俺にとっては今やこの時間はただの虚無。あるいは時間の浪費。

「ククク…」

最高だ。阿鼻叫喚のコンクールを想像したら笑いが止まらなくなっちゃった。

ククク…。ククク…。ククク…。

お前らみんなおしまいだよ！ お前らの賛美歌は薄汚れたドブネズミのような美しさに犯される運命なのだ！ 見せてくれよな。飼いい犬に噛まれて、「オーマイゴッド！」と頭を抱え苦しむとっておきのバッドエンドを！ そしてしかと見よ。あたらしいストーリーのスタートを！ ストーリーテラーはこの俺だ！ この素晴らしき陰鬱なるマイナー曲を奏でるバンドのフロントマンはこの俺だ！

「小向クン、いい加減にしてくれよ。皆が合唱コンクールに向けてモチベーションをあげていききたい大事な時期なんだから。そんなにやる気がないならやめてくれても構わないんだよ？ ただでさえ君のパートは他にもなりたい人がいるんだから」

「あ、はい。すいません。ちょっとぼーっとしてました……」

…ええ、ああ。もう少しだけ練習に付き合ってやるか。

と、とにかく待ってろよ…合唱コンクール！

—終—

#35 後ろめたさのしるし

赤い電気が点いているだけでも、隣で寝息をたてている不細工の顔はよく見えた。不細工は仕事までは死んだようにぐっすり眠り、俺の声で水底から浮上。その疲れた体のまま、体を売りに行く。

「私は不良品だから」俺が珍しく心配した日には必ず舌をだしておどけてみせる。滑稽なほどに、その笑顔は美しかったりする。皮肉なほど、その笑顔は愛おしかったりする。

しかし、それは錯覚だ。虚像だ。俺なんかが理解できる範疇じゃない。そんなこと俺が一番判っている。

帰宅して、ワイシャツを捻りあげるように脱ぎ捨ててシャワーを浴びる前に鮮血を浴びるような気が狂ったセックスをする。毎日毎日。気が狂うまで。気が狂っているのに気がつかないのは気が狂っているから。思えば気が狂っていなかったときなんて女を知る前だけだった。あの頃は、まさか自分が抱いたばかりの女に「早く寝ろよ」なんて冷淡に吐くなんて思ってた。なかった。

こんな不良品でもご立派に役職に就いているからこの国は傾いているのだ。すべての責務を押し付けていい気になっているが、本当は知っているはずだ。

たったひとり――どれだけの権力を持ってようが、一人には変わらないということ。命の重みは知ったかするのに都合よすぎるぜ、みんな。

みんないけないやつなんだ。みんな、みんな、みんな。

「おい」間拔な不細工の寝顔を見ながら、肩を揺すり起こす。「時間だぞ」

腕時計の秒針が三回廻っても起きない不細工に彼は苛立つこともなかった。また、溜息をつくこともなかった。寝顔を見つめて、無表情だった。

秒針が回されたダーツの的のように力なく失速していく。彼が目

で追う前に、女が目を覚ました。

寝ぼけた顔の彼女は体を起こすなり、無言で目をこすった。何度も目をこすった。今見てるのは現実じゃない、と拒絶するかのごとく目をこすった。

彼が何も言わずとも、ベッドのシーツに残された体温が彼女に現実を突きつけた。現実に立った彼女は、「おはよう」と言った——つもりだったが水分に飢えた口は言葉を上手く生めなかった。

おはよう、も上手く言えない彼女が上手に生きていけるはずがない。彼は苦笑しながら思った。

「顔洗ってこいよ」

こくん、と彼女は頷きだけを返して重い体を引き摺るようにして洗面所に向かった。

痩せた背中。後ろから蹴りを入れたら間違いなく折れるだろうな。彼はベッドに腰かけたまま、ガラステーブルに目をやった。テールブルの上に置かれた二つ折りの携帯電話が彼女の背中とだぶった。

こんな先のない暮らしをして、何になるんだろうか。

彼はぼんやりと自分の携帯を眺めながら思った。先ばかりを求めたり、結果論だけを崇拜しているつもりはなかった。でもこのまま下るだけの暮らしをするのも、何か——

「物足りないの？」

「は？」

「親指噛んでるから」

彼は面食らった。顔を洗った彼女のすっぴんではない。自分の行動に、だ。まるで赤子のように親指を噛んでいた自分に驚いた。俺はもう三十だぞ…。

洗顔のときだけ髪を結う彼女から石鹸の香りがした。毎夜、嗅ぐお馴染みの匂いだ。彼にとってはギターの音よりもこの匂いのほうが、響く。血液を染みわたっていく快感とは違って、現実ってのが俺を笑いにくる感覚だ。

「上着ろよ。みっともねえ」

「もう見飽きたって？」

「ちげーよ」

「あら、嬉しい」

言いように弄られて彼は舌打ちした。調子が狂う。

無地のシャツを頭から被った彼女はそんな彼を声をださずに笑った。シャツから顔を出す前の表情だったから彼には見えなかった。

彼女は仕事に行くときはだらしない格好だと決めていた。こだわりとまではいかないが、自分の仕事に誇りを持っているわけでもない彼女は恰好をつける意味を持っていなかった。どうせ店に行けば着せ替え人形のように、あれやこれやと客の趣味に合わせた格好をするのだ。気を抜けるのは今だけなのだ。だから好きにさせてよ、と彼女はいつも言っている。

「俺さ。今日仕事休もうかな」

「なんでよ。風邪でもひいたの？　そうは見えないけど」

「いや、なんとなく」

彼女は肩をすくめた。何もいわずにガラステーブルの上の鏡と見合った。鏡の中に映る彼女の顔がみるみる変わっていく。

別人のようだ。化粧つてのは便利だな、と彼はこの劇的な光景を見るとつい思ってしまう。

仕事やめてえな。不満もないが、責任もない。あるはずなんだが実感がない。あるべきはずのその実感がなくなったのはいつだった？　わからない。わからないんだ。

彼が自問自答する間、彼女は顔を作っていた。知らない人になっていく自分に畏怖することはなくなった。むしろ知らない人になりたい、と思っていた。好きなように自分の顔に絵を描いていくように彼女はファンデーション、アイシャドウ、口紅を塗った――素の自分を塗りつぶした。

「飾りじゃないのよお、涙はっ、あああ」口からメロディが溢れた。急に歌いだした彼女を先のない自問自答を終えた彼は訝った。「どうしたんだ。そんな古い曲うたって」

「ここから先が分からない」

「俺だって知らねえよ。そんな昔の曲」

「使えない人ね」

「お互い様だろ」

「あ、そういうこと言うんだ。じゃあ今すぐ帰っていいよ？ この時間に帰ったらどうなるか知らないけどね」

彼は嫌悪ではない鋭い目つきで彼女を睨んだ。こう言われては退くしかないのである。女ってのは賢いやり方ってのを知っている。敵に回すなら男に限る。これは社会の常識だと痛感する。

「おーわり」せっかくできあがった顔に波をたてて彼女は彼の隣に腰かけた。「怒った？」

「別に」努めて淡泊に返す。

「怒ってるう」

「怒ってないって」

「じゃあ悪かったなって思ってる？」

「…別に」

すこしは思えよお、と彼女は泣きつくように彼を押し倒した。華奢な腕に負けるほど彼の体は軽くないがされるがままベッドに背を沈めた。一緒にいる女からだ、悪い気なんてしない。時々喧しくも思うし、疎ましくも思う——だがそれは心の底から湧く冷めた感情じゃない。もっと着色も名前も付いていないような感情だ。

キスでもしてやろうか。彼は覆いかぶさって胸に顔を押し付けてくる彼女の頭を撫でた。ずっと撫でていれば今彼女が何を思っているか読み取れそうな気がしたが——やめておいた。知りたくなかった。知ったところで距離が縮まるわけではないのだ。なら、知らない現状を維持するのが懸命な判断だ。

——怖がってるだけだろ、俺は。違う。

——何が違うんだよ。

それは…。

「ごつごつしてる」

「ん、何が？」

気付くと彼女は手を握っていた。握るというには弱々しく、触れるというにも弱々しく彼の指の間に自分の指を挟んでいた。「お父さんのと似てる」

「お前の？」

「うん」

「へえ…」彼はこんな言葉しか出てこなかった。

「お父さん、画家だったんだよ。死んじゃったけど」

「画家？ お前の親っぽくないな」

「なによ、それ」

彼はふっ、と鼻で笑って誤魔化した。「お前のこと描いたりしてたの？」

「そりゃちいさかった頃はね。でも歳とったらそういうの気恥ずかしくなってやめた」自分で言っておいて恥ずかしい、と感じていた過去があったことに驚いた。同時に、これこそ気恥ずかしいものがあった。恥ずかしいと感じているうちに聞いてしまえ。今なら大丈夫だ、きつと。彼女は手をぎゅむ、と握った。

「ねえ」心臓に囁くように彼女は呟いた。「聞いていい？」

「…どうした？」聞かないでいい、そんな風に突き放せたらどんなに楽だろう。知らなくていい、こんな風に逃げてる俺はすでに楽しんでいる。

彼はどんな質問を投げられるか推測していた。消去法で聞かれても大したことなら順に消していけばおのずと出た。

外でカラスが鳴いている。素っ頓狂な声をあげている。鶏は朝を告げるが、カラスは夜の延長を告げる。いつもならうざったいだけのカラスの鳴き声が沈黙にはありがたかった。

「なんで私と付き合ってるの？」彼女は言った。胸に顔を任せたまま、体重をおろしたまま呟いた。愛の告白を彷彿させる気恥しい言葉だな、と彼は彼女の頭を撫でた。もう片方の手は決して絡むこと

のない手と体温を交換している。不毛なものだ。

なんで、か。

「ねえ、なんでだろうね。なんで私たち」

絡み合う手から金属の衝突する音。その音に同調するように外のカラスが鳴いている。なかないでくれ、と頼んだら去っていくだろうか？ なかないでくれ、と懇願すれば許してもらえるだろうか？ 誰に？ 何を？ どうして？ わかりやしねえよ。わからないから困るんだ。学生るとき、ばっちり予習した日でも突然あてられたらこんな風に口ごもったっけな。何も答えられずに立ち尽くして視線を浴びていた。

しかし今は、その視線がない。

追いうちをかけるその視線がない。

だから、

「後ろめたくないから、かな…」寂しさも憂いも必要のない愛情つてのは後ろめたいもののはずだが、その実感すら今の俺にはない。ないものねだりする気もない。愚直に、俺は…。

「そっか」彼女は顔をあげて自己暗示するように繰り返した。「そうだよ。うん、やっぱりそうだよね」

「俺は…」

「いいよ。もういい」

「良くねえよ」と怒鳴りながら安堵している自分に辟易する。助かった、なんて思っている自分に反吐がでる。この国でピストルが合法化されてなくてよかった。もしそうなら俺は何度銃弾を頭に受けていたことか。俺は何度自分を殺したか。

彼女は何も応えずに立ちあがって、代わりに微笑した。それから羽振りのいい給与で現金払いで購入したブランドもののハンドバッグを肩にかけて部屋を辞そうとした。

待てよ。

彼はそのたった一言をいえずに唇を噛んだ。

「じゃあ行ってくるね。ちゃんと帰るときは鍵——」

「わかってる」

言葉を遮られた彼女は、「…あっそう」と濃いアイシャドウに囲まれた目を瞬いた。

ドアが閉められても彼は動けなかった。彼女が歩いてくのを窓から眺めてからやっと彼は身を起こした。電気を点ける気にはならなかったが、このまま真っ暗の空間で自己嫌悪してもいいが流石に自分の年齢を考えたらそうするのは憚られた。

それでも人工的な光が部屋を満たすと彼の胸は他人の体温の残り香のせいでやけに重かった。重く苦しかった。薬があればもらいたかった。だがピストル以外の特効薬はないと知った。

後ろめたくないわけないんだ。そんなわけあってたまるか。

彼はさっきまで他人と絡めようとしていた指に触れた。ひんやりとした感触だけがあった。彼女の付けている指輪とは違う輝きを放っているが温度は同じだ。同じであって同じでない、と理解する。

無理やり理解して、後ろめたさを取り戻そうとする。

——「物足りないの？」

——「お父さんのと似てる」

——「なんで私と——」

彼女の言葉ひとつひとつを反芻しながら後ろめたさを探した。部屋のどこかに落ちてそうだが、どれだけ見回しても見つけることができなかった。

「ったく…」溜息をついて立ちあがり洗面所で——それを見つけた。

彼は笑った。笑うしかなかった。

やはり女は敵に回すべきじゃない。いつだって狡猾な手段を使って男の手の上で転がす。男はころころと転がって落ちる寸前でやっとな気付く。

——彼の着ている白のワイシャツに口紅がべつとりと付けられていた。

白いキャンパスに絵具をひねり出して、幼児が掌で好き勝手伸ば

したような雑な模様がワイシャツに彩られていた。キスマークと呼ぶには不細工だ。

洗面所の鏡の前で彼は彼女の父親が画家だというのを信じた。疑いようもなく信じた。

「あー、くそっ」

蛇口をひねると流れ出る水で彼は必死になって彼女への愚痴を心中で呈しながら何度も顔を洗った。水が跳ねてガラスにしぶきがつかうが、ワイシャツが濡れようが構わずに彼は何度も顔を洗い続けた。

顔を洗う彼はワイシャツを洗って帰るつもりはなかった。

—終—

#36 ゴキブリを食べないで（前書き）

一部、同じ文章を繰り返し掲載していました。申し訳ございません。
（09／04／19／19時修正済み）

#36 ゴキブリを食べないで

「マサオの家ってゴキブリ出る？」同僚のマコが普段は人懐っこい顔を透らせて訊いてくる。「昨日とうとう私家^{うち}に出たのよ、あいつ。ついに一匹」

『マサオ』と呼ばれる私はこのようないかがわしい男性相手の商売をしているからもちろん性別は女だけど、彼女は私を『マサオ』と親しみを込めて呼ぶ。なぜかと尋ねると、名前がマオで苗字がサトウ——だから『マサオ』とのこと。なぜ『サ』を名前の真ん中に挟むのだ。

なぜ、なぜ…。

アンサー「なんとなく」。こう返されたらもう何も言うまい。

「そういえば出ないなあ。引越してから見たことないや」

マコは、いいなあ、と羨望の声をあげた。静かにしなさい。控室は狭いんだから。あまりおおきい声を出すと響くというか床に沈んでいって気分が悪い。

「あいつって何も言わないから怖いよね」

「それでいて地味にカサカサって音たてるからね。気付いてほしいんだか、無視してほしいんだか」

「構ってほしいんだよ、たぶん」

「まあ私のところは出ないから構ってあげなくてもいいんだけど。構ってあげる子がいないし」

「最悪。あげるよ。送ろうか？ 一匹いれば百匹いるっていうし」

「最悪。いらない。百匹に構ってあげるような私はできた女じゃない。ベビーシッターでも呼べば？」

マコは笑う。「ベビーシッターってゴキブリも相手にするの？」

「知らない」

「どっちかというとダスキンとかの業者のほうが…」

私とマコがくだらない本気度低空さまよってますな会話をしてい

ると、仕事を終えたレミが控室にもどってくるなり客の悪態をついた。エンジンをかけるように濡れた髪をタオルでぐしゃぐしゃに拭く。

「くっそ。うぜえ。説教たれてきやがった」

ああね、そういうこと。よくいるよ。自分は教会の神父だと勘違いしている淫行野郎。じゃああんたなんでこんな店きてんの？　なんてやんわり言ったら爆発。罵られるのな。一応客だし反論は控えておくと調子づいてぎゃあぎゃあ、と筋のない論文披露会。それでも興奮してかあれはあれで腫れあがってるし。もしかしてそういうプレイをお望みですか。なら追加料金ね、はい。

「いるよねー。そういうアホ」マコは同意して首をこっくりこっくり。最高にアホっぽい。でも可愛いから許す。

「『君はこんな店で働いてて親御さんに申し訳ないと思わんのかね！』だって」レミは口を尖らせて野太い声を作った。おそらく客の真似だろう。でもそれじゃ「ダンカンこのやろっ！」と吠えるビートたけしなんですけど。というよりビートたけしのものまねをする肥えた芸人なんですけど。

マコは盛大に笑って手をばんばん叩く。さながらシンバルをしゃんしゃん狂ったリズムで叩くこわれた猿のおもちやだ。私はそれがおかしく笑った。

「ああ気分悪い。私サドだから。説教されながら突かれるのってぐったり。演技するのかなり疲れる」

「だじゃれ？」マコは笑ってるくせにするどく指摘する。決して頭は悪くないのだな、と私は時折感心する。

レミはマコの返しの意図が読み取れなかったようで溜息をついて、オンボロのソファアに倒れるように座った。部屋のベッドを買い換える金があるのならこのソファアも買い替えてほしいんですが、オーナー。

口をつぐんで浅い呼吸を始めたレミをほったらかしにしてマコは私に向き返った。

「なんの話してたっけ？」

「ゴキブリでしょ」

そうだそうだとマコは笑う。おいおい数分前の話だよ。思い出話じゃないんだよ。

「マサオがさ、男っぽいからゴキブリが怯えて出てこれないじゃないの」いきなり突拍子もない推測。

「なんじゃそりゃ」

「逆にじゃあなんで出ないか分かるの？」逆に、ってホント便利な切り返し。会話の万能ナイフだと思う。すぱっと流れ切っちゃうから。

「いや：分からないけど」

「なら決定ね。マサオが怖いからゴキブリはびびってて出ない」

「何いってんの。そんな決議認めません」

「認めましょう、現実を」

スローガンの言葉でしめようとするマコを阻止するために私は考えあぐねる。えっちらほっちら思考が飛ぶ。あれでもないこれでもない、とまるで初々しき頃の初デートで服を選んでいるような気持だ。結局「これだ！」という答えは出ずに一番マシなのに妥協してしまうのも同じ。

「ほら、私んち猫いるから」

無理があったか、と後悔した。でも猫は虫を喰うっていうから筋が通ってないこともない、と思うのですがどうだろう。

「：なるほど！」

マコは頭上に豆電球を具現化できそうな感嘆の声をあげた。どうやら「男っぽいから」なんて安直な構成の理論は消えたようだ。

でもいいのか？ これも結構安直だけど。

「私も猫飼おう！」

まあこれでいいんでしょう。結局今行われているのは国際会議でもなんでもなく、たんなる暇つぶしの会話なのだから。

マコが帰りにペットショップに寄ると言いだし、帰るときには早

朝だからまだペットショップは開いてないよ、と極めて冷静に指摘した。彼女が残念そうに頷いたその時、控室の扉が開かれた。

「マコちゃん指名でーす」顔をだしたスタッフがのびやかに言った。「はい」マコもののびやかに返してソファから立ちあがった。

視線をソファに座ったままの私に落として「行ってくるね」とマコは言った。さっきまで猫がどうだとかゴキブリがどうとか騒いでいた顔じゃなくなっていた。

——こんな顔を見てもあんたらは説教できるの？ 事情も知らないのに感情論をさも誇らしげに並べて悦に浸りやがって。

「いってらっしゃい」

扉の先に消えていくマコの背中はいつもいつも夢げで、私は目をそむける。

この日、私に指名はひとりも入らなかった。こんな日もある。毎日こうだったらいいのに、と生活を丸投げにした願望もあるけどそれだとやっぱり食べていけないから困る。

「ただいま」

猫しかいない家でも挨拶をかかさない私は律儀。ブルー入ってても習慣は抜けないってただけけどね。どんなに泣いてもお腹が鳴るのと一緒に。

「みゃお」

「はいはい、ごはんね」

足にすり寄るふわふわ茶色の毛をまとう愛猫の『ロッチ』をかわして私はベランダから餌の袋を持ってくる。重い。餌の袋を抱える度に小分けしよう、と思うけどそれはなんか嫌だ。面倒とは違う。なんか嫌。この重みはおそらく命を握っていると錯覚するためにあるものだと思う。だから小分けするのは違うと思う。

「みゃおみゃお」

わかってるって。

餌皿に가가、と餌を盛ってあげるとロッチは負けず嫌いだから、가가、と同じようにもしくはそれ以上の勢いで貪欲に餌を食べていく。美味しそうに、とか上品なんて言葉はロッチには似合わない。ただ貪欲なロッチを見ていると汗だらけのスポーツ選手を見たときと同じ気分になる。ああ生きているな、っていう感動と刺激。

ひざをついてロッチを眺める。ががつ、と餌を頬張るロッチは勇ましい。食べているときは目下の食べ物のことしか考えてない表情。猫にも表情があることを猫を飼ってから始めて知った。猫をもっと可愛く思うにはこれに気付くのが前提。気付いたら最高に愛らしく見える。

でも時々不穏な思いを抱く時もある。まさに今。ロッチに餌をあげている今。せっかく晴れた気分にあく雲が突如現われるのだ。

ロッチに餌をあげなかったら死ぬんだろうか。

残酷な事を考える私。餌をもらえないロッチはもちろん死ぬだろう。人間だって栄養を補給しなければ死ぬ。熊だって、あめんぼだってみんな死ぬ。生きたいから食べる。憂鬱に侵されてもごはん炊いたりする。でもそれは滑稽なことじゃない。確かに笑えるけどそれはバカにしているんじゃない。

「みゃ」

ロッチは空腹を解消したのか短くお礼を言って餌皿の前をあとにしてここ一月フローリングに敷きっぱなしで湿気臭い私の布団に我がもの顔で潜っていく。食べてすぐ寝たら太るよロッチ。猫なのに豚になったらどうすんのロッチ。豚を飼う気はないよ臭いから。たまに養豚場の車とすれ違くと鼻がもげると悲鳴をあげたくなる悪臭の襲われるけどあれに毎日耐えられるほど私は辛抱強くない。ロッチは猫だからいいのだ。ロッチは猫だから私がいないとだめなのだ。――私がいないとだめ？

目をつむって浅い呼吸を早くも開始したロッチは返事をしない。どうせ起きてても返事はしないだろうししたところで人間の私が理解するのは、まだ、難しいけれどなんか返事をしてくれなくて助か

ったって感じ。

ごめん、ロッチ黙っててくれて。

ありがとう、ロッチ黙っててくれて。

私の家のゴキブリをもしもロッチがすべて退治して空腹を満たしているのなら餌を与える私はロッチにとって用済み。義理か同情で付き合ってくれているってことになる。そこで私はロッチに依存しているのだから、自分のごはんよりもロッチのごはんを優先するぐらいだから。でもロッチは私に依存していないってことになる。そんなのは嫌だ。片思いみたいで嫌だ。せつなくて痛くて嫌だ。泣きたくなるけど泣き方はもう忘れちゃったからできないしこの思いの発散方法を私は知らないからそんな気持ちにさせないでほしい。

「にゃあにゃにゃにゃあにゃ？」

猫を真似て、まさに猫なで声を出す私をロッチは笑いもしなかった。食欲に爆睡。

「ロッチ。ゴキブリを食べないで」

今度は人間の言葉でロッチに言った。

ロッチは私に依存するべき。ゴキブリなんて食べなくていい。ゴキブリなんて出てきても怖くないから安心してよ。新聞紙で叩いてやるから大丈夫、ってこんなことするから私はマコに男っぽいなんて言われるのかな。

ロッチは私のこと女だって思ってる？　もしかして思ってるから

「みやおみゃ」

猫も寝言を言うってはじめて知った今日。今日からもっともっとロッチを愛おしく思える。

—終—

#37 さっきまでは恋がしたい。

おおお、猛烈に恋がしたい。勘定的かつ感情的な恋ではなく燃え
たぎるようなヤカンが「あ、あかん！ もうあかんで！」とぴーぴ
ー音を終始鳴らし続ける衝動的な恋がしたい。

俺が拳を震わすと傍らの彼女は言う。「アホや」

俺は言う。「アホじゃねえよ」

「はいはい」と唇の端をくつ、と吊る彼女の浅ましさたるや憎たら
しさたるや世界の悪をここに凝縮しました！、というキャッチコピ
ーを進呈したくなる。俺は発作的にこめかみを搔いて平静を装うが
前述の発言の通り心が荒んでいるのはあきらかな為、彼女はフハハ
などと嘲笑。フハハだと？ フハハはないだろうが！ アハハなら
ともかくだな、フハハはダメだって。許せんって。いい歳した女の
子がフハハなんて絶対にダメ。EUが認めると言ったとしても俺は
認めんぞ。

テレビの黒い照明が俺と彼女を照らす。これは波乱の予感。シヨ
ーアップナイターの予感。

「なによ。あたしの顔になんかついてるの？」

予感的中。

見てくれ、この怪訝顔。それに時折頬に殺意の『サ』の字をちら
つかせる器用さ。

「ついてねえし、見てねえよ」

アホが、と語尾に添えてもよかったが思いとどまった。これを添
えるとゴングが鳴る。間違いない。何年このヘチマ顔と付き合っ
てると思っているんだ。サインペンとスケッチブックを渡されたら三
秒で日本列島よりも複雑な尻の痣を正確に描けるんだぜ。

あああ、猛烈に恋がしたい。ヘチマを抱いて眠る——ためしてガ
ッテンの二番煎じの残りカスみたいな番組が健康法として紹介した
ら翌日のスーパードからヘチマがごっそり姿を消す——そんな恋では

なくてですね、当方が希望するのはそのですね、あのですね、もつとこうナポリ的といいますか「恋い焦がれるううう！」だとか「死んじゃうううう！」と高熱に犯されて這いずりまわるような——そう、情熱。現状には情熱が足りんですね。はい、これは由々しき事態だと思えますし当方の年齢を考慮すると非常に厳しいのは確か。「ねえちよっと、ジュースなくなつた」空になつたコップを眼前で振り振り。「冷蔵庫から取ってきてよ」

ちよい待ち。俺はお前の召使じゃねえし。むしろお前が取ってくべきだろ今度は。さっき俺電気消したし。わざわざよっこらっしよと立ちあがりーのてくてく歩きーのドア横のスイッチぱちん。これ結構重労働なの分かる？（この場合面倒な事を重労働と呼ぶ）

「自分で取ってこいよ」

「ええ…」

なにそのガツカリ顔。腹立つんですけど。かなり腹立つんですけど。

「なんでえ…？」

え、なんでほっぺ膨らませちゃったりしてんの？ …こちとらザ・立腹って感じなんですけど！

こんなやつと沈みゆく船の先端で抱き合つて両手を広げて真実の愛を悟る、そんな真似は俺はできない。したくない。断固拒否の姿勢。全力で遺憾の意を示す。船員が「この船は沈む！」と叫んだとしても俺は「あっそう」と一蹴し爆睡するね。しかも部屋の鍵かけて彼女が入れないようにする。ややあってドアどんどんどん。「うるせえなあ」。ドアどんどんどん。「安眠妨害で訴えるぞ」。なんてクールなんでしょうか、こんな人生の終焉ってかっこが宜しいですよね。男の憧れ。あ、こ、が、れ。

「じゃあジャンケンしよ」

雨が降ったら傘をさせばいいでしょみたいなテンプレート通りの提案をした彼女は俺の肩に触れる。「ジャンケンしよジャンケン」「やだ」

「ええ…」

「やだね。お前が取ってこいよ」俺は自分の空になったコップを彼女に突き出す。「お前の番」

「なによ、番って」

「俺はさっき電気消したもん」

「さっき？ もう二時間以上も前じゃん」
しまった。

虚を突かれてちょいとばかしたじろぎながらも俺は反論する。「

俺の『さっき』の定義はギリ二時間」

「長すぎ」

「はあ？ んじゃあお前の『さっき』ってどれぐらいよ」

「五分」

「ありえん」

「いや十分ぐらいかな」

「ありえんな」

「三十分かも」

「まだまだ」

「一時間かなあ」何故か遠い目。「うーん」

「まだまだ。常識ないのな」

「…一時間半ぐらいかも」

俺は待ってました、と指をばつうんと鳴らし、「一時間半も二時間もそれほど変わらんやろ！ よし、じゃあ『さっき』ってことでジューズとりに行くのはお前な」

はめられたのに気付いた彼女は露骨に怒気をまきちらした足音をたてて冷蔵庫へ向かって行った。下の階の人に迷惑だからやめてくれ。

ややあつて戻ってきた彼女にコップを渡されたがなみなみ注がれていたから受け取る時にコーラがすこしこぼれた。悪意のある注ぎ方だが、一応ありがたいと礼を言うておく。

沈黙。

敵兵沈黙。

気まずい空気。

堪えられますか？ イエスオアノー。

「もちろんノーだ！」

「うわっと、なによいきなり」

「ああ、ごめん」

「次の見る？」彼女は上目遣いで問いかけてきて応えを待たずしてテレビの前に歩いていく。「どれにする？」

「ああそうやな……」俺の頭の中で幾多のストーリーが目まぐるしく再生されていく。しかし話のさわりだけ。なぜならあらすじしか情報がないからである。「どれでもいいわ」

がしよがしや。衝突音。

そうねえじゃあねえ、とぐずぐずする彼女。その横顔——可愛いじゃないですか、ねえ皆さん。

「これにする！」

てれれれってれー、という具合に彼女はテレビと周辺機器をいじりはじめる。今日日機械に苦手な女性などは少数派である。それは企業の成果ともいえるだろうし特に女性に根強くある——即ち「機械は難しいもの」という蔓延した風潮が根絶し——（以下略）。

準備を終えた彼女が俺の傍らに帰還して腰をよこっしょ……もとい静かにおろす。オレンジを羽交い絞めにして作られた橙色の液体が注がれたコップを掴んでからテレビを食い入るように見つめる。俺もそれに倣う。

次第に真っ黒だったテレビの画面が不明瞭ながらも段々と色彩を帯びてひとつの物語を映しだしていく。

——殺し屋とその妻、そして二人の子ども。両親は過去を隠し平凡ながらも幸せに暮らしていた。しかしある日彼らの過去を知る者つまり昔の同僚達が彼らの『今』を崩壊させようとする……。というサスペンス展開は前半だけであり、後半は父と母とその息子の三人は超能力に目覚めてしかもガンアクションも豊富となり悪党共を完

膚無きままに圧倒するという三文小説に泥を塗ってレンジで一分加熱したような展開であった。

「無茶苦茶な話だったね…」二時間の労働を終えたテレビの画面にエンドロールが流れはじめて彼女は苦笑した。「エスエフがやりたいたいならはじめからそうすればいいのに。脚本家は相当なアホか悪いクスリでもやってんじゃないの」

俺は沈黙考の構え。：違う。これはそんな軽率な物語ではない。この元殺し屋一家の物語はディ●ニーが実写に参戦した際に採用しそうな話ではない。もっと内奥に潜む何かが…。

突如俺の頬に伝う涙。おうおうおう、涙が止まらないよ父、母、ファーザー、マザー、神話の神々たちよ。おうおうおう。

蛇口をひねったように涙を流す俺を見て彼女は目をぱちくりとさせる。どこで泣いたのこいつ、といった表情である。そんなの関係なしに俺は自分の感性を信じる。

おおお、猛烈に超能力に目覚めたい。人々を苦しめる愚劣な超能力ではなく下の世話に役立つものでもなく万感の思いを具現化したような眩しい善の力がほしい。俺は超能力者になりたい。超能力とは先天的なものなのだろうか？ やはり科学の力で証明できないのだからそうなのだろうな。しかし諦めることはない。まだ目覚めていないだけという可能性があるにはあるのだ。

「ないない」

「俺のモノローグを勝手に読むな！」

俺は超能力者になりたかったんだ。ずっとそうだったんだ。ちよつとばかり忘れてただけだったんだ。

「『さつき』は恋がしたいとか言ってた癖に」空になったコップを持つ彼女は笑う。「アホや」

「『さつき』じゃねえし」

「じゃあ何よ」

そうやなあ、と俺は一応思考を巡らす演技をする。顎に手を添えたりしてみる。だが答えはどうに出ているのである。よしじゃあ、

はい、答えドン——。「随分昔の話や」

——終——

#38 少年的疑問形（前書き）

「おーい、どうしてだーい？」を改題。

#38 少年的疑問形

どうやらシャンデリアとスクランブルエッグは違うらしかった。同じごちやごちや加減なのに違うらしかった。なぜかと母に訊くと苦笑を返されるだけで明確な応えはかえってこなかった。

どうやらスクランブルエッグと詩集は違うらしかった。同じなくとも困らないものはずなのに違うらしかった。なぜかと父に訊くと詩集は高尚だからとだけ説明された。続けてどこが高尚なのかと訊くと母のそれと同じ表情ではぐらかされた。

どうやら詩集と刺繍は違うらしかった。同じ発音なのに違うらしかった。なぜかと兄に訊くと見たら判るだろと怒鳴られた。見た目以外の違いを訊いたのになんだいなんだいと怒鳴り返したら殴られた。

どうやら刺繍と画集は違うらしかった。同じ手の込んだもののなに違うらしかった。なぜかと姉に訊くとなぞなぞなんて今どき流行ってないよと笑われた。なぞなぞってなんなのと訊くとまーたそういうつまらないなぞなぞを出すーと逃げられた。なぞなぞが何かは判らないけどなぞはふたつどころじゃないそれ以上もつともつと。

どうやら画集と僕の描いたパラパラ漫画は違うらしかった。同じ画なのに違うらしかった。なぜかと爺ちゃんに訊くとワシはお前の画のほうが好きやと褒められた。そんなこと訊いちゃいけないだよジジイと思っただけど悪い気はしないから笑っておいた。そしたらお小遣いをもらえた。

どうやら僕の描いたパラパラ漫画と朝のニュースは違うらしかった。

た。同じどうでもいい情報なのに違うらしかった。なぜかと婆ちゃんに訊くとアタシャお前さんの漫画おもしろいと思うえなーと褒められた。そんなこと訊いちゃいけないだよババアと思ったけど悪い気はしないから笑っておいた。そしたら頬を叩かれた。なんでねなんでねどうしてねと頭上にはてなマークを生産すると婆ちゃんは男がそんなだらしなくてどうすんのねとヒステリックに叫んだ。婆ちゃんの顔は夜の村より怖かった。

どうやら朝のニュースと変態は違うらしかった。同じ変なものなのに違うらしかった。なぜかとお隣のヨシくんのお母さんに訊くと今から便所掃除するからあとでねと逃げられた。あとでっていつって訊こうとしたけどきつとあとではあとでなんだなって判ったからあとでまた来よう。

どうやら変態と兵隊は違うらしかった。同じ異常な人なのに違うらしかった。なぜかと山にいる仙人とよばれてるおじさんに訊くとそんなことより食いものはないかと訊き返された。首を横にふるとそうかそうかと残念そうな顔をしてすこし可哀想だった。

どうやら兵隊とスーパーマーケットの前は違うらしかった。同じ列なのに違うらしかった。なぜかとスーパーマーケットの前で並んでる知らないおばさんに訊くといいいところに来たセールの醤油おひとりさま一本やからあんたいっしょに並んでとお願ひされた。断れなくていっしょに並んであげてセールの濃い口醤油を一本買った。スーパーマーケットを出るとおばさんはありがとうなーと手を振って早々に彼方に消えてった。

どうやらスーパーマーケットの前と戦争は違うらしかった。同じ大騒ぎなのに違うらしかった。なぜかと客引きのお兄さんに訊くと戦争なんか映画でしかみたことないから分からんなーと返されて逆

にキミは戦争について知ってることってあるかーと訊かれた。ないですねと即答するとじゃあ判らんのは当然やろーとけられ笑われた。

どうやら戦争と校庭は違うらしかった。同じ人がいなくなってしまう出来事と場所なのに違うらしかった。なぜかと誰かに訊こうとして周りを見たけど夕日とだれもない校舎しかそこにはなかった。おーいおーいおーいと叫んでも返事をくれるのはカラスだけだった。カラスに訊くぐらいなら訊かないほうがマシだからやっぱいいわーと叫んだ。カラスは了承してくれたのかカァークァァーカァー。

どうやら校庭とぼくの帰り道は違うらしかった。同じ家までの通り道なのに違うらしかった。なぜかと誰かに訊こうとして周りを見たけど夕日と空き缶しかそこにはなかった。空き缶を蹴ってみた。カコンカラコンコンカーン。なにを言っているのかさっぱり判らないからもう一度蹴ってみた。カコンカラコンぼちゃーん。ドブに落ちてった。あーあ。

どうやらぼくの帰り道とヨシくんの帰り道は違うらしかった。同じお隣さん同士なのに違うらしかった。ヨシくんヨシくん今帰りかいじゃあ一緒に帰ろうよ。いやだよとヨシは言った。なぜかと訊くとヨシくんはお前なんかといっしょに帰りたくなかないって強く言っておもむろに石を掴んだ。なぜ石を持つんだいぼくが何かヨシくんにしたいかいヤメテヤメテ石を投げないでくれよー痛いよ痛いよヨシくんやめてよー。ヨシくんは笑っていた。ヨシくんは楽しそうだった。ヨシくんが楽しいならいいかなとちょっと思ったけどやっぱり痛いのはいやだからヨシくんに体当たりをした。砂利道に倒れておおきな声で泣くヨシくんはこないだ生まれた弟のようだった。よしよし良い子だって頭を撫でてあげると洒落と勘違いしちゃったのかうるせえお前なんかなあお前なんかなあトモダチじゃない

んだからなと言ってぼくの頭をボカッ。ぼくもヨシくんの頭をボカッ。ボカッボカッボカカカボカッ。そしたらヨシくんは動かなくな
った。

どうやらヨシくんの帰り道とぼくの帰り道は同じらしかった。ヨシくんは黙ってぼくの手にひかれて歩いてくるのだから同じらしかった。ヨシくんは黙ったままだぼくが何をいっても訊いても黙ったままだ。つまらないこれならひとりで帰るのと同じだ。スーパーマーケットの前にはだれもいなかったみんなもう家に帰ったみたいだ。ずうっと道をまっすぐ行けばぼくの家だ。ぼくの家横にはヨシくんの家がある。ヨシくんヨシくんもうすぐお家だよぼくたちは帰ってきたんだ。ヨシくんは黙ったままだ。しょうがないなあどうせだから送ってあげるよヨシくんのお母さんに訊きたいことがあるんだ。ヨシくんの家のピンポンを鳴らすとヨシくんのお母さん登場。髪がくしゃくしゃだ。ぼくがひきずってきたヨシくんを指さすとヨシくんのお母さんはくしゃくしゃの髪をもっとくしゃくしゃにしてぼくの肩を何度も揺らしてきた。なにがあったのなにがあったのなにがあったの。ぼくが訊いたときは何も言ってくれなかったのにぼくに質問するのはちょっとおかしいと思う。なんだいなんだいぼくが訊きたいんだぞ。でもあれればくは何を訊きたかったんだっけ。ヨシくんのお母さんぼくは何を訊きたかったんだっけ。教えてください。そしたらぼくもなにがあったのか教えます。

#39「えっ」

阿鼻川市の小じんまりした居酒屋にて、阿鼻川中学校第三十四卒業生の同窓会は開かれた。

突然の集合の知らせにも関わらず参加したのは八割。余生を楽しむ年代、暇なのである。残りの二割は都合が悪く参加不可、返事すらなかった者は既にこの世にいないため現世の同窓会には参加不可。「まさかお前がまだ生きてるなんてな」口周りに黒ひげを生やしたセイジは言った。「とつくに死んでると思ったが」

「悪いか」

「いいや、悪かねえさ」

還暦を迎えた者による同窓会。人数が減っているがこれからもつと減っていくし、何十年も前の友人である一人ひとりのことを正確に記憶しているわけではない。そのせいか訃報を聞いても悲哀がわきにくい。

「俺が生きてるうちにお前の顔をまた拝めるとはな。長生きしてよかったってもんだ」

「そりゃよかった」俺は苦笑した。ありがたがられても困る。

セイジはジョッキのビールを一口。「それにしてもお前老けたなあ」

「お前だって老けたじゃないか」セイジの目元には自分と同じようにくつきりとした皺がある。

「お前のほうが老けてるさ」

「なぜだ」

「お前の髭と髪の毛真っ白じゃねえか」

むっ、と俺は押し黙った。確かに俺の毛髪は雪のような白である。そんな俺の顔を見てセイジは一通り哄笑してから言う。「じじいだ、じじい」

哄笑は続く。

俺はビールをぐびつと景気よく飲んでジョッキをテーブルに叩くように置いた。元クラスメイト一同の懐古の喧騒が一瞬ぴたりと止む。「あらあ喧嘩？」「うわっ懐かしいわ。セイジくんたちよくやってたものね」「いいぞお。セイジやれやれー」「セイジくんファイトー！」「暴力はやめろよお。二人とももう若くねえんだからよお、下手したら死んじまうぞお」「そりゃ洒落になんねえな」「ぶはは」「あはは」

嬌声に持ち上げられるようにして俺は立ち上がった。ほぼ同時にセイジも立ち上がった。

仁王立ちで向かいあい交錯する視線は火花を散らしている。

「俺が老けてると言ったな、セイジ」

「おう、言った」

「毛が真っ白だからか」

「そうだ」

力強く頷いたセイジに馬鹿め、と罵りたくなるが寸前で思いとどまる。

「ならこれでどうだ」俺は頭髪を鷲掴みして滑らせた。すなわち俺はカツラを取ったのである。

「えっ」

「どうだ」俺は頭に生える黒々（といっても一部は白髪だが）した髪をセイジに見せつけた。

セイジは絶句したのち、くくくと笑いだした。

「なにがおかしい」

「変わってないな、お前」

「えっ」

「そういう茶目っ気のあるところ」

「えっ」

「お前は人をなめるような真似ばかりしてたからな。だれかに殺されたんじゃないかとヒヤヒヤしてたんだ」

「えっ」

「懐かしいなあ。お前はいつもそうやって俺を笑わせてくれた」

「えっ」

「どうしたさっきから」

「学生時代の俺は勤勉だった。そんな軽率な行動をした覚えはない」

「えっ」

「おい、セイジ。まさか…」

「ちょっと待てよ。じゃあ俺はだれと話して…」

「セイジは首をふる。」「待て待て。お前の名前は？」

「おいおい。なんだそれは。失礼じゃないか」

「じゃ、じゃあせーの言おう」セイジは額に脂汗をうかべている。相当焦っているようだ。

俺は頷いた。「せーの…」

元は瑞々しい肌だったはずなのに現在は陰口の種が植えられた毛穴のせいにかくすんでみえる女子に御酌をされながら俺は笑いが止まらなかった。

しめしめ、セイジの奴め、見事に引かかったぞ。

せーのの合い図で奴と俺が口にした名前は見事に相違した。むろん、セイジが口にした名前は正解だった。俺は不謹慎だがこの場にも、そしてこの世にもいないクラスメイトの名前を借りたのだった。よって、合うはずがない。

申し訳ない、と頭をたらししたセイジはその数分後にうなだれて飲んだ酒が悪く回り、部屋の隅で横になっている。その間抜けな寝顔たるやタヌキのようでこれがまた笑える。こうやってセイジを騙した青春を謳歌していた頃を思い出しそれを肴にして酒が進む。

「ねえねえ、どうやってセイジくんを謝らせたの？ 急に黙っちゃって一人で酒浴びちゃって寝てるし」目尻をたらした女が訊いた。目尻がたれている原因は老いか、あるいは重力か。

「ふふふ。それはなあ…」言いかけた所で遮るように女子が数人わらわらと集まってきた。酔いがまわったか、または老眼のせいかわ視界がぼやけ全員同じ顔に見える。

「私も聞きたい聞きたい」「あたしもー」「セイジくんって強かったのにねえ。そのセイジくんを謝らせちゃうなんてねえ」

口ぐちに質問の船を岸から俺へ流す女子一同。学生時代、女子にかこまれる経験などなかった。これはいい。すごくいい気分だ。酒がうまい。

俺は酒を煽り饒舌に説明した。

「へえ、すごおい」「そりゃセイジくん謝っちゃうわよねえ」「うんうん」「たしかに仕方ないわ」

へへへと俺は得意げに笑った。酒を追加だ。今日は水のように飲めるぞ。

酒を注文しようと店員を呼んだ。店員にビールの追加を頼んだ。

その間、女子一同がなにやら不穏な空気をかもしながら俺をちらちらと見ていたのが気になった。

「ねえ」

「ん？ どうした？」

「あなた…」と目尻をたらした女がぼつりと言った。――それが「せーの」の合図となった。

「タケシくんよね？」「マサルくんよね？」「マイケル・ラ・トラボルタ三世くんよね？」

「えっ」

酔いが一気にさめてしまった。

――終――

#40 穴も石もない人生

「最悪だ」

男はそういつてから、ねじきれてしまうのではないかと他人が心配する速度で首をまわした。

「最悪なのはわかった」シクハク博士はなだめるようにいう。「君の人生は最悪だ」

肩をつかむシクハク博士の手を払って男はむっと顔をかためた。

「ひとから言われると不愉快だ」

じゃあなんと応えればいいのだ…。

シクハク博士の自宅兼研究所。急須のような外観をしたここには、なんらかの理由で人生に行き詰った悩める老若男女が根の場所が不明の噂の噂のその噂——それを頼りに連日訪ねてくる。不思議なことに呼び鈴を鳴らすのは一日一人という規則性があった。今日は三十代の男性だった。彼の三十数年の人生は酷く鬱屈としたものだったという。冗長の極みで語られた内容はプライバシー保護のために割愛させていただく。

椅子を潰すように男はうつむいた。負のかほりが研究室に充満し、シクハク博士は突発性の息苦しさをおぼえ、ことさらに痰を切った。「そうやって塞ぎこんでも仕方がなかるうに」シクハク博士は自慢の髭（といっても剃るのを怠っているだけ）を撫でて立ち上がった。そして、つかつかとブラウンの踵を鳴らし別室にいった。数分後、フルフェイスのヘルメットを抱えて戻ってきた。歯を食いしばっている表情から、やけに重量があるのが読み取れ、おまけに黒のコードが複雑に生えており大分運びにくそうであった。

シクハク博士は運んできたヘルメットを「やれやれ」とテーブルに置いた。

「なんですかそれは」男は顔をあげて尋ねた。

「記憶からトラウマを抹消して、それからの人生も数々の不幸から

守られるように脳を改造する発明品——そうだな、『タイラット』とも呼ぼうか。数分で脳に変化をもたらす。もちろん脳に損傷をあたえるような危険はない。脳波をすこしいじるだけだ——不幸を踏まないように行動を規制するように、すこし」

「す、すごい」男は愚直に感嘆した。「ぜひ私に使ってほしい」

「それはダメじゃ」シクハク博士は苦笑しながら肩をすくめた。

「なぜですか？」

目を点にした男を見据えながらシクハク博士は応えた。「これは間違いなく人生をつまらなくする」

神妙な顔のシクハク博士を見つめて数瞬後、男は噴きだした。そのとき米粒と同じ程の唾液が『タイラット』の真黒のディスプレイに付着した。

「そんな馬鹿な。嫌なことがない人生は楽しいに決まってる！ 躓かない、怖がらない、死にたくなならない。障害のない人生……なんて素晴らしい響きだ。魅力的すぎる」

「障害か……」シクハク博士は物思いにふけるように軽く目をとじた。「はたして障害は本当に障害なのだろうか」

男は口の端を歪める。「なんです、説教でもはじめるつもりですか？」

説教か。たしかに今の彼には何をいっても聞こえのいい台詞にしか聞こえないだろう。擦りむいた傷は治ってもシミとなって皮膚に残り続ける。どれだけ薬を塗ろうがシミが完全に抹消されることはない。

「なにを黙ってるんです？ 早くその機械を使わせてくださいよ。ぼくはもううんざりなんですよ。人に認められるために人を認めて、人に嫌われないために人を嫌ったり——人を好きになっても人に好きになってももらえなかったりね……そういう人生は、もう……」

「ダメじゃて」

シクハク博士が辛辣に拒否すると男はあっけなく引き下がった。

「……わかりました。もういいです」

男はとぼとぼと研究所を去って行った。シクハク博士は男の背を見送って「ふう」と吐息をつき、夕食の支度をはじめた。にんじんシチューを作った。天才発明家のシクハク博士だが、食事だけは自分で作ると決めていた。なぜなら好みの味をみつけるのはどんな機械よりも自分の舌がもっとも適しているからである。

シクハク博士は今日も安眠だった。

絶命を危惧されているフクロウがまるで「人間なんか心配される筋合いはねえなあ」と鳴いているその日の真夜中。シクハク博士の研究所に忍び込む人影があった。むろん、夕刻に訪ねてきた例の男である。

「おっ」男は堂々と正面から忍び込んだ。ドアに鍵はかけられていなかった。「不用心なもんだ」

もしかしたら警護ロボットでもいるのだろうか。いや：まさかな、夕方に来たときはそんなロボットの姿はなかった。

男の記憶どおり警護ロボットは研究所に一体もいなかった。しかし、今日だけの話である。いつもなら二体の警護ロボットがシクハク博士の寝室と研究室を護衛している。

男は足音を殺し、研究室にむかった。研究室の鉄板のように厚く、キッチンのように広いテーブルの上には男がもとめたものがそのまま放置されていた。

「これこれ」男は『タイラット』のつるつるした表面をなでながら笑った。「これさえ使えば…」

男は『タイラット』をしげしげと眺めた。スイッチが二つある。それぞれのスイッチの上にちいさく『オン』『オフ』と書かれている。こんな簡単でいいのか、と男は拍子抜けした。三センチぐらいの厚さの説明書があるのを覚悟していた。

テーブルの前に前回の訪問で座っていた椅子を運び、『タイラット』をすっぽりと頭にかぶった。はたからみると真黒だったがデ

スプレーになにやらシュールな文字列がならんでいる。どうやらごく丁寧に電源は入っているようだ。

用意がよすぎる…。

そんな不穏な思考が頭をかすめたが、迷う閑はなかった。なるべく早く研究所をあとにしなければならぬ。シクハク博士がいつ目覚めてくるか判らないのだ。年寄りトイレが近いしな。

「スイッチ：オン」ぽちゅりと左耳の位置にあるスイッチを押した。すると脳に、朝目覚めたときのような——そう、じわりと覚醒する意識のような刺激が襲った。その刺激は低周波マッサージのようでもある、決して不快ではなかった。むしろ解放されていくような至福の思いが脳いっぱい広がっていくのを感じて男は自然とほころんだ。

ピピピ、と無機質な音が鳴って男は『タイラット』を脱いだ。

すつきりとして、妙に目が冴えている。これは、どうやら成功したようだ。わかる。自分の脳なのだ。自分の脳に異変があったのは自分が一番わかる。

男は一度ぐうっとのびをしてから快活な足取りで研究所を辞した。人様の家に不法侵入したとは思えないほど気分はひやりとした夜風にユニゾンするように気持ちのよいものだった。

「やれやれ」寝間着姿で研究室に立ち、シクハク博士はつぶやいた。「使っちゃいかんとあれほど言ったのにしかたのない奴じゃ。しかし、これで私のせいではないぞ。私は止めたのだから。彼が勝手に——やったこと」

シクハク博士はトイレで小用を足してから寝室にもどった。

半年後、シクハク博士の研究室にある男が噂を聞きつけ訪ねてきた。その男は開口一番こう言った。「ぼくの人生は最悪だ」

「なぜだね」

「退屈なんです。なにも起きないんです。ぼくの人生にはなにもない。ただの真っ直ぐな道。深夜のハイウェイよりも……永遠につづいていく真っ直ぐな道です」

「ほう」

男は以前シクハク博士の研究室に忍び込み、勝手に機械を使って自分の脳をいじったことをおぼえていなかった。なぜならそれは彼にとって、まぎれもなく不幸な出来事だったからである。

「ほとんど覚えていないんです。いや……覚えるようなことがなかったんでしょう。つまらない人生だったからかな。毎日同じことを繰り返して過ごしてきたような気がします」

「それはそれは」シクハク博士は残念そうにつぶやいた。

「不幸なこともなかった。しかし幸福もなかった……」

やはりあの発明品は失敗だった。やはり――。

といっても男の脳波を正常とよばれる状態に戻すことはできない。それは私の義務ではない。彼は自分で決めて勝手に『タイラット』を使用したのだから。

不幸だの幸福だのと決めるのは本人だ。さまざまの出来事をどちらに転ばすかも本人の手腕にかかっているのである。それらすべてを避けるとなると幸福との出会いも必然的に消える。彼はこれから、彼の言うとおりの「なにもない平坦な道」を歩んでいくことになるだろう。

安全なだけのつまらない人生――。

「たすけてください」男は懇願した。「もういやだ。こんな人生は」シクハク博士は応えずに、研究室を後にした。それからややあってシクハク博士はあたたかいかほりと共に研究室にもどってきた。

「これを食べなさい」

そういつてシクハク博士が差し出したのは、器によそわれた熱々のにんじんシチューとスプーン。男は数回瞬きをしてそれを受け取った。湯気が顔にかかる。

「食べてみなさい」

シクハク博士がうながすが男は首をふった。「む、無理です。他人のつくったものを口にするなんてありえない……。保証がないんだ、食中毒になったりする可能性があるじゃないですか……」

「いいから食べなさい」シクハク博士は微笑した。「そんなことは食べてみなければ分からないだろう？」

男は生唾をぐくんと飲んだ。そして、おずおずとスプーンでシチューをすくって一口。

「どうじゃ？ 昨日の残りをあつためたんだが」

「……まずい」

男の齒に衣着せぬ応えにシクハク博士は笑って、男の肩を優しくぽんぽんと叩いた。「まあ毒は入っておらんから安心しなさい」

まずいまずいと言いつつも男はにんじんシチューを全部平らげた。男ははじめて危険な橋を渡った気分になった。同時に、心にあたたかな湯気を――。

――終――

#41 ばいばい、ゆううつ (前書き)

「ソーダの星」を改題。

#41 ばいばい、ゆううつ

「退屈な日常の繰り返しは、己の大事な、大事な感性を錆びつかせる…」

シャープペンを指の間で踊らせながら、詩人のようなことを考えてみるが、言いようのない漠然とした気分は晴れなかった。

教室の重鎮である黒板には、教室の最高権力者である『教師』の書いた教科書通りの思想や歴史が並べられている。僕はそれとクラスメート諸君を交互に見てみる。

『浮かない顔』『退屈』『セックスしてえ…』『弁当まだかよ』

大半がこのようなくだらない思念を抱きつつもノートをとっている——ように見える。僕と同じってわけか。

はあ、と小さくため息をついて僕も一応、形式上、流れに沿うようにノートに書き写すことにした。

1. 他の星との干渉は禁じられている。
2. だが一部の文化交流は認められている。しかし、政府はその交流を公開することはない。
3. 宇宙はひとつ。

毎度毎度ご苦労さん。宇宙論理科学の授業である。

ふあ、と控えめなあくびをしながら、黒板の内容を一字一句間違えることなく書き写したノートをぱたんと閉じた。

宇宙なんて僕が産声をあげた頃にはすでに身近なもので、海外旅行とほとんど大差なかった。『なんとかロケット』の量産に成功して、『なんとか燃料』が無限に溢れて、それらを発明と研究をし発表した『なんとかって科学者』はノーベル賞をもらった翌日に暗殺された。

暗殺したのは「人類の宇宙侵略を防ぐ！ 愛する宇宙を守る！」

という「よくもまあそこまで事を飛躍できるなあ」と正直苦笑してしまう団体の一味だった。

あっさり逮捕された暗殺犯は言った。「俺を死刑にしろ。そして俺の骨を愛する宇宙に流してくれ」。それは宇宙に塵^{デブリ}を流すこととなり問題になる為、当然却下されて、暗殺犯は現在も囚役中だ。：ちつとも可哀想じゃない。

——これが僕の宇宙論理科学の授業で学んだ知識。ロケットなどにはちゃんとした正式名があるが、僕のレンコンのような脳みそには記憶されていない。

「さっさと授業終わらねえかな：」

ぼつんと本音を漏らしてしまった。しかし、教室には軍隊が行進するように一定のリズムでシャープペンシルとノートのしゃかしやか音が響いていた為、一度怒るとねちっこく学期が終わるまで執拗に絡んでくる通称『納豆教師』の岡部には聞こえなかったようだ。間一髪。ぎりぎりセーフ。

チャイムが『いい加減ほかの仕事もやってみてえよ』なんて思っているかも知れないが、一応：といった感じに授業の終わりを告げた。

クラスメートの間抜けな伸び、文字にならない疲労の言葉、教師の起立を求める声、椅子が軋みながらぶつかる音。この世の混沌を感じた：大袈裟かな？

僕は空腹をずるずると引きずりながら、教室を出た。手には弁当を持って。

屋上には誰もいなかった。それもそうだ、枯葉の舞う季節だし、肌寒いし。好き好んでこんな場所で一息つくこうとするやつなんて僕ぐらいなもんだ。

無数の鳥の糞をおぼつかない足取りで避けて、枯葉のつもった一角に座る。きしきし、と僕を歓迎するように音をたてる枯葉に愛嬌のよさを感じた。

「今日の弁当は何かな」棒読みで独り言。「…うん、普通だな」

箸でつまんだ唐揚げを口の中に放り込み、よく噛みながら、学生ズボンのポケットをまさぐりイヤホンと携帯電話を取り出した。

「ごちゃごちゃと携帯電話をいじり、イヤホンを両耳に挿入すると、ほどなくして軽快な音楽が僕の中に侵入してきた。この瞬間は一種の快感だと僕は思う。平穏で退屈な暮らしがちょっとした刺激に犯されるような…」

「ふふんいっとつび」適当に口ずさみ、セッション。

秋風が顔に柔くぶつかって、反射的に目を閉じる。

「えっと、こういうのを何ていうんだっけ…『ナイスミュージック』だっけ」

すこし格好をつけた片言な独り言。

弁当を食べ終わると同時に曲も終わって、次の曲が僕の暮らしの先っぽを犯し始めた。夜の次に朝がくるように当然の流れで。

面倒なことばかり、しなくちゃいけないことを面倒なことを呼んでしまう年頃の僕を包み込み、そっと微笑かけるバンドのボーカルである“ジョン”はもうこの世にはいない——と思う。僕がこの音楽に出会ったときの年齢を考えると…残念だけど。

「新譜はまだかな」

期待薄だけど、願うことはやめられない。

屋上の柵からすこし身体を乗り出してみる。秋風をいっそう強く感じる。空にはまだ昼過ぎだというのに、薄ぼんやりと星が見える。その中でひとつ綺麗な水色の星がある。

「あ、ソーダの星だ」

ソーダの星を見上げながら、手を合わせる。

「君も退屈だろうけど、お互い頑張ろうな…」

その遠い星から贈られてきたであろう音楽に満たされながら、名も知らない同級生に語りかけた。

「あの星に行くまでどれくらいの費用と時間がかかるのだろう…」
もうすこし勉強して大人になって、『プライベート円盤』を買お

う！

そしてソーダの星にあるであろう“ジョン”の墓参りに行こう！
何度目かの昼休みに、何度目かの目標をたてた。

チャイムが聞こえ、僕は屋上を去る寸前にイヤホンから流れ込む
音楽がぴたりと止んで、耳元で、でも遠くからだと感じる、言葉が
聞こえた。

——「君も退屈だろうけど、お互い頑張ろうな」

今日の目標は守れそうな気がした。

ソーダの星に住む僕と同じく退屈に犯されている君に誓おう。

——終——

#42 跳ねまわる取引（前書き）

「ケンケンの星」を改題。

#42 跳ねまわる取引

ところ、ソーダの星の貿易宇宙船（帰路の途中）。

ケンケン星^{せい}の住人達は非常に温和な気質であり、異星人からの評判もおおむね良好であった。利口なケンケン星人は様々な言語を網羅しており、異星人からスムーズなやり取りが可能であることも評価されて貿易も盛んに行った。

「彼らは私たちを小馬鹿にしていたのでしょうか」

その日はじめて貿易宇宙船に搭乗し、ケンケン星に訪れたソーダ星の住人へ「コナール」は言った。

「ふむ。君ははじめてだからそう不快になるのも無理はない」コナールの上司である「マユガン」はせせら笑った。「彼らはふざけてなどいない。あれが彼らにとつての会話のスタンスだ」

「しかし…」

「まあそのうち慣れるさ。彼らに悪気がないのは、彼らの容姿をみれば把握できたはずだ」

「気味の悪い姿でした」

「彼らからしたら我々の姿こそ醜悪かもしれないじゃないか。美のセンスの誤差だ」マユガンは厚い瞼をこすった。「やれやれ、苦言はそれくらいにして操縦に集中してくれ。私はすこしばかり休憩をとらせてもらおうよ」

「…了解」

コナールは舵をぎゅっと握り、ケンケン星の住人の姿を反芻した。たちまち背筋を悪寒が走った。しかし、彼らは決してを悪意を感じる存在ではないというのはコナール自身、とっくに理解していた。

ところ、ケンケン星（取引中）。

「それ以上は安くできませんねえ」マユガンの容赦なしの値下げ交

涉にケンケン星の住人へキヨムキヨムは渋面をうかべた。苦々しい表情とは裏腹に、嬉々としてぴよんぴよんこと片足立ちで跳ねている。「こちらとしてもこれが限界です」

しかし、マユガンは引かない。「そこをなんとかできませんかね。我々の仲じゃないか」

キヨムキヨムは、ううむ、と顎をなでて唸った。あからさまに好意をみせられるとたじたじになってしまふものである。

「もうすこし、もうすこしだけでいいんです。次の貿易の際には私が上に口利きをして…」

「わかりました」マユガンが言い終える前にキヨムキヨムはなごやかに応えた。今度は表情から読み取れる感情相応——楽しそうに、ぴよんぴよんこと飛び跳ねる。まるで無垢な幼子のようなのである。

「そうですか。ありがとう、ありがとう」マユガンはキヨムキヨムの手をとって頭をさげた。

「いいえ、こちらこそ」にこり。「では次回から、よろしく頼みますよ」

「ふふふ」

「ふふふ」

生まれた星は違えど、彼らは商人としての老獪さを得ていた。

取引は無事に事なきをえたが、終始片足をもって跳ねまわるキヨムキヨムをマユガンの隣でみていたコナールの気は荒れた。

ところ、ソーダの星の貿易宇宙船（帰路の途中）その二。

「すまんすまん。思ったより長く休息をとってしまったようだ。操縦を変えよう」

「いえ、それはいいのですが」

「ん？」ただ先をみつめ操縦をするコナールの傍らの席に座してから、マユガンは眉をよせた。「なにか気に留めることでもあったかね」

「次の貿易では口利きをするといっていたじゃないですか。大丈夫なんですか？ そんな勝手な契約をかわしたりして」

マユガンは、ははっ、と短く笑いをもらして、

「構わんよ。あんな口約束、彼らは覚えちゃいないさ」

「え」

「彼らは人がよすぎる。そして利口だ。それゆえに白痴でもある」
「どういふことでしょうか」

「彼らはずっと進化していない。不憫な姿のまま、不憫な生活をしている。知恵はあるが、それだけだ」

「はあ」わかったようなわからないような、そんな気分である。彼らの容姿をみる限り、確かに進化をしているとは思えなかった。猿が人になっていったように、人類とは常に進化の道をあゆむはずなのだが。

「ちなみに私は貿易の度に値下げを要求している」

「それって…」

「毎回、同じセリフを吐いているが彼らは覚えちゃいない」

ところ、ケンケン星（取引後）。

「ただいま」

「おかえりなさい。キヨムキヨム」

「ただいま。ユコリン」

キヨムキヨムは迎えてくれたスタイル抜群の妻へユコリンに軽いキスをしようとした。だが、思惑は外れキヨムキヨムの、むちゅうう、とつきだした唇は空をきった。「ユコリン。君の唇はどこだい」

「まあ」ユコリンは笑った。「いいわよキスなんて。恥ずかしいわね」

キヨムキヨムは自嘲気味に一笑した。「それもそうか。年甲斐もなく調子にのってしまったよ」

ただいまのキスを諦めたキヨムキヨムの鼻孔をユコリンが丹精込めたつくったとおもわれる手料理の芳しいかほりが刺激した。今日は好物であるマカダミアンショートケーキのあぶら炒めのようなキヨムキヨムを上着の裾でよだれをぬぐった。

「今日は良い取引ができたよ」

「それはよかったわね」

ごんっ、とキヨムキヨムは壁に頭をぶつけた。

「…うがっ」

「大丈夫？ 気をつけなさいよ。引越したばかりなんだから、ちゃんと目をつかって歩きなさい」

いてて、とキヨムキヨムは右耳の上あたりをさすった。「それもそうだな」

キヨムキヨムはおもむろに靴下を脱いだ。それから取引の際にもみせたら例のポーズ——片足をかかえるようにしてぴょんぴょこと跳ねだした。ユコリンも同じように、ぴょんぴょこ。

キヨムキヨムははつきりとしながらも、上下にぶれる視界の中でユコリンの唇をみつけ、そおっと——否、跳ねる音をちらし近付いた。

キヨムキヨムはユコリンにかすめるような一瞬のキスを送った。

「んもうっ」と口では不快そうだが赤面するユコリン。「いったいくつだと思ってるのよ」

「心はいつまでも若いままさ」と気取るキヨムキヨム。

「照れるわ」

キヨムキヨムはユコリンを抱きしめたくなったが、かかえている片足の逆——その足の裏が愛の衝動を止めるように主張した。「むっ、むれるな」

「そうね、今日は暑かったからね」といってユコリンは足早にぴょんぴょこと先を行った。

廊下に座り込んで靴下を脱ぎ捨てたキヨムキヨムは思考した。

まず、風呂に入って汗を流して、それから湯あがりに一杯キンキ

ンに冷えたビールをきゅつと飲もう。うまいぞ、間違はなくうまいぞ。だって今日の取引はすばらしかったものな。ふふふ。

ほくそ笑むキヨムキヨムの鼻孔をまたマカダミアンショートケーキのあぶら炒めのかほりが襲った。そうだ、これもあったんだ。楽しみだ。

上機嫌のキヨムキヨムの鼻唄は少々離れた位置にある鼻の穴からスベーカー奏でられた。おおよそ人間でいうところの目の位置である。

では、ケンケン星の住人たちの目は何処に…？

キヨムキヨムはバスルームで一肌の温度のシャワーを足の裏に浴びせながらごちる。「ああ、気持ちいいなあ。目にしみるなあ」

—終—

#43 余生回廊孤島

肌がストレスを感じている。

肌が悲鳴をあげるのも億劫だよと訴えている。

太陽のせいだった。

これまで雨には出逢っていない。それが幸運なのかは正直判らない。だって現在進行形の私には喉の渇きも空腹感もないのだ。それなのに危機感がないのは、さしずめ慣れという名の疫病に侵されているからだ。私は安易な考えをもつことにして異常を正常化してどうにかこうにか今もこうして生きながらえている。

「これでここでは何本目？」

私は今しがた地面から引き抜いたばかりの小人をしげしげと眺めながら、

「どうでもいいけど」

小人はキャッピー！、と甲高い声を発しながら私の手の中でもがく。「キャッピー！」

私は小人についた橙色の土を払いつつ、ふむむ、と頭をひねってみる。

こいつは誰だっけ？

地面から緑色の葉をだして滞在する小人たちはいつもこうして私を悩ませる。抜いてホイ、抜いてホイ、はいはいサイナラサイナラ、といかないのが常で私は軽い頭痛を感じながら記憶を甦らせるのだ。

「あんた誰？」

「キャッピー！」

「うん。みんなそう言う」

「キャッピー！」

私は小人の頭から生えた葉をぎゅむっと掴んで、振りかぶって、それから地面にビターン！

キャキャッピー…、と力なく鳴く小人の拳ほどの頭をかかどで踏

む。大変気持ちがいい。

「答えなさい」

土に口をふさがれているような態勢になっている小人の沈黙は不可抗力なわけだけどそれを許すか許さないか、また、それは生意気か生意気じゃないか、つてのは別の問題なわけ。だから私はまた小人の後頭部を、血液でつくった熱をにじませたかかとで、ぎゅむっ。ギャギャツツピー！

これが断末魔のなんとやら。これまで何度もきいた音声。新鮮味皆無。

目標完全に沈黙。

しかしいつも心が痛まないのに、あゝ無情、なんかセンチメンタルじゃん。

たぶんたった今、私のサド欲求を満たすために絶命した彼は私が普通の暮らしに徹していた頃に大事な人だったんだな、と遅ればせながら感慨深く思っちゃうけど、やっぱ時既に遅し。死んじゃった人は生き返らないのだ。七つのボールを集めて龍をよべばなんとかなるかもしれないけど、〈ここ〉はそんな冒険的な要素はなくて、ただただずっと呼吸をするように小人を引き抜いて、

「これ誰だっけ？」

と疑問符と戦い続ける孤高の戦士ショーのみが存在する。

しかも大体答えは出ないで、さっきみたいにイラついて地面にカツオの叩きよろしくペット虐待よろしくな感じで殺してしまう。罪悪感皆無。

第一答えがでたとしても確証はない。なぜなら〈この孤島〉にいるのは私だけなのだから、当然、

「正解っ！」

と赤いハットをかぶったアナウンサーくずれはいないし、

「十っポイント！」

と心地よく気前よく叫んでくれる芸人もいないのだ。

すべては私のさじ加減。

当たってるっぽい。

これは当たってるといえなくもない。

こんな曖昧な永遠のクイズ。

やっつけられるかバカヤロー！

なんて太陽に吠えたところで、負け犬さながらの反旗は残念賞的な終焉によってぽつきりおられてしまう。

受け入れて私は、ずっと、受け入れ続けて、この亜空間ともいえる不可思議な孤島でクイズを続ける。

この目下の状況に陥ったのは私に罪があったからなのか。

それとも何もない平坦な道で突如なにかに躓いてこけてしまうようなものなのか。

とりあえずここにきて時間感覚もないから私はいくらでも物事を考えるようになった。私はこれまで何百人、いや何千人という人たちと出会ってきた。道ですれ違ったただけなのを出逢いとよぶのならその何倍もの人たちを意識したことになる。

でも、

私は、

その人たちのことをほとんど覚えていない。

自己紹介という交わりの儀式を行ったにも関わらず、顔をみただけでは思い出せない。ああ、でもこれは言い訳なんだって思っている一面もある。おそらく名前をいわれても、住所をいわれても、いきなり殴りつけられても、思い出せないものは思い出せない。開き直り。

高校生の頃、漢字テストをうけているとき私はどうしても、^{たい}鯛が思い出せなかった。シャーペンの尻を鼠さながらがじがじ噛んでも思い出せなかった。しまいには貧乏ゆすりが加速して机をゆらして私は、

「あああああああ！」

って酔狂な不快表現をしそうになった。そんな私をみかねた当時の担任、同時に現国の教師が私に言った。

「一瞬で思い出せないものは、いくら思い出そうとしても思い出せないよ」

私はぽかんと開いた口がふさがらない状態。場所が教室じゃなくて湖だったら確実にパンクズをほうりこまれていると思う素晴らしき出来。口ぽかん。目てーん。

「忘れる。つまり、思い出せないっていうのは、もう記憶にないって事なんだ。ないものは生み出すことはできても、そこにあったことにはもう二度と出来ない」

「私は思い出せないだけです。今、今だけ思い出せないだけです」

「欺瞞はやめなよ。忘れるのは別に悪いことじゃないよ。人間の脳ってのは要らない情報を削除するシステムなんだから当然なんだ」

「忘れてません」

私は意地になる。「思い出せないだけ。忘れるなんて残酷な真似はしない…」

「じゃあ幼稚園の先生の名前を全員言える？」

「えっと…」

「いいんだ。もういいんだ。思い出せないだろう？」

「今はちよっと」

「今だけじゃない。これからずっと思い出せない。過去は塗りつぶしていく、今を尊重する。それが殊勝な人間のやり方だ」

「私は…」

「君は賢いだけだ」

「でもこの〈たい〉が思い出せないと…」

教師は微笑んだ。「赤点だね」

結局私は〈たい〉を書けなかった。無感情なチャイムがテスト終了を告げて私は夏休みの補習を覚悟した。

現在、私は補習を受けているのだろうか。答えを教えてください。とのないテスト？ フェアじゃない。誰と？ しらない。でもこんなのもってない。

嘆息をついてから私は腰をあげる。次の葉の前に移動する。

ぎゅむっ。

小人が鳴く。「ギャラッピ―！」

引き抜いた小人と対面。

「あ、」

私は目を瞬いて、額をたれる汗までが固定されるように時が止まる。

「あんたは…」

小人が鳴く。「ギャラッピ―！」

私は沈黙考する。喉まで出かかっている。この小人の顔は覚え…ている。

「あ、あんた誰？」

私は定型句を吐く。喉には魚の骨が刺さっているような異物感があって、それを取り払うにはこの顔と一致する名前を記憶の森林から探し当てなければならぬ。

「あんた私と付き合ってたよね？」

小人はギャッピ？、とちいさく鳴いてから筒のような体型にどうにか備えられている首を傾ける。それからもう一度、

「ギャッピ…？」

「そう。そんな風によく戸惑う顔をしてた」

付き合った異性のリストを脳内でひろげる。十人はいる。その内、付き合っていた期間があまりに短期だったせいか名前がない男が三人。名前もなにもそもそも記憶にまだあるのかすれすれの絶妙で黒いスペースだけの男が二人。

しぼられたのは五人。

「クイズらしくなってきたわね」

しぼられた選択肢の中にどうでもいい男が二人いる。この二人に…はずいぶん悩まされた。主に金銭問題とか金銭問題とか、あと金銭問題で。

だからよく覚えている。この二人とこの小人は違うと言い切れる。

「△×○？」

「ギャッピー！」

当てずっぱいで名前を言ってみる。小人の鳴き声のトーンが高かった気がした。はずれっぽい。

「じゃあ×☆♫？」

「ギャッピー！」

引き続き、適当に言ってみる。小人の鳴き声は変わらない。

私は残った最後の一人の名前を唱える。

「上上下下左右左右○×？」

突如、私の手の中で首をかしげていた小人が、
にやり、

そして、内側から破裂した。必然的に私の顔面に肉片、焦げた葉、紫色の臓器が飛び散ってきた。生々しい臭気が鼻孔を襲う。私は硬直してやおら顔に触れる。熱い。熱い。熱い。脳が沸騰していく。記憶が擦過音と共に掘り起こされていく。ミスタードリラーズスムクンだ。ミスタードリラーズスムくんの侵攻だ。私の記憶がざくざくと埋蔵金を掘り当てる夢をもつ白痴の挑戦の場と化している。熱い。熱い。熱い。記憶がほられ、ほられ、ほられていく。

「このマンガ面白いよ」。当時の彼氏が言う。「こないだ読んだけど結構面白かった」

「あー、それ読んだよ」

「あ、そうなん？」

「うん。ここで買った」ヴィレッジヴァンガードだ。「おすすめってポップがあったから」

「やたら推されてるもんな。店員から」

「うん。別に欲しいものがなかったんだけど目についたからなんとなく買った」

「そのなんとなくで買った本は面白かった？」

「普通」

「普通ってなんだよ」

屈んで無秩序の代表格を茂みに吐きながら私はセンチメンタルな気分を満たされて、それもなんかちょっと叙情的な感じで、

嫌い嫌い嫌い

好きより嫌いのほうが多い

どっちも迷惑

嫌い嫌い嫌い

好きと嫌いの違いって何？

どっちも理解できないくせに：

どっちもすぐ忘れちゃうくせに：

つかだ☆ちひろ

こんな散文が浮かんでしまつて赤面。恥ずかし。恥ずか死。死因そのものが恥辱。こんな思い浮かべていいのは目に星が入ってる女の子だけ。

恥ずかしい散文を生産している間に私の体は落ちていった。足元が円状に裂けたのだ。宇宙のような空間をすべるように私は落ちていく。風もない。感情もない。それでも私は落ちていく。真理をみたような感覚をだいて、宇宙空間のように摩擦との因果をもたないすべりだいを落ちていく。

落ちていく

こんな状況なのにさあ

スカートを気にするって変かなあ

つかだ☆ちひろ

また散文が光る。詩人にでもなったつもりか、と私は頬をつねった。それで、

目が覚めた。

夢だったのか。

全部、夢だったのか。

軽佻な終焉を迎えたのか。よかった。これでよかった。もう、

「ギャッピー！」

夢なわけなかった。目覚ましにしては少々耳障りで、聞きなれた鳴き声で私は現実を認識した。夢なわけない。そんなのが許されるのは現実だけ。

しかし、情景は変わっていた。それまではわざとらしく単調な孤島だったのに、今、半身起こした私の目に映る情景はすこしだけ色彩を得て、生茂る木々と梢が久しく肌に感じる風によって揺らされている。

「ギャッピーピー！」

おまけに小人の鳴き声のレパートリーが増えている。

「あんた抜かれなくてもいるんだね」小人は土に埋まっておらず、はじめからそこにあるようにすくっと立っている。そして悠然と私と視線を交錯させている。「気持ち悪い」

小人はへらへらと笑う。「ギャッピー」

「短足」

小人はなおも笑う。「ギャッピーピー！」

「おまけに短小」

小人は笑う。「ギャ」笑う。「ピー」笑う。「ギャッピー！」

「ごめんね。あのときプレゼント突っ返して。傷ついたよね。それから浮気してごめん。ほかの人を好きになってごめん。途中で愛せなくなっごめん」

随分前の彼氏の顔をした小人は鳴く。「ギャッピー」

「最後まで愛せなくてごめん。勝手に諦めてごめん」

「……」

「好かれると疎ましく思ったりする私は……」言葉を詰まらせる。「きつとさ……」

「ギャッピーピー！」

私は小人を抱きしめる。小人はなにがなんだか判らずといった様

子で混乱し私の胸の中でじたばたと犬かきをはじめ。それでも私は小人を抱きしめる。抱きしめ続ける。

これは断罪？

あるいは謝罪？

どっちでも私にとっては重要なわけでそれを否定することは彼を否定するのと同義でこの状況においてそれは私自身を否定することとなるのは見え見え、あきらか、ばればれ、私は私の過去を忘れてしまっているのは確かだ。許しを請うて激痛をうけいれる。人間味ある叙情。

「でもあんたが人を殺そうとしたのは私のせいじゃないから」

この小人は、

私の元彼氏は、

人を殺しかけた。

「あんたがむしゃくしゃして、嫉妬して、憤って、鬱憤はらすために人を傷つけて、あげくのはてに自殺しようとして。あんたって一体なんなのよ。それって全部私のせいなの？ 私が謝らなかったから？ 私があんたを拒んだから？ それともあんたが私を殺すほど憎めなかったからその当てつけで赤の他人の傷つけたの？」

私は頭をかきむしる。頭皮に爪が刺さっているのにもかかわらず痛みはない。痛覚さえ今の私にはないのだ。

ないものは、ない。

「そんなのってバカげてる。バカバカバカ。バカのすること」

小人は小さく鳴く。私の胸に押しつぶされながらも喉を揺らす。小人がなにをいって、小人が理解しているかなんて私には判断のしようがない。第一、この小人は彼とは違う。

だから、こんな風に私がもっともらしい台詞吐いているのも意味がない。

素直になれ。素直になれ。私は今、ここでなら素直になれる。素直になれ。

「私のせいだね」

素直になって、素直になることが私を肯定することになるのだ。

「そう。全部私のせい。見ないようにしてきた。逃げてきた。新聞であんたの名前を見たときに私は真っ先に、それこそ仕事なんかやめて、あんたを支える為に生きる決意をしなくちゃいけなかった。それなのに私は……」すべる。口がすべっていく。「あんたを忘れた。忘れちゃったんだ。忘れようとしなくても忘れちゃったんだ。いない記憶にしたんだ。都合よく、自分勝手に」

「ギャッピ……」小人は顔をあげる。赤だ。血色の悪い顔をした小人。「たぶんあんたが本当に人を殺してたら、ここで、今、ここであんたを見ても思い出そうとしなかったと思う」

私は、

私と、

対峙することばかり考えていた。

それが正義だと信じていたから……。

ああ、目が熱い。なんか滲んでるよ。「私、死んじゃったのかなあ？」

小人は無言だ。無言のまま時間が過ぎるのを待っている。

そして、

粒子になって消えていった。私の胸の中で。私の薄い胸の中で消えていった。

「あーあ」

私は再び落ちていく。地面がぱっくり割れてまた、真空の中をすべるように下へ下へ下へ、あるいは上へ上へ上へ。方向感覚なんていらない。必要ないものを削っていく。

私は必要ないものを削っていく……。

これまでも、これからも。

それから私は色んな孤島を転々とした。河のある孤島。推定体長三十メートルはある猫のいる孤島。空がない孤島。永遠にフローリ

ングが続いていく孤島。

すべてに共通していたのは私以外の人間がいなかったということだけ。それと小人が用意されていたことだけ。

高校のときの担任の小人にもあった。その小人は妙に貫禄があった。私がお久しぶりですと挨拶するとその小人は手をあげたり、私がつとつと語ると相槌をうつように頷いてみせた。懐かしくて泣きそうになった。

「先生、私先生を覚えててよかったです」

先生は私の膝の上ではねた。「キュラップー！」
そして、

先生は爆発した。

私はこれまで何体もの小人の死をみつづけてきたけど先生の肉片が顔にベチャってグミみたいに張り付いたときはやっぱりに胸に痛みを覚えて、おまけに頭痛もして、

「あああああああ！」

って鳴咽もらして、小便もたらしちゃって、冷静に、

「あ、私まだこの機能残ってたんだ」とか思っちゃって怖くなった。もうやだって思った。

でも私はまた別の孤島に飛ばされるのだ。

「キュポー」

「あんた誰？」

「キュキュキュー」

「そんな寂しい顔しないでよ」

「キュ…」

私は答えに詰まっている。またまた人の顔と名前が一致しないという無礼極まりないけど、それでいてそれが当然なんだ、と諦念を抱いてにやにやしている。

嬉しい。

すごく嬉しい。

最近私は楽しくて仕方がない。毎日毎日、といっても寝てもいな

いし食欲もないからずっと一日を続けているようなこんな状況だ
ど、私の現状は似ているのだ。

——子どもの頃に埋めたタイムカプセルを掘る当日の高揚感に似
ているのだ。

毎日掘る掘るススムクン。

私の余生は上々だ。

悪くない悪くない悪くない。こんな境遇において愉しみを感
じる私は酔狂なんだろうか。はたしてそれは目に余る？

不快感？

または強靱な失望？

答えをくれる人はいない。私について語るのは私自身しかない。
私は寸胴体型の小人の首をぎゅむっと掴んで囁く。「あんたは
誰？」

「キュキュー！」

私は五本の指に思いっきり力をこめる。そうすると頭に緑色の葉
をそなえた小人は首から血しぶきをまきちらし、私の手の中で絶命
していく。紫色の血がだらだら。血が私の白い指に付着して、まる
でマニキュアみたい。下手くそなオシヤレね。下手くそで汚いオシ
ヤレね。

「はい、次」

私は腰をあげて次の小人の元に歩む。小人はあぐらを組んで私と
対峙する。

この顔は、

見たことがあるぞ。

私は正解を予感して思わず唇をぬらす。すっかり血色悪くなった
舌がじゅるり、ぺろり、そこで私はお金がとれるとびっきりの笑顔
ニコリ。

思い出せる。思い出せる。確実に思い出せるよ、きっと。

「答えでてこい答えでてこい」私はぼかぼかと自分の頭を叩く。一
見乱暴だけど自分の頭に生えたばかりの、

それには危害をくわえないように実は慎重に叩いていたりする。さわりさわり。それが私の手の甲にふれる。さわりさわり。

私はたくさんの人を忘れている。

私はたくさんの人を忘れてのことさえ忘れている。

小人が鳴く。「キューポー！」

私は笑う。「Ωβ α」

小人は正解というように内側から破裂して肉片をとばす。すっかり日常化した残酷性。

私の体はまた真空へと落ちていく。ぽっかり空いた真空へとすっぽりはまったように落ちる。

ふと、

私は、

遠ざかっていく太陽に手をのばす。

太陽ってあんなに小さかったっけ？

私の腕ってこんなに細かったっけ？

真空にはないはずの風が私の頭に一切の違和感もなく生えてきた、それを揺らして、

そして、真空にはないはずの圧力も、

私のそれをぎゅっと掴む。

私はだれかに掘り起こされてしまっただろうか。

もうすこしだけ、

もうすこしだけでいいから、

この余生を楽しんでいたいのに……。

—終—

#44 ラブチキン・ゾンビーズ(前書き)

「彼しゃぶるしゃぶる」を改題。

#44 ラブチキン・ゾンビーズ

——ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅ、ちゅぽぽ。あぽ。ぽ。

「んまい、んまい、んまい。ちゅうらんちゅ、おいしいにい！　おいしいにい！」

彼はさながらフェラチオのように、生々しく丁寧にまるでそれが隆起した竿だと催眠をかけられてしまったかのように、ケンタッキーフライドチキンの骨を舐めていた。両端がゆるやかに杭の形状をしている骨から滲み出る微量のエキス——味、風味、香、エトセトラエトセトラ——がひとつの渦につつまれ彼を刺激する。

——ちゅる、ぽ、ちゅるぽ、ちゅるぽ。

本来主役であるはずの肉と皮は捨てた。彼にとって肉と骨は邪魔以外の何物でもなく、また触れるのすら生理的に拒絶したくなる——要するに嫌悪対象でしかないのだ。肉を食らって、皮を食らって、「おいしい！」あるいは、

「んまい！」と目を煌々とさせて叫ぶなどという社会モジュールにならった模範、もとい健康的な青年のとする態度を彼に求めてはいけない。もつとも彼にそのような行動と思考を求める人などこの世にはひとりとしていないが。

ローン三か月支払で購入した皮製のソファアの上に、〈生命の誕生〉と題されてもおかしくはないありのままの姿で寝転がり一心不乱にケンタッキーフライドチキンの骨をしゃぶり続ける彼を、もし近所の殿方と奥方がセカンドバックを肩にぶらさげ街を闊歩しようかしらウフフン買い物ウフフンと鼻を鳴らし踵を鳴らし、不意にあらこの家窓が開いてますわウフフンちよつとよつと覗いてよつとんまあ！、とまるで殺人現場を目撃したときに発する奇声の隣人で感情をあたりに細菌と共に撒いたとしても、彼はこのフライドチキンなめなめを中止するつもりはない。いくら悲鳴をあげようが、誰一人として彼に制限をもちかけることは不可能であり、よしんば彼

女らが最強の武器と思われがちな道徳的観念を用いたとしてもそれは結局感情論に過ぎず、彼は短く笑いかけて口から涎と骨のしりをのぞかせるだけである。

「んまい！ んまいなあ！ 骨はんまいなあ！ じゅるぽーじゅるぽー！ んまんまー！ んまつんまつんまつ！ 骨。骨。うんまい骨！ じゅるるるるるるる。ちゅるっぽー！」

すでにソファアはケンタッキーフライドチキンに付着していた脂と二ヶ月間風呂に入っていない彼の頭皮の脂が混同した濃い脂による指紋だらけ。

それに骨から剥ぎ取った皮と肉を同じ皮製だからかは判らないが、キャッチャーミット——ソファア——にめがけて推定時速八十キロで投げこんでいるため、ソファアの脂による汚れは異常そのものである。花を見て「綺麗だ」といえるような普通感覚を持つ人間がこのソファアを見たら卒倒してしまうのが予想できるが、しかし彼にとってそのソファアは神聖なる場所ほかならず、もしもソファアを愚弄する他人がいたなら彼は語気を荒げ、頭皮をちらつかせ、淀んだ息を吐き、敵意をあらわにするだろう。敵意は脂をまとい吸収し、肥大化して彼の敵をかみ殺すモンスターとなり街全体を死海に変えてしまうかもしれない。そのような悲劇を起こるのを未然に防ぐには彼と関わりをもつのは控えるべきである。これまでその悲劇が起きていないということは彼の近隣住民は非常に利口であるようだ。

「んまいねえ！ んまい！ 骨んまい。じゅる、じゅう！」

腹部に飢餓感をつめられた犬さながらで骨をしゃぶりつづける彼は確かに異常である。他人から見れば気狂いとして即認識され、権威を持った人間が彼を偶然みかけたら目を見開き、歯を剥いて、精神科という名の堅牢な館に閉じ込め、彼の一生をそつなく終えさせることにより自分の余生を十二分満足できる恵まれた保障を手に入れようとするだろう。しかし彼は現在骨をしゃぶり白目を剥いて天井を見上げている。というのはすなわち社会全体が恐怖に片足を投

げだして、ほらほら掴んでもいいですよ、と彼を舐めているのと同義の過ちを公開しているのに何故気付く者がいないのだろうか。

彼自身はその愚かな行為に気付いている。だからこそ、彼は骨に執着し続けているのである。骨を耽溺し、骨しか認識しない。骨のみが存在する世界を、彼は築三十年になる持家の中で開拓しているのだ。

社会は彼に感謝せねばならない。

社会は彼に感謝を怠ってはならない。

だが、フジツボのごとく謙虚な彼はそれを望んでいない。静かな声援すら彼は望んでいない。孤独こそが最大の後押しであると無垢の鑑の彼は思っている。

「骨じゅぽー！ 骨骨骨んまんまじゅっぽー！」

細菌を凝縮した涎が頬につき、眼球にも飛来しているが彼は気に留めず骨ちゅぽを続ける。肩まで伸びた黒髪がソファーに垂れた涎を墨汁のようにして這い廻り意思表示をする。んまい、んまい、んまい、と黒髪で一筆された彼の意志は彼が公言している意志と遜色がない。無垢な彼に表裏などという狡猾な思考は存在しないのが見てとれる。素晴らしい。彼に賛辞を送れば老若男女問わず、国籍問わず、崇拜する宗教問わず、高尚な気分になること間違いない。

一冊の小難しい古典文学を渋面で読み捨てるぐらいなら彼の家の方角へ、二三度慇懃に礼をしたほうがよいのではないか？ 何度も言っているが彼はそんなことは一切望んでいないが…。

——ちゅぽっちゅ、ちゅぽっちゅううううう。

彼はようやく一本の骨をしゃぶり尽くしたようだ。満足げに文字通り骨抜きになった骨を眺めながら微笑む。

——宝石のような。

——希望のような。

骨をみつめる彼は精通に目覚めていない少年よりも少年らしい瞳をしている。そんな彼を惑星に住まう生物の一個人として扱うのは憚られる。

「んまんま！」

彼は躁。彼は躁の目付、風格。視界は冴えない。それでも立ち上がる。ふらつきながら閉め切った窓を開けた。

彼は肢体を見せびらかすショーの出番が来たように裸体を惜しげもなく広げ、

振りかぶった。

その瞬間、世界——大勢の観客にあふれる球場——は息を飲む。

静寂の訪れに思考放棄と刮目を決める。

彼の脂ぎった手から放たれたケンタッキーフライドチキンの骨は窓先に広がる一切の雑草も許されていない整然された庭に落ち、土の上で数回バウンドした。ぐちゃり。

今度は彼が息を飲む。じっと庭を見つめる。例の研ぎ澄まされたような純真な瞳で刺すように庭を見つめる。

——庭から、手。

——浅黒く深爪の、手。

——出現。発現。土がおこされて人間の手が顔を出す。本来手首にうかぶはずの薄い水色の血管は確認できない。

目の前の奇異な光景を彼はさも日常の一片であるように眺めながら指に残った脂を舐める舐める。

——ちゅぽちゅちゅちゅ。

庭に現れた手は指先に目がついているのではないかと錯覚をおぼえる正確な手付きで、彼の投げた骨を掴んだ。数回確認するように握る。浅黒い指の間に白い骨が挟まり対照的。

「どぞー！ どぞー！ んまいんまい骨どぞー！」彼は叫ぶ。「どぞどぞー！ 骨骨どぞー！ ちゅぽぽー！」

〈庭の手〉は答えるように彼が丹念にしゃぶった骨を握り、ゴモモモ、と音をたて土の中に還っていった。

彼は久しくあった友人にむけるような笑顔をうかべ気が狂ったように手を振り続けた。指についた唾液があたりに霧散したが気にせず手を振り続けた。

彼はしたたかに望んでいる。

いつしかあの土に潜む何者かがあたえられた骨を装着していきへ完全体となりあわよくば分身し一隻の軍隊と化し、彼をかこむようにして至福の死へ誘^{こび}ってくれるのを望んでいる。

昼夜問わず、彼の頭の中では腐臭を身にまとい生気のない眼孔をサーチライトのようにくばらせるゾンビーが、唸り声をあげながらゆっくり、ゆっくりと彼の体を刻む光景が再生され続け、彼はその光景を思い浮かべるたびに「はやく、はやく」と神に祈る。

あの浅黒い指で、ひきちぎるような力で首をしめてくれるのを望んでいる。

社会もそれを望んでいるように、彼も強く望んでいるのである。

社会は悲劇の種を隔離して、無意識で滅する。

——ちゅぽ、ちゅぽ、ちゅ、ちゅぽぽ。あぽ。ぽ。

彼は次の骨しゃぶりにとりかかる。

「頑張れ！」とカーネルサンダースが微笑みかける赤いボックスからフライドチキンを握りつぶす勢いで掴む。殺気立った手付きで皮と肉を剥いで壁に投げつける。べちゃりと鈍い音がする。そして、しゃぶるしゃぶる。骨をしゃぶる。いくらしゃぶっても骨は溶けないのに、彼しゃぶるしゃぶる……。

——終——

#45 魔女の皮剥がしましょう

色のない視線は、向けられた人の捉え方によって色彩を認識される。

私が彼女から受ける視線の色は墨汁より克明とした黒で、着ているシャツの色を塗り替えるほどの存在感をもっている。

不快だ。不愉快だ。せつかく明るめのブラウンに染めた髪も、彼女の視線をひとたび浴びると暗澹な雰囲気醸し出してしまうようになる。

連日、彼女は私を呪い殺す気で登校してくる。

——魔女。

一時期、世界的にブームとなったファンタジーの名残が私の脳をかすめる。彼女は魔女ではないか。クラスメイトとはかりそめの姿であり、真実の姿は黒魔法を駆使する魔女ではないか。

——メデューサ。

一時期、世界的にブームとなったファンタジーの名残が私の脳を再びかすめる。彼女はメデューサの親戚ではないか。視線を交錯させるだけでここまで人を不愉快にさせるのだ。生気を奪う。気力を殺す。彼女はメデューサの——。

私はかぶりを振った。バカだ。そんな話あるかっちゅーの。

往々にしてこのような荒唐無稽でおざなりな想像を展開させてしまう。シナプスが労働を拒否しているのだろう。

「ちょっとどいてよ、邪魔」

背後から衝撃。肩と肩がぶつかったんだと鈍く流れてくる痛みで知る。

「ごめんなさい」

「どんくさい……。ホントどんくさい……。アンタったら、どんくさいったらありゃしないわっ！」

響きはしない重い声。彼女だ。

電柱の霊に憑依されたようにぼーっと廊下に棒立ちしていた私が悪いけれど、わざわざ肩をぶつけなくてもいいでしょ。避けられなくてもいいじゃない。

しかし、私は反駁せず、軽く頭を下げた。

「ふんっ…」

短く鼻を鳴らして彼女は去っていった。護衛のようにまとわりつく二人のクラスメイトを引きつれて歩くその様はかなりの上級階級の人種のようなだ。適度に着崩した制服の色は黒。

魔女だ…。

私は彼女が去っていった方向へと歩み出した。といっても恐ろしいミニスカ魔女を追っているのではない。そこはきちんと否定させていただく。

次の授業が体育だから更衣室に行かなきゃならない――。

それだけだ。

体育の授業中も彼女と視線は何度も衝突し、その度に私はゴーヤを飲み下した時の気分になった。彼女も彼女で顔を引き攣らせ、なによこっち見てんじゃねえよこのウスノロがつ、と眼球いっぱいに心情を吐露していた。こっちのセリフだスカタン。

校庭五周というのは一介の女子高生には過酷でハードでハートが停止する授業内容で、私は茫然自失といった具合に前屈の姿勢で体力回復をはかっていた。周りからは、疲れたね暑いね死にそう最悪などと現代病ともとれるような発言が跳ねまわっていて私はいっそう強く疲労を感じた。

「マコおちゅわあゝん、大丈夫かあゝい？」

鼻息が後ろ髪を撫でた。顔をあげると体育教師の蓮池はすいけが悠然と立っていた。一時間、笛を鳴らしてただけの癖して額に汗を浮かべている。先生はカロリー消費が簡単そうでもいいですね、と皮肉をこめた笑みを返すと、

「シャキツとしなよお。シャキツとおお。うう」

意に介せず能天気な言葉を投げ返してきた。さすが蓮池だ。私を知る限り、私よりもどんくさいのはこの教師ぐらいだ。

ちよつとした優越を感じながら私は袖で汗をぬぐい、校舎へと戻っていく列に加わった。

列の先頭には涼しい顔をして護衛の二人と歩く魔女がいた。石のひとつでも投げてやろうかと思ったけど、たれてきた汗が目に入っ
てそんな気は失せた。

女子更衣室は花園だと鼻の下を伸ばした男子が豪語しているのを目にしたことがある。他の男子もそれに同調して、

『エデン』『この世の終わりを迎える際の理想の場所』『もしも覗けたらその時が人生のピーク』などと嘯みしめるように言い、また一部のいかにもな男子に限っては興奮してきたようで、

「俺もう死んでもいい」「バカ死ぬな！死ぬのはまだ早い！」

私は一等兵に過ぎず想像しただけで脳が沸騰しそうな次第でして

「バカ野郎、俺を信じろ！」「しかし！」「しかしもかかしもない！」「伍長！」「ああ！いつか！いつか行こう！」

気弱そうな男子は嗚咽をもらし、はい、と弱々しく頷いた。そのやりとりを見ていた男子たちがまばらに拍手を始めだし、最終的には『全米が泣いた』というキャッチコピーをつけられた映画の上
映後のような熱気と感動が教室を包んだ。女子はみんなあまりのア
ホ臭さに辟易して頭痛がしているようだった。ちなみに私は保健室
に駆け込んだ。

そんな夢見がちな男子諸君に私は声を大にして言いたい。叫びたい。耳の穴かっぽじってよお。聞く未来の家畜どもよ、と拡声器
を使用して言いたい。

——女子更衣室は戦場だ。

「蓮池マジうざくね？死ねばいいのに。五周はありえないって。」

男子が六周なら女子は二周でしょ」

「なんで二周？」

「なんとなく」

「あー、なんとなくね。わかるわかる。確かに二周だよね普通は」
タオルで四肢を拭きながら彼女たちは毒を吐く。二酸化炭素の代わりに毒を吐く。グローブを使わない会話のキャッチボールは拙くて、私はむずがゆくなってしまう。

戦場に飛び交うのは会話の銃弾だけではない。日頃ハンカチを『ハンケチ』と呼称するほど上品な彼女たちがロッカーを乱暴に閉めるときのボタンボタンという音——発砲音——は五分以上聞いているとノイローゼになってしまうことうけあいだ。

私は急いでするすると体育着を脱いで、汗でほんのり濡れたブラジャーも外してロッカーに投げ入れる。

ふと視線を感じた。

背後からだ。

ぺちゃくちゃとわざとらしくガムを噛んでいるような会話が聞こえる。

戦場に立つ魔女だ。

私は直観的に理解した。魔女が私を中傷しているのだ。

だが、ダメージを受けるほどのお人好しではない。被弾する銃弾は豆鉄砲のようだ、と一笑に付して着々と着替えを済ませていく。露出した肌をタオルで撫でるように拭き、乾いたのを確認してから消臭剤をきちんと注意書きにならって十五センチ以上離して吹きかける。

「ギャハハ」手を叩く音。ボタンボタン！「ギャハハ」手を叩く音。ボタン！

一刻も早くこの場から脱出しなければ。どうにかなくなってしまいうだ。熱が出てきそうだ。

私は夕べ観た『ダイハード』を想起した。脱出しなきゃ。魔女よりもこの空気に耐えられない。

ばたばたと、または、どたばたと私は代えのブラジャーを付けて制服をナチュラルに着崩した形で身に付けて、ロッカーをしとやかに赤子をあやすような手つきで閉めた。

更衣室の狂騒の中では完全に私がアウェイであり、異常者なのだと視線をかすめた魔女の目が語っていた。

この違和感。

自分が正しいはずなのに正しいと思えない違和感。

その時、私は羨ましかった。

ある人が羨ましかった。異性としての魅力は微塵も感じないが羨ましかった。

戦場を脱出するとき、私は小声で言った。

「セガール。あなたに嫉妬するわ……」

セガールじゃなくてブルース・ウィルスだった、と自分の突発性健忘の気を冷笑する余裕もなかった。急がないと授業が始まってしまふ。次は現国だ。体育明けでは十中八九、寝てしまふ時間だ。教師も黙認するほどの惨状だ。

ロッカーに忘れものをしてしまった。

廊下ですれ違着替えを済ませたクラスメイトたちはもう、表向きのクラスメイトたちに変化していた。揃いも揃って役者だ。うちの学校に演劇部がないのも頷ける。

廊下は走れないからといって早足で進むが、これではまるでリハビリ中のようだ。余裕がないせいで滲む薄ら笑いが客観視すると不気味だろうな、と思うが顔を引き締める余裕もない。ブルース・ウィルス。私はあなたのように逆境に強くないようです。

女子更衣室に到着する寸前、魔女の護衛の二人が出てきて部屋の中にかける声が聞こえてきた。

「お先にー」「先いっとくねー」

ということとはつまり――。

ボタン、と閉じられた扉の前で私は硬直した。荒れていた息もぴたりと平静を取り戻した気がしたが、肩は忙しく上下している。

おおきく深呼吸する。この扉の先には魔女がいて、声がしない事から推測すると魔女ひとりだけで、すなわち私がこの扉をボタン！、もしくはキーコー、と静かに開けても結果は私と魔女の密室戦争勃発ってことになるのは数学の力を借りずとも計算できた。

怖いのではない。

恐ろしいのではない。

その証拠に身体が震えてはいないし、喉も渴いては——いやこれは運動の後だからだ。

どうしよう…。

懊悩する私を無慈悲なチャイムが襲う。

もういいや、またあとで取りにければそれで…、そんな腐抜けた逡巡をしていると、

額に衝撃。扉が開いたのだと分かった。

「ちよっ…な、な、なによっ！」

ひよこつと顔を出した魔女はなぜか赤面していた。

こっちの台詞だ、というのを飲み込んで私は額を押さえた。痛い。激痛とまではいかないし、痕が残るほどでもないが、瞬間的に、痛い。

「ごめ……」 似合わない言葉を吐くかと思いきや、

「は、は、早くしないと授業遅れるわよっ！」

「わかってる…」

私は杖を失くした老婆のようにふらつきながら女子更衣室に入り、自分のロッカーをまさぐった。

——ない！

ブラジャーがない。汗に濡れたブラジャーがない。努力の結晶が滲んだものの汚いものは汚いとはっさり切り捨てたくなるブラジャーがない。

どういうことだ、これは…。

はっと天啓のようにひとつの推測が降りてきた。魔女め…。
額の痛みはとくに消えうせていた。

私は女子更衣室を飛び出し、早足で去っていく魔女の後ろ姿を――
魔女のスクールバッグからはみ《…》でている白いそれ《…》
《…》を確認して瞠目した。

魔女よ、それをどうする気だ。

私のブラジャーをどうする気だ！

ブルース・ウィルス！ 歴代のアクションスターたちよ！ 今、

私はあなたたちの気持ち判った。

――危機的状況においては一切の校則しがらみは無効となる。

チャイムが事切れたのを合図に私は走りだしていた。

扉を開けたときの魔女の赤面。狼狽。護衛を離し、一人で更衣室に残った目的。

そして――日々、感じてやまない熱い《…》視線。

私は走った。廊下を無我夢中で、恥も捨て走った。

魔女の背中がどんどん近くなってくる。もうすぐ手が届く距離だ。
魔女を捕まえて私はどうすべきか。

問い詰めて魔女の皮を剥がすべきか。授業をサボって二人そろって保健室に向かうか…。

そうになると、私の皮も剥がさなければならぬ…。…。

――終――

#46 走れ、色欲！（ノワール公園の一夜 B－SIDE）（前書き）

「さあ、強姦してもらおうか」を改題。

#46 走れ、色欲！（ノワール公園の一夜 B－SIDE）

「さあ、強姦おかしてもらおうか」

深夜の公園の茂みに入るなり、彼は木に手をつき、肉付きの薄い尻を突きだしながら、その姿勢とは裏腹に凜として言った。

どこかで、犬が吠える。

「無理です」

「無理ではないだろう」

首をまわし俺をねめす。とげのある視線から逃げると次に目に入ったのは彼の臀部だった。薄暗い環境の中でも、その曲線がマグカップを彷彿させるしなやかで健康的であるのと、コテで整えたように吹出物イレギュラーがひとつも見当たらず、

——確かに無理ではないかもしれない。

そう一瞬思ってしまったい恥じた。彼の臀部の美しさと共に死ぬまで忘れられないだろう。

「さあ」彼は尻を振った。「さあ、さあ、さあ」

鼻白み、あわあわと白痴になって俺は後退した。風で茂みの草が揺れた。そこから野良犬が顔を出して、くううん、と鳴いた。俺も泣きたかった。

「だめですよ、やっぱり、こんなのって、ええ、だって僕たち男同士じゃないですか。いや、異性だったらオーケーとかそういう話でもないんですけども」

「でも決めたはずだろ」

「はい、決めました。確かに。決めましたけどやっぱり無理です。僕はやっぱりこういう行為は、ちよつと、ああ、だいぶ、何が言いたいんだろう。ああ」

「落ち付きたまえ」

半裸の人間になだめられて落ち着ける人間などいるはずがなかった。同性愛者なら興奮するだろうし、非同性愛者ならなおさらだ。

そして自分はもちろん後者であり、それなのに男を強姦しなければならぬなんて。

「じゃんけんで君は勝った。そして強姦する立場を選んだ。間違いはあるか」

「合ってます。その通りでございます、はい」逃げ出したかった。

「でもですね、その」

「でもクソもない。早く勃たせるもの勃たせて、それを私の……」彼は尻を叩いた。さながら騎手だ。^{ジョッキ}「ここに刺せ！」

「勃ちませんよ！」

「さあ、さあ、さあ！」ぺちんぺちんと音をたてる尻を左右に振った。それで俺を興奮させるつもりらしい。「強姦してくれ！ぱっちこーい！」

「小森先輩……」^{こもり}

目まいがしてその場に崩れた。叩かれる尻の音と弱々しい野良犬の声がどうしてか相まって、幻覚を生み出しそうだが、目下視界に映る悪夢以上の悪夢などありそうにない。むしろこれ以外の悪夢なら歓迎する。

この異常な状況の礎石となったのは今日の——深夜だから昨日か——放課後に部室のパソコンに届いた一通のメールだった。そのメールはエロマンポルノ賞の結果報告と現役作家陣で構成された審査員の批評だった。

エロマンポルノ賞とはK談社が官能小説をプロアマ問わず募集し、その中から大賞、奨励賞、等々、等々をおくる、いわゆる文学賞の一種である。古くから読み繋がれる文学作品には官能的展開がよく見受けられるのは読書家ならずとも知っているだろう。それにも関わらず、長らく文壇は官能小説という箱^{ジャンル}を黙殺してきた。

しかし、二千年初頭に突如として現われた平成の文豪——阿智須^{あちす}——^{どいつ}独逸の一言によって文壇、ひいては文壇バーなどと呼ばれる湿っぽ

い根暗たちの住処は衝撃の大波に襲われ、あわや転覆。どうかこうにか態勢を持ち直した結果、K談社がエロマンガルノ賞を創立したというのが一般的な風説である。詳しくは阿智須独逸による伝説の一言を冠にしたエッセイ『スケベなくして文化なし』を読まれたし。

俺が大学で所属する官能小説座談会は前述のエロマンガルノ賞に自信作『風と共にじゃ逝けぬ』を応募したのだが、落選。官能小説を読み漁り、感想を言い合うだけでなく日頃から文筆修練をしていればと悔んだが結果は変わらない。裏返ったコインは触れないのであれば永久に裏返ったままなのだ。

「落選ですか」

「そのようですね」

「まあ素人が勢いで書いたものですし」

「当然の結果といえば」

「当然ですね」

「来年がんばりますか」

「そうしましょう」

会員は笑みを浮かべて口ぐちに軽口を叩いていた。来年こそは、という気負いすら感じられた。だが、俺の読みあげた落選メールに申し訳ない程度に添えられた短文の批評で部屋の空気は一変した。暗幕が落ちたようにぷつりと空気がとまった。

応募作品『風と共にじゃ逝けぬ』批評

・文が全体的に稚拙である。官能以外の小説にも手を出してみてもどうか。

・安易なパロディタイトル通り、展開もお粗末。作者の一人よがりであり、これでは読者が感情移入するのは困難。しかし、主人公のべらんめえ口調は物語に和みをもたらし◎。

・肝心の性描写がどうしようもない。「あんあん」「うう」「あんあん」「うっ」だけでは無理がある。作者は童貞か？ 三万握って

風俗に行ってこい。

「――以上です…」

誰が亡くなったのだろう。ここは誰の葬儀会場なのだろうか。俺は部屋を見回し、欠員がないか確認したが、指折りは無情にも全員の出席をつきつけてきた。

「…なるほどな」

水を打ったように静まった部屋にお似合いの沈みきった声が転がった。小森先輩だった。

「まあそうだろう。うむ。誠だな、真理だな」

「先輩」俺は名前を呼ぶだけで精いっぱいだった。

「一朝一夕で書いたのがバレバレだな。俺たちは官能小説以外読んでいないのは確かだし、それに…」先輩はむごたらしく言葉を切る。

「俺たちは全員童貞だ」

そして、てへっ、と笑った。

潮が引くようだった。それも音もなく。

部室から俺と小森先輩以外の会員は姿を消していた。

「先輩！ みんなが、みんながいませんっ！」

「慌てるな！ どんと構えてろ！ 決して泣くなよ！ 泣いても気持ち良くなんかないからなっ！」

「はいっ！ 上を向いてます！」

「そうだ、上を向いてればいい！ 人間は上を向いてさえいれば死なないんだ。たとえ電柱にぶつかっても死なないしな！」

「でもマンホールに落ちたら…」

「堕ちるところまで堕ちてやればいいさ！」

このときばかりは俺は先輩になら抱かれてもいいと思ったんだ…。でもやっぱりそれは無理だった。だって先輩は風呂は三日に一度だし、歯は生まれてから一度も磨いたことないし、あまつさえそれらをアイデンティティだとか言うし、何より黒子^{ほくろ}に毛が生えてるしそれも枝分かれしてるし。

だから俺は先輩の提案のじゃんけんで勝利して言ったんだ。「強姦してやりますよ!」って。

そしたら先輩は右手の親指を立てて、「おう、よろしくメカドツグわんわん!」って言った。

「どうせなら外でやろう」と先輩。

「そうですね」俺は頷いた。

「男二人でラブホテルに入る勇気ないしな」

「それに一番大事なのありませんから」

「うむ」

先輩と俺は遠い目をした。まだ見ぬ秘境が目の前に広がっているかのように。

貧乏学生に三万円の余裕なんてなかったのだ。それに俺たちは疲れきっていた。生きるのが少し嫌になっていたのだ。

「風俗に行きましょう。バイト増やして、もう読まない本は売って。そしたら三万ぐらいすぐですよ」

「俺たちは奨学金で大学に通う身。この立場をわきまえずに浪費なんてなあ、よっぽど教養が足りてないやつらにしか行えない所業だろうが!」

「うちの大学でデモしてる人もいましたね。『教育は国民の権利だ。国が学費を負担しろ』でしたっけ。義務教育っていつから延長したんですかね」

「俺は怖いよ。ああも世迷い事をのたまう奴らが社会に野放しにされていくと思うと、おちおちエロ本も買いに行けやしない」

先輩はくるぶしまでずり下げたトランクスをあげながら言った。説得力と教育論が泣いている。だから俺のほうが泣きたいんだが。

「そもそも次回作は同性愛のテーマで書くつもりなんですか? そんなアブノーマルなジャンルで応募するのは無謀だと…」

「バカヤロー!」だしぬけに半裸の男は俺の顔面に拳を叩きこんだ。

「愛に定義などない！ 愛に定型などない！ 愛は……愛ゆえに愛であり、また愛なのだ！」

痛みで台詞の半分以上を聞きとれず俺はふらついた。精神的ダメージのお次は、肉体的ダメージか、と半ば投げやりになりつつあるが、ここで自分が平静を崩してしまつては茂みの中で小規模なボーイズラブが巻き起こってしまうのは明らかだ。己を鼓舞するしかない。わななく拳の爪が肉に刺さった。

「た、たしかに名のある文豪の中には同性愛者もいたと聞いてますけども……」

「金閣寺！ 潮騒！ 音楽！」

「その方はバイセクシャルじゃありませんでしたっけ……」

「バイバーイ！ わははははっ！ バイバイバーイ！」

とうとう先輩は壊れてしまった。地にのたうち回りながら奇声をあげている。虚空をかきむしり、よだれをたらし、目は一点をみつめている。その一点とは――

「うわあああああ！」

洋画エクソシストよろしく、体を反り前進。標的は俺の体だ。股間が恐怖で散々噛んだガムのようになっているのは確認せずとも判った。

「落ち着いて！ セセ先輩っ！ 気を確かに！」

しかし先輩は歩みを止めない。ぶわあああ、などと声帯をどう使えば出るのか不明の壊れた空調みたいな声を出しながら後退する俺に迫る。殺される。事態は貞操の保守どころではない。

背中に激痛が走った。桜の木が俺の行く手を阻んだのだ。自然までも味方につけた先輩は俺にのしかかった。抵抗むなしく、みかんの皮でも剥くように俺から衣服を剥ぎとっていく。

「ほんと、マジで、だめだ、ああ、俺はっ！ いやだ！ いやだ！」

「嫌も嫌よも好きのうちじゃろうがあ！」

「はじめての相手ぐらいは最愛の人がよかった！ セめて女であつてほしかった！ 俺は贅沢なんだろうか、ジーザス！」

「こん経験を駆使して携帯小説家デビューして人生安泰じゃろうが
あ！」

「ああ、いつのまにか普通に会話が成り立ってる！ この人絶対正
気だ！」

みるみる内に俺は裸体に近づいていく。肌に草がちくちくと存在
をしめしてくる。

「ご開帳お！」

「ああっ！」

ついに俺は丸裸になってしまった。惜しげもなく裸体を先輩の前
で披露してしまった。

「うう……」泣くしかない。「ボーイズラブだよ。書店でどうみ
ても小学生の垢ぬけない少女たちが立ち読みしてるあのボーイズラ
ブだよ。男の作家ってだけでネットで叩かれる魔の巣窟だよ」
息を荒げる猛獣の前に差し出された肉は食い散らかされるのを待
つしかない。

「さあ、もうやれよ！ 好きしろよ！ クソツクソツ、明日からど
んな顔して大学行けばいいのかわかんねーけど！ いうかとりあ
えず明日は休むけど！」

猛獣は血走った目で黙然と俺をみつめる。生々しい体温が、膝か
ら胸にかけて波紋のように伝わっていく。

犯される。これから俺は犯されるのだ。

諦念が脳内に迸って筋肉が硬直した瞬間、

犬が吠えた。

例の野良犬だ。まだいたのかお前。俺の醜態を見たいのか。そう
いうのが好きなのか畜生のくせに。

「うっす」

「あっ、どうも」どんな状況でも挨拶されると返したくなるのが人
間の性である。

「さっきから見せてもらってたんですけど」野良犬は言った。「何
も体験しなくてもいいんじゃないですかね。うん、今の俺みたいに

他人がしてる様を見るだけでもだいぶ見識が広がるんじゃないかな」
「確かに」やおら先輩は俺の体からどいて、いそいそと脱ぎ散らかしてあったジーンズをはいた。まあそのジーンズ俺のなんだけどね。
「ちよつと先に行ったらベンチがあるでしょ？ ほら、自動販売機の近くに」

「ええつと、自販はダイトーですか？ コカコーラですか？」

犬は前足で器用に頭を掻き、ややあつて、

「コカコーラのほう」

「あつ、そちですか。で、そこでなにが？」

犬は人間然とにんまりと笑い、俺に耳打ちした。暗闇でも黒く光る刷毛のような髭がちくりと当たった。

「青姦…！」

「それはアグレッシブな！」先輩も驚嘆したようだった。いつのまにやら肌の露出が極端に減っている。俺の服を着たのだ。

「見てきなよ、童貞くんたち」犬はげらげら笑いつつ青姦が行われているという方向を指した。「深夜の刺激物ってのどうして美味しいんだろうねえ…」

「まさか、もうあなたは…」

犬は右前足の肉球を俺たちに向けた。どうやらこの仕草は人間でいう親指を立てるのと同じ意味合いらしい。「もちのろんよ。モロばっちり。しかも女は上玉よ。あんな可愛い顔して露出癖なんて、たまんねえよな。ふひひ。まあ童貞くんたちにはちよつと厳しいかもしれないけどよ」

「いや美味しくいただけるっす！」

中学生の頃に土手で拾った湿気を孕んだ官能小説。それから五年、俺は数多のジャンルと死闘を繰り広げてきた。それは同時に数多の窮地を潜り抜けてきたのと同義――。

清楚美少女露出モノ――。

「腹が鳴ってきたぜ…」

「そうだな…」

「先輩…俺、もういてもたってもいられません。止めないでくださいよ…」

ふっ、と先輩は口の端をつりあげて、

「お前、いま良い眼をしてるよ」

「先輩だって」

俺ははにかんだ。そうだ、先輩の目はこういう目だった。きりつとしていた。

「よし、童貞兵士たちよ。チェリービーンズ前進せよ！」

「イエッサー！」

有益な情報をよこした犬に敬礼し、官能小説座談会は戦場へ疾走した。むろん俺は丸裸だ。

陰茎がたゆたう。夜風が俺を後押しする。開放的な気持ちが多幸感を生み、深夜の公園がパレード会場のようにさえ見えてくる。

「先輩、俺決めましたよ」

「ふっ。判っているが、一応聞いておこう。なにをだ？」

「次回作のことです」

先輩はうなづいた。自動販売機の発光がぼんやりと見えてきた。

「SF研究会に移籍して、喋る犬を題材にノンフィクションものを書こうと思うんです」

「……手伝うよ」

—終—

#47 自称宇宙人との遭遇（フワール公園の一夜 A－SIDE）（前書き）

「自称宇宙人の口説き方」を改題。

#47 自称宇宙人との遭遇（ノワール公園の一夜 A—SIDE）

「今日ずっといっしょにいて、分かってもらえたと…」

彼女は一度言葉を切った。ううん、と惑うように首を横に振り、

「気付いたと思うけど。私、宇宙人なのね。それか、超能力者なの。私って変だから薄々気付いてたよね？ 漆原くんって敏感^{うるしばら}そうだし…」

目の前が真っ暗になったり、困惑したり、ましてや取り乱したりはしなかった。

あーあ外れ引いちゃったな、と嘆息を漏らすだけだった。

「ごめんね。いきなりこんなこと言いだして」

「いや…別に」

落ち着いた口調は努めたものでもなく、自然と舌の上を転がり落ちていった。視線も追うように下に落ちる。

彼女について特別な感情は持ち合わせていなかったといえは嘘になる。大人しそうで、従順そうで、しかし時折見せる翳り——そしてその翳りが目下、深夜の暗闇と同化して滲み出た…。でもそれを受け入れてまで彼女をどうしたいか。

馬鹿らしい。そこまでして、はっきり先の読める面倒に片足を突っ込んでまで、彼女を欲してはいなかった。なんとなくいいな、その程度の淡くいつ消えても不思議ではない恋未満の感情…。

「結城^{ゆうぎ}。一応聞けど冗談だよな？」

「そうだね。冗談だったらいいよね」

「うん。冗談のほうがいいなあ、俺は」

「ごめん」

謝られても困ってしまうし萎えてしまう。そうだ、この手の自分は周りとは違う〈何か〉だと思いたがる人種は悲観的なのだ。

悲観的で、臆病で、

理解されるのも理解するのも拒み、一人でせつせと創造した殻に閉じこもる。そこに敵意はない。有り体にいうなら他者に対する諦観だけが存在する。

「そっか。宇宙人だったか。いやいや気付かなかったよ、全然。まったくね……。いきなり深刻そうな顔して、何をいうかと思ったら」
「ははは、と笑ってみる。冗談には冗談を被せる。それが正解だと判断した。しかし、

「笑わないで」

どうやら外してしまったらしい。彼女は冷めた一瞥をよこした。

「ごめん。そんなつもりはなかったんだけど」

「じゃあどんなつもり？」

やけにつつかかるな。そっちが突飛なことを言いだしてこっちは困ってるというのに。できれば空欄にして提出したい問題に無理して答えを捻出したというのに。

不機嫌になって一語一語に含めて、

「だからごめんって。でも笑うしかないじゃん？ 今日一日楽しくやってたのにさ。いきなり『私はウチュウジンです』とか言われたら。それも真顔で。冗談なら笑うし、冗談じゃないなら笑わない。でもさ……あれ？」

「冗談じゃないよ」

「そうかそうか。うん、冗談じゃないんだよね。そうだな、じゃあ真剣に聞いたほうがいいの？」

自分でも馬鹿なことを言いだしたものだ。本当はさっさと帰って風呂に入って今日のことはちよっぴり不思議な思ひ出として床につきたい。明日になったら、友人に「いやー、まいったよ」なんて頭かきながら笑い話にしておしまい。

「できれば」

彼女は呟いて、こくりと申し訳なさげに頷いた。

どこかで犬が吠えた。

曲げられたスプーンのような街頭がちかりと一度明滅した。

自動販売機は唸り声みたいな機械音をたて続けた。

それから公園はやけに静かになり、まるで彼女が話し出すのを待っているようだ。

「いいよ。聞くよ」

話半分で。むしろそれ以下で。座っているベンチの木目でも数えながら。

「ありがとう」

結城の血色不良ともいえるほど白い横顔が、ふっと暖かみを帯びた。もし触れたら乾燥した空気にも関係ない女性特有のもっちりとした肌触りがするのだろう。五分前ならムードにも流され、迷わずに触れていた。その先にも触れたくなって恥ずかしげもなく、熱い科白を囁いて恋に発展していたかもしれない。

だが、それらの可能性は今やもう、ない。

厭世的な人間と頭に悪影響を及ぼす電波を受信している人間に惹かれはしない。

「話していい？ 大丈夫？」

どうやら横顔をじっと眺めて硬直していたようだ。

「うん。話して」

ふう、と彼女は息を吸い込んだ。決意がゆるがないようにか。あるいは話を創作するために頭をリセットさせるつもりか。

「私が…自分が、他の人とは違うって気付いたのはね、小学校ぐらいのころだったの。はじめはなんとなーくね。なんか私って人と上手く意志疎通できないな、なんて思ったのね」

彼女は目にかかる前髪を払った。

「自分が口下手なのかな、って思ってお母さんに相談して、そしたら『本を読みなさい』って言われた。『本をいっぱい読んで、人といっぱい会話して、掴みなさい』って。いま思えば妙にはぐらかされちゃった感じだったかな」

薄く笑いを挟む。

「それからいっぱい本を読んだ。童話も文学も。本だけじゃ足りない

くて映画とかアニメも見た。でも、ダメだった」

「具体的にどういう風に？」

「一拍ずれてる感じなの。…空気が読めないってやつかな」

場の雰囲気や言外の意味を掴めず、コミュニケーションを苦手とする人は多数いる。俺の人生にもそういうタイプの人間は掃いて捨てるほどいた。空気の読めない人間ってのは自分が他者からどう思われているか気付いていないから、永遠に空気が読めない。

でも、彼女はそれに気付いてもなお、現状を打破できずにいた、ということなのか。

「空気が読めるようになりたかったの？」

「わからない。不安だったのは確か」

「なんだっけ。そんな病気あったら、空気が読めない人には障害があって」

「アスペルガー症候群」

「そう、それだ。それなんじゃないのか？」

「違った」

彼女はまだ薄い笑いを浮かべたまま、

「病院に行ったら先生は私の手を握って言ったわ『正常です』って。病気だったらよかったなんて言ったら実際に病気で悩んでる人たちから石を投げられちゃうだろうけどね。そのときは期待してたのかもしれない。自分が病気で、それをみんなに認めさせて…。困難があっても原因が判っていればどうにかなるかもしれないって」

「結局精神的なものなんだから他人には判んねーんだよ」

「ううん、と彼女は否定し、」

「本当に違ったの。だってね、そのとき私、空気が読めたの」
「どういうこと？」

「病院の看護婦さんとかと普通に会話ができたの。ババ抜きみたいに流れが掴めて、どれを言おうかな、なんて言ってくるかな、ってある程度の予想がついて。びっくりしなかった。会話ってこういうのなんだって感動して泣いちゃったもん」

彼女は破顔し、恥ずかしそうに口元を手で隠した。

「あー、でも次の日、学校に行って、勇気出してクラスの人と話かけてみて愕然としたわ。また上手く会話ができないようになってた。シヨックだった。同じ立ち位置に戻っただけだったのに、たった一回、夢をみせられただけだったのね。それも忘れられない夢を。自転車の乗り方みたいに忘れることはない……」

どういふことだよ。俺は混乱しつつあった。真剣に与太話を聞く気はなかったのに、いつのまにか彼女の半生に興味を禁じ得ず、サスペンスドラマの展開でも追っているような気分になっていた。

「騙されてたのよ」

ふっと笑みが消え失せて、そこには俺の知っている翳りだけが残った。孤独の表情だ。他人を一步ひいた所から眺めているような、俺が好きになりそうだった表情だ。

「医者も、お母さんも、みんな、一芝居打ってたってわけ。私に氣付かせないために」

すぐ氣付くのにな……

そう、結城は呟いて割れそうにない夜空を仰いだ。そして、

「見てて」

促されて俺は漠然と彼女の視線から紡がれる道をなぞった。

——夜空に星が流れた。

「綺麗だった？」

まるで流星を予期していたかのように尋ねてきた。

「え？ あ、うん……」

「なんとなく分かるんだ、こういうの。ちょっと自慢の第六感」

へへへ、と彼女は照れ笑いをし、肩まで垂らした黒髪を手ぐしでといた。指先が濡れている氣がした。

今日一日、朝からそして今現在、夜が深まるまでいっしょにいた。隣を歩いていた。何も今日だけじゃない。大学で出逢って、いいな、って思っ、静かで物腰が柔らかくて、でも他人とは一線ひいて、ほとんど笑うことがない……。そんな風に思っていた。

でも、実際は違った。

「学校で孤立して苦労したよ。かなりね」

「へえ、どんな？」

「そこ聞くの？」

「聞かせてほしいな」

「失礼だね」

棘のない薔薇のような口調で言い、

「そんなんじゃないよ？」

「別にモテたくて生きてるわけじゃないからね」

「：私は結構モテるよ」

一時停止。俺は鼻白んでしまい、

——なぜか咽せた。

「ちょっと！ 冗談じゃないんだよ？ ちゃんと告白もされたし」

俺は若干出かかった鼻水を手の甲で拭って、

「ど、どんな風に？」

言葉尻がふつふつと沸く笑いで揺れてしまった。

「『トランペット吹いてる姿に惚れました』って。私、吹奏楽に入ってたから。友達はいなかったけど演奏ってしっかりパート分けされてるしちようどよかったんだ」

「なんか卑猥な告白だな」

「だよね。丁重にお断りしたよ。年下だったし私の噂届いてなかったんだろうけど」

「まあ、なんつーか結城は黙ってれば、その：」

「可愛いとか？」

「調子乗るな。まあまあだ、まあまあ。及第点そこそこ」

結城は頬を膨らませて、俺の肩を軽く殴った。こうもイメージが変わってしまうものかよ。俺が昨日までは元より、昼間のデートまで見ていた知っていた結城はもういなかった。

ひとつの創作^{つくりばなし}によって、俺の知らない結城が、目の前に現われた。それはまさしく宇宙人のように不可思議な存在——。

「あー。信じてないでしょ」

びくついて笑うのをやめた。

「本当なんだからね、告白されたの！ しかも一人じゃないし。どつかの星の人からもアプローチ受けたんだよ？ 昼休みに屋上で弁当食べてたら『お互い頑張ろう』とか音楽の話もいっぱいしたし」

「：お前それ別に告白じゃないだろ。日常会話だ」
読心されたかと思った。

——宇宙人云々の話を信じていないのを。

「会話っていいよね。対話っていいよね」

噛みしめるように彼女は言った。

「そうだな」

じゃあなぜ。

俺とはこうやって何の弊害も違和感も、ましてや投げられた言葉をぽとりとも落とさずに話せるんだ、結城。

スムーズに、普通に、なんで話せるんだよ：結城。

「それは、漆原くんが私と限りなく近い生命体だから」

結城はやにわに俺の手を握ってきた。俺は握り返しもせずに、彼女の顔を茫然と見つめ、

「俺は口に出さずに返事をした。」

「知ってるんだよ、漆原くんのは。だから話したの」

「手を握れば判るよ、全部」

「本当、冗談だったら良かったよね」

俺の心の問いに結城は正確に返答してみせた。

「どんな手品だ？」

そう言って、握られた手を乱暴に振り払った。

「俺ってそんなに思ったことが明け透けに顔に出るタイプか？」

彼女は振り払われた手を所在無げに、ぐうーぱー、閉じたり開いたりしながら、

「手を握れば判るの。相手が何を思っているか、相手がなんて言うとしてるか。手を握れさえすれば」

「へえ、じゃあ」

俺は彼女の両手をとって挟むように握った。

「俺は今、何を考えてる？」

「『うそつけバカ』」

「正解」

「『分からん分からん分からん分からん』……まだ言おうか？ あ、もういいのね」

それでもまだ俺は半信半疑だった。信じてしまうと、面倒事に片足をつっ込んでしまうのは明白。俺は彼女に惹かれつつあるが、しかし、それは彼女の創作が中々どうして感情移――。

「私を避けるのは当然だと思う。世間を忌避したくなるのも判るよ。自分が、頭のおかしい人間だって自覚しているからこそ……」

「俺は……」

「悩んでるんだよね。だから二年遅れで大学にも……」

「違わない」

「私も驚いたよ、昼に手を握ってきたとき。本当はね、今日きっぱりこっちは好意を持ってないって言おうと思ってたんだ」

俺は何も言えない。

どうせ、いや、そんなはずは。

「漆原くんのこと、多分好きだと思う」

俺は彼女と目を合わせるのを拒んだ。

「でも私はほら、話した通り普通の人はちよつと……ううん、だいぶ違うから……」

悲しげに言う。握った手が震えている。ベンチ裏の茂みから音が

する。犬が吠える。なんだ犬か。おい結城、犬がいるぞ、犬。ところでお前、犬と猫どっち派なの？ 俺は猫派なんだよ。実家にな、ロッチっつーアホだけどもまあ可愛い猫がいてな。って言っても今は姉貴が一人暮らしは寂しいからとかなんとか言いやがって連れで行ってもうかれこれ五年以上会ってないんだけどな。頭撫でてーな。猫の毛って柔らかくてすげーいいよな。

で、お前はどっち派なの？

「…猫お」

「そっか。一緒だな」

俺は泣きだした結城の頭を撫でた。実に人間の、それも年頃の女性らしい気を遣った髪はまるで水を撫でてるようでロッチの毛とは比べられない。

だって、こいつは人間だから。

宇宙人なんかじゃないねえから。

見た目通りの人間。

希有な存在なんかじゃないし、標本にされたり解剖されたりもしない。

俺と同じ人間、人間、人間――。

「なあ、お前と俺は限りなく近い生命体って言ったよな？」

あえて口に出す。結城は俺の胸の中でちいさく頷く。

「でも俺、お前の心読めないよ」

やおら結城は顔をあげた。紅潮してるわ、涙ぼろぼろだわ、で大変なことになっている。もし結城が化粧の濃い女だったら、俺は間違ひなく頓狂な声をあげて逃げだしてる。はっはは。ブツサイクになっちま――。

殴られると思った瞬間、

唇を塞がれた。

何事か、なんて白々しいことは考えなかった。気取っても彼女には意味がないらしい。何が俺の唇を塞いだかなんて、ずっと眺めていた想像していた期待していた感触であるのは間違ひなかった。

脳に直接パイプでも繋がれたみたいに、結城の考えている夢見てる求めている忘れかけている探している笑っている——殻に籠っていない感情が刹那的に俺の中に染み込んで抜け落ちそうで中々落ちなくてなんか危うい麗句みたいな、

とどのつまり、気持ちいい。

唇が離れたあと、しばらく俺はだらしなく口を半開きにしながら、結城を思った。

隣で自分を抱きしめるような恰好をして、さっきまで俺のと重なっていた唇を震わせる結城を思った。

これ以上ないぐらいに結城を思った。遠くて近い彼女を。

「こうすれば自分の思考が他人に漏れるのか……」

「らしいね」

「らしいね、ってなんだよ。……あ、」

俺はことさらに視線をそらす。

「お前、やっぱ変だよ」

「漆原くんも変だよ」

「あー、俺も変か。やっぱ俺も変なのかな」

「うん。相当変だよ」

結城は泣きながら笑う。笑いながら泣く。こないだまで無感動な感じだったのに。昼に観た映画、俺はうるっとして泣きそうになっ
てんのに、お前はむっつりして泣くに泣けなかった俺ってなんだ
ったんだ。こんなことなら泣けばよかったよ。

「あれは」

「ん？」

「泣くの我慢してたの」

「あっそ」

結城が自分を守ってるように組んでる腕を解いて、抱きしめてキスをした。ハーフコート越しでも結城のコースアウトしそうな鼓動が伝わる。たぶん、俺も同じくらい震えてる。

ふたたび、結城の思考が、唇から脳に直結して流れ出てくる。気

持ちいい。あの映画どこが良かったんだろうな。上映終わったら他の客ブーイング起こしてたのにな。なんであんなので俺達は感動したんだろう。

俺達ふたりが変だからか？

いや今はそんなつまらないことはいいいんだ。ほつといいいいんだ。いつかの悪夢も、

死のうと悩んだ放課後も、いらない。

結城とキスをして。はじめて女とキスをして。その瞬間に俺には不要なものが増えた。結城と対話を重ねていくのに不要なものは、これから棄てていくんだろう。

遠くから近付いてくる足音が聞こえる。それもかなり早足。

誰か来る。誰かに見られる。他人にのぞかれる。

でも、知ったことか。

公園で抱き合う男女なんて普通だろ。普通だ、普通。

もし普通なこと驚く奴がいたら、そいつは変だ。

俺は唇を重ねたまま、結城に語りかけた。

結城は唇を重ねたまま、返事をした。

—終—

#48 再延長戦へブンズドア（ノワール公園の一夜 C－SIDE）

そうだ。これは大した話じゃないんだ。同じく、大した人生じゃない。取るに足らない話。道端のガムみたいなもんだ。仮に踏んだとしても、アンラッキーの一言で済ましてもらってかまわない。胡散臭い男だと思ってもらってもかまわない。

とにかく僕は今からひとつの話をする。君はそれを洗濯物を畳んでいるときのようにリラックスして聞く。言葉は音声でしかない。聴覚に言語を理解する力はない。もし本当に僕の話聞くつもりだというのなら頭を使うんだ。その立派な頭を使って僕に耳を貸してくれ。

——ここまで言っ、脳内伝播を拒絶^{オフ}らなかったってことは合意と判断していいんだね。

じゃあ準備はいいね？ 波長の調子はどうだい？ そうかそうか。オーケー。

では目を閉じてくれ。

そう、フルマラソンに挑戦して疲れきってしまった夜のように。

まず、単刀直入に言おう。

僕は死んでしまった。

よく聞こえなかったのなら、もう一度言うよ。

僕は死んでしまった。

「いきなり何を言い出すんだ、この人は。キチガイか？」

君はいま、これに限りなく近い感想を抱いた筈だ。それは間違っている。根本的には間違っているよ。僕の話に耳を貸している君も他人にとってはキチガイでしかないわけだ。

他人に今日の話を話したりしたら、即刻うしろゆびを指される暮らしの始まりさ。親に知られたら大変だ。君の親がどんな人柄で、どんな役職で、どんな肩書に固執しているかは僕に知る術はないけれど、大抵の親というのは子どもに鎖のような愛情で雁字搦めにするのが最良の教育であり、親としての幸福だと考えているからね。病棟に放り込まれて生物学的な飼育に肉薄した暮らしをよぎなくされるだろうね。

やけに小難しい喋り方で悪いね。僕は卑屈なんだ。卑屈だからこそ、君を信頼する振りが上手くない。君も僕を信頼しなくていい。信頼関係は地道に築き上げるものだ。突発的に芽をだしたりはしないさ。

牽制はこのぐらいにしといて、なぜ僕が死んでしまったかについて。名前も知らない誰かさんにすぎない僕の人生なんて興味はないだろうが、聞いてくれ。拒絶^{オフ}らなかった君が悪いんだ。ははは、冗談さ。まあいいだろう。時間は有限だけど無限に感じたりもするんだからね。

生前、なんて大仰だけど、まあたった一年ぐらい前の話なんだけど、僕はひとつの結論をだしたんだ。

——人間には『必要な人間』と『不必要な人間』とがいる。

と、とても極端で述懐するのもおぞましく、ぼっと赤面しちゃうんだけど、そのときの僕にはこの結論がすべてで、終着点だったんだ。

僕は所謂日蔭者としての暮らしを送っていた。君のクラスにも一人はいただろう？

席替えの度に、端の席を引き当てて授業そっちのけで外をぼーっと眺めていて、山の稜線を視線でなぞっているだけのクラスメイト。同級生との会話の合計時間が、コマーシャルみたいに短いクラスメイト。何の気の迷いか、陽にあたる場所にひきずりだされた際には見事なまでに侮蔑の栄養を頭からバケツいっぱいにつっかけられるクラスメイト。

それが僕だった。えっへん。

大丈夫、自分にはそんな暗いクラスメイトはいなかった、思っても大丈夫。

でも本当は、

『いなかった』のではなく、

『見えなかった』。

あるいは、

『いなかったことにした』。

これって当事者にいわせれば、ありがたいことなんだ。薄っぺらい正義心は矛盾でしかないからね。背中まで猜疑心の盾で守らないとなると、うーん、ぞっとするよ。だから、どうぞそのままの君でいてくれ。

すまないね、皮肉がちで。どうにも他人にメッセージを送るのなんて初めてだから。僕がまだ人間だった頃も他人と会話する機会はほとんどなくてね。どうにも、他人とのコミュニケーションってのに疎くて、それに簡潔に話すのが苦手なんだ。

僕が何者か気になるかい。そりゃそうだ。出しぬけに頭に直接メッセージを吹き込まれたわけだからね。困惑するだろうさ。でも安心してくれ、このメッセージは圧縮されてるから君がすべてのメッセージを聞き、理解するまで一秒もかからないはずだ。脳内伝播を機能できる人ならそれなりの知力もあるだろうし。

すまないすまない。そうだね、僕が何者かって話だったね。でも脱線は会話の醍醐味らしいじゃないか。許してくれ。

突然ついでにすまないが、ひとつ問う。

君は〈神様〉ってのを信じているか？

イエスカノーで答えてくれ。

：そうかそうか。なるほどね。確かに君の言う通りだ。

答えようがないだろうね。このメッセージは一方的なものだからね。返事は不可能。

「答えたくても答えられねーよ！ バーカ！」ってなもんか。はっはは。

いやね、なぜこのような宗教的観念に準じて進めなきゃいけない、至極億劫な話題を振るかというかね。僕は神様に会ったんだよ。死後、母さんに別れを告げて神様にね。

といっても神様って呼称は、人間が勝手に使ってるだけで、神様本人はどうでもいい風だった。神様は自分がどう呼ばれてるかより、自分が何をするかで必死らしい。風体はまあ神様らしく白ひげで三階建てのビルぐらいの体躯。ずぼらそうだったよ。

「母さんの子どもに生まれ変わりたい」

パイプをくわえた神様に嘆願した。マザコンと笑ってくれてもいいよ。

「そりゃ無理だ」

神様は煙を僕の顔にむけて吐いた。目にしみたが、無臭だった。

「どうして！」

「お前の母親はなあ、あの歳で子ども産むとなったら体がもたん。死ぬぞ。親子共々な」

「：：そんな」

「わしは別にいいけどな。お前ら人間はわしのことを崇め敬うがな、正味な話、一人死人が増えるだけじゃ。どうしてもええわい」

「母さんを殺すな！」

「殺そうしてるのはお前だろうに：：」

ってなやりとりがあってね。それから何十時間、いやあの世では加速度的に時間が進むから：。まあいいか、とにかくかなりの時間を費やした結果、僕は折れた。

「じゃあ母の来世で」

「わかった、来世な。おーい、だれかー。予約リストに書いておけー。ところでお前、名前は？」

「優太^{ゆうた}」

「苗字は？」

「読神^{よみがみ}」

「珍しい名じやのう。覚えやすくてええわい」

かくして、母が転生するのを待つことになったんだ。何十年後かは知らないけどそんな時間はすぐに過ぎていくしね。

「しかし、それまでは何をするつもりだ？」

神様は言った。

まったく考えていなかった。確かに体感時間が人間と差があるといても退屈であるのには変わりはない。

「他の人はどうしてるんですか？」

「まあ大体はそうじやのう。生物以外に意志として潜り込んでいくのう」

「生物以外に？　つまり無機質な物体にですか？」

「そう。お前も生きてた頃によくT^{テレビ}Vで観たりせんかったか？『これには元の持ち主の怨念が宿っているキエー！』って騒がれてるのを」

「あります。髪が伸びる人形とかですよ」

「そう。そういうのは大抵死んだ人間が時間潰しで、現世の物体に潜り込んでるんじや。ありがたがったり、怖がったりしてるが、ありやわしらにいわせりや噴飯ものじやわい。当人たちも退屈しのぎにもなるし、渦中の人になれるからうれしいなんて言っておるしな。霊媒師に気付かれてやっと一人前の居虚人^{いきよにん}だなんて風潮もすっかり出来上がっておる」

「居虚人って？」

「今からお前がなる立場の総称じや。現世の物体に無断で宿る者たち。――それが居虚人じや」

「なんだか居候みたいで嫌です」

「実際、居候より質^{たち}が悪いわい」

「僕は迷惑かけないように頑張りますよ」

「そうしてくれると有難いがな。まあ好きやってくれても構わんど。わしを理想で塗り固めてる人間に天誅じゃ！」

そういつて神様が大笑いすると足元がぐらついた。その揺れで自分が何かの上に立っているのだと今更ながらに気付いた。

僕はしばらくの間、黙考した。むろん、どの物体に潜伏するかだ。人形やらその手のオカルトに加担するのは御免だった。生きてた頃から胡散臭いと思っていたしね。種明かしをされて君はちよつとガッカリしたんじゃないか？

「決まらんのか？ なんならカタログもあるがの。最近のトレンドは確かラグビーボー…なんじゃったつけ。まあ希望とかないのか、抽象的でもええぞ」

「なるべく…人と関われるのがいいです。でも騒がれたりするのは…」

「ふむ、よからう。しかし、なぜ死して人間と関わりたがる？」

「死ぬ前に僕はあまりに人を避けすぎたと思うんです。自分は人を毛嫌いしすぎた。自分だって人間のくせにして。人間は愚かだって達観したSF作家のようにね。じゃあお前自身は何なんだって…。お前も人間だろって…。僕のために泣いてくれる人のちいさい背中を見てて思ったんです」

「そうか…。でもそんな都合のいい箱はあるかの…」

神様はむっさりと蓄えた顎髭をつまんだ。

「ぴーん、とすぐ閃いたりしないんですか？」

「馬鹿もん。全知全能だと思ったら大間違いじゃぞ。今やっとなるゲームなんてダンジョン五十六階で行き詰っておるっちゅーのに」

神様もテレビゲームをやるらしい。ゲーム雑誌も現世から取り寄せてるって。でもレビューは一切目を通さずにタイトルと発売日とプレイ画面しか読まないらしい。『金の絡んだレビューと猫の忠誠心は頼りにならん』って鼻息荒くしてた。

「…まあ適当でええじゃろ」

「いま考えるの面倒臭くなりましたよね！」

「カタログで適当に選ぶか」

「ちよつと！ 適当とか危ないからやめて！」

「大丈夫じゃて。駄目だったら駄目で帰ってこられるから」

「どうやって？」

「そりやもう電話一本で駆けつけるて。ピザ屋より正確俊敏じゃて」

「どうやって電話するんだよ！」

「親切な人に頼みなさい」

「どうやって頼むんだよ！」

「そりやもう体全体で訴えかけるんじゃ」

「それって、たとえば人形なら髪を伸ばしたり、ガラスならノック音奏でてみたり？ あんたさっき噴飯ものだ、って言ってたけど、もしかしてそれ居虚人は助けを求めているんじゃ…」

「そ、それ以上は言うてはならん！」

焦ったように神様は口元で指を立てた。しーっ、しーっ、と殺した声で連呼する。

「助けにいけよ！ いますぐ！」

「黙らんか！ わしは神じゃぞ！ それにな、老体に鞭打つなんて酷な話だと思わんか！」

神様が煙を吹きかけてきて、今度は悪意のような悪臭が僕の鼻を襲った。

「最悪だ…」

「なんと言われようが構わん！ さっさと現世で時間潰してこい！」
怒鳴って神様が鼻毛を一本抜くと、ぱっくりと足場に穴があいて僕はそのまま直下。ぐるんぐるん視界が回る感覚もなくて、摩擦なんかも当然なく、代わりに意識は摩り下ろされていった。

ただ落下したんだ現世へ。
で、気付いたときには…。

場所が公園だというのは分かった。知らない公園だったけど僕の前を通り過ぎていく人たちが口々に「ノワール公園」だと言っていた。たぶん、僕はそこにいるんだ。動けないし、尋ねられないし確認の仕様はない。

立ち止まる人たちは僕を蔑んだりしない。

立ち止まる人たちは僕に触れて淡々と去っていく。

「お買い上げありがとうございます」

僕には二通りの言語しか扱えない。しかし普通なら居虚人が現世の人に話しかけたりはできない。僕も奇特なものに宿ってしまったものだ。

「今日も元気にいつてらっしゃい」

田舎で、駅に毎朝立つお爺さんもこんな台詞を差別なく、区別なく、何処かへ向かう人の背に投げかけていた。あのお爺さんは僕に對しても笑顔で接してくれていたのを思い出したよ。こういうのは死んでから思い出すものじゃないね。死んでしまったらいくら感謝しても届かないんだ…。

僕が何に宿ったか、君は分かったかい？

たぶん分かってくれたと思う。相当な田舎でも今じゃ珍しくないものだからね…。

さて、ここからが本題なんだ。

ついさっき——僕はあつてはならない光景を目の当たりにしてしまったんだ。それが最も君に伝えたいことでもあり、君に助けを請いたいことなんだ。

目下深夜一時を回ろうとしている。いやいや、時間帯なんて関係ない。人間の狂態が許される時なんて戦火の間中ぐらいいさ。

笑わないでくれ。

真剣に話すからね。

嘘じゃない。真実でしかない。つまりこれはジョークじゃないんだ。

二十四時間稼働し続ける僕の目に映ったのは――すっ裸で疾走する変態。それかなり清々しい笑顔なんだ。

そして、負けじと爽快な笑顔でその変態を追いかける男。なにがなんだか判らない。自分でも何を話しているかわかっていないさ。でも、これは事実なんだ。視界に刻まれてしまっているんだ、今も。消えないんだ、今も。

理解は警察に通報したあとにしてくれ！

奴らは絶対に、しでかす。小規模な大事件をしでかすよ。あんな生き生きとした人間を見たのははじめてだ。やつらの爛々と燃える瞳孔は、僕の発光する微弱な灯りでもはつきりと確認できた。

頼んだよ。電話番号は分かるよね。

君はただ、

「ノワール公園に変質者が出沒した」と警官に伝えるだけでいいんだ。メッセージは難しくなんてないから安心して。

そして最後になるけど、これは提案というより、もしよかったらというか、君に余暇があるなら……。事が済んで落ち着いたら、僕の元に顔を出してくれないか。これも何かの縁だ。照れくさいけど。今思えば、人にこうやって願い事をするってのは生まれて、はじめてかも知れない。

叶えてくれたら、嬉しい。

僕の元に來た際には名乗らなくても構わない。君の顔をみれば、きつと……。

コインを入れずに僕に触れてくれ。僕にできるお礼は限られているけど精一杯感謝のしるしとして、コーヒーでも奢るよ。最近の缶コーヒーは本格的でそこそこ飲めるようになっていいるらしいから、君の舌に合うのも一つぐらいはあるだろう。

これもまた欲張りな提案かもしれないけれど、できればそのコーヒーは僕の前に設けられているベンチに座って飲んでほしいな。

寒い日に、白い息と飲むコーヒーってのは格別だから……。

短いけれど、長々とすまなかった。
ありがとう。

＊ ＊ ＊

「はい。はい、そうです。阿鼻川市あびかわのノワール公園に二人組の変質者おのしゅんが……」

小野春は指示された通りに警官に通報し、電話を切った。しきりに名前を聞かれたが、匿名でお願いします、と突っぱねた。悪戯と思われたかもしれないが、聞いた話は聞いた話でしかなく、信憑性を疑っているのはこっちも同じなのだ。おかしい話だけれど。

首を回してみる。うとうとしながら書いていたレポートには支えを失ったシャープペンが落書きを施していた。消すのは帰ってからでいいだろう。

もう一度首を回してみる。骨が、ぼべき、と鳴った。どうやら夢ではないようだ。

わざとらしく咳をしてからスウェットの上にダウンジャケットを羽織り、戸締まりをしっかり確認して外に出た。アパートの階下に降りたところで、念には念をとまたドアに戻って戸締まりを再確認した。先日隣人が強盗のような空き巣に入られたばかりだから神経質になっている。どうせ盗まれる高価なものなどないのだが、盗まれてくれと頼みたくなるものもない。

「寒いな……」

防寒はダウンジャケットで十分だと思ったが、マフラーもするべきだったか。首筋がひやりと吹く風で鳥肌になっている。

「こんな日に裸で外に？　ありえないな。風邪がひきたくてたまらないのか」

小野春のアパートからノワール公園まで徒歩で五分。休日には草野球やフットサルをする人々が砂糖に釣られる蟻のように訪れるほ

ど広大な公園だ。

このままノワール公園に行けば変質者と出くわす可能性もあるし、警察から聴取をされてしまう可能性もある。かなり面倒で、考えただけで嘆息が白く漏れる。

ダウンジャケットのポケットに冷えた手を避難させると、ひつ、と短い悲鳴をあげてしまった。冷えた何かが手の甲に触れた。それを掴んでみると昨日コンビニで買い物をしたときのお釣りだと判った。

「何円だろ」

気になったが小銭をポケットから出して数えはしなかった。じゃじゃら。じゃらじゃら。馬鹿らしくなって笑えてきた。寒くて笑えてきた。常識的に考えてみればやはり無駄足になるだろう。

でも、歩みを止めはしなかった。

小野春はベンチに座り夜空を見上げて、缶コーヒーをすすりながら一仕事終えたようにつぶやいた。

「タダで飲むと格別に美味しいな」

たった十分間の出来事だった。

――終――

#49 聖夜ぐらい静かにしやがれ

小用を足しているときに頭の旋毛てっぺんに突き刺さった衝動は、すぐさま脳神経を刺激してからに、身体を俊敏に。私はトイレを飛び出した。

夜が更けると、寝なくては寝なくてはと焦燥が立ち起こるがそれは枕の綿に染み込んでいくだけで無碍に時間を費やすだけ。私はそういう夜は夢想到に耽ったり、さかむけをたぶらかしたり、アルバムをぺらぺらとめくってみたり、ヘリビングデッド・サンポールゝのCDをヘッドフォンで聴いたりする。

そして、今夜はたまたま「掃除をしよう！」という日だった。

エネルギーはとかく有り余っている。有り余っているのはいいことだ。いいことだと思う。何ものでも常に有り余っていれば心にうるおいがあるものだ。

「やるぞー」

パンツとズボンをいっしょくたにあげて、顔を景気づけに叩くパンパン！

トイレから部屋に戻ってぐるり頭を回して現状確認。なるほど、こりゃ潜在的に掃除をしなくては、と命令がくだるわけだ。汚い部屋だ。閉め切られた水玉カーテンごしには近所の家のクリスマス・イルミネーションの光芒が侵入してきていて、どうにかしてこれを遮りたいな、なんて目標が湧いたけれど刹那、蒸発しやはりカーテンを全開にしてイルミネーションの恩恵にあずかりたいな、と思うことにした。

手始めに…。

早くも私の手は静止した。所在無げに八の字を描いてみたりする。

「どこから手をつければいいの」

散乱した衣類からだろうか。

散乱した書物からだろうか。

散乱したCDからだろうか。

散乱した化粧品からだろうか。

逡巡の糸が断ち切れる前に、とりあえず四角テーブルを蹴り上げてみた。なんとなくコーナーキックの塩梅で思いつき蹴り上げてみたのです。

手鏡、スタンドミラー、ミラー、化粧品が舞う。空転するミラーに私の顔がまるで実写のように映り込む。ウイנק一発。ぱっちりオーケー。夜更けも乗り切れる目尻をしている。さすが実写だ。血が通う質感のリアルな映像だね。

たちまちフローリングにステージを変えて散乱し直した化粧品のうち、マニキュアの瓶が餌付けされた犬のようにころころと私のつま先に当たった。

こっん。

なるほど。得心行った私はマニキュアの瓶を掴むなり蓋をあけ、中身の液体をどぼどぼと秋刀魚に醤油をかけるようにこぼした。わざ、わざ…。当たり前だけど、パープルレッドのマニキュアは即フローリングを染めた。

「殺人現場みたいだ…」

こぼれた液体を眺めていると、焦燥よりも早く、うつとりとしてしまうのはなぜだろう。食事の時間にコップからこぼした麦茶も好き。歪んだ曲線ながらも必死に前進していくみたいで…。

「さてさてっ」と

お気に入りで三日に一度は絶対に切るバンドTシャツを脱いで、それをマニキュアの泉にぽとりと落とした。だらりと垂れ下がった舌に旅客機が墜落しているロゴがプリントされた白を基調にしたTシャツは滑稽なぐらいあっけなくパープルレッドに色づけられて、家をイルミネーションで彩る感覚もこんな感じなのかなって、窓から隣の家に向かって怒鳴ってみようかな、と思ったけど顔をだして確認するともう眠っているようで家の電気はすっかり消えていた。自分たちが眠ってもう見ないのならイルミネーションも消せばいい

のに。日ごろはエコエコ言ってるのにどうしてこういう派手な真似は平気なんだろう。ワイドショーが呑気にイルミネーション特集を組んでるから？

そうだ。間違いない。ワイドショーのせいだ。ワイドショーのせいで貴重な電力が浪費されたんだ。あのテレビ局も、あのテレビ局も、このテレビ局も全部放送権剥奪されてしまえ！ ワイドショーに天誅を！ エコに傾倒している私のサンタさん聞いて！ ついでにスポーツ紙のエロイ広告も禁止して！

とかなんとかサンタクロースなんて小学三年に信じるのをやめた私が躍起に訴えてみたところで、これは祈りではなく、気休めに成り下がる。

なんだか本当に殺人現場の後処理をしてるみたい。笑える。

大好きなバンドの物販で握手までしてもらって買ったTシャツだけど変色しちゃったらもうどうでもよくなったし足で踏んでマニキュアを拭き取った。昨日まで大好きなバンドだったけど。さっきまで大好きなバンドだったけど。今じゃ目障りなぐらい。大体これも影響だし。

部屋の隅にTシャツをおざなりに蹴っ飛ばして、

「次はお前だー！」

くずれたCDの山にドロップキックをきめこんだ。ぐしゃり。ごしゃり。めきより。小気味よい音が私の関節の節々と共に跳ねる！

「らん、らん、らん、らん！」

ナウシカ・レクイエム（ラン、ランララ、ランランラン、ラン、ランラララン）が勝手に脳内で流れ出してドーパミン活性化に貢献してくれます。子どものころからそうでした。覚醒したように私は乱暴の限りをつくして鼻血をなめながら、にっこり笑い、周りのひとから不気味がられるのです。

CDの山に頭をもぐらせて呼吸をして打ちつけて、額から赤がついっと垂れ下がると鼻血の赤を川が海に還るように逃げてくれた。ぼたぼた、と床に垂れて斑点模様の完成だ。

暴走する私。止まらない薄い流血。クリスマスに暴動が起らないのはみんな後ろめたさを根底に植え付けられているからだ。クリスマスプレゼントに騙されて、重要な側面を見抜かれないように大人たちはしていたのだ。私は気づいてしまった。二十一の私は気づいてしまったよ、ついにね。

ぐうう、ぐっ…。

「お腹すいた」

クリスマスプレゼントの真相は私に空腹をもたらしした。「フライドチキン食べよう」と

冷蔵庫の中にはフライドチキンがある。バスケットに二本だけ入っている。そのうち一本はクリスマスピーで皮がほんのり朱色で、においだけで私は食欲をうせる。だから私が食べるのはもちろんノーマルチキン。原始人が狩りに使ったようなブルーメラン型のフライドチキンだ。

冷え冷えのフライドチキンを電子レンジにセットしたら炊飯器から湯気に抱かれた白米をもっこり茶碗に盛り、待機。電子レンジの中でチキンがぐるぐる回る。チキンも驚いているだろう。まさかこんな大車輪な目に合うなんてコッココと鳴いていた時には思ひもしなかっただろうし、と思考がぐるぐるとチキンの家系図までいつちやう前に――

ちーん！

「わーい」

電子レンジを開くとフライドチキンが熱々で、やばい。これは直に触ると大変なことになる。どうしたものか。食べたい。でも食べられない。皿の上でフライドチキンは誘惑するように吐息をつき続けている。よだれが舌にじんわり滲んできて、ああ、もう！

私は立ったまま、白米をかつこんだ。チンされたフライドチキンを眺めながら白米をかつこんだ。がつがつ。こりやもう端無いの極地といった感じで、しかしそれはそれと懽然とした感じでもあつて、とかく白米は旨いということだ。がつがつ。白米さえあれば世界は

成り立つのではないか。恋人なんていらない！ 白米さえあればいい！ 実家から送られてくる品種不明の白米最高！ ちょっと水を多くして、いかにも澱粉^{でんぷん}って感じで歯にあたると水気を出すぐらいが一番好き。がつがつ。うむ、今回ベスト！

箸が一本折れて歯茎に刺さった。その激痛で私は、あっもう御飯食べ終わっちゃった、と気づいて、電子レンジに手をつっこみまだ熱々のフライドチキンさんを鳥類が魚を狩る瞬間のそれのごとく、ぎゅむつ、と驚掴みして、

「そーれっ！」

窓にむかってフライドチキンのご真ん中ストレートだ！
べちよち。

ガラスの強固な防御力に鳥風情が勝てるはずなかった。もし高級な、つまり地鶏だったら勝負はわからなかった。もし勝利の女神が、宗教的な理由で鳥を食せなければ、このような結果に…。

茶碗を捨てて、部屋に戻ってリビングに座して天井を仰ぐ。満腹だ。これ以外の言葉が見つからない。

聖夜ってのはこういうものだ、としみじみ思ったりするけれど外から不意に男女の嬌声が聞こえ、げんなりして窓開けて怒鳴ってやろうか、どうせクリスマスだからテンションあがっちゃってとか言えば許されるだろうしやってみようか、いやいやいかん、それはいかんぞ私。なんとか自重する。

気を変えるため、テレビでも見ようか、とりモコンを探すけどなかなか見つからず。散乱したCDの小山に飲まれてしまったのだろう。

「よーし、いっちょやりますか」

軽くストレッチをして体をほぐしたら、水泳の開始だ。今夜の種目はクロール。ばたばたばた。フローリングのプールを泳ぐのって気持ちがよくて、バタ足が太鼓みたいな音をたてるから気分も盛り上がるしいい感じ。食後の運動にも適してるし超絶おすすめ。ばたばたばた。

C D 山^{さん}に到着したら海軍の人間魚雷よろしく、猛突！ ケースが喧嘩するけたたましい音が鳴るけれど、私の頭の中ではやっぱりあのテーマソング——ナウシカ・レクイエムが頑として流れてるわけで、負けない。

体を——反る！

「わーい、わーい、山ひとつをぶっ飛ばして、リモコンをゲットしたぞう」

寝たままリモコン操作。あさっての方向でも操作できる赤外線って便利。

テレビがつくとたちまち部屋は芸人の笑い声に包まれた。どうやら下世話な話で爆笑しているようだ。

「最低。今日なんの日かわかってんの？」画面の左上には『ライブ！』の文字が。「あー、確信犯だね。こりゃ」

それからの私の行動はまるでシューマツハに乗り込まれたようだった。実にスピーディーかつ無駄のない鋭敏な動き。二手先の動きが念頭にある感覚。いやむしろそれじゃ遅いぐらい。

「あのー。いま、おたくの、バラエティ観てるんですけどお。今日がなんの日か、知ってますよね当然。それなのにこういう身も毛もよだつ下^{しも}ネタってどうなんですかあ？

放送倫理的にどうなんですかあ？

ファーストライナーじゃないですかあ？ アウトじゃないですかあ？

ちよ、ちよっとおたく聞いてます？

確かにあなたも今夜みたいな日にアルバイトで電話係やらされてるってのは辛いだろうし、今すぐ謝罪一辺倒で電話を切りたいたってのも分かりますう。私もそういうの考慮ってのはしたいと思ってますし。はい。でもね、許せないのね。せっかくこっちはいいムードで…え？ 今ですか？ そりゃもう彼氏といちゃいちゃですよ。さっきまで大っきいチキンをね、こーんな大っきいチキンをふたりで仲良く、あーん、ってして完食したし。

え？ 酔ってないよ？

しらふに決まってるでしょう常識的に。しらふじゃないなら電話番号ぴっぴばなんて不可能！

アイ・アム・シラフ！ オッケーかなバイトさん」

ツー、ツー、ツー。

「：切りやがったクソバイト！」

据え置き型の電話を叩きつけるように置いたけど気がすまないの
で、テレビに映ってるグラビアイドルに、

「あ？ ちょっと胸が大きいからって調子こいてんじゃねえぞコラ
ア！」

とかメンチ切ってみたりしたけれど、それでも気がすまないから
困ったが、冷蔵庫の上に異彩を放ちどっかり陣取っている箱が視界
に入って、ぴたりと静止。

ふー、と覚悟を決めてキッチンに行き、その箱をそつと、赤ちゃん
を抱くようにそつと掴んだら、そつと足音も立てずにお茶運び人
形みたいなポーズのまま部屋に戻る。この白い正方形の箱。クリス
マス仕様の箱。リボンしちゃっておめかししちゃって、箱のくせに
結構可愛くて、ぎゅつとしたいけど自重する。中身がどうなるか。

ある種、爆発物よりやっかいな箱をカーペットにそつと置いて、
開けてみるとそこにはやっぱりホールケーキ！

「おお：」思わず口に出る感激。「ちよつと欠けててブサイクだけ
どやっぱりケーキはすんごい：」

実は昼にもうぺろぺろつと食べてて――

「バイバーイ！」

テレビ番組でもちよくちよく見掛ける有名パティシエの藤川光太
郎が丹精を込めて仕上げたストロベリー・ホールケーキに、憤怒の
鉄槌を振り落とす！

白の飛沫が顔にかかる！

ぺろっ！

ぺろぺろっ！

「美味しーいっ！」

もっと食べたくて拳を何度も落とす。がんごがん！ とかとんとん！

ぺろっ！

がんごがん！ とかとんとん！

途中からケーキを殴っているんだか床を殴っているんだか拳を傷つけているんだか、はてなマーク。

ぺろぺろぺろぺろぺろぺろ、る…。

ああ、見えちゃった。見えてきちゃった。如実にそこにある。見える見える。ケーキに潜んでいたそいつが私を睨む。不細工に苺でデコレーションされたデコ携帯のおでした。殺してやりたい。

着信ありの光が、ちかちか。

外はイルミネーションが、きらきら。

——殺してやりたい。

上唇についたホワイトクリームをなめると水っぱくて嫌になった。しょっぱくて嫌になった。

こらえないと。こらえないと。暴れるのは常だ。でも、湿っぽいのはダメなのだ。そういうノリは嫌で、嫌で、嫌で、心臓が胸からこぼれ落ちそうになるのだ。こぼれ落ちた心臓を拾うには下を向かなきゃ。下を向いたら、もっとたくさんこぼれそうになる…。

崩れそうなジェンガのように耐える私を不意に、あのメロディが襲った。デコ携帯がりりんるん蠢動する。

着信だ。着信音は聞き慣れたあのメロディ。彼だけが好きなバンドの曲。マイナーだからわざわざサイトを回って探してやっとダウンロードできた曲。サビしか知らない曲…。

届いたメールは読まなくても内容は知れた。どうせいつもの素っ気ないメールに違いなく、期待するのも損というものだ。

でも、期待してしまうのが私の悪癖。

『葉飲んで早く寝ろよ。明日、朝行く』

聖夜は人によつては特別でもなんでもない。

同じように――誕生日だって自分以外にとつてはどうだっていい日なんだ。

デコ携帯を壁に投げつけて、睡眠薬と鎮静剤を噛み砕き唾液だけで嚥下して、ベッドに沈むように寝転がって、ああいつもと同じ夜だね、って思ったのを最後に思考を切つて微睡みを待つ。

聞こえてる聞こえてるよ。

そんなにうるさくしなくたって聞こえてるよ。眠れるよ。

堕ちる直前、鼻を甘ったるい匂いが塞いで、耳をあのメロディが塞いだ。そして塞ぎきれなかった口から、

「朝起きたら部屋が片付いてますように」

私だけのサンタクロースに祈った。

メリークリスマスよりも、ハッピーバースデーな私、眠る。

――終――

#50 殺すには金が必要

「今度の火曜、誕生日だよな？」男は言った。

「火曜？」女は携帯電話を開き、スケジュール帳を確認した。「そうね。誕生日だわ」

男はおよそ上品とは言い難い笑みを浮かべ、

「なにか贈るよ」と言った。

「へえ」

「なんだよ、その反応」

「期待しないで待ってるわ」

女がこうも素っ気ない反応を返すのも無理はなかった。男には借金があった。三百万。福沢諭吉のクロール軍団のような額だった。

「まあ：そうだよな」男は首を振った。「期待しろ、っていうほうが無理か」

女は遠慮せず首肯した。

三百万。すぐに手に入りそうな錯覚を覚えてしまう金額だ。塵も積もれば山となる。借金という山を砂場で創るのは容易かったが、崩すのは難解を極めた。

遮二無二労働に努めても、あるいは利子を請求されないからといって目を背け遊びに耽っても借金は付いて回っただろう。なぜならこの男はそういう人種だからだ。

「どんなのにしようかな」男は無邪気に雑魚寝を始めた。猫が爪をかいいたせいで傷みのある畳みがぎしゅ、と音をたてた。

女はまるで期待していなかった。プレゼント。プレゼント。声に出さず繰り返してみる。彼からのプレゼント。胸が高鳴る事もなければ呼吸が荒れることもない。一定の脈。平静。

「お前が驚くのにしてやるからな」男は天井を見上げながら笑った。「何をもらってもきつと喜ぶわ」

「なんだよそりゃ」

「あなたからプレゼントを貰えるってのは、そういうことなのよ」

＊

「やあ。待たせてしまったようだね」

「そんなに待っちゃいないわ。たかが三十分よ」

女の皮肉にわざとらしく肩をすくめ、男は言った。

「三十分もあれば大抵のことができるじゃないか」たとえば、と提案しながら女と相対する椅子をひいて座った。「そうだな。カップラーメンを十食分とかね」

「信じられないほど例え下手ね。あなたはラーメンを十食も食べられるの？ 飽きもせずに。胃袋と相談もなく、ぺろりと」

「そりゃ無理な話だ。見てのとおり」男は自分の体をしげしげと眺めた。屈強、厳格、肥満、成人病。それらに対極する体温計のような体型だ。

「じゃあ金輪際その例えは使わないこと」

「了解」

「それでこの遅刻はちゃんにしてあげるわ」女は横柄に言った。しかし皮肉は込められておらず、直截な冗句。

冗句には笑って応えてやるのが順当なので男は、

「サンキュ」

言うなり女がカフェでなにを飲んでいるかを確かめようと身を乗り出してコーヒークップを覗いた。白の、叩きつければ当然割れるであろう陶器には格調高い泥水——もといカフェオレが注がれているようだ。とけたミルクとコーヒーが喧嘩しあうことなく鼻をくすぐるかほりを舞い上がらせているから、男はカフェオレに違いないと断定した。

男は眼鏡を外してテーブルの隅に目をやった。蟻も気づかないぐ

らい微量の砂糖がシュガーポットからこぼれていた。それをさけるように慎重に眼鏡を置いた。それから、

「すいませーん」

あさつての方向に叫ぶ。すると女性店員——貴族につかえる侍女のようなメイド服を着た女性店員はにこりと無償の笑顔をうかべつかつかと靴音を鳴らしながら男が呼ぶままに注文を受けに来る。

「えーと、彼女と同じのを」

「はい？」

「彼女と」男は女を指さす。次に自分を指さして、「同じのを」

「ええ、お客様」

メイドは困惑ぎみに女を見た。救いの手を、言語変換を……。その目は語っていた。

女は視線を無視した。いじわるというよりは、もっと先の諧謔味をふくんだ回避だった。彼女——かしわぎふう柏木楓にとってこれは日常に起こりうる胸踊るイベントでしかない。

「あの、ご注文」

「だからさ彼女と同じのでいいって」

「えっと」

メイドは間近で顔を拝見すると不細工だった。メイド服を脱いでしまうと彼女はようになってしまうのだろう。彼女は彼女でなくなってしまうかもしれない。ひとつ確実にいえるとしたら、道すがらすれ違っても誰ひとりとして振り向かない無個性の顔だということ。それで化粧栄えもしないのだから絶望的だな。男——リ・ンルは苛立たしげに笑った。

「なあ、楓。どうしてジェスチャーが伝わらないんだろうな。俺が下手なのか？ それじゃ例えに続いて二冠になっちゃうね。可能なら」彼は鳶色の瞳でメイドをねめした。「すべての責任をこの貧乏貴族のジリ貧幸薄雌狐に」

楓は唇を隠して、くくく、と笑った。底意地の悪さが露見される笑みだった。本当に辛辣な物言いしかできない人ね、リ・ンル。こ

れを加味して二冠じゃなく三冠になってみてはどう？

リ・ンルは楓の笑い声を聞いて、だめだこりゃと肩をすくめた。

「まあいいさ。最優先事項は遅刻した俺が、ぜえぜえ走ってきた俺が乾いた喉を潤せるかどうかでことだ！」

リ・ンルは怒鳴るなり、楓のコーヒーカップを取り上げ、まるで行水でもするようにまだ湯気だつ高温のカフェオレを、ぼんくらなメイドの顔面に浴びせた。

首をしめられたようなメイドの短い悲鳴。

悲鳴にねじ込まれる楓の喜劇役者じみた笑い声。

「その味と寸分違わぬ飲み物を持って来い。わかったか？」

メイドは細い指でカフェオレを拭う——払いつつ、熱にうなされながらもこくこくとうなづいた。状況が飲み込めていないようだが命令は飲み込めたらしい。逃げるように去っていく。足跡代わりにぼたぼたと濁った雫が店内にまかれる。台風の日じゃんちゃしたガキのようだな、リ・ンルは思った。

「馬鹿ね、あんた」楓は目尻をこすりながら、「言葉が通じないならメニューを指させばいいでしょうに」

「ああ、そうか。その手があったか。失念してたよ」

「本当かしら」

「もちろん嘘だ」

「リ・ンル、あなた最低ね」

「お互い様だろうに」加虐趣味をもつと生活に支障が出てこまる。こらえられない性癖は人種は違えどあふれるには十二分すぎる。言語なんかよりずっと。

「ところで楓。用ってのはなんだい。こんな場所……に呼び出したりしてさ」

「こんな場所なんかってことないでしょ。いいじゃない、ここ。私は気に入ったわ。熱湯をぶっかけるオプションがあるならもつと早くくればよかったと後悔してるし」

「そうかい」

「嘘だけだね。用はプレゼントの話よ」

爆発的に増加しているメイド喫茶だがリ・ンルは一度として足を運んだことがなかった。日本人の流行り廃りにいちいち付き合っているのは心労でノックアウトしてしまうからだ。それにメニューに記載されている値段が悪徳そのものだ。品目もふざけている。

らぶらぶジャンケン☆ケーキ……1800円

ミルクでご主人様のお名前書いてア・ゲ・ル（ホットコーヒー、ホットココアに限ります）……1000円

ツィショット……1500円

頭なでなでしたげる……500円

馬鹿が。馬鹿めが。

だが、とり・ンルは思った。二番目に注目する。ココアにミルクで名前を書くのは熟練の腕が要求されるだろ。ただものじゃないはずだ。メイドのエキスパート。プロ。バイトでやっているんじゃないだろう。感服するね…。

「リ・ンル？ どうした？」

「ああ、ごめん。ちよつと驚いてたんだ」

へえ、とだけそっけなく返すと楓は本題に入った。リ・ンルが着くまえに確認したおぼろげなメニューに『熱湯をぶっかけるオプシヨン』は見当たらなかった。おそらく、ここに居座れる時間は極僅かだ。あと数分もすれば注文したカフェオレではなく、しかし劣らず熱した鉄のような感情を振り回しながらメイドの上司がくる。

「殺してほしい人がいる」

楓は呼吸をするように言った。自分たち以外には大学生風の数人——アニメキャラのコスプレをしているのもいれば、詰襟の学生服

のもいたがそんな着せ替えお遊びをするのは退屈を不燃焼している大学生ぐらいだろう——が店内にいるはずだし、まるっきり死角で距離もある、盗み聞きされる心配はないだろうが念のため英語を使った。日本人離れした流暢な英語だ。

「：マジでか」

リ・ンルはぼそりと呟きをおとし、シュガーポットの前においてあった眼鏡をかけ直した。レンズは入っていない。

「本当よ」

「ついにか」リ・ンルは宝くじに当選したかのように身震いした。

「ついにきたのか。このときが」

「そう。待望のって感じでしょ」

「ああ」彼は首肯した。「非合法の夢も叶うものなんだな」

まさに夢みるように言ってから、十字を切る。「神よ、感謝します」

「神って私のこと？」

「すべての神にだよ。名もない神もふくめてね」

おお。ああ。うう。喜びを隠さずにリ・ンルは呻いた。人を殺せる。人を殺せるんだ。じりじりと人を殺せるんだ。この手で、今しがた十字を切ったこの手で。素晴らしい。想像が現実になるカタルシス……。いや、待て。まだ早すぎるぞリ・ンル。喜ぶのは彼女の提示する条件を聞いてからだ。いやまだ堪えるのも一興。殺人を実行してから万感の思いとショートホープで肺を満たすんだ。彼女に感謝するのはそれからだ。

「殺してもらうのは私の彼氏」

リ・ンルは臆面もなく、素直に拳を握った。ヒヤッフ、とげつぷに似た噛み殺した歓声をあげた。彼氏。最愛の彼氏。彼女が育んできた愛をぶち壊せる。それも彼女が望んでいるのだ。最愛を裏切る最愛ってのはどんな気分なんだ、楓。君はいまどんな気分で僕に殺人を委託している？ 答えなくていい。それより続きを聞かせてくれ。

「十年付き合ったわ。この際、年数は自慢にはならないけど料金には結構関わってくるわよね。だから言う。十年付き合った彼氏。それを殺してほしい」

「無料ただでか？」そんなはずはない。だが話をすすめるにはちょうどいい問い。

「いいえ」彼女は首を振った。まぶたが震えている。「三百万で」
「安い。安すぎる。たったの三百万で？　それは安すぎるよ」

リ・ンルは明確に嘲り、

「僕を舐めないで欲しいね。そこまで安い男じゃあない」

「でもいいのよ、三百万で」

「三百万なんて、今すぐ銀行に行って」リ・ンルは腕時計を一瞥した。「訂正。コンビニに行っておろせる金額じゃないか。ありがたみがまるでないだろ。安すぎる。もつとうなるような金額じゃないと」

楓は訴えかけるリ・ンルの目を見据えた。三百万。たった三百万か。三百万ってのはどれぐらいの厚さなのだろう。視線を落とすとチョコレートをかたどったコースターが目に入った。これよりは厚いだろうか。貧困な想像力ではたった三百万すら思い描けない。

「なあ、楓。その倍でどうだ」

「いや、いいの。三百万で。曲げるつもりはないわ。私にはこれ以上の金額は無理」

リ・ンルは何も言えなかった。目をそらした相手に詰め寄るのは駄々をこねるのと同じだからだ。希望通りに物事が進まないと拗ねて相手を不快にさせる許可証を持つのはおもちや屋にいる子どもだけだ。リ・ンルは楓よりは年下だがそこまで幼児化してはいない。しない。したくない。

ふたりが沈黙に身を任せていると、つかつかという靴音が聞こえてきた。近づいてくる。その足取りは恐る恐るといった感じた。怯えている。会話が聞かれたか。ふたりは同時に音の方向を――

先刻のメイドだった。前髪はまだ完全に乾ききっておらず、化粧

はほとんど落ちている。彼女は豆のような目を潤ませながら、
「お、おまたせしました。ご主人様」メイドはテーブルにカップを
とすと丁寧に置いた。「こ、こ、こちらご注文のホ、ホットココ
アですう」

ホットココア——楓が口の端をわずかにあげた。

「先程、大変失礼な、あの、ことをしてしまったのでこれはサービ
スですう」

メイドはリ・ンルからの許可も待たずにサービスを開始した。小
ぶりのミルクポットから白濁色をココアにたらししていく。リ・ンル
は無言のままそのサービスを受けていた。

「できま、したあ！ よかったですう！」メイドは膨張する服の上
からでもわかるちいさい胸をなでおろした。「本当によかったです
う……う……」

事なきを得たと勝手に自己完結をし嗚咽をあげるメイドにリ・ン
ルは無味無臭の声音で尋ねる。

「この名前をいれてもらうオプションは何円いくらだっけ？」

「せつ……」

「千円らしいわ。それにしてもなんであなたの名前知られてるのよ」
と楓がインターセプト。

「そりゃ入店するときを書くからな」

「サービスだから無料ですう、ご主人様あ」わーん、とミルクポッ
トを抱きしめるメイド。「すいませんですうう」

リ・ンルは注文違いのホットココアに描かれた『李』という字を
視線で書き順通りなぞって、

「安すぎる」と感嘆の声をもらした。プロの技が千円だと。

「三百万」楓は繰り返す。「三百万よ。おかしいことをするんだも
の。破格でお願いするわ」

リ・ンルは答えずに『李』に口をつけた。ずずずず。ホットココ
アは舌がとけるほど甘かったが渴いた喉を潤すには適しちやいな
い。

＊

翌週の月曜日。つまり誕生日の前日に柏木楓のもとに男からプレゼントが贈られた。

なんの装飾もされていない茶封筒は無造作にポストに届けられていて、楓は顔色ひとつ変えずにそれを部屋まで持って帰った。彼女は戸惑いもしなかったし喜びもなかった。無論、吃驚することもなかった。

すべてが予定調和だった。

ペーパーナイフも使わずにびりびりと封をあける。

「あーあ」溜息混じりに呟いた。「あーあ」

彼女は壁にもたれながら生の現金を撫でた。三百万。五年前から増減していない三百万。コーヒーコースターより厚い？ 彼女はすでにあのカフェのコーヒーコースターの形状を忘れていた。

通販カタログでもめくるように三百万を指先で扱いながら、プレゼントの約束をして以来、会っていない男の顔を思い出そうとした。付き合った年月の割に克明には思い出せなかった。ぼやけている。ピンとがずれている。数年前から男の顔なんて見ていなかった気さえた。

いまや男の顔を確かめる術はない。

楓はプレゼントを雑に扱うだけで、その日を無駄にした。

明日はさらに有意義に無駄にする。三百万の使い道は限りなく有限だが、彼女のこれからは無限となり、同時に虚しさをとまなう。

――終――

#51 焦げていく風景

こんな場所来たくなかった。気乗りしないドライブは悪夢の居眠り運転だ。

休日の家電量販店ほど人の声と機械音が騒々しく、競い合い共存する場所はない。

佐藤幸辰は人気アイドルが微笑みながらマイナスイオンドライヤーで髪を乾かしている等身大ポップに怯み、立ち止まった。ぶん、と自動ドアが開き、砲声と思える異常な音たちが群がってきた。心のどこかでもしかしたら客足が遠のいているかもしれない、と考えていた。

家電量販店は蛇に睨まれた蛙のような幸辰を迎え入れた。いらっしやいませ……。どうぞどうぞこちらへ……。さあおいでおいで……。こっちのレンジは甘いぞお……。

「ねえ、パパ。はやく行こうよ」

動かなくなった父を慮る息子の健太^{けんた}が腰回りを引っ張った。幸辰はかぶりを振った。子の前で情けない。

「すまん」

「どうしたの」

「何でもないさ」なんてことはない。「さあ行こう。どこに行きたい?」

健太は利発な子だ。父の異常に気づいている。でも子どもは子ども、親の言葉こそが真実で、すばやく吸収する。

「ママと姉ちゃんは向こうに行った」

健太はドライヤーコーナーの方角を見た。妻と娘がなにやら楽しげに歩いていく背が見える。ポップの影響だろう。わかりやすいやつらだ。

「お前はどこに行きたい?」

健太はうーん、と唸り、

「ゲームのところ」

「やっぱね」

脂汗が浮かぶ額を拭って、無理して笑いかけるが健太はすでにゲームコーナーに釘付けだった。

やれやれ。

「よし、行くぞ」

「うんっ」

「ただし買わない」

えー、と健太が不満げに言いスキップで先に行く。幸辰は鉛玉を当てがられたような底冷えを無視して息子を追った。足取りは自然と遅くなる。

腹が痛い。くそったれ。

ゲームコーナーに着くなり健太は最新ゲーム機の映像が流れるテレビに夢中になった。わーすごいなこれ、と感嘆して目を輝かせている。

幸辰も画面を覗き込んでみた。武士の格好をしたキャラクターが束でやってくる野武士たちをばったたと斬り捨てている。歴史物のゲームらしい。キャラクターの人間味ある輪郭、服の皺までありそうな緻密な画、断末魔。ゲームもここまで進歩したのか、とアナログな2Dゲームしかプレイしたことのない幸辰は息子同等の感動を覚えた。同時に自分も時代に取り残されつつある人間——つまり中年になっているのだと自覚してしまった。

「人殺しのゲームだ」健太はいった。「でも血が出ない」

「本当だな。血がまったく出ないな」

息子の口から『人殺し』と物騒な単語がこぼれたのに内心どきつとした。あまり触れたくない話題だ。息子には乱暴な言葉に触れてもらいたくない。

「死体も消えてくね」

ぎゃー。画面の中で野武士たちは断末魔をあげ倒れるが死屍累々とはならず、屍は霧のように消えていく。ぎゃー。断末魔が立派だから高尚な死を与えられているのかもしれない。どんな死体も等しく醜いから。

「あ、終わった」

画面が切り替わる。宣伝映像だったらしい。どうりで誰もプレイしていなかったのだ。コードのあるコントローラーも見当たらないし。

はたと幸辰は周りに視線を配った。ここまで進化しているゲームだ。コードレスのコントローラーってのもあってもおかしくない。離れた場所から誰かが……。だが、周りにはだれもいなかった。いるにはいるが画面に釘付けになっているのは自分と息子だけだ。

切り替わった画面から大仰な効果音が流れ出した。ばーん。どどどどど。ききんきいんっ。

『リアル・アウト24』

ぐるぐると廻ってきた血文字が礫られる。ゲームのタイトルのようだ。

たったいまゲームコーナーに入ってきた小学生の集団が、おー、と騒ぎながらテレビを眺めだした。健太も小学生のため、小学生の集団に中年がひとり紛れ込んだ形となる。気恥しさを感じるが、まあ子連れなのでこういうは馴れている。しかし幸辰は一応差別化のため背筋を伸ばした。

「やっべ。リアル・アウトじゃん。やっべ」

「リアアウトのプロモもう流れてんだな。はじめてみた」

話題作らしく小学生たちがわいわいしゃべりだす。

「発売日いつよ」

「来年っしょ」

「マジで？ んじゃプロモ流すのまだ早くね」

「発売日早まったんかも」

「うそっ」

「うー、でもフォミ通には書いてなかったな。そんなこと」

すこしばかりでも偏った知識が露見される会話を聞くと異国語のように思える。

「嬉しいけどリアアウ発売したらやべーな。まだ金貯めてねえし」

「僕も」

健太がちらりと幸辰を見た。幸辰はことさら食い入るように画面に集中した。息子よ、ねだるなら父ではなく母さんにだ。男は雰囲気^{キョウキ}で語り合える。健太はしょげてはいたが希望は捨ててなかった。

画面の中で、ちよつと目を離れたすきに暴走した列車が繁華街に突っ込んだ。ぎゃー。がしゃーん。街が破壊される光景は実写映画のごときリアリティだ。女子供が泣き叫んでいる。血を流して助けを呼ぶ女に、列車から降りてきた半裸の金髪頭^{ケツ}が、

『助けを請い、神に祈るか？ それとも俺の銃^{ケツ}を舐めるか？』

女は子どもは抱きしめながらただただ首を振った。外国の女優に似そうなバタ臭い顔だが、美人だ。

『ノーアンサーは罪だぜ、婦女子さん……』

金髪は女の腕から子どもを奪い、その額に鉛玉を撃ち込んだ。貫通した銃弾が腹をえぐったはずだが女は子どもを抱きしめ慟哭^{トウキョク}して英語で何事かを叫んでいる。怒りだ。

『今のは答えなかった償いだ。さあ次こそ答えてもらおうか』

『ジーザス！』

『……神はそんなに暇じゃねえよっ！』

金髪は狂ったように女に銃弾を連射した。血しぶきが金髪を汚した。ひやはは。金髪は奇声をあげ、最後には女子どもを足蹴にして銃弾を天高く空へ放つ。

『神よ。これがリアルだ……』

ブラックアウト。ふたたび、あの血文字が旋回しながら画面いっぱいに礫^{レキ}られた。

なんじゃこりゃ……。幸辰は苦笑した。今日日、大枚はたいした監督のネームバリューしか評価できないアクション映画以下じゃない

か。進歩したのは技術だけか。でも派手な犯罪には胸が高なる。ヒトゴロシはイケナイコトだが。

しかし、小学生の反応は違った。

「か、か、か、かけー！ リアアウやべえ！」

「ちょっとちびったかも僕。震えちゃったよ、あわわ」

「予想以上だ。リアアウ恐るべしだな」

金髪とは縁遠い坊主頭の少年が銃を天に向けるポーズをして、「

『これがリアルだ……』」

「かけー！ 『これがリアルだ……』」

「リアルだーっ！」

わきゃきゃ、と猿と化した小学生たちは足早にレジに向かっていった。発売日を確認するのだろう。画面には克明に表示されていたが興奮して目に入らなかったのだ。

「すごいねこれ」

「ん？」 息子の反応が意外だった。自分に似て妙に冷めた一面があるからだ。「そうだな」

「ださいけど、かっこいい」

なるほどね、と幸辰は笑った。自己は否定しているが、小学生的にはかっこいいという素直な感想なのだ。結局は子どもだ。

「欲しいか？」 ぴりり、と横腹が痛んだ。集中が切れた途端に腹痛が息を吹き返した。「買ってやろうか」

「マジっ？」

「今日買えるんならな」 キレのない冗談だ。

「無理じゃん」

「つまりそういうこと」

「パパ、ずりい。いつもそうやって。ずりい。なんかずりい」

健太は口を尖らせた。

「お前もいつかずるくなるさ、ははは」 笑うしかない。腹痛を殺すには笑うしかない。「大人のやり方を習得しろ、健太。嫌なことは回避しろ。だはは」

笑っていると買い物カゴを押す自分と同年代の女性が数人、現れた。レジで店員と話し込んでいる小学生の集団に向かって、名前を羅列した。小学生たちは「また来るよ。予約しに！」と店員に言い、母親のもとへ駆けた。早速、親に件のゲームをおねだりしている。幸辰はその光景を、仲睦まじい光景を眺めていた。するとまた脂汗がじわりと額に滲み、くらりと頭をもたげ腹をおさえた。ちくしよう。ただの親子の会話だ。他愛のない親子の会話だ。つまらない騷の一部始終だ。俺のことなんか噂しちゃいない……。

幸辰は幻聴を振り切るように健太の肩を強く叩き、

だはは、

足をすたすたと、

だはは、

ゲームコーナーの外へ、

だはは、

「パパ、どこ行くのっ」

だはは、

「トイレだトイレ！」

なかば怒鳴るようにしてトイレへ直行した。もう駄目だ。いやもう駄目なのだ。耐えられない。笑ってられない。だはは。笑い事ではない痛痒。

幸辰は破壊衝動に従事するかのごとく乱暴にトイレのドアを閉めた。ズボンに硫酸をぶちまけられた感覚を脱ぎ捨て洋式の便器に座する。それから震える指で、かちり、と施錠した。鍵が青から赤へ変わった。

慢性的な腹痛――。

人混みに飲まれた途端にそいつは大層な靴音を鳴らし、やってくる。腹に氷を挿入され、きんきんに冷えた鉄パイプでなぶられるような鈍痛。下痢ならまだ良い。出るものを出せば終わりだし、神に

祈りを捧げる余裕も与えられる。

「ぐあぁっ……ふぬっ……」

やはりだ。出ない。アヌスはうんともすんとも言わない。ガス欠のエンジンでももうすこし可愛げのある反応をするものだ。

健太には店を回り、母と娘を捜せと命じていた。もうすぐ中学生だろ、と。

子に衰弱した姿を見せるのは老後だけと幸辰は決めていた。父としての威厳というより、これは男としての、本能的な性だった。健太にだけは、普通の父としてありたい。

腹痛と手を組んで援護射撃をしてくる嘔吐感。いっそ吐いてしまえばいいが腹痛と同じく、出るものが出ない。妻が一人目の子の出産前に散々洗面所でぶちまけていた淡い黄色の胃液さえも――。

「くそっ。くそっ」拳を腿に突き立てた。「耐えろ。耐えられるはずだ。いつも耐えてきたじゃないか」

「なあおい、聞いたか」

「ああ？」

青ざめて鈍る頭に添え物として真っ当している聴覚がドアの先の会話をとらえてしまう。トイレに飛び込んだ際には必死で目に入らなかったが先客の見知らぬ男が複数いた。そいつらが話しだした。しょんべんぐらい黙ってできないのか。

「またあれだぜ、ほら、一丁目で下着ドロ」

「へえ。こないだは三丁目だっけ」

「いやこないだも一丁目」

「物騒なもんだな。一丁目ってのは……」

「他人事じゃないだろ。一丁目は」甲高い金属音に似た男の声。「ここだろうが」

「まあね。まあ盗まれたのは下着だろ。俺ら男には関係ねえっつの」

「……それがあんだよ」

「はあ？」

「狙われてんのは下着だけじゃないんだ。金目のものもごっそりだ。下着はついでみたいなものだ」

「そうなのかよ。――あ、もしかして」

「なんだ」

「さっき俺が言ったみたいに男たちが関係ねえって傍観してるのをさ、つまり」

「目をそらす作戦だったのか？」ははは。男は笑った。「確かに狙われてんのは全部男と同棲してる女ばかりらしいがな」

「ふーん、そこまで報道されてんのか」

「マスコミは要らない情報まで垂れ流しにするのが仕事だからな」

「仕事ならしゃーないわな」

「仕事は免罪符さ」これを最後に男たちの声は遠ざかっていき、最後はドアの閉まる音に遮断された。

男たちの推理は的を射ていた。ひとつ違うのは作戦ではなく偶然に身を任せて、偶然生じた法則に乗馬しただけだ。幸辰は苦笑し、額の汗をぬぐった。

「教えてやりたい」唇が震えた。「なにもかも」

幸辰はズボンをあげ、施錠を解いた。出るものも出なければここにいる必要性は皆無だ。個室にこもったのはあくまで息子からの父を心配する視線から逃れるためなのだ。

「俺は、もう……」

手を洗う鏡にうつる髭剃り後のように蒼い顔した中年。

ふと幸辰は拳を天井に突き出してみた。

これがリアルだ……。

リアルナントカというゲームの金髪男の諦観じみた台詞を思い出す。

手についた雫が、頬を濡らした。

幸辰は暗澹たる気分をクッションに、テレビコーナーの前で休憩

していた。ふらふらと千鳥足のようにベンチを探しあて、踊り狂い指で弾けば破裂しそうな心臓はすこしばかりの安息を得た。

テレビと妊婦の尻は大きければ大きいほど優れているらしく、両手を広げてもお釣りがくる巨大テレビの前では人々が足を止め、ぽつぽつと何事かを呟いていく。

いや——あの呟きはすべて俺の噂なのだ。

幸辰の脳裏にいつもの被害妄想が疾る。

すぐさまそれを否定する。

「そんなはずはない。俺は完璧だ。完璧すぎるから押しつぶされかねないんだ……」

口に出して否定するが、ぎりぎり痛む腹痛が弱気と幻惑を呼び起こし、それを過去と呼べと命令形で下す。過去？ 俺の過去。

過去と呼ぶには新品すぎる記憶が、たわんだ意識にふわり浮かびだす。

買い物カートを押す音。車輪の音。駄々をこねる子どもの泣き声。叱責する夫と妻。昨日の逃走。「見えないっ」。ひしゃげた音声。

「またやっちゃった……」。

「くそっ」 幸辰はベンチの脚を蹴った。「やっぱりこんな場所くるんじゃなかった」

爪先に痛みが瞬間的に生まれ、腹痛が消え失せる。しかしまた数秒もすれば腹痛はぶり返し、額に脂汗を滴らせた。

蒼白な顔の人間を見かけても、このご時世どんな難癖をつけられ、損をするか分かったものじゃない。発作的に髪を掻きむしる幸辰に、「大丈夫ですか？」 「どこか体が悪いのですか？」

などと慮ってくれる赤の他人は現れない。せいぜい残していくのは地方テレビのニュース番組で連日話題の警官拳銃強奪事件についてのコメントだけである。

今もワイドテレビ内で高画質の歯茎を剥きながら、知性を笠に着る大学教授が冷静な見解を垂れ流していた。

「警察も警察ですよ。拳銃を盗まれるというのは市民の暮らしに直

結する重犯罪。それを防げなかった？ 笑わせないでほしいですな。懲戒免職？ 笑わせないでほしいですな。気の抜けたコーラみたいな意識で平和を守っとるからこんな事態が起こるのです。聞けばその警官はまだ二十歳そこそこだとか。かあー、これだからゆとりゆとりと、すつかすかの教育を受けて一人前ぶっている人間は駄目なんだっ。腐っとりっ！ 甘えとりっ！ その警官を無能としてしょっ引け！」

「ははは。星崎さん、言い過ぎですよ」

「言い過ぎ？ 笑わせないでほしいですな——」

「……では、明日の天気を聞いてみましょうかね」

「大体若者は——」星崎なる大学教授の音声が萎んでいく。

「今日はなんと、桜の木の下で桜子ちゃんさくらこが元気いっぱい教えてくれるそうですよ。ほら、星崎さんも一緒に。せーの……桜子ちゃんよろしくー！」

「教育教育といってね私もガミガミ言いたくはないんですよ。ええ、あ、よろしくー！ ……それで私が訴えたいのは教育の地盤がそもそも崩壊——」

はーい、とバトンを受け取った茶髪のアシスタントが明日の天気を読み始めた。幸辰はうんざりとして視線をそらした。

重犯罪。そうだ、重犯罪だ。あの馬鹿の長台詞で唯一正しい。

「パパ？」

幸辰は顔をあげた。そこには息子の健太が立っていた。心配そうに顔を覗いてきた。

「健太」

「やっぱり具合悪いんでしょう？」

「そんなことない」

「嘘だ。僕だけじゃなくてさっきからここ通る人みんなパパのことじろじろ見てるよ。変だ、って」

視線は感じていた。無言の視線は確かに感じていて、ことさら無視していた。直接指摘されなければ、無言と変わりはない。

はぐらかすように、

「健太、どうした。パパのことはいいからママのところに行きなさいと言ったろ」

「行ったよ」

「見つからなかったのか」

健太は、ううん、と首を振った。

「パパの調子が悪いから早く帰ろうって言ったんだ」

余計なお世話——、言いかけて飲み込んだ。肉体的疲労が口をすべらせ、言わなくていいことをすんなりと言わせようとする。危なかった。実際、これ以上この場にいれば気が狂うのは目に見えていた。

「そうか。すまん」健太の頭を撫で、立ち上がる。ふらりと視界が傾ぐ。「おっと」

「ふらふらじゃんか」

健太は父の体を横から支えながら笑った。

こんな息子を俺は裏切れるのだろうか。息子だけじゃない。妻も娘もだ。自分の欲求に直向きなのは他人の幸せを奪うのに等しい。我慢は嗚咽だが、本能の開放はそれだけで済まない。もっと家族的には大規模なのだ。

「ママがダイエットの道具また買ってたよ。しかも姉ちゃんも乗り気でさ、ふたりでやるんだって張り切ってた」

ぷぷ、と堪えきれないように笑う健太。よく笑う息子に違和感があつた。

「ねえ、パパ。賭けしようよ。ふたりが何日で飽きるか」

幸辰は悟った。息子は苦しんでいる親を励ましているのだ、と。

「ああ、いいよ」

「やったっ」

「パパはさっきのあれ、ゲームを賭けよう」

健太の目が爛々と輝いた。

「マジでっ?」

「マジだ」

「でもそれじゃ僕は何を賭ければいいの」

「何も賭けなくていい」

「賭けになんないじゃん」

父さんを信じるな――、またしても言いかけて飲み込んだ。父さんを信じるな。父さんはお前の理想の父さんにはなれなかった。最初からなれるはずはなかったんだ。

言いたかった。何もかも本当は曝け出して開放感とカタストロフィーを感じ、罪の意識を滅却して真人間になりたかった。父になるのはそれからいいと思っていた。しかし、順序が狂ってしまった。

――「六ヶ月だって」。

そのとき、妻に言えばよかったんだ。妻にだけ真実を打ち明け、妻にだけ拒まれ、妻にだけ後ろ指を指されていればよかった。

――「私は……産みたいよ。絶対に産みたい。名前だってもう決めてるもん」。

遅い。軽くステップするように二人目も生まれた今、そんな後悔は意をなさない。蓄積され、腹痛になるだけだ。

「健太。ママはどこで待っているんだ？」

「え、えっともう多分レジ通して車に乗ってると思う」

「そうか。じゃあちよっと先に行ってくれ」

「なんで？ ふらふらじゃん。一緒に行くよ」

「駄目なんだ。格好悪いだろ、子どもに支えられて歩くのは。パパの気持ち、同じ男なら分かるだろ。格好悪いのは最悪なんだ」

無理して口角を吊り上げてみせる。シニカルに。あくまで父としての威厳として。

「分かるけどさ……」 健太は父の身長を目測するように上から下まで目を這わせた。「本当に大丈夫？」

「パパをなめるなよ。たかが数メートル、これくらいのハンディがないと物足りないくらいだ」

健太は薄く笑ってから父からそっと離れた。

「うん。じゃあ先に行つとくね」

「おう」

手を振り、跳ねるように健太は去っていった。その背中^{せなか}は途方もなく小さい。さらに、さらに、小さくなっていく。

ふう、と一息ついて幸辰は遅々とした足取りで歩き始めた。

このテレビ売り場から、出入口まで何マイル？ 笑わせないでほしいですな――。

家族全員に打ち明けるのも、テレビでコメンテーターとして出演して不特定多数に打ち明けるのも差異はない気がした。

幸辰は何かにゆっくり引きずられながら歩いた。複数の家族の風景の隙間からレジが見えてきた。出入口はすぐそこだ。

レジを通り過ぎる直前、シツという擦過音が鳴ったが人間の聴覚には引つかからなかった。次の瞬間には幸辰の上着のポケットが膨らんでいた。ふつくらと食後の子どもの腹のようにだ。

「楽になってきた」

腹痛が一步、一步、そして一步ごとに和らいでいく。禁断症状^{きんたんしょうじょう}からの解放のそれと同じ原理だった。

わざわざ使い道が思いつかない単一電池を盗んだのだ。

レジには三人の店員がいたが、まるで気付かず、それどころか陽気に、

「またのご来店お待ちしております」

と送り出してくれた。

言いたかった。いいのか、また来ても、と。

落ち着いてきた腹をさすりながら、店を出ると息子と娘の舞央^{まお}が並んで待っていた。

「遅かったね」

「姉ちゃん、パパは具合が悪いんだからそんなこと言うなよっ」

「冗談よ冗談」

「たちが悪いんだよ姉ちゃんは」

「なにをう！」

こいつらはまったく……。幸辰の腹痛は不思議なほど綺麗に消え失せていた。

今だけ。今だけだぞ幸辰。お前は今だけ幸せなんだ。簡単に崩壊する。お前の築きあげた家族の風景はお前の手で、口で、お前の悪癖によって必然的に崩壊する。その崩れ落ちるすさまじい音でお前やっとなぐさくんだ。今はまだ気付いた振りをしているだけだ。甘えだ。お前はお前と家族に甘えているんだ。お前は許されない。今のままのお前を許せる人間などいない――。

「分かってるさ……」幸辰は唇を噛んだ。「その通りだ、俺」「なにが？」

子どもたち、二人同時に父に尋ねた。

「何でもないよ。帰ろう。母さんが待ちきれずに車でダイエットを始める前にな」

舞央がくすりと笑い、健太は大変だ、と車に向かって駆け出した。父として俺がこいつらにしてやれることは限られている。

父として俺がこいつらと一緒にいてやれる時間も限られている。

それは他の家族の風景には映り込まない翳りを持ち込んだ自分のせいだ。反論も異論もない。

ただ欲を言わせてもらえば他の父親が教えてやれないことを、ひとつでも教えてやりたい。それを武器にして、俺を見捨ててくれない。ばいばい。

隣を歩く来年高校受験を迎える舞央に幸辰は笑いかけた。

「なにニヤニヤして。キモイんだけど」

舞央は口は汚いがいつも笑っている。品行方正とは言い難いが友達の数、舞央の言葉でいうなら「ハンパない」。きっと親にも見せない魅力があるのだろう。

「舞央、電池が焦げる匂い知ってるか？」

「はあ？」

女の子は興味ないか。ならば助手席から手を振る息子に教えてやろうと思った。

――葉莢の匂い。焦げた電池の匂い。父の匂い。

それらを教えるころには自分はもう二度と家族に会えないだろうな、と漠然ながらも確信していた。どうもこうもない。抗えやしない。発覚しない罪はいつだって裁かれることを待ち望んでいる。

――終――

#52 家族の飼育（前書き）

#51 焦げていく風景（<http://ncode.syosetu.com/n08811/>）を先に読めばよりいっそう楽しみ頂きます。

#52 家族の飼育

父が逮捕された。目覚まし代わりに聞く怒号と罵声は夜の静けさを打ち破るには十分たる破壊力と母の自我を現実と乖離させるには事大過ぎた。

父は極めて冷静に手首の手錠を見下ろしていた。すこし笑っていたような気もする。僕は瞼にのしかかる眠気と格闘していた。隣で姉が目には涙を溜めながら僕の肩を抱こうとした。僕はそれを振り払って、母の背中を指さした。姉は母の背中を摩りながら泣いた。

母は何かの間違いだと訴えた。その訴えは神頼みに等しく、もちろん祈りは叶わない。祈りは絶望の慰めにすぎない。却下された祈りが何処に消えるか知っているか。僕は知っている。廃棄物として夢の材料になるのだ。

外傷のない患者となった母を連日苦しめたのは報道だった。ある日、学校から帰宅すると母がテレビに椅子を投げつけている場面に遭遇した。僕は冷蔵庫から冷えた牛乳を取り出してコップに波波注いでゆっくりと味わいながら、その一連の行動を黙って眺めていた。狂気とは程遠いな、と笑った。破壊衝動は葛藤に負けた行動だ。自分自身に負けた人間が取る八つ当たりだ。僕はそんな愚かな真似だけはしないようにしようと、心に杭を打った。

「もしこんな風にならなかったら」姉はその夜、ぐちゃぐちゃに壊れたテレビの破片とスリッパで踏みながらいった。「私たちは幸せのままだったと思う？」

答えはすでに出ているくせに。

「父さんを恨めばいいの。だいたい救われるからね。あんたもそうしな」と続け、舌を鳴らした。

「そもそも僕は幸せだったの？」

「違うかもしれないね」

母が奥の部屋で壁か床を殴っている音が聞こえる。何かが凹む音。

「普通だったんじゃないか。よく覚えちゃいけないけど」

「普通って何なのよ。その普通ってのは何なのよ。逃げんじゃないわよ」姉は突然僕に詰めより、語気を静かに荒げた。「死んじまえ。みんなみんな死んじまえ」

姉はスリッパを脱いで、素足のまま破片を踏み鳴らした。母の破壊衝動の音と姉の血まみれのステップが混ざりあい、この世の最後を感じさせるダンスが僕だけのために披露されたのだ。死ねというように。それは実に直裁的なメッセージを孕んでいるように感じられた。脳を見えない手に捕まれ、桃のように簡単に潰されかけた瞬間、ぐるぐると殊勝に回り続けていたレンジが甲高い音を、死のダンスのステージに響いて、僕をまた現実へと連れ戻す。

「まだ死ぬなよ。」「甘えるんじゃない」「てめえが死んで得する人間もない内に勝手に死ぬのは許されない」

耳元で何者かがささやく。

僕は、笑みを賭して、囁きに頷いた。次第に声は遠くなっていった。

僕ら犯罪一家は世間から約二ヶ月で飽きられた。

犯罪一家。そうだ、父だけが数百件という事件を起こし、何を思ったか突然日常の終止符として自供した。それはつまり僕ら家族の崩壊だけではなく、個人としても糾弾されるにたる自供だったのだ。報道は常に妄想／推測をさも真実のように垂れ流す。思考停止中の人間は疑うことを知らない。無垢というより阿呆なのだろう。批判も肯定もすべて責任逃れのために先導者任せだ。先導者が僕らを犯罪一家と名付けた時にはもう僕らの口から出る否定はただの言い訳に成り下がり、へたすれば火に油を注ぐ形になる。

父の起こした窃盗事件の件数は桁違いだっただけあり、マスコミや犯罪研究家は当然複数犯だと懷疑的になり、その共犯者は僕ら家族だと揃って報道した。当時小学生だった僕、中学生だった姉、姉

を孕んで大学を中退し父と結婚した母——いったい何ができる？
今ではすっかりお笑い種なのだろうが。

家族が全焼した後も僕は健気にも登校を続けた。逆に姉はすっかり人間不信に陥り、ヨーグルトばかり食べやせ細ったが言動は太る一方で挨拶代わりに僕を罵倒した。僕も僕で姉を認識しない、つまり無視で応戦というより自らを守るために仕方なくだが、姉を傷つけた。僕と姉は言葉の暴力と心理的態度で昼夜問わず殴り合い、慰め合った。

母は死んだも同然だった。目はいつも胡乱気で濁っており、何かとつけて破壊衝動・破壊衝動。大学中退後すぐに結婚した母には社会経験が皆無で、それに生きてたころから臍負しても社交的とはい難い神経質な性格だったのも災いし、死んだ。もちろん呼吸も、それから食事だって無理やり口にいれてやれば嚙まずに嚥下するし、医者の見地からいわせれば、

「元気ではないが生きてます」

となるのだろうか、僕と姉は母を完全に死者として扱った。母の蓋を失った糞尿の始末はどちらかが気付いたときにやるという不文律がいつのまにか確立し、母への弔いという名の〈愛の食事〉も活けた花に水をやるようにして朝晩適当な時間に行った。毎日食パンでも母は文句を言わない。毎日水だけで満足する花と同じだ。華道よりも楽な飼育だった。

飼育。

母の飼育。

僕は下卑た笑いを禁じ得ない。介護でいいじゃないか。それなのにあえて僕は〈飼育〉と表現したくてたまらないのである。生前は、「二人の子を産んだとは思えない」

と評された母が糞尿と共に眠り自我を唾棄している姿はなんとも醜い。醜悪な丸まった肉だ。崖で見かけたら迷わずその背を押す。罪悪感など毛ほども感じさせないこの世でいっとう劣悪な存在。母はたまに思い出したように、あるいは寢言のように僕に言う。

「殺して……」

馬鹿が。殺す？ そんなの不可能だ。首を絞める作業すら億劫だ。そもそもあんたはもう死んでいるじゃないか。そんな醜い面をして、口元をべちゃべちゃと濡らして、それでもまだあんたは自分が生きていると、生にしがみついていると、そうのたまう真似をするのか。殺さない。

僕は母を殺さない。

姉も母を殺さない。

僕と姉を繋ぎ止める飼育を止める気は毛頭ない。

僕は胸の中でざわざわと煮だつような喧騒を時折感じる。飼育に依存する自分を客観視できない自分を客観視している感覚の襲われる。物足りないのだ。すでにひとり分の飼育を、姉と二人で分けているのでは。物足りない。物足りないんだ。

母だけじゃ物足りない――。

清々しい朝だった。余計なことを排除した頭は清涼剤をぶちまけられたような薄荷の匂いと覚醒を僕にもたらした。天井の染み目が合う。声に出さず、おはよう、と呟いてみる。笑えるほどに好青年じゃないか。知らない人にも気兼ねなく挨拶をするなんて。

ベッドに横たわったまま首を西の方角に。窓枠が見える。といってもガムテープで補強した形跡のある汚い窓枠だけど、そこからにわか射し込む陽の光を僕は久しく視界いっぱいに浴びた。清々しい朝だ。何年ぶりだろうか。朝らしい朝を迎えたのは。

「おはよう」

やにわに人の声が隣から聞こえた。驚愕する僕に畳み掛けるようにして背中を何かつるつるの布のようなものが這う。ぞぞっと筋肉が呻く。

「おはよう」

まったく変わらないアクセントでその声は繰り返した。

僕は寝返りを打つようにして、声の方を確認した。

女だ。女がいた。姉でも母でもなく、そこには見知らぬ女が色素の薄い髪をすこしばかり啞えながら僕の目をじっと見つめている。睨んではないない。抱きしめるような柔和な視線で僕を見つめる。

「おはよう」

その声は三度目だった。唇の動きがゆっくりと空気を挟み、ゆっくりと吐きだした。

確かに三度目だったのだ。

「おはよう」

僕は清々しい朝に似合う笑顔を浮かべて言い、彼女から四度目の機会を奪った。

そして、僕の新たな飼育は始まろうとした。同時に母の飼育は完全に姉に委ねた。そもそも正確な取り決めなど存在しないのだから僕が放棄すれば自動的に姉が一切を負うことになる。別段、罪悪感も湧かず、姉も僕に母の件ではとやかく言わなかった。

「名前は？」僕は女に訊ねた。

「ない」

「そうか。じゃあへメス」にしよう」

「はい」色素の薄い女は頷いた。

「それから、僕のことだけど」

「大丈夫です」

「何が？」

「すべてです」枝毛の生えていない髪が揺れた。

「そうか。すべてか。分かったじゃあさ、とりあえず服脱いでよ」

へメスは笑いもせず、ベッドから起き上がった。薄いタオルケットがはらりと床に落ちて、そこでやっと僕は気付き、恥も捨て音をたて唾を飲み込んだ。脱ぐものがない。へメスは糸纏わぬ姿だった。

「服は、着ないの？」

「そのほうがいいでしょう」へメスは口角をあげた。

途端に妖艶な光を放つ。眩暈に誘う馥郁。くらくらする。神経に針を刺されたようだ。

僕は〈メス〉を抱き寄せた。未発達な自分の四肢が憎い。年上であらう〈メス〉の体をすべて包み込むには不足する筋力が憎い。〈メス〉は僕の耳に息を吹きかけた。せせら笑うようにそれは罵倒に似ていて、口の中で血の味がした。でも甘かった。血は甘いんだ、とぼんやりとした知識が新たにすり込まれる。

〈メス〉は舌で僕の耳朶を弄びだす。僕は抵抗もできず、勃起する。耳朶はさくらんぼと化し、噛まれても、噛みちぎられても文句はいえないな、と僕は勃起しながら受け入れる。〈メス〉の舌はどろろと二つに割れているようだった。ちょうどじゃんけんちよきの銚ちよきのよう、だが幼児の作るそのように浅い。銚で僕の耳朶は挟まれ続ける。開いたり、潰したり、体中の神経が耳朶に集中して僕の意識も介入しだす。耳朶、耳朶、耳朶が僕だ。僕自身だ。〈メス〉は僕を殺すために来たのだろうか。そうなのだろうか。それでもいいかもしれない。粗末なものを逆上させながら達観した思考をめぐ、めぐら。す。

「健太……」
けんた

〈メス〉は僕の名前を粘膜のはった発音で呼ぶ。返事。返事をしなくちゃ。名前を呼ばれたら返事……。

「健太は、生きてる？」

僕はこくこくと頷いた——つもりになった。熱病に犯された股間と頭は今にも爆発しそうで、静止するので精一杯になっていた。〈メス〉は耳朶から銚を引いて、僕の耳元に直接口をつけ、そのまま脳に管でも繋げたかのように、あっ、語りかけ。

「生きてないよ。健太は生きてないよ。健太だって死んでるよ」

〈メス〉の声が近くなる。ずっと一緒にいたような気さえする。違う。ずっと一緒にいたんだと思う。この女は生前の母にも似ている。この女は優しかった頃の姉にも似ている。この女は、〈メス〉は女であって女だ。女としての尊厳なのか。

「違うよ。私はそんな偉そうなもんじゃない」

否定された。

「じゃあなんなんだよっ。気持ち悪い。気持ち悪い。飼い主にむかって」

「メス」を突き飛ばした。「メス」は玉のようにごろごろと転がりベッドから落下。しかし痛みをおくびにも出さずに、それどころか僕に、にや、と笑いかけた。僕はぞっとした。辺りが丑三つ時のごとく暗転した。朝が消え、女の顔だけが、色素の薄い女の顔だけが僕をじつと凝視する。口がぱくぱくと動いている。何か言おうとしている。聞いちゃいけない。それは禁忌だと本能的に、僕は怯えながら聴覚を尖らせてしまう。女は、

「死ね」

僕は悲鳴をあげた。ベッドのシーツに黄色い染みが広がり、浅瀬で溺れた雑魚のように心境的にも肉体的にも呼吸を奪われた。目の前に、鼻頭がぶつかる距離に女の顔がある。女はまるで睦言を交わすようにして僕に祈る。死ねと祈る。

厭だ。死ぬのは厭だ。

ベッドから転がり落ちた。深海が僕を待ち受けていた。必死にあがいてみるが何処にも掴めそうにない。仮に掴めたとしても弾かれてしまいそうだ。いや弾かれるだろう。他人から僕は弾かれて、これからも弾かれて——これから……？

これからなんてないじゃないか。このままじゃ。僕にこれからなんて永劫訪れない。掃いて捨てる人生未満のまま僕は誰かの慰み者にすらなれずに見えない指から目を潰され、腸を引きずりだされ、それでそれで……。

厭だっ。

「駄々をこねないの……」

母の声がした。死んだ母が僕を手招きしている。実の息子を道連れに地獄に落ちようとしている。目を瞑る。目を開く。すると母が僕の顔を覗き込んでいる。美人だった母が、今は亡き母が僕の耳朶

を舐める。

やめろっ。死んだくせにっ。

「悪い子だ。健太は悪い子だ」

黙れっ。

僕は母を全力で蹴飛ばす。蹴飛ばした腹に何かが詰まっていた、そんな感触があった。母が痛みに呻きながら腹をさする。

「健太をいじめちゃ駄目でしょ……」

健太を、

いじめちゃ、

だ、め……。

僕は、健太。

健太は、僕なのに。

やはり母は死んでしまったのだ。僕を忘れてしまったのだから。黒の中を呼吸も漂う。これが絶望なのだとしたら父を失った絶望とはなんだったのだろう。父が嫌いだったか。それはない。それだけはない。僕は父が好きだった。父も父としての愛に従順だった。僕は愛情を得て、凡俗な成長を遂げていた。姉も同じだ。等しかった。僕らは愛されていた。

父さんが逮捕され、警察に囲まれ、赤いサイレンと母の慟哭が夜に溶け込み、僕は絶望したはずだった。何もかもが怖く、何もかもが煩わしく、体中の細胞が否定だけが続いていた。母は日に日に壊れ、僕はそれを無然と害虫でも見るかのように――ああ、厭な奴だ。僕ときたら凝縮した悪意のような人間じゃないか。まだ青いガキの癖に黒々と光を拒絶して、母を飼育した気になっている。姉に罵倒されながら、姉を救った気になっている。諦観の平行線に立ちすくんで唾を垂らしているだけなのに、まるで自分が英雄かのように、この家で唯一まともな人間かのように、振舞って、それで、

「目が醒めた？」

知らない声がいった。へメスとも姉とも母とも違う声だった。

僕は首を降って、濁った返事をする。

「まだ全然だよ」

「焦らないでいいからね」

「うん」歳相応の青い返事をしてから親指を咥える。耳朵をつまむ。ある。指だって耳朵だってちゃんとある。

「怖いだろうけど、とっても怖いだろうけどね」声が頭の奥で鳴る。「とっても良い事だからね。とてもとても良い事だから」

「良い事だらけだったらいいのに。悪い事なんて起きなきゃいいのに。みんなみんな優しくかったらいいのに」

「そしたら、君だって。ううん、私だって生きちゃいけない人になっちゃうよ」

「……ごもつともだね」

僕は苦笑して、頭を下げた。声に慇懃に頭を下げ、面をあげた。声が、くすつ、と揺れた。

清々しい朝だった。ずうっと限界まで海に潜っていて、ざばっと顔を出してから酸素を取り込む……そんな朝だった。透明な皮を体がまとっていたので丁寧一枚ずつ剥いでから起き上がった。代わり映えない朝のはずが、今日はどこか違う。意識が変わると認識もやはり変わるのか。気持ち悪く、心地よい。

部屋を出ると、姉が向かいの自室のドアの前で眠っていた。毛布もかけずにごろりと丸まって浅い寝息をたてている。僕は姉を素通りして、母の部屋に向かった。荒れたリビングにはまき散らしたティッシュやびりびりに破かれた新聞紙、二つに折れた携帯、中身が半分残ったヨーグルトのカップ……どれもこれも僕を邪魔するには不十分だった。

母は依然として死んでいた。青白い頬がぴくぴくと痙攣し、口の端には涎が泡立っている。髪はちぢれ、廃棄された日本人形みたいだ。それでも脈々と伸び続けているのも怪奇じみた逸話を持つ日本

人形そのものだ。

母は美しかった。

これは美しくない。

母が死んだのを再確認して、僕はようやく母の首を絞めることにした。指の骨が、ぺきぽ、と鳴って僕の命令からすこしずれた場所からの信号を受け、すつと首筋に伸び、

絞めた。

母は小さく呻いた。

生気の失せた面に恍惚とした表情が……。

いや勘違いだ。母は死んだ。母は死んでいるんだ。だから殺してあげなくちゃならない。弔いができないじゃないか。母を殺さない
と僕が、

「死ぬ」

母の無意識の抵抗が、その死者の無様な抗いが、息を絶とうとする瞬間――

「何してんのよ……」

姉だった。僕の背後から姉が呟いたのだ。

「何してんのって……」

僕は答えず、更に指に力を込めようと――

「何してんのよ、健太っ！」

姉は僕に全身全霊をもって体当たりをかましてきた。僕は弾かれたボーリングのピンのごとく弾け飛び、頭から壁に激突した。

「母さんを殺す気なの……？」 健太、あんたそこまで頭に蛆が湧いたわけ？ キチガイじゃない。キチガイそのものじゃない」

「そうだよ、姉ちゃん。僕は死ぬしかないぐらいに頭がおかしい」
うずくまったまま肯定する。そのとおりだ。姉のいうとおりだ。姉はいつも正しい。

「やめてっ」

姉は頭を振る。何度も頭を縦横に振る。気が狂ったように。

「やめてっ、やめてよっ。私まで頭がおかしくなる。私までおかし

くなったら……」

「ほら、分かってんじゃない。やっぱり姉ちゃんも僕がおかしいってこと分かってんじゃない。なのはどうして聞くんだよ。どうしてだよ。ねえ」

姉は半狂乱のまま、僕の顔面に蹴りを入れた。鼻が潰れた。血が散る。白が散る。殺すのかよ。殺してくれんのかよ。なあ。

「あんたのせいだ……。母さんがこんなになったのも……」

「父さんのせいだろ。いい加減にしろよ。逃げんな」

「私は逃げてないっ。逃げてんのはあんたでしょ。知ってんだから。いつもぶつぶつ言いながらパソコンでなんか打ってるの知ってんだからっ」

姉の蹴りが僕の腹を打とうとする。僕は姉の脚を掴んで引っ張った。姉は肩から床に落ち、痛いだの馬鹿だのと僕を罵る。

姉も気が狂っている。

母は気が狂うどころか——今だってこうして姉弟が面罵し合う状況でも、とろんとした目で何も言おうとしない。姉がいつも僕を虐げるとき、ちらちらと母の顔を確認するのを僕は知っている。母がいつか姉弟喧嘩を、むかしのように止めてくれるんじゃないかと期待してんだ。馬鹿らしい。死んだ人間に期待なんかすんなっ。

「死んじゃえ……」姉はぼろぼろと泣きながら、

「死んじゃえ。あんたも母さんも死んじゃえ」

「じゃあ殺させろよっ」僕は怒鳴る。

「それは駄目っ」姉も怒鳴り返す。

泣く人間を見ると急激に醒める。自分は悪魔に魂を二束三文で売ったのかもしれない。しかし、それで得たものなんて一つもないのだ……。泣きじゃくる姉と死んだように生きている母を眺める度に嫌でも認めなければならぬ。

まっとうにやり直すには、自殺しかない。

邪魔な人格を殺して、僕はやり直すことに決めた。

殺してやる、と拳を握り起き上がろうとすると、姉が僕の脚を引

っ張って、僕は顔から床に叩きつけられた。何度目だろう。
甘い血の味がした。

—終—

#54 通り魔、なるべくして

「通り魔が本当に、『通り魔』だと思っているのか？」

「通り魔なんだからそうだろ。もしも必然的一殺ないし、多殺だとしたら、それは通り魔じゃないさ。計画的犯行っていうんだ」と俺。「計画的犯行。そうだ。通り魔は計画的犯行で概ね正しい。突発的なわけがない」

「どういうことだよ。通り魔イコール突発的イコール通り魔で合ってるだろ。同じこといわせないでくれ」

「長い目で見ると。長い目で、その細い目をもっと細めて、視力の弱い人間が遠くの風景をみるようにして観察してくれないか」

観察といわれても。「面倒くさいな。……刹那だ。通り魔は刹那だ。殺意に中った人間の取る手段だ。非現実から現実への帰化への方法の一つだろ」

「残念」失望したという表情で、

「それは違うね。僕は思うんだよ。通り魔は長期間……灰のように積り、雪のように溶けない恨みつらみの結果だって、ね」

男——ルイーは寒気のする詩的表現で締めくくり、肩をすくめた。俺の友人（でなければ、顔見知りのクス）、ルイーは突拍子も無いことを、あたかも飛躍なしに正論のように言う。顔を真摯にし弁舌すればいかなる暴論も正論となる——まさにそれだ。俺はほとんど嫌気がさして、暴論には暴論を投じて茶を濁したくなる。だがそれでは議論からの敗走と同じだ。つまり、俺は嫌々ながらもこいつに付きあわなければならぬわけだ。帰りの電車が一本ないし、二本遅れるな、とこれまた嫌気が。

平和を得るために軍事を燃やした国へドツギアイに俺は住んでいる。社会的地位は、客観視すれば無職のプーというやつである。後ろ指さされるプー歴二年半の俺がいたいのは、労働逃避を現実逃避とひとくくりにするのは愚かしい、だ。ふざけるな、だ。馬鹿

野郎め、だ。ご高説サンキュー、だ。他は知らんが、すくなくとも俺は現実逃避すらしていない。ただ働かないだけで、飯を食っているだけで、糞して寝るだけなのだ。時折、友人のルーイとアジアではポピュラーな賭博である麻雀や将棋に興じたり（本場ではすっかり廃れた娯楽らしい）、目下のようにこうした机上の社交界に足を運び空論ダンスを踊る。みせっこする。

今はルーイの住む10階建てマンションの8階——将棋カフェでルーイのそばかす顔を睨みながら、最近……と形式上いうが俺たちが生まれる前から耐えることのない通り魔事件についての議論を重ねていた。駅で拾う新聞を斜読みした賜物である。ルーイは新聞ぐらい買えというが、こいつのような金のベッドで寝小便たらすような成金には分からんのだ。新聞は情報量の割に、高い。

「君は通り魔と一口にいうが」ルーイは『歩』をつまみながら、「よく考えてくれないか。たとえば、この『歩』。こいつはいきなりは『成れない』」

ルーイは『歩』にキスをして、その『歩』を花嫁衣装を着せて敵陣に送り出す。成ったのだ。

「そりゃそういうルールだからな」

俺はさてどうしたものか、と呻吟の末、この『歩』を殺さないことにした。まだその時じゃない。

「ばかだな」ルーイは口角をあげて低く言った。「王手だぞ」

「あ、」

指摘され気付いたときには遅かった。ルーイは俺の『王』を殺した。外野の『角』で。

「凡ミスを可愛いと思う歳じゃないだろうに」

「まてよ。お前、王手を宣言してないだろうよ」俺は猛烈に抗議する。「あれだ。『待った』ってやつだ。それを使わせてもらうぜ」

「認めない」

「何でだよ」

「打つ前に決めてなかっただろ。『待った』も『王手宣言』も。そ

んな取り決めがあったか？ いやないね。記憶にない。まさか僕がこの歳でアルツハイマー患者だともいう気じゃないだろうね」

「常識的に、将棋のルールとして組み込まれてんだろうが」

「ほら。君の悪い癖だ。そうやって常識常識と。周りのルールが自分のルール、そして僕のルールであると考えている。プーのはみ出し者のくせに、自己評価は常識人だ」

「そうだろうよ。スポーツマンシップってのは」

「アンフェアな行為とでも？」

「……そうだ」

「アンフェアなのは勝負を決してから嬉々として、後出しジャンケンを行う君じゃないか」

にやにやとそばかす頬を緩める、ルイー。よっぽど殺そうかと思う。

「おっと。殺意に中^あった面だな。今、僕を君が刺し殺せば、君がいう『通り魔』の被害者として僕はこの美しみと情緒と潤いに満たされた人生を儚く淡いエンドロールで飾れるわけだ。くふ。いいじゃないか。上等じゃないか」

俺は拳を振り上げる。ああそうだな。面倒だ。まあ俺とお前は知人なんだから通り魔にあたらないがな。殺したいのだけ合っているよ。

振り上げた拳は空気を掘るようにしてスライドし、テーブルの盤を見事ひっくり返す。盤が、成る。けたたましい音が店内に響き、ルイーはことさら嫌そうな顔をし、周りの客は、

「負けた腹いせかよ。だっせーの」という露骨な表情を一瞬浮かべるが、俺が一睨みすると慌てて対戦相手に向き直る。んなら初めから見るんじゃないやねえよ、チビとハゲ。

「あーあ。やっちゃった」ルイー、床に散らばった駒を見下ろしながら、言う。むろん、拾う気は皆無。そういう男なんだ。

「勘違いするならよ。負けたからじゃねえ。お前にムカついたからだ」

「そりゃあ、君もっと失礼だよ」

「ああ。だから言ってるんだ。お前にムカついた、殺してやりたくなるほどにな。殺さないために盤をひっくり返した。どうよ？」

「うん、なるほど、だね。煽っというんだけど、殺されたくないし」

「俺もお前を殺して新聞に載るぐらいなら、遺書に載りたい」

「死ぬのかい？」

「死なねえよ、馬鹿」

「なんだ。あとで喪服をクリーニングに出しとかなきゃ、と思ったのに」

「ああそうかい。クリーニング代が浮いてよかったな」

べらべらと喋っている内に店員がやってきて床に散った駒をかき集めていた。一人でなくわざわざ二人なのは、俺があまりに勢いよく盛大に盤を暴れさせたせいで、どこにいったか行方不明の駒がちよいちよいあるようで、自分探しの流浪の旅に出たんじゃねえの？、駒だって年頃だしよ、と言いたくなる。おつかれさん。ごくろうさん。いい日旅立ちじゃあないか。

ルーイが店員に頭を下げた。「ごめんね。友人は将棋で負けると発作を起こす特異体質なんだ」

「そうなんですか？」 目を丸くする女店員。スカートが危うい。俺は目を逸らし答える。

「んなわけあるかよ。ルーイ、くだらねえこと言うんじゃないよ。」

女は騙されるのが生きがいなんだから、すぐのぼせるだろうが」

「女性を騙すのが仕事なら君はプーを脱却できるのにね」 くくく、と笑うルーイ。

またも、むらむらと殺意が沸く。

「まあいい」 無理くり殺意を心の棚に押し込む。反動で熱い鼻息を出す俺。

「器用なもんだ」

「うるせえ。噛むぞ」

野蛮すぎるよ、とルーイが笑い、俺もしかたなく同調する。殺意を殺すのに慣れた自分が哀しい。

はたと腕時計、確認。予定通り遅れてしまったが、まだまだドラマの再放送に間に合う時間だ。将棋も終わり、あとはコーヒーを飲んで帰る。墮落しきった日常の過ごし方。いいじゃないか。

「帰るのかい？」

ああ、と頷いてコーヒーを一気に飲み干す。冷めたホットコーヒーはなぜこうもまずいのだろう。痰に絡み、弊害しかないじゃないか。鍋のように温度を保つ器に注げばいいのにな——それじゃ口がつけられないか。却下だ。

「そうかい。……おや？」

ルーイは何かに気付いたらしく、視線を立ち上がる俺から窓の風景にスライド。俺もつられてしまう。眼前で指を回されおちよくられるトンボのように、滑稽だ。

「どうし——」

問わずとも把握した。18階のから俯瞰する風景はいつにもなく壮観で、阿鼻叫喚のうねりに巻き込まれていたのである。

人の群れ。

人の怒鳴り声。

ないまぜになった集合体が街中を蠢動しながら咆哮——。俺、それを野次馬と呼ぶ。

「何があったんだ？」

「見てたよ、僕」ルーイは事もなげに嘯く。「『通り魔』だ」

お前外みてたのかよさつき気付いたような顔してたくせに訳わかんねえよサバナナの動物並の視野の広さじゃねえかよ、などとは詰問せずに、ルーイの告げた言葉を素直に受け入れざるを得なかった。なぜなら——、

目を細める。

息をおおきく吸う。

晴天なのに、水たまりができている。

その水たまりは赤く、路上にぐったりと倒れている人の髪をびちゃびちゃに濡らしている。遠目からでも分かる。あれは、出血は、間違いなく……。

「三度だ」

ルイーが指を三本立てたのがガラスの反射で映る。ガラス越しにルイーと俺の目が合う。

「右腕に一回。横腹に一回。そして……」
いわなくていい。

「胸に、ぐさり」

ルイーの冷たい声がよりいっそう、想像力をかき立てた。俺は胸のあたりが、ぎゅると締め付けられる思いに襲われた。刺す……。刺された……。死んだ……。殺された……。痛い痛い痛い……。

スーツ姿の男やファッショナブルで奇天烈な服装の青年から押さえつけられている白髪の男。どうやらあいつが通り魔らしい。目を細めればナイフだか包丁だか、とにかく鋭利な刃物が赤と共倒れしているのが確認できた。

「落ち着けよ。落ち着いて深呼吸してみなよ」

指示通り、俺は馬鹿みたいに深呼吸。だが、楽になりかけた俺が解放されることはないようだ。呼吸を整えてから一層明瞭になった視力が俺にへどうでもいい付加価値を与えた。

チビだ。

刺されて倒れているのは、さっきまで——俺は斜向かいの席を凝視する——そこで対局していて盤をひっくり返した俺を嘲笑した、あのチビだ。

「目が良すぎるっていうのも考えものだね。時の流れは残酷で、人間は進化しすぎた。良きかななんて思えないこともしばしば」

「十八番の文句はいらねえ……。今は」

「そうかい」

心臓がどくどくと身を喘ぎだす。どうでもいいチビが刺されただけなのに、だ。単純な死への恐怖ではないようだった。死体へと移

りゆく季節のような儚さを感じ取ったわけでもない。では、なんだろう。

「明日の新聞は一面これかなあ。辛気臭くて購入意欲が失せるね、まったく」

「お前、平気なのかよ」

「平気もなにも」

「なんとも思わないのか？」

「思うさ」

ルーイは冷めているであろうコーヒーに口をつけてから、こう語った。

「あの刺された被害者にも人生があって、刺した白髪の青年の方にも人生があって……、

もしあの二人に接点が存在するなら、『通り魔』とはいえないよね。

たとえばあのいかにも性根が腐ってそうな被害者がかつて白髪の青年を虐げてたり……、するかもね。

ならば殺意は明確だ。

起こるべくして起こった殺人かもしれないね。あ、まだ死んだかは分からないけど」

俺はそんなくだらねえ根も葉も無いとってつけた推理／推論は無視した。毒されたくなかった。ルーイの言葉遊びと推理ごっこは被害者への中傷として片付けた。

「君は思う。『ありえない。警察が因果関係を調べ上げるはずだ』と。」

接点を、被害者側が忘れている。

接点を、加害者は黙っておく。

——これだけで『通り魔』の完成だね。

記憶と記録に残らない悪意を植えるのは容易い。回収と撲滅だけが難儀なんだ」

ルーイは言いたいことだけ言って、ごちそうさまと代金をテーブルに残して、やり投げな挨拶さえもせず店から去った。俺も俺でルーイの背を見送りもしなかった。

「おかわりどうですか」

にこやかに尋ねてきた店員に、びくついた。野次馬もうその体軀を細めつつある。飽きられてきたのだ。通り魔なんて日常のちょっとしたアトラクションにすぎないのだ。俺だって、そう、思う。思おうと思う。

「いや、結構。もう帰るから。それよりさっきは、すまなかった。取り乱して。ありがとう片付けてくれて」

俺はいった。

凜とした唇が印象的な店員は、

「いいえ。仕事ですから」と実に綺麗な定型句を吐いた。
なぜだか背中が、物凄く冷えた。

—終—

#55 情事の後で……

さっきまで無我夢中に愛を囁き、胸を触り、背中を舐めていた男は今や電池が切れたように、呼吸と心臓だけに徹している。薄い毛布に包まれて、薄い筋肉が微動するのを私はじっと見ていた。1、2……。1、2……。ゆるやかな均整のリズムに耳を傾ける。彼が息をする。当たり前のことだが、こうも近くで、それも深淵のような電気を喪じた部屋の中でまざまざと見せつけられると感動したりする。もしも毎日、こんな誕生日のような素晴らしさに触れると気が狂ってしまうかもしれない、と思った。

長い間、彼は片思いの相手であり、同時に、両思いの相手でもある。ふたりとも臆病に臆病を重ね着し、容易に手を伸ばし続ける関係でもその手を握り合うことは一度としてなかった。ずるずると車に轢かれ眼球の飛び出した猫の死骸のような、にっちもさっちもいかない恋を続けた。

「ずっとお前が好きだった」

私は拍手した。「私も」

「よかった」

「そうじゃないかと思ってた？」

「いいや、全然。今、心臓が口から出そうなぐらい驚いてる」

「私も……」

自分に嘘をついた。嘘をつくのは尊厳と自尊心を質に売ることだ。ならば、三年間の負債を彼に払わせようじゃないか。拍手。女はしとやかで、したたかでなければならぬ。世俗では女尊男卑か男尊女卑かで揉めていようが、私にとって性別は議論の問題にならない。彼と彼女。つまり、こいつと私。私はこいつにツケを払ってもらうのを無言で約束させよう。

神が舌を出して私をからかう。私も舌を出して、こいつを指さす。神は笑う……。

来世について話をしよう、彼が眠っている内に。私はできれば次は日本人じゃなければいいな、と思う。日本人として生まれ日本人として生きた。日本人を全うしたと自分自身で思うのだ。人類最後のやまとなでしこは私ではないか、と信じてやまない。たとえ他人から後ろ指をさされたとしても彼なら理解してくれるだろう。愛より速く、彼の本能が私を肯定するために全細胞を蠢かせる。私はヒロインでありたい。私がヒロインである限り、彼はヒーローであり続けることになる。運命共同体という形容詞は、現実ではその風味を失うが、この彼と彼女は違うのだという証明が、肉体以外で、そう、オーラのように体の毛穴から滲み出るようなハッピーエンドに向かうストーリー。私は線の上を点になって歩く。彼が隣を歩く。私たちを繋ぐ線が出来る。私たちのストーリーが線になった瞬間、私はヒロインになる。ヒロインとヒーローが揃う……。

うう。彼が唸り声をあげた。寝苦しいのか喉を掻きむしっている。私は彼の心臓に耳をぴたりとくっつけて、命の呼応を確認する。1、2……1、2……。悪くない音。すっきりとした音がする。むき出しの胸に息を吹きかけてみる。彼は身をよじる。喉をかく。私はそっと毛布をかけ直してベッドから出た。

朝食の準備をしよう。男は目を覚まして、まず空腹を訴える。天気の確認よりも株価の流れよりも、飯を……、と乞う。そのとき、女が食事を用意していれば絶対的な立場にたつことができるのだ。男尊女卑、女尊男卑のはじまりは食事だ。連日日夜、せかせかと走り回る活動家に言いたい。もういいのよ、そんなことしなくてもいいのよ、訴えるようにうろたえるのはやめましょう、この世には男と女しかないのだから優劣が生まれるのは当たり前で問題はその事実を看破するのではなく、無我の矛で打ち破って平行線を作り、そこから個々で争うべきだ、と。でも私は言わない。言えばそこでまた新たな諍いが起こり、涙を流す人が生まれるから……このように私が達観したのは恋に病んだせいだろうか、それならそれでいい。ととん、とん。葱を刻む。まな板が喘ぐ。私はふふふと笑う。沸

騰したお湯に気泡がうかぶ。ぶくぶくぶく。数えてみようかと思っただけで夢いので中止した。味噌をお湯に入れる。葱も入れる。豆腐か油揚げでもあればいいのだが、一人暮らしの男の冷蔵庫と読書家の口車は信用していけない。吹きこぼれる前に火を止める。湯気から神が現れる。

「いい匂いだ」

「そうでしょう？ 何年花嫁修業したと思ってるのよ」

「修行……努力は徒労ではないのか。有益な過程などこの世にあるか？」

「自己満足で構わないわ」

「……よろしい」

私は食器棚からいかにも安そうなプラスチックの器を手にして、背中越しの神の声を聞いた。味噌汁を器に注いでから耳をすます。すうすう、と寝息が聞こえる。湯気がぶれる。黒塗りの神が顔を出して、消え入る瞬間の花火のような切なさと存在感を発する。私は頷く。黒塗りの神は湯気に飲み込まれていった。

味噌汁に口をつけてみる。少々しょっぱすぎるかもしれない。でも、しょっぱすぎるぐらいが私にとってはいいのかもしれない。かもしれないがこの先、どれだけあるのか分からないけれど、今はこの不確定さと手を繋ぐ。

もう彼の呼吸は聞こえてこない。私は振り返らず、彼に心臓で感謝と万感を伝える。届けばいいな、と夢見る少女じみた思考に、すっかり熱さに鈍感な口元がほころぶ。寝顔の彼のまつ毛が極端に短いことを思い出して、更に口元がほころぶ。

八〇歳にして、初恋叶いました。

さようなら。

すぐに私も、愛に逝く。

#56 四人がけテーブル延髄斬り

半月——。まさに半月を描くような鋭さだった。惚れ惚れするとはある種の恐怖を抱いたということだ。私は間違いなく、たった今、彼の放った延髄斬りに恐怖した。

首筋に衝撃を受けたサラリーマン風のくたびれた中年は、声にならない声を圧し潰してそのまま顔からアスファルトに叩きつけられた。不意打ちだったせい、この中年に受け身をとる技量が足りなかったせい、かは判然としないが、彼に運がなかったのは分かった。運に見放された人間は不運にお追従しながら生きる。倒れた中年はぴくぴくと指を動かしている。

「おっさん」

私の彼氏はまるで痛みを共有してるかのように首を回しながら、「たぶん今日もついてなかったな」と言って唾を吐き捨てた。唾が中年の後ろ髪にへばりついた。中年は、うううう、と唸っていた。

私はいつも通りだ、と思い顔をそらした。いつも通りだ。何も思うことはないのだ。感慨や底につたう冷たさは無常の産物だと唾棄すればいい。賢いやり方と冴えたやり方とはとことん目を瞑ること。

公路や学生専用の遊具、ゲームセンターから遮断された場末の裏道には私たち以外人影がなかった。これもまたいつも通りだ。私は不法入国者が大量に住んでそうなトタン屋根のアパートの階段に座ったまま、友人の眞子^{まこ}から借りたポール・スルーの短編集を読みはじめた。眞子は私のあこがれだ。眞子のように生きたいと思う。彼女のようにしがらみから解放され、目に見える羽で自由に世界を飛び回れたらな、と常々思うし、それが時折殺意に変貌するのもしばしばで彼女の耳が赤くなるたび、その衝動は強くなって、私はだめだ、と自制の意味をこめて彼女からお薦めの本を一冊借りることにしている。彼女の感性に触れて私は胸がほっぴりする。酸素を吸うスタンスで、暴力から距離をとってポール・スルーの短編を読み進

める。

「おっさんはさ、自分が無力だって思うよな？　当然、思っちゃったりするんだよな。みっともねえけどいい大人だから泣けもせずに無力感で舌が乾いちゃったり。んで、こう思うんだよな。『なんで俺が。なんで私が。なんで僕が。こんな目に合わなきゃいけないんだ』ってよ……」彼は一気にまくし立てた。

私は顔もあげずに彼が次に言うであろう台詞を呟く。「ジーザス……」

「ジーザス！」たぶん、彼は今や雨に打たれる脱獄犯じみたポージングで自分に酔いしれている。「残念賞はアンラッキーかい？　それ即ちバッドエンド？」

くひゃひゃ、と彼の笑い声が響いた。

ポール・スルーを読むのは二度目だった。一度目は春に、眞子とクラスが一緒になってはじめて喋ってはじめて羨ましいと思った帰り道に、眞子が女子学生のかばんにしては質素すぎるトートバッグから取り出してきて、あげるよ、といって貸してくれた。もうなんて悪い。それもほとんど初対面の人から。私は拒否すると、彼女は笑ってから、じゃあ貸してあげるよ、と言った。あげるよ、に妙なアクセントをつけて。

私は本が嫌いだ。でも眞子が貸してくれた本だけは別だ。どんな娯楽も眞子の手垢がつけばそれは高尚たる歴史となる。帰宅するなり、私はポール・スルーを貪った。深夜四時に新聞屋がドアポストに新聞を配達したコトウンという音で、はっとするまで眺めていた。小説の内容はてんで覚えていなかったけれど、翌日眞子には面白かったと感想を送った。眞子は、ふうん、とだけ言ってまた帰り道に、友達になろっかと極上の笑顔を私に浴びせた。気持ちよかった。友達は気持ちいいと私は知った。

——眞子の残像を打ち切って、私は脚を伸ばした。関節部が鳴った。伸びをすると脛の裏で白が散った。延髄斬りをくらくとこんな感じかもしれない。ぱたんと本を閉じて、彼をみた。彼はかがんで

猫背になり、依然倒れたままの中年に話しかけていた。

「俺、思っただよね。人生ってつまんねえし、退屈だし、やることねえし、どうでもいいやって。なんつうか、うん、まさに今のおっさんみたいに地面に突っ伏してさ、俺？ うん、まあ俺か、俺というアクシデントに立ち塞がれて助けを待っただけの人生？ 怖くて怖くてママ助けてって震えるだけ震えという帰ったら冷たいシャワーあびて、『忘れた！ 今日は何にもなかった！ 隊長、本日も晴天なり！』みたいなことを本気で信じる人生。俺は嫌なわけよ。立ち向かう感じでいたいわけよ。まあ俺、自分が何言ってるか半分わからなくてねえけどな。ところでおっさんは何なの？ 石ころ？」

彼が中年の横腹を蹴った。びくん、と中年のビール腹がたゆんで、うろう、と呻き声が聞こえた。

「話そうぜ。俺今日とはことん話しちゃうよ、素面で。アルコールとかヤクとかそんな退路はいらねえ。ここには罵声だけありや十分くひゃ。あれだから、おっさんが虫の息ごっこしても俺には関係ないから。やっちゃうから。うん、俺やればできる子だし」

そういつてまた蹴る。くひゃひゃと彼の耳障りではあるけど聞き慣れれば風の音と大差ない笑い声。彼は親からはじめてサッカーボールをプレゼントされた子どものように無垢な蹴りを何度も放つ。

「……っぜ」

蹴りの反動で体が段々と仰向けになっていく中年が絶え絶えに、

「だ……」

「ん？」彼は耳に手をあてる。「なんすか？ 応答してください、どうぞー」

「……なぜこんなことを？」

しわくちゃでずたぼろ雑巾が意志を掲げた。見上げると黒い空。とてもマッチしている。

彼は、あー、とことさら呆けたように言ってから苛立った様子で髪をぐしゃぐしゃかき回し、中年の耳をひっつかみそれを拡声器に仕立て、

「もう一回はじめから俺はやり直さなきゃいけないのかなあ？」

私に訊ねてきた。私は足許に擦り寄ってきた野良猫を撫でながら、首を横に振った。すると彼は親指をたてた。

「オッケー、了解。するってえと、次は趣向を変えて弁舌じゃなしに、肉体言語でおっさんに語りかけてみようかな。くひゃひゃ。痛覚は麻痺するが、あふれる感情が麻痺しないのは素人同士の絶対的暴力の怖さだよな、おっさん」

彼は有限実行を趣味としている。彼の言葉は彼の責任において必ず遂行される。彼は自分に忠実なるしもべだ。

暴力の音がした。

肉と肉が衝突する音がする。鈍くて嫌な音だ。耳にへばりついて洗い流せないしつこい汚れだ。彼の笑い声が混じる。くひゃひゃ。

「死なれたら困るが、死ぬぐらいの思いで生きといってくれよな」。
呻き声がそれに答える。

「今日の夕飯はなんだろう」私はずれたブラの紐を直す。「今日は肉より魚がいい。むしろ野菜ばっかでいいなあ」

足許で気が狂ったようにごろごろ転がっている野良猫が、ふにゃーお、と鳴く。

「眞子は今なにしてるんだろう。一人で夕飯食べてバラエティ観たりしてんのかな」

くひゃひゃ――。

「でもそれって変じゃない？ 似合わくない？ 似合ってるんだけどアンバランスだと思っうよ？」

ふにゃーお――。

「とりあえず眞子が平和で夕飯がサラダとパスタだったらいいね」
ぴん。野良猫の耳を指で弾くと威嚇された。私は申し訳ない気持ちになった。本をかばんに入れてスカートをはたいて逃げていく野良猫とは逆方向に歩く。こっちが私の帰り道だからだ。帰り道に彼はいなかった。

先程読んだはずのポール・スルーの短編、題名すらもう覚えてい

ない。けど、主人公に殺されたふくよかな隣人の遺言だけは覚えていた。

——明日のために出来ることはたとえ死んでも出来ることだと思うわ、ジャスティ。そうよ、粛清なんて考えないで。それはあなた自身を見捨てることになるわ——。

「ただいま」

「おかえり。遅かったじゃない、どこ行ってたの？ 寄り道してたの？」

「うん。そんなところ」

「お母さん心配したんだから」

「いつも通りでしょ。いい加減慣れてよ」

「それでも遅れるときは連絡よこしなさい。なんのための携帯電話なのよ。おもちゃにするために高いお金払ってるんじゃないからね。遅れるときは電話。わかった？」

「うん。面倒くさいけど」

「面倒くさいと思うから面倒くさいのよ。お母さんを見習いなさいよ。面倒くくめの生活よ？ 掃除に洗濯に食事の準備に、おまけにあんたにこうやって説教もしなくちゃいけない。主婦になるってことは面倒くさいと結婚するってことなのよ。あんたも女の子なんだからいつか分かると思うけど」

「もういい。分かったから分かった分かった、もう」

「分かってないのに分かった振りしないで」

「癖よ、癖」

「ああもう、なんであんたはこう、小憎らしい感じに育っちゃったのかなあ、もう」

「ごめんね、こんな歪んだ性格で」

「ごめんねじゃ足りないわよ、まったく……。あ、えーとなんだっけ、さっきあんたに電話あったよ。なんだっけ、不良の子から」

「眞子？」

「そうそう、眞子ちゃん」

「……眞子は不良じゃないから。いつになったら名前と事実を覚えるわけ？」

「いちいちあんたの交友関係まで覚えてたら頭がパンクするから。」

第一なんで子どもの友達の名前なんか覚えなきゃいけないの？　これ以上、面倒事を増やさないでほしいわ……。前から思ってたけど、あの子なんでうちに直接電話かけるの？　携帯にかければいいのに」

「眞子は携帯持っていないから」

「持っていないから何？」

「私も持っていないの」

「はあ……いくら愛情愛情愛情の我が子でもさすがに日本語が不自由だと涙が出てくる！」

「眞子が持っていないなら私も持っていないのよ。眞子イコール私なんだから」

「……真似っ子はいい加減卒業しなさい、よくわかんないけど。はい、ちゃっちゃとご飯食べて。片付けられないから」

「うん」

洗面所で念入りに手を洗ってから食卓に座った。本日の献立はハンバーグだった。がっかりだ。和風ハンバーグで大根おろしがまぶされているのがせめてもの救いだ。四人がけのテーブルにぽつんと座っていると口元がいやらしく緩む。やはりちよっと私も面倒くさい。

母の洗い物をしている背中が目に入る。口に箸でハンバーグを運ぶ。もぐもぐする。美味しい。母に美味しいと報告しようかと思うけど、しない。照れくさいしあとあと面倒くさい。明日からずっと永劫的にハンバーグなんてことになりうる。

「テレビ観れば？」

母がじゃぶじゃぶと皿を洗いながら、

「あんたあのドラマ好きでしょ」

嫌いだ。主演のアイドルの鼻につく演技が嫌いだ。俺ってどうよ俺ってかっこいい俺って……。画面から薄っぺらいナルシズムが臭ってきて鼻の奥につーんとわさびを塗られたような気分になる。眞子も嫌いだっていった。

「自分が観たいくせに」

「な、なにいつてんの？ あんたが好きだからわざわざ教えてあげたのに。そろそろ始まるのに」

「いや観ないっていうか元々私はすすんで観てないし。お母さんに付き合っただけだし」

洗い物を終えた母は濡れた手をエプロンで拭き、私の向かいに座った。「強情っ張り」

「どっちが」

私が素っ気なく突き放すとしようもない距離感が生まれて、沈黙があらたにおかずに加わった。もりもり食べる。ほぼ無心で食べる。母は舌打ちする勢いでリモコンを掴んで、テレビの電源を入れてチャンネルをお目当てのくだらない茶番ドラマに変えた。くだらないテーマソングが流れて、母はそのリズムをちよつと私にはあくまでばれないように乗ったりして、もう最悪。主演のアイドルが息を切らしている。テレビの中でこれだけくだらないことが出来るのなら実生活は想像をはるか上回るくだらないものなんだろうなと思った。なんと嘘くさい輝かしい笑顔！

「強情なあんたに付き合うだけ」

あっそう。

「ごちそうさま」シャワーを浴びて、眞子の本の続きを読もう。「お皿洗わなくていい？ 浸けとくだけで？」

「ちよい待ち、口実ちゃん」

「お断りします」

「お父さんが帰ってくるまでいなさい」懇願というより強制する母。

「……恥ずかしいから」

「はぁ？ 恥ずかしい？ 意味がわかんない」

「とにかくドラマが終わるまでここにすること」

有無も言わさぬ母に気圧されたわけではないけど私は腰をあげずに頬杖をついた。最悪だ。第四話まで観てさぶイボで全身犯されたのに、第五話まで観たら頭皮がずる剥けになるかもしれない。……と、あとで眞子に電話したときに話そう。眞子なら、もしずる剥けになったら水でじゃぶじゃぶ出来てよさそうだね、みたいなことを笑っていつてくれるだろう。

「ああ最悪」

「あんた真剣に観なさい。そしてフジ君の笑顔と演技と脚の長さの魅力を認めなさい」

「無理」

「どうやらお父さんとお風呂入りたいようね……あー、フジ君逃げてー。ふふ。高校生にもなってパパと一緒にバスタイム。犯罪ね、犯罪。……フジ君とお風呂は是非お願いしたいわぁ……」

目をとろんとさせる母を無視して私はドラマに集中する。早速さぶイボがたつ。肌が裏返りそうだ。胸が疼く。どうやら今回は心臓疾患を……。いや、制服の裏ポケットの携帯電話がヴァイブレーションで自己主張しているようだ。猿と化した母に気付かれないように、そっと携帯をとりだして確認。メールだ。「世直し終わったよーん」。

彼からだった。ゆっくりとボタンを押し、返信する。「お疲れー」。

「彼氏から？」母が言った。「かっこいいの？」

「普通」

「フジ君に似てる？」

「全然」

「そうよねえ。フジ君ぐらいになると人間にはいないかもねえ、うんうん」

じゃあフジ君はなんなの、と訊ねる前に、

「フジ君はフジ君。それ以外の何者でもない。あ、いま目が合った

……」

フジ君なるアイドルが遁走するシーン。この人はどれだけ走れば気が済むのだろう。そして母はこのアイドルのどこに魅せられているのだろうか？ 顔、スタイル、と母は答えるに決まっているけども。静かに、時に激しく興奮する一人楽団と向かい合いながら、私は極めて冷静にぼけっと思案に暮れる。眞子との電話のシュミレーションにトリップ……。

今日は帰りに土手で眞子から借りたポール・スルーの本を読んだよ。一章だけ読んだ。遅い？ 私は丁寧に読むの。それからバイトの面接に行った。話したでしょ、ペットショップ。でも落ちたと思う。うん、結果はまだだけどね。自然に振る舞えなかったし。そうだね、別にショックではないよ、うん。ペットショップって表向きは華やかだけどきつと裏ではきな臭いことになってるしさ。むしろ落ちてラッキーみたいな。眞子は何してたの。眞子、ああ今日バイトだったんだ。シフト変えたの？ ふうん。まあそうだね火曜より水曜のほうが眞子には合ってると思う、星占的に。うん？ 気にしないで気にしないで。それで……そうだね、でも公私混同じゃないのそれ。ちゃんと買ったほうがいいと思うよ、強く言つてのしちやえ。大体なめられたら終わりだしね、大抵の関係は。防げるなら防ごうよ。あれよ、終わりのないディフェンスってやつ。え、知らないならいいけど。駅前？ あー、アイス屋でしょ？ もうすぐ夏も終わりなのにアイスってどうなの？ 好きだけど、太るでしょう。アイスはあれ脂肪の塊だからね。お腹に食べた分塗ってると考えなきゃ。せっかく補習やらなんやらがばたばたと片付いたときに暗い話でごめんね。とにかく太るのだけは……あ、お父さんが帰ってきたみたい。

「おかえり」

「ただいま」父は言った。「遅くなった」

「そうね」

母はテレビから視線をそらさないまま、父を出迎えた。父はくた

くたで今にもその場に崩れそうになりながらもなんとか食卓についた。母の隣で、ふう、と息をついてネクタイをゆるめる。ワイシャツがしわくちゃでみっともない。あとで母がどやしつけるのは目にみえていた。

私は黙って父に会釈した。特にあげたい言もなければ、報告すべき事もないし、黙るに限る。父は、ああ、と力なく私に微笑かけた。しかしこれで四人がけのテーブルの席が三つも埋まってしまった。不均等で不誠実で違和感満載だ。

テーブルの上で私の携帯がうなった。母がきつと私を睨む。静かであるのが最優先事項なのにヴァイブレーションはある条件下において騒音物と化す本末転倒。メールだ。「つーかごめん。コントローラー、イッちまった」。

彼に返信する。「弁償」。

一分もかからずに返信がくる。「割り勘でよろしく」。

「ありえない。死ね」。「殺生な」。「格ゲー禁止」。「じゃあお前もわけの解らん顎尖った男が馬鹿みたいに出るの禁止」。「意味不明」。「意味快晴」。「借り物壊しといて何なの?」。「モラルハザードじゃね? それか信頼関係がなせる技じゃね?」。「もういい。とりあえず明日またね」。「……怒らないでね?」。「やだ」「いけず!」。私は携帯を閉じた。

テレビドラマはいつのまにか終わりにかけていた。主演とヒロインが手を取りあってなぜだか自然保護を訴えている。名脇役と名高い俳優が涙ぐんだりしている。そりゃそうだろう。先月は外国の映画賞に呼ばれ、血の色のカーペットを胸のあいたドレスをまとった女優と歩いていたというのに、自国に帰省するとこれだもの。私は心底同情したし、さっさとこのドラマが無事に穏便に可及的速やかに最終回を迎えるのを祈った。ジーザス。

父がはあはあと息を切らしている。このドラマのオープニングのように、肩で息をしている。私はちらっと確認して頬杖をつく。父は濁った目で私の胸元をみている。私は気取らずにそのままぼけっ

とする。母はテレビに釘付けのままだ。どうやらエンディングと次回予告までしっかり漏らさないらしい。よくできた生理用品のようだ。母は愉快だ。父も愉快だ。私だって愉快だ。エンディングが終わって残すは次回予告のみ。母が満足げに、ほおう、と呟いた瞬間に私は食卓を立つ。

眞子に電話しなくてはならない。友人の眞子と分かち合い、感情を吐露して共有し、許容し、触感を味わい、めまぐるしい日々について和やかに意見交換しなくてはならない。私が私であるために。私が眞子であるために。眞子が眞子であり、私であるためにだ。私たちは互いだけを尊重し、互いだけを全うしようじゃないか。二人だけのサイクルに起きるイレギュラーはイベントに繕い、朗らかに笑うのだ。「眞子、あなたのそういうところが好きよ」。「私だって、伊織いおりのそういうところが大好き」。「私たちって気が合うのね」。「そうね、病的なぐらいに」。「病んだもん勝ちよ、そう思わない?」。「あなたの彼をみるとそう思うわ、時々」。「彼はあれが自然だから」。「うん? まるで他人事みたいに。自然体なのはあなたもでしょ?」。「ふふ、そしてあなたも」。

ああ眞子。愛しの眞子。すこし濡れてきた、眞子のせいで。私は廊下の電話機にあえて登録しない番号を入力する。何度だって押してきて手に馴染んだ番号だ。眞子は何をしているだろう。明日私に貸す本を選んでいるかもしれないし、鈴虫の鳴き声に耳を傾けながら野良猫に餌をあげているかもしれない。神聖なる眞子を煩わせる快樂、悅樂、背徳心! 私は幸せいっぱいだ。

遠くで母の素っ頓狂で愉快な声がきこえる。

私は電話の呼び出し音にあわせて口真似をする。「るるるる……」
何かが勢いよく倒れた音がきこえる。

「るるるる……」

どたどたと走り回る足音がきこえる。

さあ、眞子。早く出て!

「るるるる……」

母が騒いでいる。終末感で固めた悲鳴をあげている。

ぶちっ。あ、眞子が電話に出た。

「眞子？ うん、伊織。電話かけてくれたでしょ？ 出れなくてごめんね」

母が遠くで騒ぎ続けている。無駄によく通る声で騒ぎ続けている。おと……さん……が……いったい……死……そんな……に……が……。

「ぼろ雑巾のお父さんがどうかしたの？」

私がいきなりぽつりと言ったせいで眞子が不審げに訊ねてくる。どうかしたの、と。どうかしたのはうちのお母さんです、はい。電話機の横に置いた最先端がヴァイブレーションでうなる。ねえねえ、と眞子が向こうで甘い声を出す。私は、ははっ、と笑ってごまかしながらメールを確認する。「やべえ、明日まで待てねえ！ 今すぐお前んち行く！」。私は馬鹿の突発的行動にうんざりして、眞子に提案する。

「もし晩御飯まだだったらうちに来ない？」

え、どうしたの、と眞子は驚く。私と眞子は親密だけれど食卓を囲んだ経験はないのだ。

「いやー、うちのテーブル四人がけのなんだけどさ。うちって三人家族なのね。それって間違ってると思わない？」

間違ってる。

眞子の返答を待つ間に私ははっとして自分の計算違いに気付いた。父、母、私、眞子で四人なのに例の馬鹿が壊れたコントローラーを握りしめてこの家に押し寄せてくると一人あぶれてしまう。

電話を子機に切り替えて、ああお願いします宜しく神様アと低頭姿勢で祈りながら廊下から食卓を覗く。

——死に体のままテーブルに突っ伏す父と噎び泣くだけで行動しない母がみえた。

私は子機に伝達する。「眞子！ 大丈夫みたい！ プラスツーでも、こっちはマイナスワンらしい！」

眞子はなぜだかいまいち把握できていないようだけど、私はすぐ来てね、と念を押して電話を切った。さて料理の心配をしようと思ったとき、玄関のチャイムが鳴った。馬鹿が来た。早くもあの馬鹿が来た。マイナスツーにならないよう気をつけなくては。護身用の包丁を握りしめ、私は玄関にゆったりとしたテンポで向かった。ドア先から、いつもの笑い声がきこえてくる。いつも通りの。

――終――

#57 肌色鉛筆

体育の授業で柔道が課目だと俄然意欲を出して、率先して教師面する柔道部。彼らは初めこそ親切に手ほどきをするが、いざ実戦となると子羊を狩る眼光で容赦なく大技を素人相手に繰り出す。そしてふふん、と鼻を高くする。

意気がる。ここぞとばかりに。

その瞬間が人生の絶頂期であるかのように彼らは、意気がる。

くだらない優越感で帯が緩んでやがる。

しかし、そのくだらない、と吐き捨てたかった彼らが、いかに要領よく立ちまわっていたかに気づき、僕は眩暈に似た焦燥を覚えた。
「近藤^{こんどう}、さっさとしろよ。ちゃっちゃと描いてくれよ。バレんだろうがよ」

「待って。待ってくれ」

「難しい事言ってねえだろ。裸描けって言ってるだけだ」

僕は美術部で。

今現在、美術の授業で。

授業と関係のない女性の裸体をクラスメイトから要求されているのだった。柔道部に所属していればこのような苦境には立たされなかっただろう。汗臭い道着に身を包んで、連日受身の練習をしていればよかった。暴力と紙一重の年功序列に頭を下げていればよかった。

選択を誤った。が、今を乗り切ればこの短絡的な後悔は息といっしよに消えていくだろうし、深く考えないようにする。

「みてえんだよ裸が」

ニキビ面でいかにもスケベそうなおく^{おくのりお}則夫が、僕の背に軽く抱きついて囁く。別段仲がいい間柄でもないのに、こと頼みごととなると誰しもが極端に低頭姿勢かフレンドリーである。

「帰ってエロ本でも、ネットでエロ画像でも見れば済むじゃないか」

「近藤。俺はな、女の裸が大好きなんだ」

「自信満々に言われても」

「俺はな……女の裸が大好きなんだ……」

「深刻そうに言われても。それに大好きならなおさら帰ってちゃんとした？ 裸を鑑賞すればいいじゃんか。さあ席に戻ってくれ」

かれこれ五分以上も奥は僕に依頼を続けているのだった。先ほどから美術教師の末広すえひろがちらちらと視線で注意してきていて、内申点が下がっていくのを肌で感じている。

末広は美術教師なので当然、美術部の顧問も担当しているのだが、部員の僕も何を考えているかよく分からない謎の教師だ。はっきり口で注意しないから、逆に怖い。

「奥。頼むから席に戻ってくれ」

「エロにひたむき状態の俺を動かしたいなら戦車でも持ってくるんだな」

「そういうのいいから。頼むよ、末広がさっきから睨んできてるんだ。ああいう静かで何考えてるか分からない奴が怒ると、とんでもない事になるって一六年も生きてたら想像がつくもんだろ？ だから頼むよ」

「イエスが聞きたい。こちらの要求はそれだけだ」

僕は嘆息をつき、投げやり気味に、

「イエス。でも期待はしないでくれよ」

「適度な期待はモチベーションアップに繋がるんだよな」

「……まあいいよ。席に戻って」

去り際に奥は親指を立て、グッジョブ、と呟いた。先走ってる。おそらくグッドラックと言いたかったのだろう。それでも意味がよく分からないが。

やれやれ、僕は指を鳴らしてから鉛筆を握った。やっと本来の授業内容、モデルのデッサンが描ける。

中心にモデルを一人座らせて、クラス全員で円状に椅子を並べ囲んでいる。

モデルは多数決で選ばれた山口保香^{やまぐちやすか}。死語で表現すればクラスのマドンナだ。品行方正で生徒だけでなく教師も篤い信頼を寄せている。

彼女は可愛い。

まじまじと、あくまでモデルとしても観察すればするほど美意識が刺激されて幸せに包まれる。

「いいなあ」

思わず率直な感想が口に出る。

「だよなあ。着やせするタイプらしいしなあ」

はっとして隣を睨むと、奥が下品な目線を上下させていた。

「なんでいるんだよ」

「席変わってもらった」

末広を確認する。末広は心ここにあらずといった感じで壁に寄りかかっている。残念ながら問題はないらしい。末広にはがっかりである。

「描いてねえじゃん。全然描いてねえじゃん。イエスは嘘だったんか？ 神を冒瀆するのとか？ 暴徒化か？ 我ながらすべってるの自覚してるぞ？」

「いま描こうと思ってたところだよ。わざわざ監視しなくてもいいのに」

これで描かずにやり過ぎルートは途絶えた。

「ふうん」

「なんだよ」僕は言う。「細かい注文は聞かないぞ」

「いやいいから、手を動かしてくれ。ちゃんとモデルを見て、な」

「モデルを……」
なるほど。

「だめだ。アウトだアウト。いくらなんでも下劣すぎる」

「俺は注文しじゃないぜ」

奥はガムを噛んでいるのか忙しく口を動かす。憎たらしい奴だ。「その条件は飲めない。無かった事にしてくれ。そもそもこちらに

メリットはないんだ。交渉は決裂というより、最初から断裂してたな」

「か、顔は描かなくていいんだ！」

「注文したな！　今はっきり注文したな、奥！」

「あ、ミスった！　今のは取り消しだ！」

「だめだ。大抵の場合、チャンスは二度も訪れないんだよ、奥」

漫画であつたような気がする科白じみた僕の一言で奥は身内に不幸があつたかのように頭を抱えて苦しそうに呻いた。

こいつ本気だ、と僕は少々慄く。

「裸が大好きなんだよお」

奥は僕にすがりついて半泣きで訴える。

「静かにしろ。周りに迷惑だ」

「……お前が裸を描くまで駄々こねて迷惑ばらまいてやる。おもちゃ売り場の糞ガキリスペクトだぜ」

脅迫を始める。とんだ人型兵器がクラスに紛れこんでいたものがある。

「お前山口が好きなのか？」

「性的欲望のはけ口にしたいぐらいには」

「一度死んだほうがいいよお前」

「褒めるなよ」

こうしている間にも時間は刻々と削られていく。どうせならやつつけ仕事で済ませて、描いた絵を退魔よろしく奥の体に貼りつけて悪霊退散してやるのが吉。アクシデントは最短距離で振り切るのが僕のスタンス。

「……さて描くか」

奥がにやり笑う。「待ってました」

裸を描く。つまりはヌードデッサン。二度だけ経験がある。一度目は春先、まだ入部したての頃だ。純朴なティーンエイジャーに対する度胸試しで、この時期の風物詩らしかった。僕以外の新入部員は女子なので、恥ずかしさは尋常じゃなく、晒し者に近い被害者意

識を覚えていた。鉛筆の先が震えたり、なぜだかなんども尿意に襲われたり。

いい思い出ではない。

二度目は先週だ。モデルさんは凄く綺麗な人だった。後ろめたそうに名乗っていたから偽名かもしれないが、確かサトウさんだった。末広曰く、ヌードモデルってのは結構流動的で一度きりの人もいれば何十年と続ける人もいる世界らしく、彼女の裸を恋人や温泉客以外で見るのは君らが最後かもな、と何を考えているか読めない美術教師はぽつりと言っていた。

いい思い出にしよう、こちらは。

「山口可愛いなあ。触りてえ」

奥のぶち壊しな一言で僕は艶めかしい過去を心の宝箱に戻す。

「山口はドスケベに違いない」

「根拠もなく言い切るなよ。失礼だ」

山口の悪い噂は耳にしない。怖いぐらいにクリーンだ。

「いや俺には分かるんだよ。なんというか……同胞の香りというか、腹違いの兄妹というか。なにより泣きぼくろのある女はドスケベって相場が決まってるからな。染色体レベルで」

「山口が聞いたら泣くぞ。わんわん泣くぞ」

「女は泣いてる姿が一番エロいよな。喪服の女とか最高だろ、きつと。すすん泣いてると不謹慎ながらもご相伴にあずかりたいと思うよな」

同級生とは思えない親父臭さだ。まあね、と生返事をしておく。美術室の壁にかけられた時計を見る。ちょっと本格的に時間がない。モデルデッサンを諦めて、ヌードだけを描く時間しかない。

これでいて奥はクラスの中心人物なのだ。常に打算的な僕としては課題を家に持ち帰るのは良しとしても、こいつの機嫌を損ねるのはなんとしても避けたい。ずるずる話し込まず早々に適当な仕事をしておけば、と惜しむ。

「これから本気で集中するから。黙っててくれよな」

「オッケー」

よし。

山口を観察する。よく観察する。

人体に完璧な直線は存在しない。曲線が直線を騙っているに過ぎず、人体は曲線を集めて簡略化しどうにか小奇麗なフォルムに見せかけているだけ。女性の場合は曲線が強調されていて、分り易く、描き易い。よってモデルは女性が好まれるそう。

山口は椅子にかけて、自分を抱きしめるように腕を組み、スカートから白を覗かせる長い脚はリラックスして伸ばしている。

漠然なイメージが徐々に固まりだしたら、頭の中で整理して余計なものを添削する。やがて黒鉛筆が走りだす。一旦リズムをつかむと面白いように紙の上を線が埋めていく。

「おお、美術部みてえ」

「美術部なんだよ。一応な」

僕の思う山口のヌードと、実際の山口の情報が着々と結合していく。奥に同調するわけじゃないが、山口を着痩せするタイプと仮定する。いや断定する。イメージと泥団子は固まれば固まるほど優秀だ。

胸はやや大きめに。腰回りはやや太いが健康的で手の甲を押し付けるとぴったりはまり、弾力性は申し分ない。二の腕は生活に適した筋力をさりげなく誇示しつつも、異性にたましいたくましいという野卑な印象を決して植えつけない膨らみ。質感、肌質は……。

「参ったな」

実力不足だ。手を止める。

「どうしたよ。おっ、すっげーな、おいおい。エッロ、マジでエッロ、お前エロエロだな、おい」

「駄目だ。質感が……」

「質感？」

「ああ。あまりに、画すぎる」

「デッサンでそういうもんじゃねえの？」

僕は首を横に振る。「違うんだ。僕は想像とはいえより完璧に近い裸を描きたいんだ。それにはやはり生の質感が必要だし。くそっ」ことさらに悔しがってみせる。

「いや、いいって。凄いいって。よく描けてるって。うわ、エッロ！特に胸が俺好みの割れる寸前の風船的張りとか！」

「……そうかな？」萎縮しながら問う。

「オッケーよ！」

「お前がいいって言うってくれるならいいんだけどさ」

よし。なんとかなった。時間以内に第一の課題を済ませる事に成功。なんたるかをまるで知らない相手をたばかるには自ら辛辣に批判——卑下してやることで、相手を満足させるのが手っ取り早い。

「貰っていいんだな？ 遠慮はしないぜ？」

「依頼者は黙ってブツを受け取るだけでいいんだよ。なんていうか……ハードボイルドだろ？」

「しまった。葉巻ぐらいいつも持っとくんだった」

「持ってもどうせ火がないってありがちなオチに決まってる。格好がつかないな」

「はっは。言えてる言えてる」

阿呆ここに極まりだ。僕は苦笑を隠さずに、

「まだちょっと時間あるし本来の課題も描けるだけ描いとう」

「そうだな。大体描いとけば家でどうにでも出来る」

そう言って奥は立ち上がる。「じゃっそういうことで」

「あ？」

怪訝に思うが、すぐに理解する。用が済んだら退散って訳だ。

「現金な奴」

「思ってもわざわざ口にすんなよ。敵が増えるだけだぞ」

「上から目線だな」

「違う。ただの注意だ」

僕は敵を作らない。発言はすべて相手によって決める。主体性と自己正当化はとうに捨てていた。できた子であろうと誓っているの

だ。だから絵を描く。絵を描きたいと思う。僕自身が何もない空洞だから埋め合わせや、感情移入先を自分の手で、こればかりは自分勝手に。それに喜びを覚える。

一息つくと、奥に描いた山口の仮想ヌードがまぶたの裏に焼き付いていた。まばたきをするとシャッターが切られる。しかし、顔は映らない。顔だけが、見きれている。でも山口の声が聞こえ、僕の筋肉は硬直する。

当然のようにいやらしい事を考える。胸が熱くなる。

山口が微笑んだ。まぶたの裏で。

「近藤」

「なんだよまだ何か？」

鼻息を荒くして戻ってきた奥が肩を叩いてくる。

「こいつを塗ってくれないか？」

「……色を？」

奥の手には肌色の鉛筆が握られている。

どこでこんなものを。今回の美術の授業で使うのはデッサン鉛筆だけだ。学生は得てして荷物が増えるのを嫌うので普段の筆箱にデッサン鉛筆を一本入れておき、他の道具は必要とあらばしぶしぶ、といった感じで用意する。

「拾った。足元に落ちてたんだ」

なるほど。イレギュラーだ。

「色は塗らない方が映えると思うよ」

面倒だからそれらしいことを返す。

「世は二一世紀。モノクロよりカラーを尊ぶ時代だ、絵かき屋さん」
「モノクロでアナクロが流行する時代でもあるはずだよ。何から何まで最先端じゃ味気ないから。懐古主義者が目くじらを立ててなきや最先端は最先端に整列できないしね」

「件はエロだ。エロエロだ。各種主義の横槍は無用だろ？ 無粋なくらいにな。いや、不快なくらいに露骨な追求だ。同時に命令でもある」

突然、強気になる。牙を剥き出しにして命令ときたものだ。

ありがたいことに時計は残り時間をガキの色塗り遊びに合わせたように刻んでいる。ファックだ。サノバビッチだ。昨夜、ロードショーでトカレフを乱射していた尻丸出しの刺青女が、僕を蜂の巣にして歯をみせる。

「いいよ。了解。でも時間がないんで、粗い仕上がりになると思う。あとになって、『今の方がよかった』は通用しない交渉となる。メリットは少ないね、後ろ盾に大使館を並べた希望的観測でも覆らないほどこに」

「学生だ。後ろ盾も何もない。ひたむきなまでに学生なんだ、こっちは」

「分かってる。境遇は同じ。一寸の狂いなく」

「なら答えも分かりきってるはずだろ？」

「……追求」

「ひたむきに、だ。……エロを、な」

僕は天を仰ぐ。といってмокすんだ天井があるだけだが。

「オーケイ。尻の穴が濡れても後悔すんなよ」

「あいにく俺の前立腺はお利口さんでね」

薄ら笑う奥。ここではっと気付くが、彼も昨日のロードショーを見ていたらしい。

つられて薄ら笑う僕。「お絵かきの続きでもやってなさい」

けらけら笑う奥。

適当に塗っておしまいだ。課題は部活中にでも描きあげればいい。頭の中に山口のフォルムは叩きこんである。

何よりノッてきた。ノッてきてしまったのだ。愚直にも僕はデッサンとは名ばかりの、いやらしいこのお絵かきを。放課後連中が茶を飲み、ファーストフードを食らい、女の尻を値踏みしている間に得たスキルをもって楽しみだしてしまったのだ。思えば僕も山口は妄想のはけ口に何度か使ったこともある。悪い気はしない。罪悪感。はペン先を滲ませもしないし、筋を痙攣させたりしないのだ。

「とことん自分が嫌になる。流されやすい性分も、受け入れては氣持よくなる氣質もだ」

小声でごちったら握る肌色鉛筆がエンジンがかかったように唸り出したようだった。ここまでか。こうもノッているのか、と僕の自虐に拍車がかかる。学生だ。学生ゆえにだ。性に支配され、柵の中で生きる学生ゆえにだ。華やかさは遠い泥臭い道中のご真ん中で笑い憎み蔑み怒り戸惑い続ける。どうだ、哲学的じゃあないか。たかが同級生の裸を想像しているに過ぎないのに！

「考え事は後回しでいいだろ、近藤」

「……だな」

どう体裁を繕ったってやってる事が下品なのは否めない。

僕は肌色を、白と黒のコントラストに一筆入れた。

——その瞬間だった。

「はああっあんっ」

美術教室は水を打ったように静まり、僕だけがその奇怪にも快樂に果てる声が誰のものか不名誉ながらに即答してしまい、唾を飲み、生々しい唾が喉を通る音が美術教室中にサイレンのごとく響いたようにで寒氣と怖氣がした。

「末広……」

振り向きざまに僕はそいつの名前を口にする。肌色鉛筆が震える。いや震えているのは僕の指だろう。

あくびならまだしも。放屁ならまだしも。要するに生理現象なら、誤魔化しがきく。しかし末広は、のっけから本能剥き出しだった。何故に授業中に、僕や奥に負けない下品な声を！

ざわつくクラスメイトたち。当然の反応だった。普段は寡黙が崇めてよく出来た蠟人形の異名を持つ末広が急に……。

ホラーだ。

「先生どうしたんですか？」

人のいい女子が明らかに怯えながら末広に声をかけた。

「肌色……」

末広ははつきりとそう言った。

「え？」

「近藤くん、肌色、ダメ……」

末広はどもりながら、かすれ声で僕を呼んだ。

警察の掲げる標語か？　すぐさま理解できるエクスキューズは与えられていない。

「手を、離しなさい」

途端に、美術教室の後方で気だるそうにしていた教師は、本来なら死人であるべき足取りで僕に迫ってきた。遅々とした、そして必死の形相で。毎日毎日、繰り返される日常で、毎日毎日、嫌気も死ぬほど顔を合わせてきた教師が僕に迫ってくる。

おぞましい！

銃は？　僕の銃は？　トカレフ、トカレフ、トカレフ……！　ミ

リタリー知識が乏しい僕にはトカレフしか頭に浮かばない。

「訳がわからない」

「近藤！」　奥が猫なで声で言う。「俺は関係ないよな」

「ふざけるなよ！　お前が乗せたくせに！　泥船どころか幽霊船じゃねえか！」

なりふり構ってられるか。口調が下衆くなる。

「近藤くんただちに肌色鉛筆を破棄しなさい」

僕は恐怖に駆られて即答する。「……嫌だ！」

「なんでだよ！」　奥が怒鳴る。

まったくだ。「すまん。思わず」

「早く捨てろ！　足元にそれ置けよ、近藤」

「ああ分かった」

屈んで、しかし視線はひゅーこー、と切迫した呼気を吐く美術教師からそらさない。ゆっくり肌色鉛筆を床に置く。

「はあはあ。いいんだ。うん、実にいい。そのまま。そのままだ」

末広は下っ腹を押さえ、息も絶え絶えに僕をあやす。

未曾有の危機は去ったのだろうか？

「あつ」奥があほ面に磨きをかけて言う。

「どうした？」

「昨日テレビで映画観ただけど。ドンパチの。チャカ満載の」

「俺も観たよ。ヤクザものじゃなかったけど」

「同じようなシーンがあったろ？ ほら妻のルーシーを人質にとられたジョバンニが、敵に銃を床に置けて命令されて」

「あつたな。奥さんの強情さと悔しさが表れてたこぼれる涙は名演だった。すこし泣いちゃったし」

奥は頷いて、

「そのあとジョバンニ、足を撃たれ——」

僕は奥が言い終える前に行動していた。舞台は最後の夏、甲子園の切符を賭けた高校球児らの戦い、輝く汗と太陽、九回裏ラストバッター、当たりはぼてぼてのショートゴロ、だが諦めるな諦めるな、決して諦めるな、土をかぶった白いファーストベースにバッターはヘッドスライディングを……という感じで。

床に転がる肌色鉛筆に飛びついた！

末広が目を見開いて、

「いやああああつ」絶叫する。して海老反りで、悔しそうに身悶えする。エレクト、エレクトだ。

「あぶねえ……」

「お前意外と行動力あるな……」

「三度の飯より安定が好きただけだよ」

額に嫌な汗が横切り、学生服の裾で拭う。

「近藤くん今なら先生怒らないからね？ 本当だからね。先生極めて冷静よ？ 早くそれを……んんっ……敏感なところをんっ」

「絶対やるなよ近藤」

「ああ。『怒らないから』は悪い大人の常套句だ」

「先生は悪い大人じゃないよ。先生嘘つかない。先生は敏感なだけ。人より敏感なだけ」

「インディアンも腹いっぱいなら飯残すし、命の危険感したら嘘も

つくわボケ！」

「奥、言い過ぎ」

「交渉はどれだけ優位に立ち続けるか、だ。こちらら一步も引くつもりはねえぞ！」

経験から納得である。教師と生徒の会話とは思えないが。

「お、お願いします。敏感なんです」

苦しいのか気持ちいいのか分からないが、末広は最早こちらに向かってくるのをやめていた。肌色鉛筆の代わりに床に転がっている。下腹部付近を押さえて。

すこし冷静になって思索をめぐらすと、とてつもなく脈絡のない話だ。笑えない。

「おい近藤……何ぼーっとしてるんだ。早くしろよ」

なぜか奥は、僕をかばうように腕を横に広げている。

「え、何が？」

「肌を塗れ！」

「しょ、正気ですか！ そんな場合はとうに過ぎてるだろ！」

「肌色を塗りたいくれ！ ここは俺が死守する！」

「オージーザス、対話が不可能ときたもんだ。おまけに自分に酔ってやる」

映画のワンシーンを再現中なのだ、彼は。

「ぐっ……あまり長くはもたねえようだな……。だが悪くねえ、好きな女のために死ねるなら……俺みたいな馬鹿がいてもいい、そうだよな神さんよ……」

「絵だから。これただの絵だから」

「うだうだ言ってねえで早くしやがれ、ブラザー！ 愛してるぜ！」

「……サノバビッチ！」

自棄だ。ああ、この際自棄だ。クラスメイトたちはとくに終業のチャイムを待たずして潮が引くように教室に戻っているし自棄だ。僕だつてとくに自棄になっている！

「肌を塗る！ 塗ってやる！ 塗ってやるぞ！」

「そうだ、肌を塗れ！」

「やめてええええええええ」

末広の痛切な悲鳴。だが僕はすでにブレーキが壊れたトロッコ。ひたむきに純情。曖昧に冷静。激動に感謝。悪戯に、制止の声に軽快なノーを叩きつける。

なんて事のない、一見して他の肌色鉛筆と違いの分からない肌色鉛筆は、いったいどうしたのか末広の性感帯を刺激しているらしく、それを僕は偶然にも、というより奥が見つけたらしく、それを僕は偶然にも握ってしまつたらしく、ああ、末広の、仏頂面の末広の性感帯を僕は荒々しくぎゅっと握っているわけで、ならばどうすべきかは一択なのだろう、自我が不安定な学生諸君なら同意をもって僕に頷きを返すはずだ。

恨みがなくとも、相手を虐げる快楽は別腹なのだ。悪意の親戚を僕は知った。知ろうとしているんだ。

探求！

「足から！」

探求！

「腰まで！」

「山口、好きだああああ」奥が叫ぶ。

「二氣に、登り詰める……」

「山口、やらせてくれえええ」奥が叫ぶ。

「顔は丁寧に……だ。たまらないよ、もう何がなんだから分からないけども。分からないからこそなんて思えちゃうほどにだよ。たまらないんだ」

自分自身に慄きながら、肌色鉛筆を床に置いた。

奥が死線を超えた顔付きで僕の元へ。山口の裸が描かれた紙を眺める。なめるように眺める。足の先から乳房の先まで。目がぎろぎろと動いている。

「違う……」

「え？
どうした？
血迷ったか？」

「違う！ こいつは……」

蒼白に顎を小刻みに揺らす。奥は、違う、と言った。否定だ。イメージと違う？ いや、そいつはなしだと予め釘をさしてある。奥は下衆だが、無粋ではないと思う。共に死線を乗り越えた身としては信頼したく思う。

美術室に冷たい空気が満ちた。床に転がる末広はぴくぴくと痙攣している。末広の横たわる床は、びっしりと濡れていた。僕は、奥の真意を待った。

「こいつは、山口の裸じゃねえ。もつと恐ろしいもんだ……」

「何なんだよ！ だったら何なんだ！」

奥は言った。「分からない。怖い。怖い。俺は、怖い！」

情けない男がいた。クラスで権力を持つ男は、未知の存在に怯える小市民じみていた。もうだめだ、奥は。僕の中にあった打算からくる丁重な扱いはもう使えそうにない。

紙の上の裸は慄然とそこにあった。怯える奥を笑い、山口の裸は僕に語りかける。まだ分からないの？

「まだ分からないの？」

誰かが言った。

あえて誰かがと言わせてほしい。僕も情けない男だった。

「教えてあげるよ」

誰かが言った。恩着せがましく。

「言うな」奥が怒気を顕にした。「言うんじゃねえ、末広」

「知っての通り、私は美術部の顧問だ。日々、部員たちを見守っている。彼女、もしくは彼らの行動言動。嫌な話もね、聞くよ当然だけれどね。致し方無いと諦めて聞き流している」

「うるせえよ。黙れよ」

棒にでもなったような四肢が不気味に、末広をその場に顕現させる。まさにそう言うしかない立ち上がり方。末広と目が合った。末広は口角を、にまあとあげて語り続ける。

「私は日々、部員たちを見守っている。美術室に顔を出さない日は

ない。察しはつくだろうけど私は同僚たちの中でも浮いてしまっているんでね。ふふ。居場所が美術室だけだったのも多分にある。いや、認めよう。悲しい事だがね。事実是不幸ばかり生むよね……」

末広は目を細めた。先程まで奇怪な行動をとっていた者とは思えない滔々とした語り口がいつそう気味が悪い。全身の神経が、ぐさま逃げろと警鐘を鳴らしている。でも動けない。一步も動けず、聴覚がやけに鋭敏になっていく。

「私は彼をみていた。毎日毎日、彼をみていたんだよ」

奥は、やめろやめろ、とたわごとのように繰り返している。

「何が言いたい？」彼は訊ねた。「僕に何が言いたい？」

彼——僕の声は強がるガキそのものだったのだろう。末広が一笑した。

「不可解な事は一つもない」

「不可解そのものじゃないか！」

「理解を拒む道理だよ、そいつは」

「世迷い言を口にして気取るのはらしくないでしょう、鉄面皮さん」僕は嘲るように言った。「喉まで出かかってるものを早く吐き出したらどうです？」

授業を終えた美術室には僕と末広だけがいた。一生徒と一教師だけがいた。静寂が矛盾するようだけど、ひたすらに囁っている。耳を塞ぎたくなる。

「その裸は……」

静寂を末広が切り裂いた瞬間だった。重なるように、びりい

紙を裂く音。二枚になった紙を指でつまんで、けたけたと笑う奥。「やってやったぜ。やってやった！」

「奥！」

末広が怒鳴る。「私の裸！ 私の裸を！」

奥は耳を塞ぎながら、興奮を体で表現しつづける。けたけた。

「君をみていたんだよ！ 私はいつも君をみていた！ 来る日も来

る日も君の指先、君の呼吸、君の毛先を！ 参加自由な美術部じゃあ毎日顔をだすのは君と私だけだ！ 恐らく、いや絶対に、いやそうでなくてはならない！ 君にとっても私だけのはずだ！」

「こいつはいい。愉快だ！ 愛だよ！ 違いねえよ！」奥が気が狂ったように野次る。

「母のいない君にとって異性は私だけ……。異性のイメージは私なんだ。そうでなくてはならない！ 繰り返す、そうでなくてはならない！ そして証明された！ 繰り返す、君にとって異性のイメージは私なんだ！ だから私の裸を描いた。私の目に、私の裸が目に入ったとき、大喜びだったよ私は……。身悶えが止まらないほどに大喜びさ……。もうどうにも止まらないよ、獣欲が抑圧に耐えかねて、今にも胸を突き破りそうさ！」

敵を作るな。

父は子どものころから僕に何度も言った。母はすでにいなかった。僕的人格は、他者に迎合できずたたを踏み形成されていった。確かにそうなのだろう。しかし。

認めてたまるか。

「さあ、おいで」

「断る。糞野郎」

「居場所はいらないのかい？」

「そりゃ欲しい。正直な所」

「正直な子は好きだよ。学生はそうでなくちゃ、ね。君も重々承知の上だろ？」

僕の行動をすべて見透かしているようだ。虫唾が走る。

「君が色を加えようとしたとき、直感的に危機感を覚えた」末広は肩を落とした。「でもそれは快楽が怖かったからだだった。今は幸福に満たされてる。感謝だ」

「質感……」

「リアリティは、やはり色からだよね。私たち画家に胸を焦がす人間に言わせればさ」

「くだらない」

「まーたそうやって認めるのを拒むスタイルだ。私といえば明日が明るいよ？ どうだ？ どうなんだい？」

奥の姿はなくなっていた。代わりに、一年以上毎日顔を合わせていた知らない人が、僕の顎を撫でている。僕の視界は酷く狭くなっている、心臓はどうにかして活動を停止しようとして一生懸命だ。どうにでもなれ、とは決して思わない。しかし、どうにもならないんだ。山口保香を思い出す。山口は僕の下の名前を覚えてくれているだろうか。僕は山口が好きだ。山口を好きでいればいいのに、と他人ごとのように願う。きっと恋の域にも達していない邪で最低な感情なんだろうけど。山口を利用してでも僕は現状を打破したい。

「いいよね？」

末広が僕の制服のボタンを外しながら問う。

「気持ち悪いよね？ でもしょうがないよね？ 気持ち悪いの先に気持ちいいがあるんだからしょうがないよね？」

現実ってなんだろう。椅子に腰掛ける僕の体を愛撫する末広の頭越しに、僕の教室が見える。数学の授業を受けているクラスメイトたちが見える。誰も僕を見向きもしない。なぜ僕はブルー入ってるんだろう。さっきまで愉快に、はしゃいでいた気がする。友人とふざけあっていた気がする。内向少年の僕が、だ。

それさえも現実じゃなかったのかもしれない。遠い過去のように感じ、まぶたが誰かに押されているように重い。

美術室のドアが固く閉まっている。終令のチャイムが聞こえてこなくて、僕はここから出られないみたいだ。足が床に埋まっている。

なぜ辛い？

なぜ泣けない？

なぜ拒めない？

必要とされたから？

必要としたから？

「いいよね？ いっぱい、いーっぱいいいよね？ だって私たちは

——野暮だよ。言わせるのは。結論はふたりだけの秘密……だよね！」

事が済んだら家に帰って。祖母のルーシーが焼いたアップルパイと熱いコーヒーを飲んで。ドラマの再放送を見て。羊たちに餌をあげながら父のジョバンニを待って。もし隣の家のヨシくんがいるのならキャッチボールに誘って。日が暮れたら家で母の末広と明日についての考察をしながら晩ご飯を食べて。風呂から出たら幼なじみの山口保香に面倒だけどおやすみの電話をして。

それから、それから……。

僕が射精すると、末広は、

「いけない子だ」と腐った笑いを浮かべ、肌色鉛筆を振りかざした。根本的な質問で悪いけど、そもそも肌色鉛筆ってなんだ？

言下に末広は、そんな画材はないよ。あとは振りかざした『それ』を僕に突き刺すだけだった。

——終——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0902e/>

気分はもう短編集

2011年11月16日16時11分発行